

---

# 依り代

陣磨 紳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

依り代

### 【Nコード】

N0729W

### 【作者名】

陣磨 紳

### 【あらすじ】

21世紀の平和な日本に住む無気力サラリーマンが、突然「新世紀エヴァンゲリオン」に似た世界に迷い込んだ。しかも、碇シンジとして

温かさを感じる曖昧な世界で、主人公はいつたい何を得るのか。

本作は、旧TV版／旧劇場版までの「新世紀エヴァンゲリオン」をベースとした二次創作です。2007年以降に発表されている新劇場版「新世紀エヴァンゲリオン」とは世界観・キャラクター設定等

が異なります。

自サイト「ジンマシン ノベルズ」(閉鎖)に掲載していたものの  
転載となります。一部加筆修正を行っています。

初稿掲載：2001年 - 2008年

## プロローグ（前書き）

本作は、旧TV版／旧劇場版までの「新世紀エヴァンゲリオン」をベースとした二次創作です。2007年以降に発表されている新劇場版「新世紀エヴァンゲリオン」とは世界観・キャラクター設定等が異なります。

## プロローグ

西暦2000年。

南極に大質量隕石が落下。

かくして有史以来未曾有のカタストロフィー

「セカンド・インパクト」は起こった。

なんてことはなく、あいも変わらず、腐敗と盲目の平和を貪る、西暦2001年の東京。

俺は散らかった部屋の中、独りで、漫画を読むのに没頭していた。漫画のタイトルは「新世紀エヴァンゲリオン」。

1995年から1997年にかけて、日本に一大センセーションを巻き起こしたロボットアニメのコミカライゼーションである。

俺は、当時TVアニメを通して見ていた。あまり熱心に見てはいなかったが、感情移入をしやすいキャラクター、スケールの大きさを感じさせる世界観と謎が謎を呼ぶストーリー展開に、それなりの魅力を感じてはいた。

TV版のラストは意味不明だった。怒号を上げるファンもいれば、作中で引用されている軍事・宗教その他雑多な知識を仕入れ、一生懸命理解しようとするファンもいた。だが、俺は単純に、製作者が、何かの原因で作品を「投げた」のだと思った。だから少しだけ腹は立ったが、それ以上は気にもならず、その後映画として公開された完結編にも、今一つ興味が沸かなかった。それが、学生の頃。

あれから数年経って、俺は社会人となり、友人の少ない根暗な、それでもありふれた大人になっていた。

暇つぶしに入った書店で、「エヴァンゲリオン」の単行本を見つけたとき、何故か懐かしさを覚えて全巻　　といっても、その時点で漫画版は完結しておらず、6巻までしか出版されていなかったが

衝動的に購入し、帰宅するなり読みふけていたのだった。

「…ふう」

密度が薄いのか読ませ方が巧いのか、この漫画はサクサクと読める。単行本1冊読み切るのに20分とかからない。買ってきた6冊を一気に読み終わると、疲れた目を閉じて休ませつつ、ぬるくなったコーヒーをずず…とすすった。

……この主人公ってこんなに強気だったか？それにストーリーも微妙に違うような…などと、今読んだ漫画と昔見たアニメを比較しようとするが、アニメの方はもはや断片的にしか思い出せない。全体のあらすじは覚えているし、映画でのラストも、人づてやウェブサイトで大体知っているのだけど…続きも気になるし、レンタルで借りてこようかな。

そんなことを思いながら、見慣れた自室を見渡し、ふと我に返る。

休日に独り、薄暗い部屋に閉じこもって、何をやってるんだろう。

彼女どころか友人もない。人と話すのが苦手だった。

仕事では問題ない。自惚れかもしれないが、人並み以上にはこなす。必要なら交渉も説得もする。でも、それだけ。

周りで展開される世間話には参加できないし、何かにハマることもないから、マニア仲間もできない。そんなふうに自己分析してみたとこで、現状を打開する気力が沸いてくるわけでもない。要するに無気力なのだ。

ただ時々、猛烈に空しくなることがある。今突然俺が死んでも、肉親以外は気にもかけてくれないんじゃないだろうか。

俺は、いらない人間なのかな

そう思った後で、それが先ほど読んでいた漫画の主人公の台詞であつたことに思い至る。自分の顔に苦笑が浮かぶのが判った。

こんなの、中学生だから許される台詞だな。少なくとも二十いくつのサラリーマンが言っている台詞じゃない。

などと考えつつ横になると、すぐに眠くなる。ここんところ残業続きで、酷く疲れていたのだ。

今日は特に予定もないので、俺はそのまま睡魔に身を委ねることにした。

……そして気がつくと、俺は見知らぬ街に立っていた。

空では、戦闘機らしきものが低空飛行していた。

## 第一話 到着、あるいは旅立ち

……あれ？

ここは、どこだ？

見覚えのない街と、山。

奇妙な形のモノレールは、ホームから動こうとしない。

着ているカッターシャツの胸ポケットに、封筒が入っていることに気づき、それを出してみる。

宛名は……

「碇……シンジ？」

思わず洩らした自分の声に、俺は酷く驚いた。

その高い、まだ変声期を迎えていないような声は、明らかに俺の声とは違う。見ると手は華奢で白い。身長も低いようだ。

手近なビルの窓ガラスに自分の姿を写してみたが、そこに写るのは、俺ではなく、女のような整った顔をした少年だった。

俺はパニックを起こしかけたが、頭の片隅に、これが自分の姿だ、という妙に冷めた思考もあることに気づく。そして達した結論。

これは夢だな。

碇シンジ、という名は、さっきまで読んでいた漫画の主人公の名だし、そういえばこの町は、話のはじめで主人公が降り立った町並みに似ている。

漫画の内容を夢に見るとはなあ。まあ印象的なストーリーではあるし。こういうこともあるか。

さっきの封筒の中身を取り出すと、手紙と写真が入っている。手紙のうち一枚には、殴り書きだが力強い筆跡で、「来い」とだ



け書いてあり、もう一枚にはワープロ書きで、地名や経路などが書いてある。そこにある地名や路線などはよく判らない　　と思ったのだが、ある程度の知識は持っていることに気がついた。

さすが夢。なんでもアリだな。

写真の方を見ると、おおっ、と声が漏れた。女性が写っている。

かなりの美人で、前かがみで胸の谷間を強調する、雑誌のグラビアのようなポーズを取っている。それをわざわざ強調するように、胸のあたりにペンでマークをつけて「ここに注目！」などと書いてあるあたりは、ちょっとノリが軽すぎる気がしないでもない。

ここが「エヴァンゲリオン」の世界だとすると、この人は葛城ミサトという名で、もうじき迎えに来てくれるはず。

ぼうつと突っ立っていると、あまり見慣れない型のヘリコプターが、轟音と共に低空を飛んできた。そして、円筒形の何かを落とし、ていく。

その円筒形は、一端から炎と煙を吹きながら、自力で飛行を始めた。

ミサイル？

そう認識した一瞬後、ミサイルが飛んでいった方向で爆炎が上がった。煙の中から、周りのビルと同じ程の背丈を持つ何かが、のそり、と現れる。

そこにいたのは、顔を胴体に埋め込んだような、気色の悪い巨人。……使徒、つか」

巨人は、群がる戦闘機を次々と腕で叩き落とす。大量に打ち込まれるミサイルも、まったく意に介してないようだ。

などと呑気に見ていると、叩かれた戦闘機が一機、こちらに落ちてきたではないか！

「う、うわあっ！」

夢と思っけていても怖いものは怖い。情けない悲鳴を上げて、その場から離れようとする。しかし、反応が遅すぎた。聞いたことのないような爆音に、体ごと弾き飛ばされ、アスファルトに転がされた。「うっ、痛い……痛い？」

痛覚がある。両腕に擦り傷ができたが、その位置にはつきりとした痛覚があつたのだ。

夢じゃない。

そう考えると、突然体が震え、歯の根が合わなくなってきた。

「……い、いたい、どうなってんだ、これは……」

と、そこに、けたたましいブレーキ音を立てて、車が突っ込んできた。

俺の目の前に止まると、運転席のドアが開いて女性の顔が出てくる。

「早く乗ってっ！」

面食らったが、その顔が写真の女性 葛城ミサトだと認識できたので、大慌てで助手席に飛び乗った。

ドアを閉め切らない前に、車が急発進する。

「ごめんねシンジ君、遅れちゃって」

状況の割に軽い謝罪に、俺はなんの返答も返すことができなかった。

とにかく呼吸を落ち着かせる。当面の危機は遠ざかったので、現状を考える余裕ができた。というものの……

なんで俺は「碇シンジ」になつてゐるのか。いや、何故「碇シンジ」が俺の人格で動いてゐるんだ？その問いに答えは出ない。出せる訳がない。

いや、俺は本当に『俺』なのか？ 自分の記憶を疑う。混乱する頭を掻き分けると、『俺』の昨日やった仕事の内容も、『碇シンジ』の伯父の家での寂しい10年間も同様に思い出せるではないか。なんだこれは。あまりにも強引なご都合主義ではないか。

「……くん、シンジ君！」

女性の大きな声に、思索の海から意識を引き戻される。

「え、あ、はい？」

「ボーっとしちゃって、大丈夫？どつか打った？」

「あ、すみません。大丈夫です」

あんまり大丈夫ではないのだが、混乱の原因を素直に語っても信じてくれまい。それこそ、頭でも打っておかしくなったと思われるのがオチだ。ふた呼吸。気持ちを落ち着かせる。

後ろを振り返ると、使徒が攻撃を受けつつ、悠然と前進する姿が見えた。

「国連軍の湾岸戦車隊も全滅したわ……軍のミサイルじゃ、何発撃ったってあいつにダメージなんか与えられないわよ」

「使徒、ですか……」

思わず俺が呟いた台詞に、葛城さんが怪訝そうな顔をする。

「……なんで、アナタがその名前を知ってるの？」

「えっ、あいや、その。父に聞いたんですよ」

慌てて弁解する俺に、葛城さんはさらに怪しむような目つきになる。そりゃそうだな。碇シンジは本来、ここにきて初めてエヴァや使徒について知るんだ。今の俺が知ってるわけがない。機密事項だとしたら、父に聞いた、という話も不自然か……

「ええと、その、葛城さん、名前だけは聞いてるんですけど、使徒って一体何なんですか？」

「今は詳しく説明してるヒマはないわ」

突然、車の行く手に使徒が現れた。

「うわわっ、葛城さん、前っ！」

「わかってるわよっ！」

叫ぶなり、車はスピンターンを決め、来た道を全速力で戻る。恐怖も車酔いも最高潮だ。

後ろを見ると、何故か使徒が追いかけてくる。なかなかスリル溢

れる光景だ。

「うっ……」

「情けない声出すんじゃないの！男の子でしょ！」

怒られた。

と、いきなり、使徒とは別の紫の巨人がビルの陰から現れ、使徒に組み付いて止めた。

「あれは……」

エヴァ初号機、と危うく喋りそうになって口を噤む。すると葛城さんが二の句をつなげてくれた。

「心配しないで、あれは味方よ。それより急ぐわよっ！」

見ると、初号機は使徒に殴り飛ばされ、蹴り飛ばされる。一方的だ。

「一方的に、やられてますよっ！」

葛城さんは、苦渋に満ちた顔を見せる。

やがてボコボコにぼてくりまわされた初号機は、道路に空いた穴に降りていった。おそらく回収されたのだろう。と同時に、あれほど群がっていた戦闘機群が散って行く。

「葛城さん、みんな使徒から離れていきますよっ」

「顔引っ込めて、シヨックに備えてっ！」

そうだ、確かここでは、N2地雷とかいう強力な爆弾を……

瞬間、閃光が走った。

その次に、とてつもない衝撃が飛んできた。悲鳴を上げることもしかない。

車はなす術もなく、木の葉のように吹き飛ばされる。

何がどうなったのやら……

気がつくと、車も俺も葛城さんも、逆さまになっていた。

「……もういやっ」

葛城さんが泣きながら呟いた。

ひっくり返った車から、なんとか這い出し、葛城さんを引っ張り出す。

煙が晴れると、クレーターの真中に、使徒がまだ立っているのが見えた。漫画と同じ展開だ、と再認識する

戦闘は一時落ち着いたようなので一安心だが、漫画の通りだとすると、俺が初号機にのって、あのバケモノと戦わなければならないのだろう。

「まいったね、こりゃ……」

俺が独りごちると、意味を取り違えた葛城さんが話しかけてくる。「ホント。まだローン残ってるのに……まあ、今はそこそこじゃないわね。車起こすの手伝ってくれる？」

「あ、はい」

車を起こす。どうやらまだ走れるようだ。あの爆風を受けてまだ走れるのか……ルノーってすごいな。

車の中で、葛城さんから受け取ったパンフを読んだ。

「特務機関、ネルフ、ですか」

「そう、国連直属の非公開組織。私もそこに所属してるの。国際公務員ってところかしらね。あなたのお父さんも同じよ」

あなたのお父さん、というところで、胸にチクリとくる。この感情は、元のシンジのものだろう。

自分には覚えのないはずの記憶と感情。この奇妙な感覚に、俺はもう慣れつつあった。本来の「俺」と碇シンジの人格や記憶が、どういうわけか融合して、今の碇シンジになった、ということ、とりあえず俺は納得することにしたのだ。これ以上悩んでも何か判るわけではない。

「はあ……要するに、使徒から人類を守るための組織、ってことですか」

「そうね」

実際にここでやろうとしていることを、俺は漠然とだが知っている。だがそれは今の葛城さんが知ることではないし、ましてや碇シンジが知ってるわけがない。

しばし沈黙していると、葛城さんが聞いてきた。

「……何のためにアナタが呼ばれたか、聞いてる？」

「いえ。……それを今、考えていたんです」

とりあえず嘘を言っておいた。

「教えてもらえますか？」

「それは、アナタのお父さんに聞いたほうがいいわね」

「そう、ですか……」

あの男と話すのは、心底イヤだなあ、そう思った。

「お父さん、苦手？」

「……苦手ですね……もっとも、人と話すこと自体苦手なんですけど」

「そうなの？私とは普通に話してるじゃない」

「……」

俺は沈黙した。どう反応していいか判らなかったからだ。

「それとも、私は特別なのかしらん？」

葛城さんはからかうような口調で言ったが、俺はそれにも答えなかった。

「……葛城さん」

「ん、ミサトでいいわよ」

「父さんは、俺のこと何か言っていましたか？」

「んー、私には特に何も言わなかったわね」

「……そうですか」

俺の中の「碇シンジ」の心に、シクシクとした痛みを感じた。

いつのまにか車はトンネルを走っている。いや、ミサトさんはハンドルを握っていない。どうやらレールの上を自動で走っているようだ。

少しすると、明るいところに出た。そこは、オカルト雑誌に載っているような、何かの冗談のような光景だった。

天井から逆さまに林立するビル群。

はるか下に広がる森と、中央に位置するピラミッドと、深淵。

「ここは……」

俺が驚いていると、ミサトさんが誇らしく語り出した。

「これが私たちの秘密基地、ネルフ本部よ。世界再建の要、そして」

「人類の砦、ですか」

感慨深く言った俺を見て、ミサトさんは何故か悔しそうな顔をしていた。

もう三十分ほど歩いているだろうか。まだ目的地には着いていない。

「ミサトさん」

「なあに？」

「……見掛けによらず、ずいぶん広い建物なんですネ」

「そう？」

「ずいぶん目的地が遠いなあ、と思って」

「うっ」

ようやく、俺が嫌味を言ってるのに気づいたようで、ミサトさんは俺を睨んだ。

「やっぱ迷ったんですか」

「……アナタ、結構やな性格ね」

「そつでもないですよ」

うそぶく俺。

未だ不安は拭いきれていないが、どうやらここは、あの漫画の通りの世界らしいし、多少でも物事の背景を知っているのだから、元の「碇シンジ」よりはいくらか有利なはずなのだ。そう考えると、嫌味を言う余裕も出てきていた。

と、後ろから白衣の女性が現れた。

「葛城一尉」

「あ、リツコ……」

リツコと呼ばれたその女性は、美人だが妙な違和感があった。なんだろう……あ、金髪なのに黒い眉毛だからだ。あの髪は染めてるのか。……なんか中途ハンパでカッコ悪いなあ。

「あんまり遅いんで迎えにきたわ……また迷ってたわね」

「ごめん。まだ慣れなくて」

ジト目でにらむリツコさんに、悪びれた風もなくあやまるミサトさん。と、リツコさんの視線がこちらに向く。

「その子ね、例の第三の適格者<sup>サイドテルドレン</sup>って。……私は技術1課、E計画担

当博士、赤木リツコよ。よろしく」

「あ、碇シンジです。よろしく、赤木さん」

「リツコでいいわ。……お父さんに会わせる前に、シンジ君に見てもらいたいものがあるんだけど」

「はあ」

リツコさんの言う「見てもらいたいもの」の正体は見当がついたので、俺の返事は気の抜けたものになったが、リツコさんはやる気のなさが気になったのか、「大丈夫か？ コイツ」と言うような表情をした。

リツコさんに連れられてやって来たところにあっただのは、案の定……

「さっき俺らを助けてくれた……」

「人の作り出した、究極の汎用決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機よ」

俺の呟きに、リツコさんが続けた。

先ほど使徒と戦っていた紫の巨人の、頭部だけが見えていた。そ



ここから下は液体に浸かっている。

そして、その頭の向こうに、見覚えのある人影が見えた。

「父……さん？」

「久しぶりだな、シンジ」

その人影は、碇シンジの父親にして諸悪の根源、碇ゲンドウだった。漫画以上の悪人面である。どうやったら、アレからこの息子ができるんだ。よっぽど母親が美人に違いない……そう思ったが、シンジの記憶の中にも、残念ながら母の顔はおぼろげで、よく見えなかった。

「シンジ、よく聞け。これにはお前に乗ってもらう。そして使徒と戦うのだ」

その言葉に慌てたのはミサトさんだった。

「まっってください司令！レイでさえ、エヴァとシンクロするのに7ヶ月かかったんですよ！今日来たばかりの子にはとてもムリです！」

「座ってればいい。それ以上は望まん」

正直、乗れと言われたら、この場は乗るしかないのだろうな、と思っていたのだが、ゲンドウの傲慢な態度にカチンと来た俺は、嫌味の一つも言つてやろうと思った。

「何言つてんの？戦闘訓練も受けてない中学生に、こんなの操縦してバケモノを倒せて？もっとちゃんとした兵士とか軍人とかいないの？」

「お前が適任なのだ。いや、お前にしかできん」

「さつきは誰が動かしてたんだよ」

「パイロットはもう一人いる。だが怪我をしている」

「それで、俺？一人二人にしか動かせないなんて……そりやまた、役に立たない兵器だね。それならそうともっと早く呼んでくれよ。訓練もなしにいきなり実戦なんて、何考えてんの？」

「判ったのは最近だからな。それに、座ってればいいといったはずだ」

「座つてればいい？コイツはただ座つてるパイロットを放っておい

て、勝手に戦うってこと？そんなもん、人乗せる必要ないじゃないか」

「……乗らんなら帰れ！」

ついにゲンドウは激昂した。ありやりや。ずいぶん短気というか、小心者だなあ。

「条件付きで、乗ってもいいよ」

「……」

交渉を持ちかけてみるが、反応なし。しょうがないので一方的に条件を提示してみる。

「まず生活の保証。出撃や訓練に応じた報酬と住居を用意してください。どうせ今回で終わりではないんでしょう？ それと、今回は出撃前に、エヴァの操作について一時間ほどレクチャーを受ける時間を下さい。やるからには少しでもまともにやりたいですから」

ゲンドウは数瞬、不思議そうな顔をして俺の顔を睨みつけてきたが、すぐにリツコさんの方に向き直る。

「赤木博士、使徒の状況は？」

「は、N2地雷によって一時的に沈黙。体組織の回復状況から見て残り30分ほどで行動を再開すると思われます」

「シンジ、レクチャーの時間は三十分だ。報酬と住居については後だ」

「しょうがないね。わかったよ。でも、あとで決めた報酬は、今回の分もちゃんともらうからね」

「…わかった」

ゲンドウの戸惑うような様子に少しだけ溜飲を下げ、リツコさんの方へ向き直った。

「そういうことですリツコさん。よろしくお願いします」

すると、リツコさんもミサトさんも呆然としていた。

「シンジ君、本当にいいの？」

ミサトさんは解りやすく心配そうな顔をして、確認を重ねる。

「さっき司令に言ったとおりです。どうせこのまま帰しちゃくれな

いんでしょう？ それより、時間がもったいないですから。早く説明してもらえますか？ リツコさん」

「え、ええ」

その後三十分、エヴァの操作や武装、A Tフィールド等について、座学のみだがレクチャーを受けた。

エヴァに乗りこんだ。

『第一次接続開始、プラグ注水』

オペレータの声と同時に、エントリープラグ内に液体 L C L とか言ったか が満ちてゆく。顔まで水位が上がってきたところで、思い切って飲みこんだ。

「気持ち悪いな、これ……」

『我慢しなさい、男の子でしょ』

ミサトさんのふざけたような声が聞こえる。

『……初期コンタクト全て問題なし。双方向回線開きます』

オペレータの声がそう叫ぶと、全身の感覚が広がってゆくような感じを覚える。そしてその感覚が何かに触れると、こんどはそれが自分の体内に入ってくるような感じになる。

そういえば確か、この初号機にはシンジの母親 碇ユイ の魂が込められてる、っていう設定だったよな。するとこの入ってくるもの、つてのは、母親の魂なんだろうか。

……話せないかな。

そんなことを不意に思いついた。ダメ元で、心のなかで呼びかけてみる。

母さん。

すると、さらに自分の中に何かが入り込んでくるようなイメージが脳裏に浮かんた。少しだけ恐怖を覚えたが、抵抗せずに受け入れる。わけのわからない世界に飛ばされたせいで、結構自暴自棄になつていたのかもしれない。やがて、体内への「何か」の進入は、不意に停止した。そして、なにかメッセージを「感じた」。俺はそれに応える。

しばしの邂逅。俺は確かに、エヴァンゲリオンの中に在る「母親」と、会話した。

「 母さん」

『シンジ君っ!?!』

リツコさんの、取り乱した声が聞こえてきた。ＬＣＬのせいで見た目には判らないが、俺はどうやら泣いているようだ。

『シンジ君、返事をして!』

「どうしたんですか?」

『シンジ君、何か異状はない?』

レクチャー中はずいぶん落ち着き払った声をしていたリツコさんがうるたえるのを聞いて、少し意外な感じがする。

「ええ、特に何もありませんが……」

『そう……』

そういつて通信が一時切れた。おそらく、モニターしている数値が不可解な動きでもしたのだろう。エヴァの中のものとか心を通わせる。アニメでは、パイロットがＬＣＬに溶けるとか、異常な状況でないところなかったことだ。これがどうシンクロに影響するのか、よくわからない。

数十秒後、再度リツコさんからの通信が開く。

『問題ないわ。起動状態も良好よ』

ミサトさんがそれを引き継ぎ、指示を開始する。

『エヴァンゲリオン初号機、発進準備！』

号令以下、エヴァが射出口の真下へ移動。そして、最後の指示が下された。

『エヴァンゲリオン初号機、発進！』

強烈な慣性力を感じた。想像よりも強烈な勢いで、地上に打ち出される。

しばらく後、再び襲う強烈な慣性力が、停止したことを知らせてくれた。

『最終安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ！』

背中の固定具がはずされ、俺が乗るエヴァンゲリオン初号機は今、第一歩を踏みしめた

が、俺が今回やるのは、ここまでだった。俺は再び意識をエヴァの中に向ける。彼女は確かに、この場はまかせて、と言った。俺はその言葉に従うことにした。そして、この世界に在るために必要な情報を、少しでも彼女から引き出したかったのだ。

意識が戻した時に始めに目に入ったのは、使徒のコアを、初号機の右手が握りつぶす瞬間だった。

## 第二話 踏み込む決意

目が覚めると、最初に見えたのは、ヤケに白い、初めて見る天井だった。右手を持ち上げる。華奢で色白な少年の腕が見えた。軽く、落胆のため息。

自分が何もせぬままに戦いが終わり、止めを刺した瞬間が脳裏に焼き付いている。だが、その後の記憶は朧げだった。操縦席のコンソールの光は失われていたような気がする。たぶん、あのまま気を失った俺は、動かなくなったエヴァから、ネルフの職員によって助けられたのだろう。

ここに至っても、俺はほんの少しだけ、今までのことが夢であることに望みを抱いていたが、俺は『俺』の部屋でない、知らない場所にいて、そして俺は『俺』ではなかった。酷く気が重くなる。

ともあれ、この世界に来てから、初めてゆっくり考えられる状況になった。

俺の中にある碇シンジの記憶、そして初号機の中の碇ユイが教えてくれたこの世界の過去、エヴァや碇ゲンドウらのあらまし……彼女は、訊けばなんでも答えてくれた。しかし、どうにも情報量が多すぎて俺のほうで消化しきれていない。

それでいて、何故俺がここににいるのかについては、何も判らなかった。

情報とは別に、碇ユイという人物についても多少は把握できた。作中では登場シーンが多くなり、半ば舞台装置的な役割だったように思うが、実際に会って話してみれば、これがまた嫌いなタイプの女であった。

信心深く、彼女が属していたゼーレと呼ばれる宗派の教義を深く

深く信仰しており、その奥義を達成することが全人類のため、即ち自分の愛する夫や子供のためになるのだと疑わない。通常であればただの宗教狂いだが、厄介なことに、彼女は自身の頭脳によって、科学的裏付けを与えてしまった。達成する道筋を見つけてしまったのだ。伴侶が見も世もなく嘆き悲しんでも、幼い息子が孤独に苛まれ歪んでも、それは些細な問題であり、彼女は変わらずエヴァンゲリオンと共に在り、その日を待ち続けることを望んでいた。

正直言つて、こんな女には関わりたくないし、それに狂って手段を選ばなくなった旦那にも近寄りたくない。いくら『シンジ』の肉親の情があつたとしても、それだけでは如何ともしがたい嫌悪感のしかかった。

とは言つものの、このまま俺が逃げ出した場合、どうなるか想像もつかない。ユイは、初号機に取り込まれた後のことをほとんど知らなかった。おそらく、初号機に直接関わることで以外は認識できなかった、ということなのだろう。例えば、自分のサルベージが試みられ、代わりに綾波レイという存在が生まれたことは知っていたが、その後どうなったのか知らない。現状のネルフが、彼女の夢見た方向に進んでいるとは限らなかった。

何にせよ、アニメのような、ほとんどの登場人物が不幸になったシナリオは、自分が当事者となつた以上、絶対に回避したい。

悲劇の要因の大部分は、シンジを始めとした登場人物の精神にあった。ゲンドウやゼーレやらの陰謀もあるが、結局は病んだ心によるコミュニケーション断絶の物語であつたのだから、それを回避するには、他人とのつながりを大切にし、いざというとき支えあえるようになっていなくてはならない。「人類補完計画」のようなストーリーのバックボーンには、いかな主人公とはいえ、パイロットの立場ではおいそれと手は出せない。主要なキャラクターである綾波レイ、葛城ミサト、惣流・アスカ・ラングレー、それぞれ心に深い傷を負っている彼女らと、共に戦えるような絆を得るにはどう

したらいいのだろうか。

などと考えていて、ふと思う。

元の世界では、こそこそと他人を避け、関わり合いを嫌っていた俺が、異世界に来て初めて、他人との関わり合いについて真剣に考えている。ひどく奇妙な感じがした。自分に似つかわしくない、そんな風にも思えた。

考えるのもそろそろ煮詰まってきたので、起きあがって病室から出た。ロビーに來ると、テレビで「第三新東京市での爆発事故」のニュースをやっていた。エヴァや使徒の話は一切出なかったが、そこに映る建物の壊れ方は、明らかに爆発の類によるものではないのは、素人目からも判る。

数人の医師と看護師がベッドと共に移動してゆくのが見えた。すれ違う瞬間、ふと、ベッドに載せられた患者に目をやる。

全身を包帯に包まれた少女の髪は、蒼みがかった銀色という、見たことのない色をしていた。

目が合う。冷たく深い紅玉は、俺の心臓を掴み上げた。

そのまま彼女を目で追うと、その向こうに淀ゲンドウの姿があった。少女に一言二言話し、見送った。

なんとなく妙な雰囲気を感じ、遠くから眺めていたが、住居や報酬について詳しく話せていないことを思い出した。彼とはあまり話したくないが、今後の生活のことだ。

「司令」

呼びとめる俺に、振り向きもしないゲンドウ。

「住居と報酬の件、あとで話しに行きますので、よろしく」

敢えて使う敬語に、肉親としての拒絶を込めた。

ゲンドウはこちらに一瞥をくれると、

「葛城一尉に話してある。彼女に相談しろ」



ぶつきらばうにそれだけ言つと、父親であるはずのその男は去つていった。

「ひどいわねえ。息子に労いの一言もないなんて」

不意に後ろから声がした。ミサトさんだ。

「出撃前にいろいろ言っちゃいましたからね。怒らせちゃったんでしょうか」

おどけて言つと、ミサトさんも苦笑を浮かべた。

「身体の調子はどう？」

「大丈夫ですよ……というか、全然何も判らないまま、戦いが終わっちゃいましたからね」

半分、嘘である。

「何も憶えてないの？」

「ええ。全く。……教えてもらえませんか？前回の戦いについて」

「いいわよ。と言つてもここじゃなんだから……車の中でね」

「どこ行くんですか？」

「ま、ドライブよドライブ」

走る車の中で、ミサトさんは戦闘の様子を語ってくれた。

初号機の戦う様には、怖気を感じた。噛み付きや引つ掻きのような、獣らしい戦い方ならばまだ判る。だが、拳で殴り、掴み拳げて投げ、倒れた相手に馬乗りで殴りつける、というような人間臭いアクションが、なおさら狂気を感じさせるのだ。怖がらせないように、という配慮なのか、語っているミサトさんはおどけて話していたが、その笑顔もすこし引き攣っていた。

「シンジ君が意識していないとなると、あれはエヴァの暴走、ってことになるわね」

「それにしても、勝手に動いて使徒を倒す、か。まさか冗談で言っ

た言葉が本当になるとはね。ホントにパイロットって必要なんですか？」

呆れて言う俺に、ミサトさんも同じような顔をして言った。

「そういつもいつも暴走されちゃ困るわよ。こっちの言う通り動いてくれないと」

「ははは、そりゃそうですね」

「……意外と冷静ね」

「は？」

突然ミサトさんの口調が真面目になったので、ついていけず間抜けな応えになる俺。

「暴走、とか言ったら、もうちょっと怖がるかと思っただけ」

「はあ」

暴走とはいえ、ちゃんと意思のあるものの動きだから、意図さえ読めれば怖くないんだけど。……ってミサトさんはこの辺の事情知らないんだっけ。

「ま、そう言うわけだから、ちゃんと操縦できるように、明日から訓練を受けてもらうわよ」

「それは、こないだの要求が通れば、の話ですね」

「……子供のクセにシビアねえ」

肩をすくめつつ、ミサトさんはゲンドウから提示された報酬額とネルフ内での待遇を語る。中学生、かつ一兵卒に対する報酬としては高すぎる。ありふれた平社員の月給からすればちよつと信じられない額だった。住居もそれなりの広さのマンションをあてがってもらったこととなっていた。

「どうかしら」

「まあ、文句はありません。今後どんな要求をされるか怖くもありますけど」

「納得してくれて何よりだわ」

はあ、とミサトさんは溜息をついた。それは呆れたというより、安心して見えるように見えた。

「ところで、今日病院で司令と話してた女の子、ご存知ですか？」  
なんとなく判っているが、一応聞いてみる。

「ああ、シンジ君の同僚よ」

「てことは、彼女もエヴァのパイロット？」

「そ。第一の適格者、綾波レイ」  
ファースト  
チルドレン

「なんか酷い怪我みたいでしたけど」

「シンジ君が来る前に、初号機で使徒と戦ってたからね。見たですよ？」

使徒にボコボコにされる初号機を思い出す。

「心配？」

「そうですねえ」

「ふふん、かわいいもんね彼女」

「そうですねえ……って何言わせるんですか」

「照れない照れない。でも彼女無愛想だから、口説くの大変よ」

口説かないっての。14歳に手え出したらロリコンじゃないか。

って今の俺も14歳か。でも……いいのかなあ。

判断に苦しむところである。

「難しい顔しちゃって。わっかいわねー」

別にそういうわけではないのだが、こういうからかい方はあまり好きではなかった。

「ああ、それと住居の件だけど、部屋を用意するまで2日かかるんだって。それまではわたしの家に泊まりなさい」

「ええ？」

「何よ、イヤそうね」

イヤだ。

「……えーっと、ミサトさんに悪いですよ。本部内に部屋でも用意してもらえれば……」

「一晩や二晩くらい、平気よ。本部の部屋を借りるのは手続きが面倒だしね」

「はあ……」

心底イヤだったけど、ここまで言われた以上、ムリに断るのも変な話である。

「わかりました。お世話になります」

「ん、素直でよろしい」

などと言っている間に、ミサトさんの住むマンションに着いた。

俺の目の前で、ミサトさんがビールをガバガバと飲んでいる。

それはいいのだが、テーブルの上は非常に狭い。コンビ二弁当のカラや缶詰の空き缶などが大量に乗っかっている。

別に今、これだけの量を食ったわけでもないのだ。一体いつからこの状態なのか。

ダイニング中に奇妙な匂いが漂っているし、周りをみると着散らかした服や雑誌、ペットボトルが転がっている。

俺もそんなにきれい好きというわけじゃないが、この惨状はさすがに耐え難い。

「うーん、それにしてもシンちゃん、料理うまいのねえ」

いつの間にか呼び方が変わっている。

ミサトさんがパクついているのは、俺が作ったサラダである。コンビ二にある数少ない生野菜とドレッシングでさくくりと作ったものだ。こんなのは、野菜の鮮度とドレッシングの味次第なのだから、料理の腕などあまり関係ない気がする。

「こんなもん、料理の内に入りませんよ」

俺は相変わらず不機嫌に言う。

「謙遜しなくていいのよ。ねーシンちゃん、ここに住まない？」

「遠慮します」

「遠慮なんかしなくていいのよお」

「なら、イヤです」

「つれないわね」

頬を膨らます。年齢的には少し無理があるしぐさだが、妙に似合っていた。

「どうせ、家事全般押し付ける気でしょ？」

「そっ……そんなことしないわよ」

「どうだか……」

「部屋んなかジロジロみてんじやないわよ」

ゴミ溜めを再度見回していると、頭をひっぱたかれて止められた。

「ま、確かにここにいれば、俺の監視もしやすいでしょーけどね」

何気ない俺の一言に、ミサトの顔が、すっ、と険しくなる。

「……なによ、それ？」

「別に隠す必要ないですよ。俺だってそれくらいは自覚してますから。どうせ、ただ外歩いてるだけでも見張られるんでしょ？」

「なぜ、そう思うの？」

「……ネルフでの俺の扱いを見てれば、想像はできますよ」

「でも、私はそんなつもりじゃあ……」

もももこと言い訳しようとするミサトさんを見て、少し申し訳なく感じてきた俺は、意識して語調を和らげた。

「あー、いやその、判ってますよ。母を亡くして、父に捨てられて、その上戦いに追いやられる俺に同情してくれてるんですね。そのお心遣いには、感謝します」

すこし沈黙したあと、ミサトさんは顔を上げた。

「そっ……でもね、私は、同情や仕事の上だけで他人と一緒に住めるような、物事割り切れる人間じゃないわ」

漫画と同じ台詞だった。それが、どうにも癪に障った。嫌がらせをしてやろうという思いが、次の言葉を吐かせた。

「ミサトさんからすれば普通の、コミュニケーションをスムーズにするオツキアイなんでしょうけどね。……家族を演じてくれる優しい人に命令されて、死闘へ駆り出される。残酷なことだと思いませんか」

苦虫を噛み潰したような、という形容通りに、ミサトさんの端正な顔が歪んだ。

アニメのストーリーを思い起こせば、葛城ミサトというキャラクターは、シンジにとって最大の加害者であつたように思う。エヴァに乗る以外のシンジの価値を否定した上で（本人にそんな気はなかっただろうが）、愛情を与えてエヴァに縛り付けたし、アスカのトラウマとシンジの性格を知りながら、何の配慮もせず同居させた。そして、シンジが最も傷つき、自分の存在意義を疑っているとき、大人の理屈でねじ伏せようとしなかった。何より最後まで、大人としての体面の維持に努め、それが壊れそうなきはシンジに近づこうとしなかった。そんな印象しかない。

人としては嫌いじゃない。だが、シンジの立場としては、アニメのようにうやむやのうちに取りこまれることだけは避けたかった。

重いおもい、沈黙が流れた。

と、いきなりミサトさんがビール缶を持ち上げ、一気に飲み干した。そしてもう一缶を開栓し、これもまた一気に空けた。さらに一缶。

三缶目を空けてテーブルに勢い良く叩きつけ、あっけに取られた俺を睨みつける。

「うアタシだつてねえ。あんたみたいな子供に戦わせたくなんてないわよっ！アタシじゃだめだからしょうがないでしょう！アタシが、アタシがどんな思いでっ……！」

突如愚痴り始めたミサトさんを見て俺は驚いた。こんな簡単に内

心を吐露してくれるのは想像だになかった。俺は彼女が強くないことを知っている。いや、もしかしたら漫画の彼女とは違うのかもしれない。それでも、大人がみんな、普段かぶっている仮面ほどに強くないことを、多少なりとも俺は知っていた。だから、その愚痴にも共感できたし、むしろ少しだけ近づけた気がしていた。

「……ミサトさんは何故、そんな思いをしてネルフの作戦部長なんかやってるんですか？」

だから、俺は、ミサトさんの心に踏み入る決心をした。

### 第三話 絆

研究に没頭して家族を省みない父親と、それに苦しみ、責める母親。幼い頃はそれを見て育ってきた。

あるとき、ようやく父が歩み寄ってくれて、自分を調査隊に同行させてくれた、まさにその時発生した大災厄。セカンド・インパクトあれは世間一般で言われているような隕石衝突などではなく、南極に埋まっていた使徒、そのエネルギー源に関する実験で発生した「事故」なのだという。すべての生命が死に絶えたあの地で、父は死に、自分は助かった。「使徒が家族の時間と絆を奪って、最後には命まで奪っていったしまった。なんて考えちゃったのよね。仇討ちみたいなものよ。簡単に言っと」

そんなことを、ミサトさんはオドケながら話した。

「そのために、戦略自衛隊に入って死に物狂いで上を目指したわ。その後、使徒に対抗するための特務機関ができたから、無理を言ってそっちに出向、目論見通り作戦部のトップに就任」

とん、とん、とん、と、テーブルを右から順に指で叩きながら言う。最後はビール缶の上に指を置いて、小さくつぶやいた。

「そしてやってることは……子供に命令を下して、本部から喚くだけ」  
あんぜんなところ

自らを嘲笑うミサトさん。

「改めて事実を並べてみると酷い話ね。軽蔑したかしら」

ミサトさんは本当に酔っ払っているわけではなさそうだ。たぶんこの人は、俺を見て話している。俺に対してはこういうことを打ち明けたほうが話がしやすくなる、この碇シンジという少年はそういうタイプだ、そう判断したように見える。酔った勢いで語るにしているは重すぎるし、ちよっと話を単純にしすぎている気もする。だから、多分彼女が期待しているだろう返答をする。

「いえ。こちらこそ、立ち入ったことを訊いてしまつてすみません。



俺は、軽蔑なんてしませんよ。そういうものだって、始めからはつきりしていた方が、やりやすいです」

「……そう、よかったわ」

その一瞬だけ、ミサトさんの顔が不思議な表情を象った。何かにいらつくような、何かを諦めるような。その表情が何なのか、俺は推測するのを諦めた。

翌日。

朝から明らかに遅刻の葛城ミサト一尉に連れられて、再びネルフ本部へと出向いた。

エヴァンゲリオンを起動し制御する、そのための実験<sup>テスト</sup>を行うのだそうだった。

「どうしたのシンジ君、起動限界ギリギリよ」

リツコさんが苦々しげにシンクロテストの結果を眺める。先日の第三使徒戦の時は、信じられないほど良好な数字が出ていたのだそうだった。碇ユイとの対話のおかげだろうか。しかし、その時ががなまじ好成绩過ぎたためか、今の凡庸なデータを見る目に焦りが窺える。

「こないだのがマグレだったんですよ。きっと」

テキトーに受け答えしていると、リツコさんの表情がさらに険しくなった。

「マジメにやりなさい」

「は、はい」

エヴァンゲリオンとの接続<sup>シンクロ</sup>に心理的な作用が影響するのならば、碇ユイを嫌っている今の俺ではまともにシンクロできないのかもしれない。「心を閉ざしていれば、エヴァは動かないわ」とは誰の台詞だったか。

だが、おそらく俺は、今後もこれに乗って戦闘を行わなければならない。好き嫌いの問題ではないのだ。そうは思っても、半ば恐怖に近い拒否反応はなかなか拭えない。どうしたものかと頭を抱える。

テスト

実験が終わり、ようやくリツコさんの説教から解放された。ミサトさんも「シンジ君にビールでも飲ませたんじゃないの」などとあらぬ嫌疑をかけられたため、うんざりしている。

ふと、俺は綾波レイに会っておこうと思いついた。

「ミサトさん、今日はもう何もないですね？」

「そうね。今日のところはシンクロテストで終わり。どこかに行きたいの？」

「いや、綾波さんに挨拶がてら、見舞いに行こうと思って」

「あら、やっぱり気になるのかしらん」

「……まあ、そうですね。同僚になるわけですし」

「ふうん。場所はしってるのよね？まあ頑張つてらっしゃい」

などとニヤニヤしながら言う上司に、俺は「ただの見舞いですからね」とだけ断って、踵を返した。

「はじめまして……綾波さん」

ベッドに横たわる少女。蒼銀の髪と、紅い瞳。透けるような白い肌。

うーむ。現実だとこんなふうになるのか。綺麗だなあ。

それだけに、右目を塞ぐ眼帯や、右腕のギプスが痛々しい。

「……誰？」

見惚れていると、訝しげな目で尋ねられてしまった。いかん、これじゃ怪しいやつだ。

「えーっと、俺は碇シンジ。今度、綾波さんと同じエヴァのパイロットになったんだ。よろしく」

「いかり……しんじ、そう、アナタが」

「え、俺のこと知ってるの？」

「……私に、何をする気なの？」

「は？」

「司令が言ったわ。シンジは、女と見れば何をするか判らんから、気をつけろ、って」

あまりに予想外のセリフに呆然とする。

あの野郎。どういうキャラなんだアレは。アニメではそんなギャグ要素なかったよな？

湧き上がる困惑と怒りを抑えつつ、微笑を作る。果たして成功してるだろうか。

「ただ、挨拶したいと思ったただけだよ……ダメかな？」

「……構わないわ」

彼女の返事に、俺はホッとした。とりあえず椅子に座る。

とは言うものの、何を話せばいいんだろっ、えっと……

「……怪我、まだかかるの？」

「あと一週間くらいと聞いている」

「そっか……ねえ、そんなに酷い怪我までして、君はまだ、エヴァに乗るの？」

「ええ」

少女の表情は変わらない。

「なぜ？」

「絆、だから」

「司令との？」

「……私には、エヴァに乗る以外、何もないから」

聞き覚えのある会話。しかし、実際の彼女の口から発せられる言葉は、酷く重く響いた。

「……そっか」

数瞬、沈黙する。

「何故、泣いているの？」

「え、あれ？」

確かに頬に感じる涙の軌跡。いかん、なんだこれは。決して同情じゃない。この少女を想って涙するような善人じゃない。不可解な涙の理由を頭の中で必死に探って、一つの言葉にたどり着いた。

「……寂しいんだよな」

「私が？あなたが？」

「俺も、君も」

すべての柵を置き去りに異世界に送りこまれた男と、愛を与えず自らに引きこもる少年。寂しく、不安であることには間違いない。

そして、この少女は、エヴァに乗る以外に自分には何も無いと言ったのだ。エヴァのパイロットであることにどれだけの価値があるうとも、彼女にとってこんな寂しいことがあるだろうか。

もしかしたら勝手な、価値観の押し付けかもしれない。それでも、彼女が新たな絆を得ることができれば、そう思った。

「……よく、わからないわ」

「父さんは、優しい？」

「……よく、わからない」

彼女は俺を見ない。じつと、虚空を見ている。

「エヴァに乗ること得られる絆……それ以外にも、もっとたくさん絆を、欲しいと思わない？」

「それは……司令が望まないわ」

「君はどう思うの？」

少し、俯いてしまう。だんだん罪悪感が沸いてきた。

「そっか……でも、君ならきつと、もっとたくさんの絆ができるよ」  
「何故？」

「ここでようやく、彼女は俺を見た。」

「……君がかわいいし、純粹だから。君が他人に興味を持てば、みんなも君に興味を持つてくれるよ」

紅い瞳が泳ぐ。

「きつといつか、判るよ。……まず、俺と友達になろう」

「司令の命令なら、そうするわ」

「命令じゃないよ。ダメかな？」

「……構わない」

「そっか、よかった」

ホッとした。

「ごめんね、長々と喋らせちゃって……あとはゆっくり休んで。早く退院して学校へ行こう」

そう言つて、立ち上がったところで、ふと思い立つ。

「そっだ、お願いがあるんだ」

「……何？」

「俺のことはシンジって呼んでほしい」

「……シンジ、くん」

「うん。それと、君のことレイって呼んでいい？」

「……構わないわ」

「よかった。じゃ、また来るよ、レイ」

レイに語った内容を思い出して、俺は休憩コーナーで独り、羞恥に悶えていた。

なんであんな気障な言葉、ポンポンと出たんだろう。

……彼女の言葉を聞いて、俺も独りだつてことを再認識したら、

……でも多分、彼女は俺以上に孤独を感じているんだろう。何故かそう思つた。だから、言わずにいらなかった。

はあ、ゲンドウの動きも気になるけど、俺もいい加減にキャラが

変わっているな。『俺』も『シンジ』も、こういうのは苦手だったはずなんだけど。

……まあ、いいか。

これがきつかけでレイが人間らしくなって、反骨心みたいなものを持つてくれればいいんだけど。

「何、頭かかえてるの、シンジ君」

声をした方を振り向くと、リツコさんが立っていた。

「あ、いえ何でもありません。大丈夫です」

「何か悩みがあるなら、私やミサトに相談しなさいね。エヴァとのシンクロには精神状態も影響するから」

「はあ。わかりました」

そんな俺を見て、微笑を浮かべるリツコさん。

「まあ、ミサトとはもう、随分腹を割って話ができているみたいだけれど。意外と世渡り上手なのかしら」

その言葉に、思わず苦笑が漏れる。

「そんなことはありませんよ」

この人、こんな優しいキャラだったかな？もっと冷たいのかと思っただけ。

などと考えていると、視線を俺から外し、表情を消して、リツコさんはボソリと問うた。

「シンジ君、第三使徒との戦いとき……初号機の中で誰と話したの？」

「え？」

「意識を失いつつ、誰かと会話していたように見えたわ」

どうやらリツコさんは察しているようだ。「会話」の相手も。隠す意味は……あまりないか。

「……ええ。母さんと話していました」

「そう……やっぱり。シンクロ率が落ちてるのは、お母さんの存在

を知ったから、かしら」

「判りませんが……たぶん、違います」

「違うというのは……なにか見当がついているのかしら」

俺はどこまで話すか悩んだが、どうせ腹芸など不得手だ。隠せるネタなんてないし、それなら子供らしく、嫌だと思ったことを吐き出してしまおう」

「許せないですよ。母さんが。父さんも許せないけど、母さんはあまりにも勝手過ぎる。俺も父さんも、母さん一人に苦しめられるようなもんですから」

それを聞いたリツコさんは目を見開いた。

「シンジ君……エヴァのこと……」

「ええ。大体のところは母さんから聞きました。母さんがエヴァを開発した理由、初号機に取りこまれ、サルベージされない理由……母さんの信仰するナニモノかには付き合いきれない。そんなもののために振り回されるのが許せない、というのが正直なところですよ」

怒りのあまり声が震える。

しばらく流れる沈黙。

「シンジ君が、何のためにエヴァに乗ったのかはわからないわ。お金のためやお父さんのため、というわけでもなさそうだけど……あなたがお母さんを憎む気持ちもわかるわ。でも……お母さんは、シンジ君の目的を妨害しようとしてるかしら？」

はっ、とした。

「私もね……正直言うと、あなたのお母さんに含む所があるわ。でも、私は私の欲するもののために、彼女たちを利用する。拒絶する理由は、今のところない」

なるほど、と思った。目先の憎しみに捕われて、目的を見失ってはいけない。

同時に、俺が目的自体を失いつつあることに気がついた。

始めは、シンジとしてネルフに関わりつつ、アニメで描かれたらしいサードインパクトの回避を、と考えていた。

しかし、この世界と「エヴァンゲリオン」の世界が同じとは限らない。相違点も多い。それを実感として認識しつつある。アニメの「人類補完計画」とて、碇ユイの計画とは違っているようだし、行く末がサードインパクトのような破滅に至るのかどうか、判らないではないか。

考えこむ。

結局、当面はエヴァに乗って使徒を撃退しつつ、真実を探らなくてはならない。この世界の事実を。そのためにはエヴァに、碇ユイに協力を仰ぐ必要がある。少なくとも俺に対して害意は持っていない。

「そうですね。目的を見失っちゃどうしようもないですもんね。……ありがとうございます。リッコさん」

「いいわ。私も、今のような状態が続くと困るもの。いざと言うときエヴァが動かないと、ね」

それは、照れ隠しなのか、俺のことも利用しているだけであるという宣言なのか判別できなかったが、少なくとも、ミサトさんより付き合いやすい相手ではある気がした。

そして俺は、リッコさんのことも利用させてもらおう、と思った。それは危険な賭けでもあったが……

「リッコさん、一つ相談があるんですが」

「何かしら？」

「父さんが、母さんのことを諦める、何かいい方法はないでしょうか」

碇ゲンドウと赤木リッコの関係がアニメの通りであるとするならば、このセリフはとても重い意味を持つだろう。リッコさんがゲンドウに欲してやまないもの、それを得るにはどうしたら良いか、と問っているのだ。その答えはリッコさん自身が一番望むものだろう。リッコさんは怪訝そうな顔をした。あまりにも脈絡がなさ過ぎただろうか。

「どうして、司令があなたのお母さんを諦めていない、と思うの？」



俺は慎重に答えを探った。

「……レイが、母さんに似ていたんです」

リツコさんの顔が、少しだけ険しくなる。

「レイの出生については、母さんに聞きました。彼女は母さんのクローンみたいなものでしょう？そして、父さんは彼女を傍におき、あんな風に……エヴァ以外に何も無い、そう思い込ませている。そうやって自分に縛り付けている。ということは……そういうことでしょう？」

重い沈黙が流れた。リツコさんは顎に手をあて、しばらく考え込んだあと、口を開いた。

「それは、レイのためかしら？」

「自分のためでもあります。あんなのも実の父親ですから」

どちらのものともつかない、溜息ひとつ。リツコさんが立ち上がった。

「正直見当もつかないけれど、まあ、考えてみるわ」

そう言って立ち去った。

碇ゲンドウが、もしアニメの通りならば、彼は、ゼーレのものは別の、妻に再開するためだけに立てられた「計画」を進めようとする。それに対する楔になればいいが。

そんな手前勝手な理由で、彼女の後ろ暗い部分をつついてしまうことに、今更ながら一人、酷い罪悪感を感じていた。

## 第四話 新しい日常

「碇シンジです。父の仕事の都合で先日引っ越してきました。よろしく願います」

碇シンジは中学生である。学校には通わなくてはいけない。ということで、市立の中学校に転入することになった。

「それじゃ、席は……まあごらんの通り空席が多いから、適当に座りなさい」

いいかげんな担任教師の言葉に、教室をぐるりと見渡す。レイも同じクラスと聞いていたので、席が近い方が何かと話せていいかなあとも思ったのだが、彼女はまだ怪我が治りきっておらず休んでいる。そのため、彼女の席がわからない。担任か誰かに訊けば判るだろうけど、「綾波さんの席はどこですか？」なんて訊いたらさすがに露骨過ぎる。

しかたないので、窓際の空いている席を適当に選んで、座ろうとした。

「ああ、すまん。そこはもう使ってる人がいるんだ。今日は休んでるが……」

俺はちよつと驚いた。普通、学校の机など、本人がいなくとも中に何かしら物があつたり、横になにか引つ掛けてあつたりするものだが、今座ろうとした席は、そういった「使っているような痕跡」が全くなかったのだ。それで、この席の使用者がレイであることを直感した。

「はあ、じゃ、こっちはいいですか？」

ちようど、その席の斜め前が空いていたので、そこを指差す。

「ああ。そこは空いてる。じゃあ、わかんないことがあれば、そこにいる学級委員長の洞木に訊きなさい。洞木、たのんだぞ」

「はい」

担任の言葉に返事したのは、髪を二つに分けて纏めた、そばかす

顔のマジメそうな女の子だった。

ホームルームを終えて担任が教室から出て行くと、その洞木さんが話しかけてきた。

「洞木ヒカリよ。よろしくね」

「よろしく、洞木さん」

「それにしても……こんな時期に引越してくるなんて、珍しいわね」

「え、なんで？」

「この辺、もう疎開が始まってるのよ。この間の怪獣騒ぎ、知ってるでしょ？」

「怪獣騒ぎ……ああ」

思わず苦笑しかけて慌てて抑えた。

「そうだね……」

「ねえ、やっぱりあの噂、本当なの？」

後ろから、別の女生徒が身を乗り出してきた。

「あの噂って？」

「碇君、あのロボットのパイロットなんですよ？」

噂。子供の空想から生まれた根も葉もない作り話なのか、それとも機密が漏れているのか、判断に苦しむところだ。まあ、疎開の始まったこの時期に転入生ってのは確かに不自然だし。確かアニメでもすぐにバレていたような気がする。

「碇君、ホントなの？」

洞木さんまで身を乗り出して訊いてくる。教室中からも視線が集まる。バレバレでも、自分の口から機密を漏らすのは抵抗がある……とはいえ、今後隠し続けながらの学校生活もやだなあ。口止めされてるわけでもないし、いいか。

「まあ、うん。ホント」

そのとたん、教室中の人があつと集まってきた。

「すごい！カッコイイ！」

「どうやって選ばれたの？」

「テストとかあったの？」

「怖くなかった？」

「必殺ワザとかあるの？」

「どういう仕組みで動いてるんだ？」

「あの怪獣、一体何なの？」

恐ろしい勢いで質問が飛んできて、しどろもどろになつて答えにく。といつても、めんどくさそうな質問には「機密だから」とお茶を濁しておく。

そうしていると、不意に後ろから声がかかった。

「ふん、エラそうにスカしおって」

振り向くと、ジャージ姿のガタイのいい男が立って、見下ろしていた。

「鈴原、喧嘩はだめよ」

「喧嘩なぞせんわい」

洞木さんがたしなめるが、男はさらに鋭い視線を俺にぶつけてきた。

こいつは……もしかして鈴原トウジ、ってやつだろうか。たしか漫画だと、第三使徒戦で彼の妹が大怪我して……それを恨んだ彼に、この後屋上に呼び出されて、殴られるんだよな。

などと考えていると、ジャージの男は突然頭を下げってくる。面食らった。

「気にはくわんが……礼はいつとく」

「礼って……俺なんかした？」

「ワシの妹が隠れてたシエルターな、危うくあの怪獣に叩き壊されるところだったんや。直前でオマエのロボットが怪獣をフツ飛ばしてくれなんたら、そのままシエルターごと御陀仏やった……だからオマエは妹の命の恩人や。ありがとう」

周囲で「おおお」という歓声上がる。拍手まで上がった。男は頭を下げたままだ。

「い、いいよそんな。頭上げてくれよ。俺だって無我夢中で、助け

ようと思って助けられたわけじゃないんだ」

俺はその時、母親と呑気に談笑　　というほどこいもんではなかったが　　していたのだから。

だが、男はそれを謙遜としてとらえたようだ。ようやく上げると、きよとんとした顔をして、俺を見た。

「オマエ……思ったよりいいヤツやな……」

「そ、そう？」

「よっしゃ。これから仲ようしようやないか、碇。ワシは鈴原トウジや。トウジと呼んでくれ。それとこいつは」

トウジは、自分の横にいた眼鏡をかけた男の方を向く。眼鏡の男は一步前に出てきて、言った。

「俺は相田ケンスケっていうんだ。ケンスケでいいよ」

「ありがとう。よろしくトウジ、ケンスケ。俺のことも、シンジでいいよ」

「おう、よろしく」

その後も、休み時間の度に質問攻めにさらされることになった。

「今日はシンクロテストの前に、インダクションモードの訓練を行うてもらわ」

今日の訓練の内容について、ミサトさんとリッコさんから説明を受ける。

「インダクションモード……えーと、射撃訓練ってことですか？」

「そうよ。ようやくパレットライフルも実戦配備になったしね。一応これに目を通しておいで」

そう言つとリッコさんは、パレットライフルの使用説明書とスペックシートをよこした。

「これでちよつとは楽になるといいわね」

さほど期待していない、というような口調で話すミサトさんに、

眉をひそめるリッコさん。

ふと、漫画の第四使徒戦を思い出した。確かあの時、焦ったシンジはパレットライフルを撃ちまくり、弾かれて粉塵化した弾丸で視界を遮られ、ピンチに陥った。

そこで俺は、弾丸のスペックシートを見た。幾つかのオプションがあるようだが、基本的には劣化ウラン徹甲弾を使用するようだ。

「リッコさん、この弾丸、劣化ウランって書いてますけど……」

「ええ。それが何か？」

「えーと、確か劣化ウラン弾って、弾着したときに高温を発生して燃焼して、さらに酸化ウランの粉塵を撒き散らす、らしいじゃないですか」

ネットで仕入れた知識を披露する。と言っても、単に知ったかぶりしようということではない。

「なあに？環境保護でも主張するつもり？」

「いや、まあ確かに守るべき都市の近くでウランを撒き散らすのもどうかと思いますが、その前に、こういう弾丸を高速連射したら、煙と粉塵で視界が遮られるんじゃないかなー、と」

そんな指摘をすると、ミサトさんは意外そうな顔で、こちらを見た。

「意外と詳しいのねえ。実はシンちゃんって軍オタ？」

「いや、そういうわけじゃないんですけども。したこともない戦争で命かけることになったんで、自分なりにいろいろ調べたんですよ」

「そう、ヤル気があるのは感心ね。あなたの言うとおり、劣化ウラン弾でフルオート連射は避けたほうがいいかもしれないわね。もともとそのような使い方をする弾丸ではないし」

うまくいった。「煙幕になってしまふ」ということをミサトさんやリッコさんに意識させておけば、使徒と出会い頭に、いきなり「パレットライフル斉射」なんて命令を出されることもないだろう。「それはそれとして、インダクションモードの訓練をはじめましょう」

ミサトさんの言葉に、俺もリツコさんも従った。

「目標をセンターに入れて、スイッチ。目標をセンターに入れて、スイッチ……」

シミュレータの画面に現れる、第三使徒を模したポリゴンキャラクターを、レバーで照準を操作して、撃ちぬいてゆく。4、5発食らったキャラクターは、それだけで粉碎されてゆく。

こんな簡単に使徒が倒せるんなら、苦労しないよなあ。

落ち込んでいたエヴァとのシンクロ率は、だいぶ回復していた。碇ユイを許すのではなく、理解するでもなく、単に「協力者」として受け入れる。微妙な距離感だったが、それなりにうまくいったようだった。

新居は、意外に広かった。

広いと言っても2LDKだが、元の世界では六畳一間の部屋に住んでいたのだから、とても広く感じる。

荷解きを終え。今日調達した食料、調理道具、その他もろもろを収納したあと、リビングに寝転がる。

盗聴機やら監視カメラがそこらに仕掛けられてるんだろうな、とは思ったが、俺に探す技術があるわけでもないので気にしないことにした。大体、下手に処分して怪しまれるのも得策じゃない。

昨夜はミサトさんとリツコさん、オペレータの伊吹マヤさんが訪ねてきて、俺の引越し祝いをしてくれた。といっても、この女性陣は揃いも揃って料理ができないようで、ミサトさんがレトルトや惣菜を山のように買ってきたのだが、それでは寂しいと思い、俺が腕を振るうことになった。その味には三人とも随分喜んでくれた。

その料理の腕前は「シンジ」のものであったが、これにはあまりよくない記憶が纏わりついていて。伯父の家にいたとき、まだ十にも満たないシンジに、わざわざ離れが生活スペースとして与えられたのだ。台所も完備されていて、食事は独りで作り、食べる。「自立心を養うため」と言えば聞こえがよいが、俺から見れば体のいい「隔離」である。……伯父夫婦は、シンジのことを疎ましく思っていたようだ。あるいは意識的に扱いを悪くしているようにさえ思えた。

彼の料理の腕は、そんな孤独の中で培われた。そういう「孤独から生まれた料理」を他人が食べ、喜んでくれる。それを見ると、俺は無性に嬉しくなった。

レイが学校に出てきた。

といっても怪我が完全に治ったわけではなく、相変わらず右目には眼帯を着け、右腕を吊っている。

彼女は、学校に来ても終始無言で、あの紅い瞳でぼうつ……と窓の外を見つづけている。ちなみに席は、俺の推測通りだった。

とりあえず、校内の女子にやたら詳しいケンスケに、レイのことを聞いてみることにした。

「なあ、ケンスケ」

「ん、なに？」

「レ……綾波さんのことなんだけど」

「綾波がどうした？」

「どうしたってワケじゃないんだけど、学校では普段どんな感じなのかなーって」

「なんだシンジ、お前綾波に気があるのか？ 渋い趣味してんなあ」

「う、いや、そういうわけじゃなくて」

「ははは。照れるな照れるな。と言ってもなあ……」



言いよどむケンスケ。

「……あの通り、としか言えないんだよ」

そう言ってケンスケは視線を移す。その先には、相変わらず独りで外を眺めているレイの姿があった。

「友達もないみたいだしな。そもそも全然喋らないし、笑いも怒りもしない。鉄面皮、ってやつだな。綺麗な顔してるんだから、普通に笑ったりすれば人気もでるんだろうに」

「オマエは売れる写真が撮りたいだけやろ」

ケンスケの後ろからトウジが声をかける。ケンスケは、人気のある男女の写真を密かに撮影し、それをファンに売りさばいて小遣いを得ている。彼のカメラマンとしての腕はかなりのものだが、その腕の使い方には少々問題があった。

「まあね」

ケンスケは悪びれもせず、そう宣ったものだ。

その様子を尻目に、俺はレイに視線を移した。相変わらずぴくりともせず、外を眺めているレイ。その姿は本当に人形のように見え、俺は暗澹たる気分になった。

と、そのレイに動きが見えた。携帯電話を取り出し、電話に向かって何やら一言二言話した後、立ちあがった。

「シンジ君、非常召集。……先、行くから」

それだけ言って、レイはかばんを引つ掴んで出て行ってしまった。余りに唐突だったので、脳味噌が理解するのに五秒ほどかった。

「……あ、俺も行かなきゃ」

そう言って、未だ呆然としているケンスケとトウジを残し、俺はレイを追いかけるのだった。

そして、第四の使徒が襲来した。

## 第五話 傷つく弱さ

「なんだアレ……」

ケイジのモニタに映し出された第四使徒は、確かに漫画と同じ姿だった。その表面には、蛇のような鱗が見える。

その生物的な質感が、超自然的なデザインと相俟って、吐き気を催すような雰囲気を放っていた。

『ホラ、シンジ君、ボーッとしてないで早く搭乗しなさい』

スピーカからミサトさんの声が響き、俺は慌ててエントリープラグに飛び込んだ。

プラグが初号機に挿し込まれ、中にLCLが満たされると。起動シーケンスが始まる。

『緊張してる？』

ミサトさんの声。

「まあ……実際今回が初戦みたいなもんですからね」

俺は努めて軽く喋るが、ちよつとだけ声が震えている。

『だあいじょぶよ。ある程度は訓練積んでるんだから、前回よりは随分マシなはずよ』

いくら訓練を積んでいるとはいえ、ついこの間までは戦争どころか殴り合いのケンカすら縁のない生活をしていたのだ。むしろ訓練が「これが命の取り合いである」ことを否応無しに実感させてくれた。もちろん全く実感がなによりはマシなんだろうが。

『……初期コンタクト全て問題なし。双方向回線開きます』

この感覚。自分が初号機に溶けこんでゆく感覚が、少しだけ心を落ち着かせてくれた。

『いい？シンジ君。地上に出たら、すぐ右の兵装ビルにパレットライフルを出すからそれを取って。その後、パレットライフルを三点<sup>バ</sup>射モードにして、使徒のATフィールドを中和しつつ牽制するのよ』

訓練の中で幾度と無く議論し、厳選したいくつかの攻撃パターン  
のうちのひとつ。イメージはすんなりと浮かんだ。

「了解」

応答すると、満足そうに微笑んで、ミサトさんは号令を下す。

『エヴァンゲリオン初号機、発進！』

号令と共に、初号機は地上に打ち出された。

初号機がリフトオフした一瞬後、右にある兵装ビルからパレット  
ライフルが出てきた。それを取る。

「インダクションモードに移行。パレットライフル、バーストモ  
ード」

前面のモニタに照準が表示され、グリップハンドルの表面にトリ  
ガーの感触が現れた。ビルの陰に隠れながら、向こうにいる使徒の  
様子を伺う。

殺気、というのだろうか。あの使徒はこれから、俺を殺すために  
動き始める。その相手をこの手で殺す。未経験の恐怖。手が震える。  
俺は深呼吸して、声を抑えて気合を入れ、ビル陰から体を乗り出  
した。瞬時、使徒のコア付近を照準と重ねることができた。今だ！

ガガガン！　ぎぎぎいん！

ガガガン！　ぎぎぎいん！

弾丸は全て、使徒に達する前に甲高い音を立てて砕け散った。

あれ？

『ちよつとシンジ君！ATフィールド！』

ああ、しまったっ！

慌ててATフィールドを張ろうと思った瞬間、使徒から何か飛ん

でくるのが見えた。殆ど反射的に横に飛ぶと、光の鞭がすり抜けていった。持っていたパレットライフルを貫いて。

まずい、武器を失った。

『シンジ君、予備のライフルを出すわ。受け取って』

ミサトさんから通信。ほどなくして新たな兵装ビルが生え、そこからパレットライフルが出てきた。が……

「うわっ」

再び光の鞭が飛来し、俺はほとんど反射的に横に飛んだ。鞭は回避できたが方向がまずい。ちょうど、ライフルを格納した兵装ビルと自分との間に、使徒が位置するという状態になってしまったのだ。焦るな。無理に取りに行っても敵の攻撃の餌食だ。使徒から距離をとり、時計回りにゆっくり回り込む。散発的に鞭での攻撃が飛ぶが、相手の動きを見ていればなんとか回避できる。ただ、近づくのは難しそうだ。やはり、ライフルは回収しなければ。

やがて、もう数歩でライフルに手が届く距離までたどり着いた。あと少し。そう思い、視線がライフルに向く。

その瞬間が命取りだった。

視線を戻すと、いつの間にか使徒が間合いを詰めていた。

「しまっ……」

叫びきらないうちに、足首に痛みが走る。次いで、ぞっとするような浮遊感。

足首を鞭に絡め取られ、そのまま投げ飛ばされたのだ。

「うわああああああっ！」

地鳴りのような轟音がこだまする。

背中に激痛が走り、息が詰まった。どうやら山肌に叩きつけられたようだ。

と、その状態に強い既視感を覚える。それが、朦朧となった意識を急速に覚醒させ、さらに恐怖すらも忘れさせた。

その既視感に従い、尻の後ろについた、エヴァの右手元に視線を

移すと、指の間で、泣きながら震えるトウジとケンスケがいたのだ。そう、それは漫画版と同じ展開。エヴァ見たさにシエルターから抜けだした二人が、戦いに巻き込まれるのだ。迂闊だった。漫画と同じこの状況は予測できたはず。ちゃんとクギをさしておくべきだった。

『何でこんなところに民間人が!?!』

ミサトさんの声も悲痛だ。

だが、使徒は驚いている余裕なんか与えてくれない。光の鞭が再び襲ってきた。

下手に動くと二人を踏み潰してしまう。

そう咄嗟に思った俺は 自分でも信じられないが 飛んできた鞭を二本とも掴んでいた。

光の鞭は炎のような熱量を持ち、容赦なく、エヴァの手のひらを焼いた。熱さは接続シンクロしている俺にも伝わる。

「熱ぢぢぢぢぢぢぢぢ! ミサトさんっ!」

「わかってるわよっ! なんとか振り払って!」

「だって近くに人がっ!」

『できるだけ動かないように、振り払うのよ!』

「ムチャ言わないで下さいっ!」

トウジとケンスケを見るが、腰が抜けているのか、恐怖に竦んでしまったのか、座り込んで動かない。

俺は手の痛みに耐えながら、数瞬、考える。が、考えるまでもなく、他に手はない。

「ミサトさんっ、二人をエントリープラグに収容します! 許可を下さい!」

一瞬の沈黙。しかしそれが、俺にはヤケに長く感じられた。

『……わかったわ。許可します』

「初号機、現命令のままホールド! エントリープラグ、イジェクト!」

許可が下りたところで、俺は躊躇なくプラグを出した。そして、

外部スピーカをオンにして、叫ぶ。

「二人とも、乗れっ！」

俺が場所を説明する前に、即座に反応したのはケンスケだった。迷わずエントリープラグに向かってよじ登る。トウジは慌ててケンスケに倣った。

さすがケンスケ。どっからエヴァの仕組みなんて情報を仕入れてくるんだか。

『葛城一尉！プラグに民間人を乗せるなんて越権行為よ！』

『責任は私がとります』

リツコさんとミサトさんの口論が聞こえるが、俺の知ったこつちやない。ハッチをあけると、二人が飛び込んだ。

「ぶわあっ！なんやコレ、水やないかあっ！」

「か、カメラ、カメラが……」

ＬＣＬに驚く二人。

「プラグ、エントリー！」

俺が叫ぶと、再びプラグがエントリーされ、神経接続が回復する。手にあの熱さが戻ってくるが、先ほどより感覚が鈍い。

『異物が入ったせいで、シンクロ率が落ちてるわ！』

リツコさんが叫ぶ。

「異物とはなんじゃコラア！」

「うるさいトウジ！気が散る！」

なにやら喚くトウジを怒鳴って黙らせる。この状態でエヴァを動かすには、いつも以上の集中が必要だ。

『退却よシンジ君。回収ルートは３８番』

ミサトさんの指示が飛ぶ。３８番ルートは現在地のすぐ横だ。

鞭を引っ張って使徒を寄せ、蹴り飛ばす。その隙に、回収坑に走り。首尾よく坑に飛び込んだ。回収坑が開き、初号機が回収されると、使徒がその穴に飛び込もうとしている。

ヤバイ、ジオフロントに入られたら……

そう思った俺は、坑にＡＴフィールドで蓋をする。

使徒が坑に入れず、ATフィールドに頭を打ち付けているうちに、シャッターが閉じた。

……疲れた。

「だ、大丈夫かシンジ」

「大丈夫じゃないよ……」

謝るトウジに、ジト目で返す俺。

「なんであんなとこにいるんだ、死ぬ気かよ？」

「す、すまん。いや、ケンスケのヤツがな……」

「なんだよ、トウジこそ」

何か言い訳をしようとして、口論になりかける。こんな狭いところでケンカでもされたらたまらない。慌てて制止する。

「おい、やめろ。こんなとこでケンカすんな。……事情は俺じゃなくて、ネルフの職員に説明してくれ。どうせ絞られるだろ」

「げ」

「まあ拷問とはいかないだろうが、それなりに厳しい尋問と説教が待ってるんじゃないかな」

「うつうつ……」

と、さんざん脅しかけてる間に、エヴァはケイジに到着する。トウジとケンスケは、プラグから降りると、黒服につれていかれた。

そして俺は、三度エヴァにエントリーする。こっちの仕事は、まだ終わっていない。

「すみませんミサトさん、ミスりました」

『まあ、反省会は後にしましょう。ちよっちマズイ情報があるわ』

「……なんです？」

『やつのATフィールド抜きの体皮強度を試算したら、パレットライフルの火力じゃ不足するっていう計算結果が出たそうよ』

まじか。というより、どうやってそんな試算をしたんだろうか。

『むき出しのコアの強度は情報不足で試算できてないけど、第三使徒の例からいくとそっちなら行けそうなのよね』

「といっても、今の俺の腕じゃ、動きながらあの小さな的に当てるのは、どうにも……」

かと言つて、あの高速で動く光の鞭を掻い潜つて、近接戦に持ち込むのもまた難しい。せめてあの攻撃を無力化できれば……というところまで考えて、脳裏に浮かぶのはまたも漫画の風景。やはりアレしかないのか。躊躇するが、あまり時間を掛けてもいられない。覚悟を決める。

「……作戦を提案します」

『言つてみて』

「あの使徒の鞭は、鞭といいつつ薙ぐのではなく、何故か突く攻撃がほとんどです。そこで、プログレッシブ・ナイフを装備して、使徒の正面から一気に間合いを詰めます。そして、あの鞭で初号機のボディを貫かせます」

『え？』

「で、ボディで鞭の動きを封じつつ、頭の下にあるコアをナイフで破壊します」

そこまで説明すると、慌てた様子でミサトさんが制止する。

『ちよつと待つてよ、あなた、痛覚までシンクロしていることを忘れてない？ それに、一歩間違えばプラグごと破壊されるわよ』

「今の俺の技術と頭じゃ……これが精一杯です。もう少し被害を抑えられる方法があればいいんですが」

しばしの沈黙。

『……その作戦を採用します』

「了解です」

『ごめんなさい。無能な指揮官で』

俯くミサトさん。

「お互い様、ですよ。その辺も、あとで反省会しましょう」



そして、少し意識的に笑って見せた。

「大丈夫。なんとかしますよ」

その直後、何故かミサトさんの映像が突然途切れた。

再び地上に現れる、俺と初号機。

プログレッシブ・ナイフを肩のウェポンラックから取りだし、構える。エヴァを人間サイズとすると、刃渡りはだいたい文化包丁と似たところか。酷く頼りなく見える。もうすこしリーチの長い武器がほしいところだ。

手と膝が、震える。

それでも、こんなところで死にたくはない。

使徒を睨む。気合を入れる。

ATフィールドを使徒のそれにぶつけ、中和させる。

俺はナイフを腰ために構えて、そのままチャージをかける。

「うおおっ！」

恐怖を振り払うための絶叫。

そんな初号機に向かって、恐怖の元が、飛んできた。

どすっ！どんっ！

「うっ、ぐ……」

腹から全身に走る、経験したことのない激痛に、一瞬意識が飛びかける。

だが、初号機の胸と腹を貫き、目論見どおり身動きできなくなつた使徒を見ると、辛うじて踏みとどまることができた。

痛みを通り越して、もはや何だか判らなくなった異物感に耐え、大きく一步踏み出す。それでようやく、使徒の胸元の光球コアに手が届く距離になった。

かすかに残った意識をかき集め、イメージする。コアにナイフを突き立てる、イメージを。

「うわあああああああああああああああ！」

狙いあやまたず、刃は光球に吸い込まれる。

「あああああああああああああああああああ！」

高速で振動する刃は、使徒のコアを少しずつ抉ってゆく。

「あああああああああああああああああああっ！」

そして、コアの亀裂から漏れる光が消えたとき……エヴァを貫く光も消えた。

使徒は脱力し、その場に立ち尽くす。

一瞬後、俺は痛みから解放された。そして、そのまま俺は意識を失った。

また、病院送りか。

目覚めて最初に見えた天井が、前回と同じだったので、俺は苦笑するしかなかった。

その天井を見たまま、戦いを思い返す。

怖かった。恐ろしかった。だけど、それとは別に、妙な感覚があ

った。

ただ興奮していただけではない。手詰まりの場面でも、妙に冷静に、漫画の内容を思い出せる俺がいた。

楽しんで……いたのかな。

そう考えると、納得がいった。何故こんな状況に楽しみを覚えるのか、心当たりはないわけではない。

退屈だったのだ。

逃げたかったのだ。

かつて『俺』がいた世界で感じていた、閉塞感と無力感を払拭するものが、ここにはあったのだ。

恐怖は、事が終われば消える。肉体的な痛みもやがて消える。

それなら精々、「傷つきながら戦うヒーロー」を演じてやろう。

ここならそれができる。そんな風にさえ思った。

そんなことを考えていると、病室の扉が開いた。入ってきたのは、蒼銀の髪の少女。

「レイ？」

レイは無言でベッドの傍まで来ると、あの冷たく紅い目で、俺を見つめた。俺は何故か、その瞳から目を逸らせない。しばらくただ、じつ、と互いの顔を見つづけた。

沈黙を破ったのは、レイだった。

「わからない」

「え？」

「なぜ、あなたは あんな危険なことをしたの？」

「危険なことって？」

「双子山に叩き付けられたあと、使徒の攻撃をかわさず、鞭を掴んだ。シンクロ率が落ちるのに、あの二人をプラグに乗せた。なぜ？」

「なぜって、そりゃあ あの二人は友達だしなあ。さすがに、へ

夕に動いて二人を踏み潰したんじゃ、寝覚めが悪いじゃない」

友達、とか、知り合いが死ぬ、ということがよく理解できていないようだ。これも命令優先で育てられた故なのだろうか。

「シンジ君が死にそうになっても？」

「死にそうなのは、今だってそう変わらないと思うけど」

「人類が滅亡が賭かっけていても？」

「うーん」

俺はしばらく考えたあと、言った。

「やっぱほら、友達や知人が危機に陥ってたら、助けてあげたいよ。できれば、他の人をないがしろにしたくはないけど、……これも絆、ってやつかな。やっぱ絆が強い人は、えこひいきしちゃうよね」

「えこひいきって、自分よりも？」

「……あんまり、いいことじゃないんだけど……つい、ね」

「そう」

レイは相変わらず、冷たく言った。

そのまま、しばらくの沈黙。

「どうしたの？レイ。俺のこと心配してくれるの？」

沈黙に耐えられなくなった俺が、からかうように言ってみた。

「心配？そうね……そうかもしれない」

「え、ほんと？」

俺は軽い驚きと、強い喜びを感じていた。このレイが、俺のことを心配してくれているなんて。

だが、レイが語る次の言葉は、より強い驚愕と、大きな疑念を俺に打ちこんだ。

「私はあなたを守らなくてはならないから。……命令、だから……碇司令の」

## 第六話 そばにいるヒト

俺は、第四使徒の亡骸の解体・調査現場にやってきた。ミサトさんに「自分の倒した敵を見ておくのも悪くないわよ」とか言われて、連れてこられたのだ。

「やつほー、リツコ」

「ちわー」

「あらシンジ君、こんにちは」

出迎えてくれたのは、技術部の最高責任者であるはずのリツコさんだった。

「リツコさん自ら現場で調査ですか。大変ですねー」

「まあ、自分で分析するのが一番確実だからね」

言葉の割に、自嘲気味に笑うリツコさん。偉くなっても権限委譲できずに諸事に忙殺されるタイプの人だなあ。

「ほお、言っじゃない。で、何かわかったわけ？」

「これよ」

リツコさんが指差すモニタには、大きく「601」と表示されていた。

「……何スか？これ」

「解析不能、つてことよ」

「何よそれ。結局ワケわかんないつてこと？」

「まあ、そうね。でも、一つだけ判ったことがあるわ。使徒の固有波形パターンが、人間と酷似してるのよ。共通部分は99・89%」

と言われても、俺はよく解らないのだが、ミサトさんには思い当たるところがあるようだ。

「それって……」

ミサトさんがうめくのに続けて、リツコさんがちょっともったいぶる様に言った。

「エヴァと、同じよ」

その後、使徒の解体現場を見て回っていると、ミサトさんが不意に声を上げた。

「あれ、司令じゃない？」

指さす方へ振り向くと、使徒のコアの破片を見学するゲンドウの姿があった。

「へえ。意外と研究熱心なんですね……ちょうどいい。話したいことがあったんだ」

何故レイが、「俺を守る」などと言い出したか、何故そんな命令を出したのか？それを聞きたかった。

「あ、ちよつとシンジ君」

ミサトさんの制止を聞かず、俺はゲンドウに近寄っていった。

「司令」

俺が呼びかけると、ゲンドウはこちらを一瞥し……何も言わず、また視線をコアに戻した。

「司令、お聞きしたいことがあるんですが」

「お前に関わっている暇はない。葛城一尉に聞け」

それだけ言つて、ゲンドウは去っていった。

ずいぶん露骨に避けてくれるな。単に子供への接し方が判らないというだけじゃなく、他にも何かあるのだろうか。

そんなことを考えて眺めていると、去っていくゲンドウの手の平が、酷い火傷跡で荒れているのに気がついた。

「シンジ君……」

心配そうに、俺を呼ぶミサトさん。俺は慌てて、取り繕った。

「ああ、ミサトさん。心配しないで下さい。なんとも思つてないですから、ところで……父さんの手、なんか酷い火傷の跡みたいなの

がありましたけど、何かあったんですか？」

「火傷？さあ……リツコはなんか知ってる？」

「ああ、あれはね……」

リツコさんが語った内容は、俺の「知っている」通りだった。  
それがほんの少し妬ましく、ほんの少し、嬉しかった。

退院後、レイは毎朝のように、通学路の途中で俺を待ち、一緒に登校するようになった。

レイいわく、俺を守るため、だとか。

14歳の女の子に護衛させるというのは、男としてどうにも情けない。とはいえ、何年も戦闘訓練を受けているというレイは、口々に喧嘩もしたことの無い俺などよりよほど強いから、強く反発できない。それがますます情けない気分させるのだが……

まあ、こうやって一緒に歩いているだけでも、ネルフ保安部が請け負っている本来の護衛任務は効率よく進められるだろう。そう思うことにした。

俺とレイは、無言で歩く。レイは言うに及ばず、俺も元々よく喋る方じゃない。結果、互いに無言になる。だけど、不思議とその沈黙は不快ではなかった。ただ、肩を並べて歩く。お互い話をしたときだけ、話す。そんな距離は、とても心地よいものだった。

しかし、レイはどう思ってるんだろうな？

「ねえ、レイ」

「何？」

「俺を守る、って、イヤじゃない？」

「イヤじゃないわ。命令だもの」

レイの口から出る「命令」という言葉は嫌いだ。酷く痛々しく感じるから。

「命令じゃなかったらさ、こうして、俺と一緒に歩きたいとは思わないかな？」

レイは沈黙する。顔には相変わらず表情が無い。怒らせちゃったかな……

と、しばし経って、

「……よく、わからない」

呟くように、レイは答えた。

そして、再び数分の沈黙のあと、レイは先ほどよりも小さな声で、言った。

「……でも、こうしているのは、イヤじゃない」

「そっか。よかった」

それにしても、ゲンドウは何故、レイにあんな命令を出したのだろうか？

ずっと、その疑問が頭に引っかかっている。

ゲンドウの計画が俺の知る通りならば、ゲンドウにとってレイは人形であり続ける必要があるはず。なのに、こうして俺とレイを近づけるような命令を出すことに、どんな意味があるのか。

一体、ゲンドウは何を考えているのだろうか。俺の知らない事実があるのだろうか。あるいは、俺の知ってることは間違いなのだろうか。

「うーん、わからん」

「何が？」

思考がつい、口に出てしまったようだ。レイが俺の顔を覗き込んできてる。顔は相変わらず、無表情だが。

「え、いや、司令がさ……なんでレイに、シンジを守れ、なんて言ったのかなあ、って」



「……あなたが、司令の息子だから」

「だからってレイを……」

そこまで言って、俺はしまったと思い、口を噤んだ。

稀有で希薄な「絆」に縋る少女に、あまりにも無神経なことを言っ  
てしまった。

レイは俯いている。

「……あー……その」

「私には……代わりがいるもの」

「レイ」

俺がちよつと強めに呼びかけると。驚いたように顔を上げるレイ。  
「代わりがいる、なんて言うなよ。少なくとも俺にとって、クラス  
の連中にとって、レイの代わりなんかいないんだからな。」

それにレイだって、父さんに大事にされてるじゃないか。

聞いたぜ。父さん、手に酷い火傷を負ってまで、レイを助けたん  
だろ？」

調査現場で、リツコさんから聞いた話だ。

俺がここに来る前、エヴァ零号機の起動実験が失敗し、零号機は  
暴走。勝手にエントリープラグが強制射出され、ケイジの壁を跳ね  
返り、天井の高さから落下した。

レイはその衝撃で怪我をしたのだが、その時、過熱したハッチを、  
火傷に耐えながら素手でこじ開け、レイを助け出したのがゲンドウ  
だった。

「……でも、あの人が見ているのは、私じゃないもの」

そう呟くと、また、レイは俯いてしまう。

「それを言うなら、俺でもないさ」

「嘘」

「嘘じゃない。あの男が見てるのは……まあいいや。とにかく、な。  
レイはもっと自分を大切にしろ。レイが死んだら、悲しむ人間は少

なくともここに一人いるんだからな」

そう言って笑って見せた。

すると、レイは俺の顔をじっ、と見つめてきた。

「ん？どうした？」

そう言つとレイは目をそらし、「何でもない」とだけ言った。

「今朝も夫婦揃って登校か、羨ましいことやな」

「まったくだね」

今日も今日とて、お決まりの冷やかしを浴びせるトウジとケンスケ。

「だからそんなんじゃないってのに……まったく」

とはいえ、毎朝一緒に登校して、帰りも大抵一緒となれば、そんな風に見えるのは当然だろう。だから俺も強く否定できない。

正直、悪い気分じゃないしな。

「こんだけ見せつけとって、何言うつるんや」

「そうだそうだ。綾波も、シンジが来てから何か雰囲気変わってるし」

「……そんなことないわ」

レイも否定するが、それすらもトウジたちに見ればいいネタだ。

「そんなことあるわい。前はこんな風に、ワシらの話に入ってこんかったやろ」

これまで、レイはたとえ自分のことが噂されていても、反応することはなかったらしい。自分に用事があるときだけ、機械的に反応する。

他人との関わりが嫌いなんだろう……それが、クラスメイトの綾波レイに対するイメージだった。

まあ、これまで他人との関わりを必要ないものと思っていた

ようだから、あながち間違いというわけでもないのだろうが。

だから、俺がクラスの連中、トウジやケンスケ、洞木さんなんかと話すときは、できるだけレイを交えて話すようにした。目論見通り、レイは俺以外の人とも少しずつ会話を交わすようになっていった。相変わらず表情は乏しいが、それすらも、彼女の個性として受け入れられつつあった。

トウジがからかう様子を見ていた洞木さんが、寄ってくる。

「そうそう。綾波さん、最近私達とも随分話してくれるようになったし。やっぱり碇君の愛の力なのね」

「ほ……洞木さんまで」

「シンジ。ワシはお前を見縊っておった！お前は凄い男やつ！」

オーバーアクションで、トウジは俺の肩を掴む。

「心を閉ざした女性を変える……ある意味、男として最高の勲章だね」

ケンスケも大げさに頷いて見せる。

「や、やめろってば。変わるのはレイの意思。俺は何もしてないよ」

「シンジ君」

「な、何？レイ」

俺を呼ぶレイの声が、なんとなく緊迫感を持って聞こえる。

「……私が変わると、迷惑？」

「……はあ？」

その場にいた全員の声がハモる。

「な、なんでそうなるの？」

「私が変わるせいで、シンジ君が皆に詰め寄られて、困っている」  
啞然とする一同。

いち早く再起動を果たしたのは洞木さんだった。

「や……やあね、綾波さん。別に綾波さんが変わるのが悪いわけじゃないわ。今みたいに、明るくなっていくのはむしろいいことよ。」

碇君だって喜んでるわ。ねえ碇君」

「あ、ああそうだよレイ。レイが気にすることはないんだ」  
「本当に？」

無表情だが、瞳が微かに揺れるレイ。

「ホントだってば」

「……アホらし」

「同感」

そう言つて、トウジとケンスケは気が抜けたように自分の席に戻つていった。

放課後。

「レイ、俺、今日は道場だけど、レイはどうする？」

「私も行くわ」

レイに守られてばかりというのも癪なので、ネルフの訓練の合間を縫つて、学校の近くにある中国武術の道場に通うようになった。

「今日も道場かいな。シンジも見かけに寄らず熱血やなあ」

トウジがからかってくる。

「そんなんじゃないよ。融通が利かないだけさ」

「同じや。ワシはそういうノリは好きやけどな」

「あー、確かに好きそうだな」

「トウジは熱血バカだからね」

「誰がバカじゃ、誰がっ！」

「はははは、じゃあな」

トウジとケンスケの漫才を尻目に、俺とレイは教室を出る。

「せいっ！せいっ！」

棒を使った演武を繰り返す。俺から少し離れたところで、レイも同じ鍛錬をしている。

「せいっ！はあっ！」

この道場では、徒手空拳での戦い方の他に、剣、棒、ヌンチャク、トンファーといった多様な武器を用いた戦い方を学べる。俺が空手や柔道といった、比較的メジャーな格闘技ではなく、この道場を選んだ理由がこれだ。ここで馴染んだ武器を、エヴァ用の近接戦用武装として提案しようと思っている。

「よし、そこまで。小休止だ」

師範代が手を叩いて言った。

汗を拭いていると、先輩道場生が話しかけてきた。

「よお、碇。今日も彼女連れか？」

「彼女じゃないけど……来てますよ」

視線をレイに向けると、数少ない女性の道場生が集まり、何やら話していた。

始め、女連れで道場に来るのはかなり反感を買ったりもした。何人かがこっそり俺に喧嘩を売ってきて、レイに叩きのめされた。それがなお強い反感を誘うことになったのだが、元来他人に関心を持たない性質である俺は、気にせず鍛錬に没頭していた。しばらく通っていれば、真剣にやっているのを見てくれる人も増えてきて、気安く話せる仲間もできた。

「ほんつと、レイちゃんって綺麗だよなあ」

「……あんたハタチ過ぎでしょ。14歳に手出したら犯罪ですよ」

ま、それは俺も似たようなものだが。

「それ以前に、叩き伏せられるよ」

「はは、ごもつとも」

「彼女が強いと、苦労するだろ」

「だから彼女じゃないですよ……」

などと笑いながら話す。『俺』も『シンジ』も、本格的に運動を

したことがなかったから、こういう場での人との触れ合いは新鮮だった。戸惑うことも多いが、楽しい。

なんだ、俺もレイと大差ないじゃないか。

そう思うと、不思議と笑みがこみ上げてくる。ふとレイの方に視線を向けると、目が合った。

「なあに見詰め合ってたんだ、碇いゝ」

それを目ざとく見つけた先輩道場生に首を締められる。レイは無表情で、女性たちの談笑の輪に戻っていった。

## 第七話 想いと疑惑と駆け引きと

今日は学校を休み、レイと一緒に、ネルフ本部へ向かう。零号機の起動実験があるのだ。レイはパイロットとして、俺は、万一のための警戒要員として参加を言いつけられていた。

俺は相変わらず考え込んでいた。次の使徒のことである。

漫画の通りならば、今日、第五使徒が来襲するはずだ。兵装ビルを一瞬で溶融させる程のエネルギーを持った加粒子砲。それに対抗するための作戦は、レイの乗る零号機をディフェンスとし、初号機が陽電子砲で打ちぬく、というものになるはず。

初弾を外し、特製の盾をもって加粒子砲からシンジを守るレイ。

しかし、予想以上に早く盾が融解してしまったため、零号機は全身で加粒子砲を浴びることになる。

結果的に、レイには目だった怪我もなかったはずだが、一歩間違えばエヴァごと破壊されていたかもしれないし、そうでなくとも沸騰したLCLで全身火傷、もしくは内臓をやられていたかもしれない。

フィクシヨンのキャラクターに対してならば、そんな危惧の欠片も抱くことはなかったが、こうして目の前にいる少女に降りかかるであろう災難だと思つと、身震いが走る。

なんとか、安全に切り抜ける方法はないものか。

「……くん、シンジ君」

ふと気がつくと、レイが俺の顔を覗き込んでいた。

「どうかしたの？」

「あ、ごめん。ちょっと考え事してて……」

「そう」

前方に視線を戻すレイ。

いつものその無表情さが、今日はやけに気になった。

「ねえ、レイ」

「何？」

「今日の起動実験、怖くないの？」

わずかにだが、当惑混じりの視線を、レイは再びこちらに向けてきた。

「なぜ？」

「だってさ、前は失敗して、怪我したんだろ？」

「怪我は、怖い。だけど、今回は前の反省を踏まえていろいろ対策しているはず。だから怖くないわ」

淀みなく言つてのけたレイが、少し羨ましかった。

「そう。信じてるんだね」

「……シンジ君は、信じられないの？司令のこと」

どう答えたものだろうか。正直に答えたら嫌な気持ちにさせてしまつかもしれない。けど、今更取り繕っても嘘くさいし、どこかでボロがでるだろう。

「そうだなあ。割りきってエヴァには乗っているけど、正直言うと、イマイチ信用できないかな」

そう言うと、レイは立ち止まり、俺を見つめてきた。初めて見る、はつきりと判る悲しい表情。

「レイ……」

「なぜ？あなたと司令には、親子という絆がある。私より強い絆がある。なのに……なぜ？」

それを聞いて、俺は息を詰まらせた。レイにとっての「絆」というものの重さを、俺は軽く見ていたのかも知れない。君が大切にしているものは、俺も大切だ、つい、そういう安直な同意の言葉が喉から出そうになる。

だが、すぐに思いなおすと、首を横に振り、言う。



「あのね、絆が信頼を作るんじゃないんだ。逆なんだよ。信頼が絆を作るんだ。」

血がつながってることが絆を作るんじゃないくて、血のつながりが家族を作り、その中で信頼関係を築くからこそ、絆ができるんだよ」「家族……信頼」

レイは何かの設問を解こうとするかのように、その口から単語を紡ぎ出す。

「俺には、レイと父さんがどんな関係なのかは判らないけど……でも、多分……君は父さんと何年も一緒にいたんだろう？ でも、俺との間には何も無いんだよ。十年も離れてたんだから。何も、無いんだ」

口を突いて出た言葉に、自分で戸惑う俺を、傍らで冷静に分析する俺がいた。「何も無い」といつつ、言外にそれを求めている。

『シンジ』が、未だに父親を求めているというのだろうか？

最近では、どこまでが『俺』の思考で、どこからが『シンジ』の思考なのか、区別がつかないようになってきている。こんな風に、自分の言葉に戸惑いを覚えるのは、久しぶりだった。

レイは俺の横顔をじつと見ている。こんなことで混乱している俺を、この少女は、どんな風に見たのだろう。

やがて、少女は静かに口を開いた。

「でも、司令はシンジくんのこと、心配してるわ」

レイの言葉は、にわかには信じられなかった。

「……それ、本当？」

レイに問い直すと、しかしレイは心細げに俯いて、

「そんな気がするの」

と小さく言った。

「そっか」

信じられないが、レイが嘘をつくとは思えない。絆を信じたいレイの主観が混じっている……俺は、そう思うことにした。

その後は無言のまま、歩く。

ジオフロントへ通じる電車に乗る前に、空を見上げる。常夏となつてしまった日本の、夏らしい抜けるような青空。そして強い日差し。

今日も、暑くなりそうだ。

『パイロット、零号機と接続開始』

『パルス及びハーモニクス正常』

起動実験はスムーズに進められている。

ゲンドウはじつと、発令所から零号機の様子を見つめている。

実験開始前、俺はゲンドウに話しかけてみたが、「後にしろ」の一言で突っぱねられた。

『絶対境界線まで2.5……2.0……1.7……』

そんなゲンドウから目を逸らし、零号機を見上げる。

『……0.4……0.3……0.2……0.1……ボードーライン

クリア。零号機、起動しました』

零号機の目に光が灯る。レイと零号機が繋がった瞬間だ。

起動実験が無事に終了したのだ。レイの無事に、とりあえずホッと胸を撫で下ろす。

そのとき、神経を逆なでするような警告音が鳴り響いた。

『未確認飛行物体接近中。分析パターン青。おそらく使徒と思われるます』

やっぱり来たかっ！

ここまで沈黙を保っていたゲンドウが、口を開く。

「実験中止だ。初号機を出撃させる」

その時、俺は大事なことを忘れていたのに気がついた。

まずい。ここでいきなり出撃させられたら、出鼻を加粒子砲でブチ抜かれてしまう。漫画では、それでシンジが仮死状態にまで陥った。

「ちょ……ちょっと」

なんとか説得しようと考えたが、「使徒は加粒子砲を持つてるはずだから、まず威力偵察してくれ」などと言ったら、使徒の能力を知っている俺が怪しまれてしまう。

「何をしている、早く行け」

「シンジ君、早く！」

ゲンドウは俺を冷たく睨みつけながら、ミサトさんは焦燥を浮かべて、俺を促す。

しょうがない。

俺は腹を決めると、ケイジへと駆け出した。

モニタに映る使徒は、漫画と同じ、いかにも金属的な質感を持った正八面体だった。……これで生き物だってんだから、なあ。

エヴァに乗りこみ、神経接続をしている最中も、俺は加粒子砲を食わない方法を考えていた。

真っ先に考えられるのは、ATフィールドで防ぐこと。

しかし、あの加粒子砲のエネルギーは、使徒のATフィールドを貫いた試作型陽電子砲と同程度以上だと考えられる。だとすると、エヴァのATフィールドも貫かれてしまうかもしれない。

地上に出たら即かわず、というのも、タイミングがシビア過ぎるだろう。固定具ロックホルトがあるから、それを引き千切るためのタイムロスがある。

『シンジ君、応答して、シンジ君！』

「あ、はい？」

『どうしたの?』

ミサトさんの声。

どうやら、呼びかけても返事のない俺を心配したらしい。

「す、すみません。ちよつとぼーっとしちゃって」

『もう、シンジ君、集中して』

「あ、はい。すみません」

要は地上まで出なきゃいいわけだから……あれが使えるか。  
よし。

『エヴァ初号機、出撃!』

号令と同時に、リフトが高速で上昇する。身構える俺。

『ダメっ!シンジ君、よけてっ!』

上がり切る前に、ミサトさんの悲痛な叫びが聞こえた。

やっぱりかつ!

予測していた俺は迷わず、初号機を包むように球状のATフィールドを展開した。

メキメキッ!

ATフィールドはリフトのレールを破壊し、周囲の壁にめり込んで、上昇を止めるブレーキとなった。

ガリガリガリッ!

壁が円筒面状に挟りとられてゆく。

「ぐうつ」

強烈な振動と慣性力。シートベルトが肩にくい込む。

止まらないっ!?

ATフィールドを使ってリフトを止め、地上に出るのを避ける……  
名案だと思ったが、リフトの速度を甘く見ていた。フィールドを

展開しても、すぐには止まらないのだ。俺は焦った。

中途半端なところで停止し、首だけが死の閃光を浴びる光景を想像した。

全身で受け止めるのと違い、首だけでは負荷に耐えられず、吹き飛ばされるだろう。集中しているためかシンクロ率が高くなっているようだから、首をもがれる痛みのフィードバックは想像を絶する。ショック死だって考えられるのだ。

恐怖。

それがさらにATフィールドの出力を上げた。

「ぐううあああああ！」

思わず漏れる絶叫。

やがて、停止した。

しかし、目の前には閃光が迫る。肩から上が、地上にはみ出ているのだ。

「うわあああああああつ！」

余りの恐怖に、咄嗟に頭を抱えてしゃがみこんだ。固定具がATフィールドによって吹き飛んでいたのは幸いだった。

すぐ頭上で轟音が響く。恐らく加粒子砲が兵装ビルか何かに当たったのだろう。頭部に、微かに熱を感じた。俺はその威力に恐怖しつつも、とりあえず助かったことに安心していった。

ため息と共に、ATフィールドを解除する。

「っはあ、助かつ……」

と、突然感じる浮遊感。

……あ、しまった。リフト壊したせいで、台座が落ちちゃったのか……

「たあああああ……」

俺は間拔けな声を発したまま、数十メートルほど落下した。

どおん、と大きく鈍い音と共に、初号機は背中を射出ルートの曲がり角に打ちつけた。

「いててて……」

『シンジ君、大丈夫？』

ミサトさんからの通信。

「あ、はい……すみません、リフトと射出ルート壊しちゃって」

『仕方ないわよ。エヴァの修理費に比べれば安いもんだわ。むしろいい判断だった。最後はちょーちカッコ悪かったけどね』

「たはは……」

『作戦を練り直すから、とりあえず自力でケイジまで戻ってきて』『了解』

ようやく、まともな作戦を立てられる。

状況について簡単に説明を受けた後、シャワーを浴びて、休憩室でジュースを飲む。ビールでも飲みたい気分だが、さすがにここでビールは売っていない。

椅子に座り、今立案されつつあるであろう「ヤシマ作戦」へ思いを馳せていた。

「あらシンジ君、大丈夫？」

考え込んでいた俺に声をかけたのは、リツコさんだった。

「この通り、大丈夫ですよ」

そう言って、腕を振り回して見せると、少し安心したように微笑んだ。

「……あの、リツコさん、作戦立案で忙しいんじゃないんですか？」

「私の役目はデータを分析して、提供するだけよ。あと初号機の点検ね。いずれにせよ、もう終わったわ」

「はあ、そうですか」

そんな俺を尻目に、リッコさんは自販機でコーヒーを買い、俺の隣に腰を下ろした。

しばし流れる沈黙。

「……聞かないのね、今回の使徒のこと」

唐突なリッコさんの台詞に、どきりとする俺。

「あ、ああ、そうですね。えっと、あのとき、どんな攻撃してきたんですか？」

「あなた、知っているんじゃないか？」

リッコさんは、すっ、と目を細めて俺を見る。

「……え？」

まずい。感づかれただろうか。

「あなたがATフィールドを展開したタイミングは、ミサトの叫びに反応したにしては、早過ぎるわ。何しろまだ言い終わってないタイミングですもの。使徒の攻撃を、あらかじめ知っていた、としか思えないのだけど……ちがう？」

俺から視線を逸らさず、疑惑の根拠を語る。俺は触れば切れそうな視線に負けじと、見つめ返した。

「そんなの知ってれば、苦労しないですよ……今回の使徒って、これまでのと違って、いかにも格闘戦はできません、って形じゃないですか。てことは飛び道具があるかもしれないでしょ？なのに、威力偵察も無しでいきなり放り出されることになったから、警戒してたんですよ」

「……無理のある言い訳ね」

いつもより低い声。正直ビビる。

「そう言われても……」

さらに言い訳を続けようとするが、リッコさんは、ふう、とため息をついた。

「まあ……今はいいわ」

うーむ。すっかり怪しまれちゃったなあ。ま、今更どうこうしようもないか。

それより……そうだな、レイのこと、リッコさんなら何か知ってるかもしれない。

「ところで……リッコさん」

「何？」

「司令……父さんは……なんでレイに、俺の護衛なんか命令したんですか？」

「……どうしてそれを、私に訊くの？」

「直接訊こうとしてるんですけど、何かずっと避けられてるんですよ。あの人は、一体何を考えてるんですか？」

「それを、私があなたに教えると思う？」

悪戯っぽく微笑むリッコさんは、さっきとギャップが大きく、なんだか魅惑的に見えた。幼くも見える。その様子に、少し戸惑った。「どうしたの？」

「あ、いえ……うーん、やっぱり信用してもらってないんですね。ま、俺も隠し事は多いですから、追求はしませんよ。そういえば、この間の話はどうなりました？」

この間の話とは、ゲンドウがユイを諦める方法についてである。

「それも、秘密」

「ええ？」

「なんてね、正直言くと、やっぱり全く思いつかないわ。他を当たってもらったほうがいいかもね」

そんなことを言う。たぶん、まともに考える気はないのだろう。そんな簡単に考えつくようなら、とくに実行しているだろうし。「いつそ誘惑してみたら、どうです？」

ぷつ、とコーヒーを吹き出しかけるリッコさん。アニメの通りなら、そんな段階はとうに越えているはずだが、本当のところはどうなのだろう。この反応だけではよく判らない。

「何をマセたことを言っているのよ、子供のくせに」



コーヒークップを見ながら、苦笑するリッコさん。

「……ねえ、シンジ君、一つだけ教えてくれないかしら？」

「何ですか？」

「あなたは、何をしたいの？」

「……ずいぶん、核心的な質問ですね」

「言えない？」

すこし考え込む。言ってよいか、ではなく、そもそも「何をしたいか」がはっきりしていないのだ。

十秒ほど、考え込んだ後……

「いえ、俺自身、実ははっきりとしないんです」

正直に言うことにした。

「強いて言えば……世界を守りたい、でしょうか」

「英雄願望、というやつかしら？」

「……独善的なところは似てるかもしれませんがね」

自嘲的に笑う俺。怪訝そうな目を向けるリッコさんを尻目に、俺は少し考えて、言った。

「そうですね、結局は……俺が存在できる場所を、守りたい。できるなら、俺に近い人も守りたい。そういうことだと思います」

その言葉に、嘘はないつもりだった。元々ここは「俺」のいる場所ではない。それは判っている。だが、元々いるべき場所からはじき出され、今、俺は碇シンジとしてここに存在している。自分の意思では逃げようもない。その上、俺次第でこの場所すらもなくなってしまうかも知れない、となれば、動かざるを得ないではないか。リッコさんはしばし沈黙した後、半分ほど残ったコーヒーを飲み干した。

そして、妖艶な笑みを見せた後……俺の耳元に唇を寄せた。

ちよつとキツめの香水と、コーヒーの香り。趣味は悪いとは

言え、リッコさんもかなりの美人である。ドギマギする俺。

「ちよ、ちよつとリッコさん？」

「ひとつだけ、キーワードを教えてあげるわ」

ひそひそと話すリッコさん。その声すら艶かしい。

「キーワード？」

唐突な話に、戸惑いながらも眉をひそめる俺に、リッコさんは楽しそうに、その言葉を口にした。

「……じんるいほかんけいかく」

俺は思わず、ひゅっ、と音を立てて息を詰まらせた。

アニメのシナリオのバックボーンとなる重要な舞台装置。大人たちの間で蠢き続け、クライマックスまではその存在すら俺やチルドレンには知らされないはずのその言葉を、あえて俺に聞かせるリッコさんの意図が判らない。

混乱する俺の反応を見て、リッコさんは満足げに微笑むと、握りつぶした紙コップをごみ箱に投げ捨て、何も言わず休憩室から去っていった。

しばしショックで硬直したのち……

「ああっ、しまったっ！」

俺は、自分のミスに気がついた。

前フリもなくキーワードだけ聞かされて、あんな反応を返したんじゃない、「俺は何か知っている」って言うてるようなもんじゃないか。一杯食わされたことによろやく気がついた俺は、一人、頭を抱えた。

そのとき、館内放送が鳴り響く。

『ファーストチルドレン、及びサードチルドレンは、発令所に集合してください。繰り返しします……』

まあとりあえず、今は使徒をなんとかしなくちゃ、な。

そう思いなおし、俺は発令所に向かった。

## 第八話 ひたむきな心のその先は（前書き）

繰り返しになりますが、本作はTV版／旧劇場版を元にした二次創作になります。フリーダムなラミエルさんなんていません。ご了承ください。

## 第八話 ひたむきな心のその先は

「これまで採取したデータによりますと、あの光線、目標の外周部にある加速器によって高エネルギーを与えられた粒子を、ビームとして放出しているもののようです。この加粒子砲をもって、目標は一定距離内の外敵を無差別に排除するものと推測されます」

「エリア進入と同時に、加粒子砲で狙い撃ちつてワケね……エヴァでATフィールドを中和しながら接近戦、つてわけにはいかないか」オペレーターの報告に、ミサトさんが受ける。

俺の知るミサトさんと違って、やり手のキャリアウーマンを想起させる、凜とした美しさを見せている。

それはいいんだが。

これは作戦会議である。作戦部でも上位の人しか出席できない。そんなところに一介のパイロットがいていいのか？

『実際に動くのはアナたちなんだから、聞く権利はあるわよ。大丈夫、ただ座ってればいいわ。もちろん、言いたい事は言っちゃって構わないし』

とは作戦部長の弁である。

まあ、責任者がいいって言ってるんだからいいんだろうが、その割には、一部の出席者の怪訝そうな視線が痛い。単なる末端の兵士、それも14歳の子供に、自分たちの仕事へ口出しして欲しくない、といったところだろうか。

へえへえ。何も言いませんよ俺は。

隣を見ると、レイが俯いている。珍しく緊張してるのかな、と思いきや……

かつくん。

蒼髪の頭が一瞬落ちそうになり、慌てて立ち直る。その上「ずる」と涎をすするのだ。その音がまた、出席者の視線を厳しくさせた。

ミサトさんは、そんな俺たちを見ないふりをして、会議を進行させる。

「敵のATフィールドは？」

「健在です。相転移空間が肉眼で確認できるほど、強力なものが展開されています」

「攻守ともにほぼ完璧……難攻不落の要塞ってわけね。問題のボーリングマシンは？」

「現在、直径17.5メートルの巨大ドリル・ブレードが、ネルフ本部に向かって穿孔中。第2装甲板まで到達しています」

「本部への到達予想時刻は？」

「明日、午前0時6分54秒には、全ての装甲板を貫通し、ネルフ本部に到達するものと予測されます」

「あと10時間足らずね……」

爪を噛みながらそう言っていると、ミサトさんはコンソールへ向き、通信を開く。

「赤木博士、いる？」

『伊吹です。赤木博士は席を外してます』

「伊吹二尉でもいいわ。エヴァの現在の状況を教えて」

『はい。初号機は、射出坑落下時に破損した背部第1装甲板を換装しました。起動準備も完了しています。零号機も起動準備が完了していますが、フィードバックにまだ誤差が残っています』

「零号機は、実戦投入できる？」

『動くには動きますが、精密な動きや機敏な動作は期待できません。接近戦闘は不可能と思われます』

「そう……ありがとう」

通信を切ると、こちらを向く。

「はあ……初号機がすぐに動けるのが救いだけど……状況は芳しくないわねえ」

「白旗でもあげますか？」

ため息をつくミサトさんに、面白くもない洒落を言う眼鏡に短髪

の男。……日向二尉、とか言ったかな？

「それもいいけど、その前に……パイロットからは、何か意見はない？」

悪戯っぽい笑みをこっちに向けるミサトさん。他の出席者は、同情するような顔、露骨に顔をしかめる人もいる。

何考えてるんだよミサトさん。

とは言うものの。作戦立案に介入できるというのは、願ったり叶ったり、と言えなくもない。俺やレイの危険を減らせるかもしれないのだ。

「えーっと、それじゃ、ひとつ質問させてください」

「なに？」

「……加粒子砲の最大仰角って、わかります？」

その場の全員が全員、怪訝そうな表情に変わる。

「どうなの？日向君」

訝しがりながらも、質問の答えを促すミサトさん。

水平になっている円形の加速器で粒子を加速・射出する以上、真上や真下には撃てそうもない、と俺は考えた。実際に今までの動きを見ていると、常に正八面体の水平な辺から発射している。ドリルブレードが地中深く刺さっている状態では、転がって撃つこともできないだろう。

「あ、はい。ダミーバルーンを使った実験から推測すると、よくても二十度前後であると思われます」

二十度……それならなんとかなるかな？

「それなら……上から攻める、というのはどうでしょう？」

「上から？」

「エヴァ用の輸送航空機……ウイングキャリアーと言いましたっけ。あれで目標の上空にエヴァを運び、そこから降下。目標のATフィールドを中和しながら、自由落下のエネルギーを利用して、武器でもって目標を貫通……という作戦なんですけど、どうでしょう？」

要するに、上から落ちる勢いで使徒を串刺しにしましょう、とい

うシンプルな作戦だ。これなら、日本全国から電力を徴収したり、戦略自衛隊から陽電子砲を強奪したりする必要がないから、むやみにネルフの敵を増やすこともないだろう。俺一人でカタがつくし。場がざわつく。誰も彼も困惑の表情を浮かべる。ややあって、数人の出席者から質問が飛んだ。

「正確にコアを突かないと、着地した瞬間に反撃を食らうわよ」

「あの加粒子砲って、使徒の外周部の加速器で加速させてるんでしよう？ならば、コアを外しても、加速器を破損させればこちらの勝ちです。それほど分の悪い賭けとは思いませんが」

「目標を貫通するだけの、大型の武器がないぞ」

「特別な武器は要りません。充分な高さからの自由落下なら、長くて丈夫な棒切れがあれば充分でしょう。刃状のものなら申し分ないですけど」

場に沈黙が降りる。その雰囲気はかなり辛い。俺は逃げたくなかった。

「ええと、俺は思いつきで言っただけですから。駄目なら駄目で……」

「まあ、検討する価値はあるわね。他に策はなさそうだし」

俺が弁解しようとする、それを遮ってミサトさんが言った。再び技術部に連絡を取り、データの提供を要求する。

レイは……いつの間に目を覚ましたのか、俺のことをじっと見つめていた。

レイを連れて、本部内の食堂で腹ごしらえをすることにした。

俺がでっち上げた作戦が有効なら、それに決まるだろうし、ダメなら本来の「ヤシマ作戦」が発案されることだろう。どっちみち、これ以上俺ができることはない。

レイは持っていた固形食や栄養剤を取り出そうとしたが、飯はちゃんと食べ、と叱り、肉の入っていない味噌ラーメンを買わせた。



ちなみに俺は肉うどんである。

そういえばアニメで、レイが屋台で「ニンニクラーメンチャーシュー抜き」とか注文したシーンがあったよな。ファンの間で妙にウケていた。残念ながらこのメニューにはニンニクラーメンはないけど。

などと考えていたら、レイはテーブルにあったガーリックパウダーの瓶を掴むと、これでもか、とばかりに味噌ラーメンにふりかける。

漂うニンニクの香り。

……そんなに好きか、ニンニクが。つか味噌ラーメンに合うのか？

呆れる俺を尻目に、レイはラーメンをすすり出した。

俺も、うどんに軽く七味唐辛子を振り掛け、食べ始めた。

二人、無言である。

中学生の男女が、顔つき合わせて黙々と麺をすすっている。しかも格好は、身体のラインをそのままシルエットに写すプラグスーツだ。考えると、なんだか妙な構図である。

やがてレイは、どんぶりを両手で持ち上げ、ずずず……とスープを飲み干した。どん、とどんぶりを置くと、そのまま動きを止める。食うの早いなあ。俺はようやく麺を食い終わったところなのに。

「……なぜ、あんな作戦を提案したの？」

不意に問い掛けるレイ。

「ん？ああ、……まあ、せっかく意見を求められたから、ダメもとで言ってみただけだよ」

「でも、あの作戦が採用されたら、またあなたは一人で戦うのね」  
伏し目がちに言う。

「それは、まあ……だって、零号機はまだ戦闘に耐えないって言うてたじゃない」

「でも、動くわ」

「動くわ、ってね」

「動けば、戦える。盾くらいにはなれるわ」

レイはいつもの表情だが、その言葉には焦りを感じる。どうしたんだろうか？

「……そんなに、戦いたいのか？」

「戦いたい？……そうかもしれない」

「かもしれない、って」

「シンジ君が一人で戦って、一人で傷つくの考えると、胸が痛くなる」

そう言うと、レイは俯いてしまった。

俺は少しだけ、胸が熱くなる。

「そう……俺を心配してくれたんだよね、ありがとう」

俺がそういうと、レイは顔をあげ、きょとん、とした表情で俺を見た。

「でも今は、零号機は万全じゃないんだ。不完全な状態なら、一刻も早く完全な状態に持っていくのが第一だよ。いつか、本当にレイの力が必要ときに動けなくちゃ、困るだろう？」

「でも……」

「大丈夫。まだあの作戦が採用されるとは限らないし、採用されたとしても、ミサトさんやリツコさんたちが、ちゃんと完璧な作戦に仕立ててくれるさ」

レイの不安をなだめながら、俺は内心嬉しくてしよがなかった。俺のことを心配してくれたのも嬉しかったが、レイが任務や命令と関係なく、本気で人を心配しているのである。その心の成長を感じると、俺は喜ばずにはいられなかった。

結局、降下作戦が正式に採用された。

武器は、タングステン鋼の百メートルほどの棒に、プログレッシブ・ナイフの予備を括り付けたものだ。

目標上空五千フィート（千五百メートル）の高度から降下し、この即席の槍で使徒を貫くことになる。

『降下開始から地表まで、時間にして13秒ほど。その間の軌道修正は、背中と腹部の小型バーニアで自動的に行われるわ。だけど、姿勢が狂うと計算も狂うから、できるだけ直立状態を保って。特に逆さまになったりすると、軌道修正は全く働かなくなるから注意してね』

ミサトさんからの通信。俺はすでに初号機に搭乗している。その初号機は、ウイングキャリアーに括られて上昇中である。

充分な高度を取る前に使徒に近づくわけにはいけないので、まず反対方向に離陸し、離れたところでUターンしつつ上昇してゆく。

「了解です。……それにしても、俺なんかが立案した作戦、よく採用しましたね」

『俺なんかが、なんていう言い方はよしなさい。使徒という理解しがたい相手について、一番肌で感じているのはアナタたちパイロットなんだから。私は、今までの戦いを見てそう思ったから、アナタの意見を求めたの。この作戦についても、有効でリスクも少ないと判断したから、採用したまですよ』

「それにしたって、中学生の立てた作戦を採用したなんて言ったら、周りからの風当たりも強いでしょうに」

俺は苦笑する。

『まあ、私だって、いつもいつもアナタ達に頼り切ってるつもりはないわよ』

それは、人としての素直な決意。

自分の力不足を素直に認め、すぐに今以上の高みを目指す、柔軟な向上心。

漫画やアニメの「葛城ミサト」には、こういう面はあまり見られなかったように思う。

だが、本来のミサトさんは、きっとこういう素直で貪欲な性格な

のだと思う。でなければ、たとえVIPの娘であろうが、20代でこの地位は得られなかったろう。

「そうですね。そうすりゃ俺も楽できるってもんです」

『シンちゃん、それはちょっとナマイキよ』

コンソール越しにクスクスと笑い合った。

『シンジ君、降下ポイントまであと五分よ。準備はいい？』

「はい」

声が硬い。自分でも判った。

『シンジ君って、いざって時には妙に緊張するわよね』

「そりゃ、怖いものは怖いですよ」

戦いの前の緊張と言うヤツには、何度やっても慣れないが、それに加えて今回は千五百メートルもの高所からのノーロープバンジーである。はっきり言ってかなり怖い。それに、まかり間違って、使徒に手が届かない場所に落ちようものなら、一瞬にして加粒子砲の餌食である。陽電子砲で射撃するほうが、逃げ道がある分まだ安全だったのかもしれないなあ……などと詮無いことを考え始めた。

『そうだ。レイ、こっちいらっしゃい』

考え込んでいると、モニタにはレイの顔が映し出されていた。

いつもと違い、一目で判る、悲しい、切ない表情。

潤む紅い瞳で、俺の顔をじっと見つめる。

『シンジ君……』

ぐっ、こんな顔されたら、強がるしかないじゃないか。

「大丈夫、レイ。ちゃんと片付けて戻るからさ」

そんな強がり、不思議と俺の心までも落ち着かせる。

この子は、俺がどうにかなったら、悲しんでくれる。悲しんでしまう。

そう思うと、死にたくない、死ねない、という気持ちが強くなる。

後で考えれば、それはあまりにも単純な思考だったが、この時の俺は、これが全てだった。

「また、あとでな」

精一杯の笑顔で、答えた。

『……ええ』

そしてモニタの映像が、ミサトさんのニヤけ顔に変わる。

『愛しいレイちゃんのお返しで、勇気百倍ねん』

「そーゆー冷やかしはやめてくださいよ。」

でも……今回は礼を言っときます」

『どーいたしまして。さあ、そろそろ時間よ』

「はい」

そして、時を待つ。

『降下ポイントまで十秒。カウントダウン開始。八、七、六』

操縦桿を握る手に力がこもる。

決意が、俺とエヴァの一体感を、高める。

『……三、二、一、ロックボルト・リリース固定具解除！』

そして、十数秒後。

即席の槍によって加速器を破壊され、手も足も出なくなった使徒のコアを、俺はプログレッシブ・ナイフで強引に貫き、ATフィールドで囲みつつ、自爆させた。

ボーリングマシンは、最後の装甲板の手前で、止まっていたという。

## 第九話 変化

第五使徒を殲滅し、ケイジに戻ってきた。ＬＣＬを吐き出してエントリープラグから出ると、整備員から歓声が上がる。

凱旋、と言うヤツだ。

悪くないよな、こういうのは。

などと思いつながら、方々にお辞儀して返しつつタラップを降りると、ミサトさんとレイが待っていた。

「お疲れ様、シンジ君」

「……お疲れ様」

「どーも」

労ってくれる二人に、俺は笑顔を返した。

「な？大丈夫だっただろ、レイ」

おどけるように言ったが、しかし、レイの反応は思いもよらぬものだった。

いつもの表情……その紅い瞳から、ひと雫、白い頬を伝った。

それはひと雫では終わらず、双眸から、ぽろぽろと止めど無く落ちる。

「れ、レイ？」

「私……泣いている。なぜ？」

「……嬉しいときにも、涙は出るのよ」

ミサトさんが優しい顔で、レイに言った。

「そう……私、嬉しいのね。……ごめんなさい」

「どうして謝るの？」

「こんなとき……どんな顔していいか、判らない……」

俺は、何か言葉を紡ごうとして、一度飲みこんだあと、ゆっくりと言って聞かせた。

「今判らなくても、いつかきくと判る。ゆっくり、考えるといいよ」  
ＬＣＬに濡れた指で、涙を拭ってあげた。

その仕草に、目を閉じて、少しくすぐったそうにしていたレイは、やがて俺の手を取り、顔を上げ、まっすぐ俺を見つめて。

ゆっくりと、微笑んだ。花が綻ぶように……月明かりのような、優しい笑顔で。

「……わかってるじゃないか」

その笑顔に吸い込まれそうになりながら、俺は、それだけ言うのがやっとだった。

あれだけ騒がしかったケイジが、静まりかえる。とてつもなく優しい空気に、俺たちは包まれたのだった。

「てなことがあったんだって？シンジ」

ケンスケが、興奮気味に詰め寄ってくる。

冒頭のようなシーンが、彼の父親（ネルフ広報部に所属してるらしい）経由で彼に伝わっていたらしいのだ。身も蓋もない言い方をすれば、単なるデマである。そんな気障なキャラじゃないぞ、俺は。「かあっ！シンジもキザなことするのう」

「そんな恥ずかしい真似できるかよ。ただのデマだよ、デマ」

二人とも冷やかしモードに入りそうなので、俺は慌てて否定する。「シンジって、意外と嘘のつけないタイプだな」

「え？」

ケンスケが、眼鏡の縁をキラリと光らせる。

「いや、何でもない。そーかあ。デマかあ。それにしてもさ、綾波の笑ったとこって、未だに見たことないんだよな」

「そーいや、そーやのう。最近天然っぽくなってとっつきやすくなったけど、無表情だけは相変わらずやからな」

俺と一緒に行動して、クラスのみんなと話すようになってくると、

人付き合いに不慣れな彼女の初々しい反応は、人の目にはその容姿も相まってとても可愛らしく映る。そんな雰囲気、また他人との垣根を取り払っていくようであった。

ただ、それでも表情はあまり動かない。まあ、短期間でいきなり表情豊かになったとしたら、それはそれで怖い。

「だろ？なあシンジ、ネルフでは、綾波ってどんな感じなんだ？」  
「ん？別にいつもと変わらないよ」

「シンジも、綾波の笑顔って見たことないのか？」

これは返答が難しい。見たことがある、と言えば、シンジの前でだけ笑顔を見せるのだ、などとかかわれるのは目に見えているし、かと言って見たことがない、と言えば、レイの鉄面皮的なイメージを強めることになる。

「うーん……まあ、見たことはあるよ」

ちよつと逡巡した挙句、そう答えた。

「ほう、さすがやな」

「やっぱ、笑顔ってのは気を許した相手にしか見せないもんだからなあ」

「ま、一緒にドンパチやってれば、それなりに交流もあるからな」  
月並みなごまかし。

「で？どうなんだ？」

「どうって？」

「綾波の笑顔だよ」

「ケンスケ……やな笑顔だなあ」

ニヤニヤ笑うケンスケにジト目を向けるが、効果なし。

「まあまあ、で？どうだったんや？」

「どうって……まあ……綺麗だったな、うん。透き通るような、つつつか」

「ほう」

「へえ」

俺の言葉を聞いたとたん、トウジとケンスケがにやあ、と笑う。



「な、何だよ？」

そう言った後、二人の視線が俺の後ろに向けられているのに気がついた。

「だってよ、綾波」

「いつ？」

ケンスケの言葉に、慌てて後ろを振り向くと、そこには耳まで真っ赤にしたレイが、俯いていた。

「おー、赤うなっとなる赤うなっとなる。こんな綾波も初めて見るのう」  
トウジが冷やかす。ケンスケは、いつの間にかカメラを取り出し、照れたレイを撮りまくっている。

「やめろよ二人とも……あ」

俺の視線が二人の背後に流れる。背後から迫る殺気に、今度はトウジとケンスケが振り向く番だった。

「あなたたち……」

怒りの籠った声。われらが学級委員長にして乙女の味方、洞木ヒカリ嬢だ。

「女の子いじめるなんてっ！サイテーよっ！」

「ま、待て待ていいんちよ。ワシらは別にいじめてなんぞ……」

「問答無用ッ！」

「イテテテ、耳をつかむなっ！」

二人は、洞木さんに引きずられていった。南無。

その様子を、心の中で手を合わせつつ見送った後、慌てて振り返る。レイはまだ俯いていた。

「レイ、……その、あんまり気にするなよ」

「……気にしてないわ」

「そ、そう」

「……その、嬉しかった、から……」

レイは、そう言って顔を上げると、ちょっと控えめに、微笑んで見せた。

と、周囲のざわつきが、一瞬静かになる。

「あ……綾波さんが笑った……」

「すげえ可愛かったぞ、おい」

「ああ、あんな顔して笑うんだ……」

あちこちからヒソヒソ話が聞こえてきた。それを聞いて困惑するレイ。

「私が笑うと、みんな様子がヘン。私の笑顔って、ヘンなの？」

「い、いや、そういうワケじゃないよ、きっと。普段余り笑わないから、珍しいんじゃないの？」

「そう……笑う必要がなかったから」

「必要がなかった？」

「嬉しいこと、あまりなかったから」

それを聞いて、また憐憫の思いが膨らんでくる。

「でも、シンジ君に誉められると、嬉しい」

「そ、そう……ありがとう」

「なぜ、私にお礼を言うの？」

「いや、俺もなんか嬉しかったから」

「そう」

再び微笑むレイ。

うつ、周囲の視線が……痛い……痛いぞう……

レイの笑顔を見て、ほんわかしたのもつかの間、俺は背中にじつとりと冷や汗をかく。

「さ、さあ、そろそろホームルームが始まるから、席に戻ろう」

「うん」

本当のところ、ケンスケの言った噂話と似たようなやりとりは、確かにあったのだ。レイが笑顔を見せてくれるようになったのは、それからだ。もちろん、ケイジのような衆人環視の下ではない。着替えた後のブリーフィングルーム、ミサトさんとレイ、その他少数のスタッフしか目撃者はいなかったはず。

それがなぜ、あんな噂話になって広がったのか……と考えたとき、

半ばオッサンと化した某作戦部長のニヤケ顔が脳裏に浮かび、ため息が出た。

それはともかく、その一件以来、レイは一段と俺にくつついて歩くようになった。休み時間にも、気がつくとな俺の後ろに佇んでいる。基本的に存在感の希薄な子だから、ちよつと怖い。まあ、それなりに俺に対して好意を持ってくれてるようだし、レイのようなかわい子であれば、これは「喜ぶべき状況」というやつなのだろう。

自宅で、ノート型端末を広げてウェブを見て回っている。

二十世紀末に形成されたインターネットは、セカンドインパクトによって大部分のインフラを破壊され、事実上停止した。その後、地軸の転倒によって極地となったアメリカに替わり、中国、イギリス、フランス、ロシア、日本の各地が中心となってインフラを復活させ、インターネットに似た世界的ネットワークを再構築した。

などというウンチクは、元の世界にいたころプログラマーをやっていた俺の、職業的興味から仕入れた知識であるが、ただのユーザーにはそんな話は全く関係ない。見た目上、俺がいた2001年とまったく同じような仕組みが、そこにあつた。

「SEE<sup>ゼロ</sup>LE」や「人類補完計画」などというキーワードでサーチをかけることも考えたが、誰でも見られるようなところにまともな情報があるとも思えない。それどころか、考えてみればこの端末の通信記録も、第三新東京市の回線を利用している以上、ネルフの生体スーパーコンピュータ「マギ」によって監視されている可能性は充分にある。下手なことは控えた方が無難だろう。

というわけで、今見ているのは他愛もない芸能情報だったりする。

自宅での過ごし方は、元の世界とあんまり変わらんなあ。

などと考えていると、不意にインタフォンが鳴った。

受話器を取ると、女性の声が聞こえた。

『はあゝい、シンちゃん、ミ・サ・ト・よん』

軽い頭痛を覚えながら出迎えると、

「えへへ、今日もご馳走になりましたわ」

などと思ひれもせずに言う。そう、この二十九歳の作戦部長は、部下の、しかも十四歳の男子の家に、夕飯をたかりに来るのである。これが初めてではない。最近は、週二日ほどのペースである。

「ったく……今日はビール二缶までですよ」

「ええ」

「ええゝじゃないでしょうっ！」

「やあねえシンちゃん、固いこと言っているとモテないわよ」

この調子である。俺に「一緒に住もう」と誘ったのは、家事をやらせるためだったんじゃないかと思えてくる。などと考えつつ、無遠慮にリビングの椅子に座るミサトさんにビール缶を差し出す俺も、いい加減お人よしだなあと思う。

「んふふ、ありがと」

「はあ……」

俺は、これ見よがしに盛大な溜め息をついてみた。それが何の効果もないことを確認すると、もう一つ溜め息をついて、キッチンに入った。

「……んで、こういう仕掛けをすればいいと思うんです」

「ふーん。でも切断できないとツラくない？」

「ソニックグレイブってやつありましたよね？ドイツで開発してたやつ。あれの穂先を応用すればどうですか？」

「あれだって、刃状だから切断できるのよ。この武器じゃ刃を付けるわけにはいかないでしょう」

飯を食ってビールをかつくくらいながら、エヴァの新武装の話なぞ

してみたりする。

ミサトさんとうして話すときは、大体仕事の話ばかりしている。始めは、飯をたかりに来るのを牽制するための嫌がらせのつもりであつたが、その効果は余りないようだった。そうしているうちに、エヴァの運用や作戦上の相談ごとをするための、定例ミーティングのようになつてしまった。

「……なるほどね。じゃ、あとでレポートに纏めて私にちょうだい。簡単でいいから。リツコにも渡して検討してみるわ」

そう言つて、トンカツの最後の一切れを口に放りこむミサトさん。「むぐむぐむぐ……ん、と、ご馳走様。相変わらずシンジ君の料理は最高ねえ」

「はいはい、お粗末様でした、と」

俺も味噌汁の最後の一口を飲み干し、食器をキッチンに運びはじめる。

「まあつたくなえ」

そんな俺を見ていたミサトさんが、不意に、溜め息交じりに言う。「何ですか？」

「こんな夜に女を連れこんで、美味しいご飯ご馳走して。フツーなら即オツケーってシチュエーションよ」

「何が即オツケーなんだか。自分の半分も歳のいつてない子供に何を期待してるんですか」

オッサン臭くからかう二十九歳独身女に、俺はいろんな意味で溜息をついた。黙つてりや美人なのにねえ。

「うつさいわねっ。まったく、冷静でつまんない。マセた中学生もいたもんだわ」

「今時、みんなこんなもんじゃないですか？」

「自分用のビールをストックしてる中学生が普通なの？何だか嫌過ぎるわ、それ……」

「失礼ですね……はいお茶」

「ありがとう」

二人して、ずずず……と煎茶をすすりながら、和む。

「ところでシンジ君」

「はい？」

ミサトさんは、さっきの「エヴァ運用ミーティング」以上の真剣な眼差しである。

「レイのことなんだけど」

「レイが、何か？」

ミサトさんは一瞬言いよどんで、続ける。

「あのね、レイについて知ってること、聞いたこと、なんでもいいから教えてほしいの」

「何スカそりゃ？チルドレンの監督責任者って、ミサトさんなんですよ？」

そう問い返すと、少し悲しそうな顔になった。

「レイは違うのよ。あの子に関する責任者は、碇司令。彼女に関しては、最低限の健康状態とエヴァとのシンクロ関係の情報以外は私には上がってこないのよ」

「はあ……」

まあ知ってはいたが。しかし、ミサトさんは俺が思っていたより不満なようだ。

「あの子に関する過去の情報は、マギにもほとんどなかったわ。プロテクトされてるとかじゃないのよ。まるで、始めからそんなもの存在しないみたい」

「ふーん。なんでそれを知りたいと思うんです？」

「それは……その、作戦指揮の参考に、よ」

実際にはそれだけじゃないのが、表情からわかる。基本的に嘘の下手な人らしい。

「なら、そう言つて、司令に訊くのが筋でしょ。俺の知ってることなんて、彼女の本の趣味とか好きな紅茶の銘柄とか、そんな話くらいですよ」

もちろん「シンジが知っているはずのない情報」も持っているが、

言ったところで怪しまれるだけだろう。

「そう……シンジ君ならレイといい感じだから、何か知ってると思っただけだなあ」

少しだけニヤケ顔になるミサトさん。

「そういうんじゃないですけど……そうですね。そう思ふのなら、レイという話してあげてくれませんか？」

「へ？」

俺の申し出に、ミサトさんは意外そうな顔で俺を見つめる。

「これは推測ですけどね……彼女はこれまで、人と接する機会が極端に少なかったんじゃないかと思うんですよ。だから感情の表し方が判らないし、そもそも自分の感情もよく判らないんじゃないかとだから、あの子には、何気ない人との会話が大切だと思うんです」

「ふーん、なるほど、だから学校でも、彼女を連れまわしてるわけね」

「あ、いや、あれは、彼女の方からついてくるつてのもあるんですけどね。まあとにかく、いろいろ話してみてください。はじめはとっつきづらいかも知れませんが」

「うーん……そうねえ」

「まあ、司令の秘蔵っ子ともなればなかなか距離感難しいかもしれないけど、部下としてでも子供としてでもいいんで、普通に接してあげてください。そうすればきっと、彼女も心を開いて、いろいろ話してくれるかも知れませんが」

しばし考え込んで、

「……わかったわ。努力してみる。それにしても、シンジ君にそんなに心配してもらって、レイがちよっと羨ましいわね」

またニヤニヤ顔に戻る。

「まあ、同僚だし、それに何か他人のような気がしないんですよ、彼女は」

異父兄妹みたいなもんだからなあ……と心でつぶやく。

「ふーん……あ、そろそろ帰るわ。お邪魔したわね」

「そうですか？それじゃまた……」  
そして、ミサトさんは帰っていった。

ミサトさんが、レイに興味を持ち始めた。

アニメや漫画ではなかった事だ。アニメのミサトは、シンジやアスラにちよっかいを出す一方、レイはいつも敬遠していた感がある。単純にエヴァのパイロットとして、部下として、綾波レイと言う人物に興味を持ったのか。それとも、加持リョウジも来ていないのに、早くもネルフの秘密を掴むために動きはじめたのか。

前者ならいい傾向だが、後者ならば危険だ。ミサトさんは、ネルフの幹部なのに一人だけ真相を教えられていない。トラウマ故の視野狭窄から、ゲンドウにいいように利用されているのだろうが、早い時期に真実に近づけば、下手すれば殺されるのではないか。

どうしたものか……

何にせよ、確定情報をもっと欲しいな。

やはり一度、ゲンドウと話をしなきゃいけない。改めて決意した。



## 第十話 誰がために命を捧ぐ

「ジェット・アローン、ですか」

ミサトさんの執務室。パンフを読む俺と、椅子にだらーっと体を預けてコーヒーを飲むミサトさんがいる。

「そ。略してJ.A。重工共だかが開発した、対使徒用の機動兵器なんですって」

アニメにも確かに登場した、ネルフとは無関係の組織が開発した兵器である。その公式発表会が一週間後にあるということで、ネルフにその招待状とパンフレットが送付されてきたのだった。

外部からの動力供給がなくなるとも百五十時間以上稼動し、遠隔操作が可能。操作には訓練を重ねたオペレータが当たることができ、当然ながら精神汚染などの問題もない……と長所だけ並べれば、エヴァンゲリオンへの対抗意識がひしひしと感じられてくる。まあ、十歳の子供しか操縦できず、外装の受ける衝撃が、痛覚としてパイロットにフィードバックされる、などという兵器もはつきり言ってもではないし、安全な代用品ができるのなら、素晴らしいことだろう。

しかし、このJ.Aというヤツは、エヴァに輪をかけてしょうもない代物だった。

ただでさえ不安定な二足歩行型の上に、重心が上半身に偏っている。バランスが極めて悪く、遠隔操作のために、機敏な動作は期待できない。その上、自慢の長時間自律稼動のための動力は、原子炉と蒸気タービンを内蔵することで賄っているのだ。ガンダムの世界じゃあるまいし、『俺』がいた二〇〇一年の地球と大差ない原子力技術で、たかだか十メートルちよつとの構造物の中に原子炉を押し込んでいるのだ。

小型の原子力発電所を二足歩行をさせ、あまつさえ殴り合いをさせようというのである。正気の沙汰とは思えない。

「はあ……なんつーか、凄いですね。いろんな意味で……」

この限りなくお間抜けな設計には溜め息しか出てこない。

「信じられないわよね、まったく。こっちゃん必死だったのに。こんな危ないモンに注ぎ込む金があるんなら、こっちに回してほしいわ」

ミサトさんは、憎々しげにぼやく。

「あーあ、もうちよつとまともなモノ作ってくればなあ。俺もちよつとは楽になれるかも知れないのに」

何の気なしに言った俺のその台詞に、ミサトさんは顔を顰めた。

「それはそれで、エヴァの出番がなくなっちゃうかも知れないわよ？」

なんだろう。俺が好き好んでヒーローやってるとでも思ってるのかな。

「俺は別に、エヴァだろうがJ Aだろうが、何だっていいですよ。

それに、本当にエヴァに匹敵する強さなら、素人に毛が生えた程度の俺より、ちゃんとした訓練を受けたプロの大人が戦った方がマシでしょ？」

それを聞いたミサトさんは、少しだけ険しい顔をしたが、やがてふう、と息を吐き、

「そーよね。シンジ君はそういう人よね。……でも、やる気なさそうな割には、ずいふんと体を張るじゃない？」

「今のところ、俺がやるのが一番効率がいいってだけですよ」

「それだけ？」

ミサトさんの追及に、俺は少し言いよどんで、

「……知ってる誰かが傷つくことで、罪悪感に苛まれるよりは、自分がどうにかなった方がマシですから」

そう答えた。

「そういう考えはよくないわ。これからは零号機も出られるし、もうすぐ式号機もドイツから来るから。これからの戦いは、チームワークが重要になってくるのよ。今までみたいに、ヘタに自己犠牲の精神を発揮されたら、レイやもう一人にも影響するんだからね」

予想通りに窘められた。面倒だから話題を逸らそう。

「わかってますよ……ところで、その発表会って、ネルフからは誰か出席するんですか？」

「ええ。E計画担当博士に作戦部長、それにエヴァンゲリオン初号機パイロットよ」

「へ？俺も？」

「そうよん」

「いいんですか？ただでさえ、子供をパイロットにしてるって、ネルフへの風当たりがキツいんでしょ？」

「しょうがないじゃない。司令が連れて行けって言っただから。あ、初号機も持っていくからね」

「はあ」

アニメでは確か、ゲンドウが加持リョウジを使って、J Aの制御プログラムを書き換えて暴走を演出した。エヴァの代用となりうるものの評判を落とすためだ。

初号機は恐らく、暴走したJ Aを一時的に足止めするための備えだろう。……てことは、やっぱ、やるんだらうなあ。

あんなもん、ほっといても学者やマスコミの失笑を買っただけだと思うんだけど。

説明会は、J A開発担当者トリツコさんの嫌味合戦が繰り広げられたり、ネルフへ向けられる陰湿な悪意にミサトさんがキレかかったりしたが、概ね滞りなく終わった。

で、いよいよJ Aのデモンストレーションが始まる。

なんというか……こうして実物を見ると、冗談としか思えないデザインである。

巨大で不恰好なロボットが、サブマシンガンのような火器を持つて的を撃ちぬいたり、エヴァそっくりの風船を叩き割ったりしてい

る。動きは鈍重だ。百八十度転回に五秒近くかかっている。第三使徒あたりに周りを走られたら、追い切れなくて転ぶなあ、ありゃ。

「アレで使徒をどうこうしようって言うのかしらねえ。ATフィールド以前の問題だわ」

リツコさんが言う。

「まったく。あれ一台作る金で、戦闘機やら戦車を大量に配備した方がいっすね」

「そうね、その方が囲くらいいには役に立つもんね」

俺とミサトさんもうなずく。

その間も、不毛なデモは続く。

『……以上で、本日予定しておりましたデモンストレーションは全て終了です』

おや？結局何も起こらなかったな。

騒動はないに越したことはないが、それなら何故、俺やエヴァを……？と、疑問に思った瞬間、予想外のアナウンスが会場に響いた。『しかし、本日はネルフ様のご厚意により、エヴァンゲリオン初号機との、実戦形式のデモンストレーションを急遽行うこととなりました』

「……はあ？」

「ちょ、ちょっと、どういうことよ？」

「どうもこれも。そういうことよ」

困惑する俺とミサトさんに、リツコさんはしかし、悪戯っぽい笑みを浮かべてそう言った。

「リツコあんた、知ってたの？」

「それはそうよ。これを司令に進言したのは、私だもの」

え、リツコさんが？

「何のためにそんな……」

「これからの戦いに、あんなに出しゃばられちゃ迷惑でしょう？

格の違いを見せてあげるのよ」

おっと、この人こんなに攻撃的なキャラだったっけ？

「なに？シンジ君、自信ないとも言うつもり？」

「いや、負けはしないと思いますけど……原子炉と殴り合いなんてしたくないですよ」

体全体で「嫌だ」と表現するも効果なく、リツコさんは少しだけ考えて、やがて言った。

「まあ、その辺は丁寧に扱ってあげてね。手足は壊してもいいそうだから」

ダメだこりゃ。やるしかないか……

「ちよつとリツコ、なんで私に一言もないわけ？シンジ君の扱いは、私の管轄よ」

「私が話すことでもないでしょ。文句は司令に言つてね。そんなことより、今はちゃんと指揮しなさいよ」

悔しそうに歯噛みするミサトさん。あーあ、今夜あたり荒れそうだなあ。

『シンジ君っ、こうなったら構わないから、ギッタングッタンにしてやりなさいっ！』

指揮になっていない指揮を受け、初号機がJ Aと対峙する。

今回は外部電源がないため、内部電源の持つ五分間でケリをつけなくてはならない。

つーてもまあ、コレに五分もかかるとは思えないけど、さ。さっさと終わらそう。

『はじめ！』

ドンッ！

試合開始の合図と同時に地面を蹴り、俺の乗る初号機は、最大戦

速でＪＡに突進する。

身構えるＪＡ。

しかし、俺は相手の目前で進路を変え、相手の背後に回り、相手の右腕を掴む。……やっぱ全然反応できないんでやんの。

グシャッ！

蛇腹パイプ状の腕を一息に握りつぶした。

ＪＡは握り潰された右腕を全く意に介さず、上半身をひねって、左腕で殴りかかってくる。流石に、関節の構造は人とは違うようで、左腕は妙な方向に曲がってたりするが……

左肘でブロックする。お、結構重い。パワーはあるようだ。だが俺は、殴ってきた腕を悠々と掴む。やはり遅い。

メキメキメキッ！

そのまま左腕も握りつぶす。両腕を失ったＪＡは、大慌てで距離をとった。

「もう、やめましょうよう」

両腕を失ってもまだやるか？ できるだけ衝撃を与えないように戦うのも、しんどいんだけどなあ……

『まだよ。ちゃんと動きを止めるまで気を抜かないで』

「って言っても……」

と、ＪＡは重心を低くとり、少し前傾姿勢になった。

って、まさか……

ダン、ダン、ダン、ダン！

テンポの遅い足音があたりに響き渡る。なんと、ＪＡが初号機向けて突進しだしたのだ。

『た、たいあたりいー！？』

ミサトさんが素っ頓狂な声を上げる。

原子炉で体当たり！？ 正気かよッ！？

俺はできるだけ衝撃を吸収できるように、全身でＪＡを抱きとめる。轟音が一帯に響き渡る。お、重い……

なおもJ Aは、走り続けようと足掻く。

「み、ミサトさんっ！コイツのオペレーター、止めてください！」

『今、リツコが説得してる……え、何？制御不能！？』

「なにいいいいい！！」

こんなところで暴走だと。例の陰謀か？たとえ陰謀だとしても、アニメのように勝手に勝手に停止するとは限らないか……

とりあえず、動きを止めなければ。

J Aを抱えながらプログレッシブ・ナイフを取り出し、いまだ地面を蹴り続ける脚に突き立てる。

程なくして、走る原子炉はその可動部分を失った。

『ソイツ、制御棒の制御ができなくなってるわ。そのまま放っておくと良くて炉心熔融、悪くすると爆発するわよ』

ンなこと言われたって、どうすりゃいいんだ。

『もう時間がないわ、シンジ君、ソイツから離れて、ATフィールドを最大出力で展開するのよ。ATフィールドなら放射線も遮断できるわ』

「……それじゃ、俺は助かって、そちらが……」

『いずれそうなるわ。アナタだけでも生きなさい！』

俺は何も答えられなかった。どうすればいいんだ！

数瞬考えて、思いついたのは、単純で頭の悪い対処方法だった。

俺はダルマ状態のJ Aを抱きかかえ、周囲に内向きのATフィールドを張る。爆発も放射性物質も、エヴァとATフィールドで封じ込めるのだ。最悪、爆発による飛散さえ封じ込めれば、ホテルにいる人達はそれほど被曝せずに避難できるだろう。

『シンジ君！？シンジ君、やめなさい！！』

モニタの向こうで、ミサトさんが叫ぶ。反論しようとしたとき、全てのモニタがブラックアウトした。

「しまった！」

活動限界だ。内部電源で動いていたのを忘れてた！

「……何やってんだ、俺はっ！」

俺は、悔しさの余り、操縦桿に拳を叩きつけた。

結局、誰も助けられず、俺も死ぬわけだ。間抜けな最期だなあ……

まさかこんなどうでもいいキャラで死ぬとは……

「こいつは……悔いの残る死に方だな……レイ、ごめん……」

俺は、目を閉じた。

『……シンジ君？シンジ君、大丈夫？』  
ん？

何も起こらない。予備電源で動く通信機から、ミサトさんの涙声が聞こえてきた。

「あ、あれ？一体……何が？」

『突然、J Aが停止信号を受け付けて……原子炉は停止したわ』

ミサトさんの声に替わって、冷静なリツコさんの声が聞こえた。

「……ほ、本当ですか？」

『ええ』

「……はあああああ」

俺は安堵のため、深い深い溜め息をついた。

エヴァから降りた俺を出迎えたのは……ミサトさんのビンタだった。

「アンタねえっ！自己犠牲はやめなさいって言ったでしょ！」

張られた頬を押さえて呆然とする俺の肩を掴み、ミサトさんは激昂する。

「そんな形で生かされたってねえ、こっちは嬉しくもなんともないのよー！」

「……俺だって、みんなを見殺しにして、まともに生きられるわけ



ないでしょう?」

どちらも間違っている。頭で理解しつつ、それでも反論せずには  
いられなかった。

「…っ」

さらに何かを続けようとしたミサトさんだったが、それを飲み込  
み、どこかへ去っていった。

リツコさんは何も言わず、無表情でこちらを睨みつけるだけだっ  
た。

帰った後、ミサトさんから一部始終を聞かされたレイにも、力い  
っぱいはたかれたのは、言うまでもない。

## 第十一話 ドイツから来た少女

俺とミサトさんは、太平洋上を飛行する輸送機に揺られている。

ドイツから日本へ輸送中のエヴァンゲリオン弐号機と、その専属パイロットを出迎えるためである。

「わざわざ護衛を付けて運んでくるって言うてるのに、こんな中途半端な位置まで出迎えなんて、司令は何を考えているのかしら」

ぼーっと外を眺めていたミサトさんは、そのまま誰にもなく呟く。

「さあ……」

「やっぱり、何か理由があるのかしらね」

「理由？」

思わずオウム返しに聞き返すと、ミサトさんはこちらに視線を向けて続けた。

「だからね、弐号機や、それを護衛する艦隊に、私やシンジ君を必要とするような事態が起こる。それを司令が予測してるのかな……」  
「ってことよ」

少し、驚いた。

アニメの展開から考えても、恐らくミサトさんの言う通りだろう。彼女ならそれぐらいの推察もできるだろう。ただ、それを俺に漏らした、という事に、俺は驚いていた。

「何よ、ハトが豆鉄砲食らったような顔しちゃって」

「え、あ、いや……ミサトさんが珍しく理論的にものを考えてたんで、びつくりしました」

「……失礼ね、それじゃ私がバカみたいじゃないの」

「どっちかって言うと、直感で動くタイプだと思ってたもんで」

「フオローになってないわよ。……否定はしないけど」

さも可笑しそうに、クスクスと笑うミサトさん。そのわざとらしいさが、未だ彼女の意識の大部分が思考の底に浸っていることを窺わ

せた。

眼下に艦隊が見えてきた。国連海軍所属、太平洋艦隊。戦艦、空母、駆逐艦、その他もろもろ含めて30隻近くの大艦隊だ。

「ふーん……なかなか壮観ですねえ」

これだけの艦隊が、たかだか荷物一機を輸送するために動員されている。エヴァの重要性について、詳細を知らされていない国連軍の兵士達は、さぞかし自分の仕事と存在意義に疑問を感じていることだろう。同情を禁じえない。

「ほとんどが、セカンドインパクト以前の老朽艦よ」

「モノを大切に使うのはいいことじゃないですか」

いささかピント外れの答えに、ミサトさんは苦笑を漏らした。

「ヘロウ、ミサト！」

ヘリから降りると、タラップの上から声が聞こえた。声が聞こえた方向を向くと、女の子が仁王立ちしている。

輝くブロンド・ヘアーをたなびかせたその少女は、14歳にしてはメリハリの効いたスタイルをしていた。顔は、欧米系らしく彫りの深い顔に、日本人らしい、くりっとした大きな目をしている。そしてサファイア・ブルーの瞳。そこら辺のアイドルではちょっと太刀打ちできないくらいにの美少女であった。

「アスカ、久しぶり！」

ミサトさんが手を振って答える。

……少女の服装は、黄色い薄手のワンピースである。そんな格好で、海風吹きすさぶ甲板上に仁王立ちしたら……

ぶわあっ。

お約束というか何というか、少女のスカートが思いっきりめくれあがった。

「……っ！」

彼女は顔を赤く染め上げると、凄い勢いで、しかし音もなく俺の近くに歩み寄った。そして。

「うわっ」

少女の右手が飛んできた。そこまでは予測できたから、難なくよけることができた……が、初弾をかわして油断したのがまずかった。べきっ！

「あがつ！」

少女はビンタの勢いを殺さず、ローキックを放ったのだ。第二弾は脛に命中し、俺は余りの痛みに、脛を押さえてしゃがみこむ。

「いつっ……何すんだよいきなり……」

「ふん！見物料よ。これでも安いくらいだわ」

そう言い放つと、少女はミサトさんの方に向き直った。

「げ、元気そうね、アスカ」

「ええ。この通りね。ところで、サードチルドレンって、もしかしてコイツ？」

「そう、碇シンジ君よ。……シンジ君、大丈夫？」

「……ああ、大丈夫です」

ミサトさんは手を貸そうとしたが、俺はそれを断って自力でなんとか立ち上がる。

「紹介するわね。この子が……」

「エヴァンゲリオン式号機パイロット、セカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーよ」

ミサトさんの紹介を遮って、アスカが胸を張りつつ自己紹介する。そして、俺を品定めするようにじろじろと眺めると……

「……何だかサエないヤツねえ」

いきなり失礼なことを言う。

だがその目は、見下しているのとも、ライバル意識とも、ましてや冗談を言っているのとも違う。

「フンッ！ちよつとぐらい実戦経験があるからって、いい気になつてんじゃないわよ。アタシは何年もエヴァのパイロットとして訓練

してきたエリート。ぽつと出のアンタなんか、いつまでもデカい面させとかないんだから！」

そこにあるのは、憎悪。

思えば、こんな風に人にはつきりと憎まれたことはない。憎まれたことを認識したことがない、と言うべきか。

これも、人に深く関わらないように、生きてきたからなのだろう。それは幸運だったのだろうか、それとも不幸だったのだろうか。

「……あんまり突つかかるなよ。戦う相手は俺じゃないぞ」

感傷を押し殺し、おどけるように言ってみせた。

「うっさいわね、わかってるわよっ！」

アスカはそう言い捨てると、踵を返して立ち去った。

「うーん……嫌われちゃいましたねえ」

「まあ、これからもしよっちゅう顔合わせる事になるんだし……気長に付き合ったら？」

ミサトさんが人事のように言う。

「あの……ミサトさん、俺たちを指揮する立場だって事、忘れてません？」

俺のツツコミに、作戦部長は難しい顔をして黙ってしまった。

艦内の食堂で腹ごしらえをした後、ミサトさんは艦隊司令に用事があるからと、どこかへ行ってしまった。俺はすることもなく、ぽーっとコーヒーをすすりつつ、先ほど出会った少女のことを考えていた。

惣流・アスカ・ラングレー。

13歳で大学を卒業した天才少女。何事も一番でなければ気の済まない極度の負けず嫌い。人類を守るエヴァンゲリオンのパイロット

トであること、それを誰よりも誇りとする少女。妄執のあまり、シンジにシンクロ率を抜かれ、使徒の精神攻撃によってエヴァにシンクロできなくなったとき、全てを拒絶して心を壊してしまった。

それが、アニメに出てきた「アスカ」というキャラクター。

さつき出会ったアスカが同じ過去を背負っているのかどうか、確たることは言えないが、さつきの憎しみをこめた眼差しから推測するに、やはりエヴァにそれなりの執着があるのだろう。

客観的に見れば、今の俺は、アニメの碇シンジよりもパイロットとしては優秀と言える。シンクロ率は言うに及ばず、戦闘についても、3体の使徒を全て単独で殲滅し、作戦立案にまで参加している。もし彼女がこれまでの戦闘記録を読んでいたなら、それは彼女の危機感を大いに煽ることになっただろう。

彼女にとって、自らの唯一の存在意義を覆しかねない存在。それが、サードCHILDREN、碇シンジなのだ。

だが、俺はそこで思考を打ち切ることにした。彼女の本当の心情が、アニメのものと同じという確証はない。確証のない話を元にして彼女という人物を捉えたところで、それは都合の言い妄想と変わらない。

俺は俺として、彼女に接しなければならぬ。余計な先入観は、邪魔になるだけだろう。

「碇シンジくんかい？」

不意に呼びかけられ、その方向に視線を向けると、長髪を後ろで結った、不精ヒゲの男が立っていた。そういえば、この男もここで初登場だったか。

「あなたは？」

「加持リョウジ。セカンドCHILDRENのボディーガードさ」

口の片端を吊り上げてニヒルな笑いを浮かべたその男は、自己紹

介すると、俺の向かいに座った。

「一人かい？」

「ええ」

「保護者はどうした？」

「艦隊司令に話付けてくる、って肩いからせてどっかいっちゃいましたよ。多分、旗艦じゃないですか？」

すると加持さんは、さもおかしそうにクスクスと笑う。

「相変わらずみたいだな、葛城も」

「ミサトさんをご存知なんですか？」

「ああ……昔ちよつとな」

「もしかして、ミサトさんの元カレとか」

「ほう」

よく考えると、根拠薄弱な一方的極まりない決め付けであつたが、言われた男は、面白い、といった感じの顔になつた、

「なかなか鋭いね、シンジ君」

……まあ、アニメではそうだったから、言ってみただけなんだが。

「冗談で言つたつもりなんですけどね」

肩を竦めて見せる。

そして、コーヒーをすすつた後、少し考えて、言つた。

「惣流さんとは、よく話すんですか？」

「ん？まあな。長くボディガードやつてるからな」

「……どうも俺、彼女に恨まれてるようなんですけど……今日初対面だし、原因が皆目見当つかないんですよね。僕はできれば仲良くやっていきたいんですけど、なんか、知りませんか？」

「恨まれてる？そうか……」

加持さんは顎をなでながら、少し悲しそうな目をして思案している。

「何かあるんですね？」

「ふむ……まあ、アスカはエヴァのパイロットであることにプライドを持つてるからな。それも、いつもナンバーワンでないと気の済

まないタチだ。　すでに3体もの使徒を独力で倒してるサードチルドレンがいれば、尻に火もつくだろうな」

「けど、単なるライバル意識には見えませんでしたけど」

「それは……俺からはちよつと言えんが、まあ察してくれ」

加持さんの目の、悲しみの色が濃くなる。それは、エヴァに執着せざるを得ないような何かが、彼女にある、ということだろう。

「なるほど……<sup>チルドレン</sup>適格者というのはみんな、そんな風に育てられるもんなんですか？」

それを聞いた加持さんは、怪訝そうな顔をする。

「どういうことだい？」

「あ、えーと、レイ……ファーストチルドレンも、エヴァに執着するように育てられたみたいですからね。惣流さんもそうなのかな、って思っただけです」

「君はどうなんだい？」

「俺はひねくれ者ですから」

それを聞いた加持さんは、くつくくつ、と笑う。

「何か、おかしいこと言いました？」

「くつくくつ……いや、すまん。ま、アスカと仲良くしてやってくれよ。これまでも、あまり同年代の友達はいないようだったからな」

長年、少女にとって数少ない理解者だったのだろうボディーガードは、頭を下げた。

「そりゃもちろん、そのつもりですよ」

その時、

「あ、加持さん！」

少女の声が聞こえた。パタパタと走って寄って来ると、加持さんの腕にまとわりつく。

「ようアスカ、飯かい？」

「何言ってるんですかあ、加持さんを探してたんですよ」

さっきとはまるで違う、媚びるような口調で加持さんに甘えるア



ス力。

「一緒にランチしませんか？」

「悪いね、俺はちよつと用事があるんだ。代わりといっちゃなんだが、シンジ君と親交を深めておいたらどうだい？」

すると、俺から明らかにワザと視線を外していた少女は、その視線をこつちに向け……思いつきり睨んできた。少しビビる俺。その隙に、加持さんは自分の腕をさつ、と脱出させ、そのまま背を向けた。

「じゃ、失礼」

「あ、加持さあん」

アスカが呼びとめるのに片手を上げるだけで応え、加持さんは去っていった。目当ての男に立ち去られたアスカは、こつちを再び睨みつけ、「ふんっ」と踵を返すと、出口の方へ歩き出し……すぐに歩みを止めて、振り向いた。

「サード！ちよつと付き合いなさい！」

空母「オセロー」。

その広大な飛行甲板の大部分を占有して横たわるのは、赤いエヴァンゲリオンだった。

「これが、エヴァンゲリオン式号機よっ！」

式号機の胸部装甲の上に仁王立ちで、誇らしげに言うアスカ。……だから、高いところで仁王立ちすると見えるってば。

「純粹に戦闘用に作られた、初めての制式タイププロダクションのエヴァンゲリオンよ」

それにも構わず、アスカのプレゼンテーションは続く。

「所詮、零号機や初号機は試作機プロトタイプと実験機テストタイプ。式号機とはデキがちがうのよ。ポッと出のアンタなんかが簡単にシンクロできるのがいい証拠だわっ！」

フツ、プロダクションタイプってのは使いやすいように作るもんだがなあ。

とは言うものの、実際、零号機や初号機と式号機以降は、明らかにモノが違う。あるとき碇ユイから聞いたところによると、彼女が開発・研究していたのは零号機、初号機だけで、式号機は基礎理論のみ共有しただけの、全くの別物らしい。日本とドイツで、別々の「E計画」が進んでいたということだ。

式号機は、セカンドインパクトを起こした「光の巨人」アダムのクローン。それに対し、零号機と初号機は、箱根の地下、ジオフロントに埋まっていた第二使徒リリスのクローンである。そう考えれば、式号機はアダムベース・エヴァンゲリオンの試作機と言えなくもない。

「ちよつとアンタっ！聞ってるの！？」

怒鳴り声で、思索の海から引っ張り上げられた。

「ん、ああ、聞いてるよ」

「だったら、なんか言いなさいよ！」

「ああ、……式号機って赤いんだねえ」

特に言うべきこともなかったので、思いつくことをそのまま言ったのだが、彼女のお気には召さなかったらしい。顔がさらに険しくなる。

「……っ、アンタねえっ！バカにしてるの！？」

ドカーン！

突然、空母を衝撃が襲った。

「つきやあつ！」

不安定なエヴァの胸部に立っていたアスカはバランスを失い、そのまま落下した。4、5メートルの高さである。

「危ねえっ！」

どたんっ！

間一髪で、アスカの落下点に駆け込み、受け止める……が、衝撃を支え切れず、そのまま倒れこんでしまった。

「つつ……惣流さん、大丈夫？怪我はない？」

そう言って視線を上に向けた俺は……予想以上に少女の顔が間近にあったため、一瞬固まってしまう。

む、かわいいなあ……

だが、その顔の持ち主はすぐに、がば、と体を起こすと、恐るべき俊敏さで立ちあがった。

「フン、恩を売ったなんて、思わないことね」

そっぽを向いて言う。少し顔が赤い。さすがに照れるか。

「そっ、それより、さっきのは何？」

アスカは船縁へ向かって駆け出す。俺も後を追った。

そこで見たのは、艦隊の船が、轟音と共に次々と沈んでゆく光景だった。

## 第十二話 海中の祈り

突然、水柱が上がった。ほんの少し遅れて、どおん、という低い音が響いてきた。そして、駆逐艦が一隻、真つ二つになって沈んでいく。次いで二隻目、三隻目。巨大な何かが泳ぎ回り、周囲の軍艦に手当たり次第体当たりを敢行しているらしいことが判った。

「使徒……か？」

「あれが使徒？本物の？」

俺の呟きに、興奮気味に問い直すアス力。

「こりゃ、ミサトさんに知らせないと」

と言いつつ、俺はアニメでの展開に思いを馳せる。そして、

「……チャ～ンス」

などという呟きを聞きつけ、その記憶が現実のものになることを確信した。

「サードっ、行くわよ」

「……行くって、エヴァのところ？」

「そうよっ！アレが使徒なら、エヴァじゃないと倒せないんでしょ？さっさと行くわよっ」

「あ、ちよつと持ってきたいものがあるから、先にエヴァのところに行つてて」

「はあ？ちよ、ちよつと」

俺は、へりに置きっぱなしの荷物を取るため、駆け出した。後ろでアス力がなんか喚いてるが、気にしない。

「お待たせっ……着替えるの早いね、惣流さん」

船縁で別れてから、ものの10分足らずで式号機の元へ辿りついたのだが、アス力はすでに深紅のプラグスーツに着替えていた。

「何やってんのよ、アンタも式号機に乗るのよ。ホラ、さっさとこれ着なさいっ!」

眉毛をキリキリ吊り上げながら、自分が着てるのと同じ女物のスーツを俺に突き出す。

「いらないよ。自分のあるから」

「はあ?」

持ってきた小ぶりのスポーツバッグを掲げて見せる。

俺はこの事態に備えて、自分のプラグスーツを持ってきたのだった。

「……アンタ、アタシを差し置いて式号機に乗る気だったんじゃないでしょうね?」

「万一のための予備ってやつだよ。予備なりに、準備はしとくもんさ」

「じゃ、なんでわざわざここに持ってきたわけ?」

「惣流さんのことだから、『アタシの華麗な操縦をみせつけてやるっ!』なんて考えてるんじゃないか、なんて思ってたさ」

図星を突かれたのが気味悪かったのか、怪訝そうな顔を向けるアスカ。

「まさか、惣流さんのスーツを着ろって言われるとは思わなかったけどね」

その台詞に、彼女は何故か顔を赤くする。

俺は、華奢な体つきで身長も低めだから、サイズ的にはアスカのでも着られる。が、いかんせん身体のラインに合わせて作られるプラグスーツのデザインは、性別を選ぶ。ついでに言えばスタイルもかなり選ぶ。そういう意味では、14歳とは思えない、整ったメリハリのあるスタイルを持つアスカのプラグスーツ姿は、素晴らしい。

「……何ニヤニヤしてんのよ」

はっ。何を考えてるんだ俺は。

「と、とにかく着替えるからさ、先に乗っててよ」

「……ふん、早くしなさいよ」

そう行つて、アスカはタラップを駆け上がった。いった。

ちゃちゃつと着替え終わつてタラップを上ると、アスカはエントリープラグのハッチの横で、腰に手を当てて見下ろしてきた。

「遅いっ！」

「乗らないの？」

「アンタが先に乗るのよ」

「は？」

プラグの中は狭い。ただ入るだけなら2、3人入つても問題ないが、パイロット・シートに座するには、一番先に乗らないと入れ替わりが大変である。

「どういうこと？」

「いいからさつさと乗れっ！」

バシッ！

困惑する俺は、プラグの中に叩き落された。

「あたた……何すんだよ……お、おい」

後から乗りこんできたアスカによつて、強引にシートに座らされる。

「起動させてみなさいよ」

「ええ？」

アニメにもなかった展開。何を考へてるんだ？

「アンタ、初めてエヴァに乗っていきなりシンクロ率80%も叩き出したそうじゃない。他人の機体でも、起動させるくらい何てことないでしょ？」

酷く険を感じさせるアスカのニヤつき。

恐らく俺では、式号機を起動させることはできない。エヴァのパイロットが専属制になっているのは、エヴァとパイロットの相性があるからだ。突き詰めれば、コアに込められた魂との相性である。

初号機のコアに、母親である碇ユイの魂が込められているから、俺が操縦することが可能なのだ。アニメの通りならば、弐号機のコアにはアスカの母親の魂が込められているだろう。だからこそアスカがシンクロできるのだ。もっとも本人は気づいていないだろうが。

しかし、外から微かに聞こえる爆音はまだ途切れない。被害が広がる前に、早く何とかしないと。俺は早々に説得を諦め、起動シーケンスを開始した。

「……基本言語を日本語に設定。LC注入開始」

ま、適当なところで泣きを入れれば替わってくれるだろう。LCがプラグ内に満たされる。続いて神経接続を開始する……と、そこで、モニタに「思考ノイズ発生」の赤文字が現れた。

「……惣流さん、もしかしてドイツ語で考えてる？」

ジト目で見つめるが、アスカは意地悪い顔で、ドイツ語らしい言葉をお口ににする。エントリープラグに、正規のパイロット以外の人間が乗った場合、その人間の思考がパイロットとエヴァの神経接続に影響を与える。特に思考言語が違ってしまつと、起動も不可能になる程の大きなノイズとなる。

アスカは、それを故意にやっているのだ。器用と言えば器用だが、これには流石に腹が立ってきた。

「……お前な、次々に船が沈められるって時に、せこい嫌がらせしてんじゃねえよ。ガキかお前は」

言われたアスカは目を見開いた。次いでその表情が怒りに染まっ  
てゆく。

「オマエのくだらない意地のせいで、助けが間に合わず死んでいく人間がいるんだぞ。判ってるのか？」

プライドを大いに傷つけられたであろう少女は、ギリギリと歯を軋ませる。それでも何も言わず、俺を押しつけてシートに座った。そして、起動シーケンスを再開する。

それ以上の口論が無駄であることを、聡明な彼女の理性は理解したのだらう。だが、その目は怒りに燃えていた。

『起動を中止しろ！許可なくソイツを使うんじゃない！』

式号機が起動したところで通信が入る。旗艦からのようだ。始めは知らない男の声、しかも英語だったが、すぐに聞きなれた声が聞こえた。

『アスカ、聞こえる？いいからそのまま立ち上げて！』

「ミサトさん？」

『シンジ君も乗ってるの？』

「はい」

「ンなことよりっ！ミサト、電源用意しといて！」

焦ったようにアスカが叫ぶ。

『「オーヴァー・ザ・レインボウ」の甲板に用意してあるわ』

「オッケイ。そっちまで移動するわね」

通信が切れる。

「いくわよ、アスカ」

アスカの呟きが聞こえ……そして、深紅のエヴァンゲリオンは、「オセロ」の飛行甲板に立ちあがった。

細身の手足をしならせ、式号機が空高く舞う。機体の差かパイロットの腕か、その跳躍力は、俺の駆る初号機のそれをゆうに超えていた。そして自由落下に入る。その落下点は…海面だ。

「アスカ、海に落ちるぞっ！」

「黙って見てなさいよ！……せーのっ！」

バキーン！

不意に、甲高い音を立てて式号機は再び飛び上がった。足下、海面スレスレにオレンジ色の光が飛び散ったのがかろうじて見えた。

「ATフィールドか……こんな使い方があったなんて」

着水寸前、足下に一瞬だけ、内向きのATフィールドを張ったのだろう。俺はその発想と操縦能力に舌を巻いた。

と、そういえばアニメでは、艦隊の船を踏み台にして跳び回



つていたような気がする。さっきの一言が効いて、気を使ってるんだろうか。

式号機はそのまま、飛び石を跳ぶように「オーヴァー・ザ・レインボウ」に近づき、その手前でひときわ高く跳びあがった。

「エヴァ式号機、着艦しまーすっ！」

外部スピーカを使い、叫ぶアスカ。

ガキーン！

ズズン……

着艦するエヴァ。着艦寸前にATフィールドを使って落下速度を殺したおかげで、予測したよりもはるかに小さな衝撃で済んだ。

「……すごいじゃないか、惣流さん」

「あつたりまえよっ！誰に言ってるの！」

言いながら、アンビリカルケーブルのプラグを、式号機の腰にあるソケットに挿し込む。サイドモニタに映る、活動限界までの残り時間表示がクリアされ、外部電源に切り替わったことを示した。

『アスカ、今の式号機は、B型装備よ。水中戦はできないわ』

ミサトさんからの通信。

「水に落ちなきゃいいんでしょ」

そう言って、肩のウェポンラックからプログレッシブ・ナイフを取り出す。初号機のそれと違い、刃を出し入れできる大型のカッターナイフのようなデザインだ。

周囲に気を配っていた俺は、海面の盛り上がりが迫ってくるのを発見した。

「来たよ、惣流さん、4時の方向！」

それを聞いたアスカは式号機を振り向かせ、使徒を待ち構える。やがて海面の盛り上がりは水柱と化し、巨大な水音とともに弾けた。海面から跳びあがったソレは、なんと空母を覆い尽くすほど巨大な、エイに似た形のモノだった。

「でかい！」

「予想どおりよっ！」

何の予想だ。

俺の心のツッコミには構わず、甲板に仁王立ちした式号機を跳び越さんとする使徒に、力いっぱいナイフを突き立てた。ナイフの刃は使徒の腹を薙ぐが、如何せん短すぎる。うつすらとした切り傷はすぐに復元してしまふ。そして、勢いを失った使徒は、エヴァと空母にそのまま覆い被さってきた。

「うつっ」

歯を食いしばり、その重さがもたらすフィードバックに耐えるアス力。やばい。このままじゃエヴァもつぶされるし空母も沈められる。

だが、妙案を考えつく前に、式号機は船縁から足を踏み外した。

「きゃああああっ！」

『アス力！』

そのまま、使徒ごと海中に落下した。

猛スピードで泳ぎ回る使徒にしがみついたまま、翻弄されるエヴァ式号機。縦横無尽に襲う慣性力に頭をシェイクされ、何かを考えられる余裕を完全に失った。

『もうケーブルがないわ、ショックに備えて！』

朦朧とした意識でミサトさんの指示を聞き、ほとんど反射的に身を強張らせた。

そして、ほとんど爆発音のような音。

「うわっ！」

「くっっ！」

ケーブルが延びきり、時速百キロ近い速度が、一瞬にしてゼロになる。俺は必死でインテリアにしがみつき、アス力は体にシートベルトが食い込む痛みに耐える。

「しまった！」

使徒が手から放れ、エヴァから距離を取り、こっちに向かって方向転換した。

「ちよつと！動きなさいよっ！」

アスカが回避行動をとろうとするが、水中用装備でないエヴァはじたばたと動くだけで、ただ泳ぐこともままならない。そうこうしてる間に、使徒はみるみる近づいてくる。

そして、俺たちの目前まで迫ると、がばあ、と上下に割れ、生え並ぶ鋭い歯を見せた。

「く、くちいゝゝゝ？」

そして、エヴァンゲリオン式号機は、第六使徒の体内への進入を果たした。

「……つて、食われてるんじゃないのよっ……」

式号機は、右脇腹を牙に貫かれている。その痛みのフィードバックに、アスカの顔が歪んでいた。それは、恐らく俺も同じだろう。

「ちよつと、アンタ……邪魔、しないでよ」

俺は咄嗟に、アスカの手の上から操縦桿を握って神経接続を行い、フィードバックを半分肩代わりしていた。

「強がつてる場合じゃないだろ……痛みで失神でもされちゃ、困るんだよっ……。とにかく今は、なんとか、使徒の口をあけてやらなくちゃ……」

「でも、またコイツを放したら……どうしようもないわよ。どうやって、倒すの」

「使徒を倒すには、コアを破壊するのが一番早い……そして、コアは恐らく、あれだ」

エヴァの頭上方向　使徒の口の奥　を視線で指す。そこには確かに、赤く光る球体が埋め込まれていた。

『アスカ？目標を放さないで！今から、アンビリカルケーブルを巻き上げるわ』

ミサトさんからの通信。って、これはまずい！

「……ちよつと待ってください！今、使徒に噛みつかれてるんです。腹に牙が、深く刺さっています。こんな状態で、引きずられたら……シャレになりませんよっ！」

痛みを耐えながら、抗議の声をぶつける。

『うつ、でも……』

「ミサトさん、コアを、口の中に発見、しました。こいつを、ブチ壊せば終わり、です。それを、待って下さい」

途切れ途切れだが、何とか考えを伝える。

「ちよつと、サード。いい加減なこと、言わないでよ。B型装備で、どう、するつてのよ」

アスカの抗議の声。確かに、水中で身体能力のほとんどを奪われているが、エヴァの潜在能力はこんなもんじゃないはずだ。俺はそれに賭けることにした。

「大丈夫、惣流さん。思いを、込めれば……必死でエヴァに、願いを捧げれば……エヴァはきっと、応えて、くれる」

恐らく式号機のコアにあるのは、アスカの母親の魂だろう。娘の「生きる意志」には、きつと呼応してくれるはず。

「惣流さんなら、できる。エリート、なんだろ。俺も、サポートする、から」

アスカは俺の顔を見据えながら、その表情を疑いから決意へと変化させる。

「わかったわよ……アタシに、エヴァに乗るアタシに、不可能なんて、ないんだから」

その言葉に安心した俺は、瞑目し、エヴァの中にいるモノに呼びかける。

この少女を、護ってくれ。

何かが応えた。それを感じ、俺は推測を確信に変えた。

「開け、開け、開け、開け」

アスカの呪文のような呟きが聞こえてくる。俺はその声に乗せて、意識を集中させた。

「開け、開け、開け、開け」

「開け、開け、開け、開け」

その瞬間、エヴァの身体に力がみなぎるのを、俺は感じた。

「ひらけええええええええええっ！」

俺とアスカの叫びが一つになる。

先ほどまで、水圧と使徒の力に負け、ほとんど動かなかった弐号機。それが今、圧倒的な腕力をもって、ギリギリと使徒の口をこじ開ける。

ある程度開いたところで、下あごに右足を掛け、一気に口を全開させた。

「おおりやああああああああああっ！！」

アスカの気合一閃、弐号機は掛けた右足をそのままふんばり、使徒の口のさらに奥へ跳びこむ。

腕を伸ばし、奥の光球を両手で掴み、力いっぱい握りつぶした。

ずどおおおおおおおおおおおおおおおんん！

突然の大爆発。ショックで一瞬意識が飛んだ。

「シン……ザザッ」

ノイズ交じりにミサトさんの声が聞こえた気がした。意識を取り戻したとき、弐号機は空を飛んでいた。

だが、それは錯覚で、相変わらず重力の呪縛からは逃れられてお

らず。フリーフォール独特の浮遊感の後、轟音と共に、深紅のエヴァは「オーヴァー・ザ・レインボウ」の甲板の上に落下した。

「……大丈夫？惣流さん」

「何てことないわよ……」

と言いつつ、頭を押さえつつうめくアスカ。二人してよろめきながら、エントリープラグから這い出し、甲板に降り立った。周囲から、兵士たちの歓声が上がる。

「……どうやら無事に終わったみたいだね。お疲れ様」

「アンタもね」

そう言って……少しだけだが、アスカは初めて俺に笑顔に向けた。つられて、俺も笑顔になる。

「今まで、アンタはあんなのと独りで戦ってたのよね……人は見かけによらないもんだわ」

「ひでえ言い方。……でもな、別に独りで戦ってたわけじゃないんだよ」

その言葉に、不思議そうな顔を向けるアスカ。

「パイロットとして前線に立ったのは俺だけでも、使徒の能力を分析する人、作戦を立てる人、エヴァを整備する人……それに、普段の訓練のサポートや武装の開発をする人、たくさんの人が戦ってる。俺だけじゃ、何もできないよ」

「……ずいぶん、シユシヨーな心がけね」

やや不機嫌そうな顔で、彼女はため息をついた。だが、すぐに顔を上げると、俺に言い放つ。

「けどねっ、アタシが来たからには、アンタなんかすぐにお払い箱にしてやるんだから」

あくまでも強気な少女に、俺は苦笑を浮かべるしかなかった。

「まあとにかく、これからは一緒に戦う仲間だ。よろしく頼むよ、

惣流さん」

そう言っただけ俺は右手を差し出したが、アスカはちょっと嫌そうな顔をして、

「その、惣流さん、って呼び方、やめてくれる？なんか気持ち悪い」「気持ち悪いって……」

あんまりな言い方に、トホホとなる俺。

「アスカ、でいいわよ。アタシもアタのことシンジって呼ぶから」

「判ったよ、アスカ」

「よろしく、シンジ」

今度こそ、がっちり握手を交わす。がっちり……って。

「いててててて、痛いってば」

アスカはギリギリと、俺の右手を握り締めた。そして、ぱつ、と振り払うと、

「ふん、情けないわねっ。しっかりしなさいよ！」

そう言っただけ、くるりと踵を返すと、立ち去った。

「……やれやれ」

溜め息をつき、俺は新たな同僚が去った方向を、穏やかな気持ちで眺めた。

ミサトさんに乗せた小型ヘリが飛んでくる音を、ぼつと聞きながら。

### 第十三話      レンアイとプライド

今日も、俺はレイを連れ立って学校へ行く。

『俺』にとつては2度目となる中学校生活も、だいぶ慣れてきた。気がね無く馬鹿を言い合える親友もできたし、学校に行くのが楽しみですらある。一度目はいじめられっこ街道一直線だったから、今こうして楽しめているのが、純粹に嬉しい。『シンジ』にとつても同様だろう。第二新東京市での学校生活に明るい思い出はなかった。

「シンジ、綾波、おはようさん」

トウジが後ろから追いついてきた。

「うーっす、トウジ」

「……おはよう」

「二人とも、今朝は珍しく遅いのう、どないしたん？」

俺と綾波が登校路でトウジと会うことは珍しい。トウジはいつも遅刻ギリギリで来るからだ。今日会えたのは、俺たちがいつもより遅いからである。

「いやあ、俺が寝坊しちゃってさ」

「なんや、綾波とヘンなこととつたんやないやろな」

「ニヤニヤと冷やかしかしモードに入るトウジ。」

「……シンジ君は、昨日まで船旅だったから、疲れていたの」  
「フォローを入れるレイ。」

「船旅？なんやそれ？」

「んー、まあ仕事でね。でっかい軍艦で三泊四日の太平洋クルージングだよ」

「ほー、昨日まで休んだのはそのせいかいな。ケンスケが羨ましがりそうやな」

「ははは、そうだな」

「ところでシンジ、そのケンスケが言つとつたんやけどな。今日、転校生がくるらしいで。それもガイジンの、ものごつつう別嬪な女



子っちゅう話や」

これは多分、アスカのことだな。やっぱりウチに転入するんだ。

「さすがケンスケ、情報早いねえ」

「って、シンジ知っとったかいな。ちゅうことはネルフ関係者なん  
か？」

「まあね。もう会ったし」

「ほんまかつ？」

期待に満ちた目で俺を見るトウジ。

「で、どうなんや、その転校生は」

「どうって……まあ確かに、ルックスはかなりのもんだと思うよ」  
すると、彼の顔は訝しがる表情に変わった。

「……なんや、含みのある言い方やな」

「まあ、会ってみりゃ判るだろ」

「……シンジ君」

不意に呼びかけられる。振り返ると、レイが何だか不機嫌そうに  
していた。

「どうしたの？」

「急がないと、遅刻するわ」

レイの言葉に、トウジは時計を見てギョっとなる。

「ああつ、アカン。あと3分やつ！」

そして3人は走り出す。その日の始まりは、こんな感じだった。

朝のショート・ホームルーム。

担任に紹介されて教室に入ってきた少女は、ブロンド・ヘアーを  
なびかせて、大きく「Asuka Langley Sorry」  
と筆記体で板書した。

「ドイツから引っ越してきました、惣流・アスカ・ラングレーです。  
ヨロシク！」

めいっぱいの笑顔で挨拶する美少女転校生。主に男子から、どよめきが起った。

なんともまあ、外面のよいことで。

それにしても、こうして見ると、やっぱりアスカってカワイイよなあ。太平洋ではツンケンした顔ばかり見てた気がするけど、笑顔の方が絶対にイイな。愛想笑いとかわかつちやいても。って、二十二歳の『俺』がこんなこと考えてるのもあんまり良くないかね。まあ『シンジ』なら憧れても無理もないだろうけど。

などと、やくたいもない考えを打ち切ると、席を選ぶように促されたアスカが、こちらへ歩いてきた。俺の隣の空席を選んで座ると、こちらを向いて、

「よろしくね、シンジ！」

眩しいほどの笑顔で言う。

「あ、ああ、よろしく」

途端に、周囲の男子から殺気が放たれた。

「オイ、なんか碇と知りあいみたいだぞ」

「つーか、ヤケに親しくないか？」

「綾波がいるくせに……」

「二股掛けるつもりか……あの野郎」

ヒソヒソと交わされる怨念交じりの会話。アスカはすました顔で座っているが、こちらに視線を向け、周囲に気づかれないように、ニヤリ、と微笑んだ。

このやろう。

ショート・ホームルームが終わるまで、俺は針の筵に座らされることになった。

昼休みの屋上。俺、トウジ、ケンスケ、レイの4人が昼食をとる

ために集まった。いつもは洞木さんがこのメンバーに加わるが、今日はアス力を購買に案内したりしている。

俺が少し遅れて屋上に来るなり、トウジはいきなり俺の頭を抱え込んだ。

「のう、シンジ。しょくじきに答ええよ」

「な、なんだよ？」

「オマエ、あの転校生とどないな関係なんや？」

凄みのある声と関西弁。結構威圧感がある。いつものやつかみや冷やかしも違う雰囲気、俺は少し戸惑った。

「どないな関係って、同僚だよ、同僚。彼女もエヴァのパイロットだって言ってただろ？」

「知り合ったばかりの同僚の割には妙に親しそうだったけどなあ。ファーストネーム呼び捨てにしてるし。正直に言った方が身の為だぞ」

横からケンスケの追求が入る。こっちは完璧に面白がっている。トウジの腕が首にかかった。頸動脈に入る。

「呼び捨てなのは、彼女がそうしろって言ったから、倣ってるだけだって」

「ほなら、オマエと転校生の間には何もないんやな？誓うな？」

首を締める腕に力が籠る。その拍子に頸動脈を外れ、チョーク気味になる。

「ち、誓うよ。だから、放せてば」

いい加減……意識が朦朧としてきた……

「鈴原君、シンジ君が死んでしまうわ」

レイの制止によって、ようやく俺の首は解放された。

「はあ、それ聞いて安心したわ」

「げほっ、げほげほ……安心？」

安堵しつつ呟いたトウジの言葉に、俺は驚く。

「まさかトウジ、アス力のことを……」

言つと、トウジの顔が一瞬で赤く染まった。

「あつ、アホなこと言うな！わ、ワシはそんなん……」

動揺しまくっている。これは意外な展開。漫画やアニメでは、トウジは洞木さんといい雰囲気だったはずだ。ここのトウジも、当然気持ちは洞木さんに向いてると思ってたんだが。まあ、恋愛は理屈じゃないし、中学生だしなあ。アニメでは、トウジは初対面でアスカのきつい性格を目の当たりにしてたせいで、自動的に恋愛対象から外れたんだろう。

と考えると、アスカがトウジに本性を見せた時が問題だな。クラスに慣れるまでは、本来のあの激しい性格は表に出さないだろう。「アスカって実はかなり性格キツいぜ」。今はまだ猫かぶってるけどな」

「何言うとるんや！あないに別嬪なのに、明るいしさっぱりしとし……」

「おいおい、トウジ……」

ケンスケまで呆れ顔である。

恋は盲目か……ある意味、トウジらしいけど。

「あ、いたいた、シンジー！」

不意に、扉の方から声が聞こえた。

「お、ウワサをすればなんとやら……」

アスカと洞木さんが駆けよってきた。

「やっぱりここにいた。せつかくだからアスカも一緒に昼ご飯食べようと思って」

「さっすが委員長、気が利くねえ」

感心しきりのケンスケ。

「よろしくね」

アスカが微笑む。天使のような、という表現がハマってしまうような笑顔に、固まるトウジと、カメラを持ってきていないのを悔やむケンスケ。

「おお、よよよろしゅう。惣流……さん」

「なんか、さんづけで呼ばれるとくすぐったいわ。クラスメイトな

「んだし、呼び捨てでいいわよ」

「え、ええんか？」

「うん。その代わりアンタ達のこと呼び捨てにしていいでしょ？ええと、鈴原、だっけ？」

「お、おう。構わんで。……惣流」

「ぷっ、何ガチガチになってるんだよ、トウジ」

「チャチャを入れるケンスケ。」

「や、やかましい」

そんな様子を見て、洞木さんは表情を曇らせている。

「で、アンタが相田よね。よろしく」

「ああ、よろしくな」

「それで……アンタがファーストチルドレンの綾波レイね」

「少しだけ視線を鋭くし、レイを睨むアスカ。」

「ええ」

「ふーん。ま、よろしくね」

「……よろしく」

その後は特に何事もなく、表面的には楽しい談笑と食事が続いた。……しかし、不自然な程俺に友好的なアスカ、俺がアスカと話すたびに睨んでくるトウジ、トウジとアスカが会話するたびに悲しげな顔をする洞木さん、なぜだかいつにもまして喋らないレイ。こんな状況の中で、俺には飯の味などわかつたはずもなかった。

ケンスケはというと……美少女転校生のルックスを、いろんなアングルからこっそりチェックしていた。

「シンジ……ワシはオマエを信じてええんやろうな？」

昼食を終えて教室に戻りながら、トウジが俺に耳打ちしてきた。

「トウジらしくないなあ……人のことウジウジ気にしてないで、自

分の方を振り向かせてやる、くらいの気概を持ちなよ」

「え、いや、ワシは別に……」

「あつそ、じゃあ俺がアスカとどうなろうと、トウジにゃ関係ないわな」

「なんやとツ!？」

「なんで怒る？」

「シンジ、あんまりトウジを苛めるなよ。トウジもな、そこまであからさまな態度取つといて、なんとも思っていない、は通用しないと思うぜ」

ケンスケが助け舟を出す。

「いや、……しかしのう」

慣れない感情に、険しい顔で考え込むんでしまつトウジ。

「はいはい。大いに悩め青少年……ってね」

肩を竦めて言う俺に、ケンスケは訝しげな視線を送ってきた。

「シンジ、オマエ時々、妙にオツサン臭いよな」

「……ほっとけ」

「シンジ。今日はシンクロテストでしょ。一緒にいこ」

授業が終わると、アスカは俺を誘ってきた。その妙に親しげな声色に、俺は不気味なものを感ずる。だが、それ以上にクラスの男子連中 特にトウジ からの視線に恐怖を感じた。

それをやり過ぎすべく、レイに助け舟を求める。

「あ、ああ……そだね。レイも行こう」

「ええ」

しかしそれは迂闊に過ぎた。レイも、タイプは違えど、アスカに比肩し得る美少女である。彼女が立ち上がると、周囲の視線はさらに鋭く突き刺さってきた。当然と言えば当然だ。

そして俺は、それだけで殺されそうなほどの敵意を背に受け、傍

から見れば「両手に花」状態で教室を出てゆくのだった。

学校から駅へ向かう道を、アスカは先頭にたつてずんずんと進んでゆく。その後ろに俺、少し遅れてレイが続く。

「……アスカあ」

「何よ？」

「学校で、あからさまに態度変えるのはやめてくんないかな？」

「何言つてんのよ。このアタシが仲良くしてやってんのよ。ありがたいと思いなさいよ」

にべもなくそう言い放つアスカ。しかしその目は、悪戯を楽しむ目だ。

「別に俺なんかじゃなくてもさ、アスカと仲良くなりたいたい野郎なんていっぱいいるだろうよ」

「アンタバカア？ そんな下心丸出しのヤツと、仲良くなりたくないかないわよ」

「その割にや、随分と外面いいじゃない。あーいうのって疲れない？」

そう言つと彼女は足を止め、こっちを振り返り、

「よけーなお、せ、わ、よっー！」

「あだだだだだ、ゴメンゴメンゴメン」

耳を引っ張る。これ、マジで痛いんだけど。

「フンッ……それにしてもファースト、アンタも黙ってないで何か喋りなさいよ」

矛盾が、少し後ろを歩いていたレイに向けられた。

「別に……何も喋ることはないわ」

「何よそれ、ム力つくわね……アンタ、碇司令のお気に入りなんですって？ 大した実績もないのに何でかしらね。もしかして、御曹司の許婚ってヤツ？」

口調がだんだん陰湿になってゆく。さすがにちよつとムカつ腹が立ってきた。

「そついう言い方は止めるよな」

「何よ、やっぱり自分のカノジヨをかばうワケ？」

「別に、レイと俺はそういうんじゃないよ。それはともかくな、そういう低レベルな話でカラむのは、みつともないって言つてんだよ」

「低レベルですって!？」

即効で激昂する瞬間湯沸し機アス力。

「……あのなあ、エースパイロットを自負するんなら、もうちよつと冷静になれよ。戦いでそうポンポン熱くなつてたら、命がいくつあつても足りないぞ。それぐらい戦闘訓練を受けてきたなら判るだろ」

「エースパイロット」という単語に反応し、アス力は齒噛みしながら、握り締めた拳を緩めた。それを確認し、俺は続ける。

「それに、レイに実績がないってのは本気で言つてる？」

「……なんでよ、今までの第三から第五までの使徒はアンタが一人で倒したんでしょ？第六はアタシが倒したんだし」

いつの間にか、第六使徒戦はアスカ一人の手柄になっている。……まあいいけど。

「レイは『プロトタイプのパイロット』だぜ。エヴァのシンクロシステムを開発する上で、誰が実験台になつたと思つてるんだ？」

「あ……」

蒼い瞳に驚きが浮かぶ。

「エヴァの開発に関わつてるんだから、当然俺たちより多くの機密に触れているはずだし、司令たちとの付き合いだつて長いだろ。そういうのを一々やつかんでたら、ストレスで胃に穴が開いちまうぞ」

「あ、アタシは別にやつかんでなんか！」

「んじゃ、何だ？……まあ、何でもいいけどさ。下らない対抗意識に気を取られてないで、もうちよつと自分や周りを注意深く見てたほうがいいと思うぞ。……俺たちは、本当に使徒さえ倒していれば



いいのか、それすらも怪しいんだからな」

「……どうということよ？」

「自分で考えな」

あとは、一言も会話がなく、本部へと歩を進める。

レイの表情が少し固いのが気になった。

ちよつと言いすぎたかな。

「お疲れ様、三人とも。今日のテストの結果はこんな感じよ」

シンクロテスト後のミーティングルーム、リツコさんが差し出したシートには、テスト中のシンクロ率変動を示す三本の折れ線グラフが描かれていた。

紫の線が俺。シンクロ開始当初の変動を除けば、75～80%の間に収まっている。

「シンジ君は相変わらず安定してるわね。でも、もうちょっと上を狙えないかしら？」

「はあ、やってみないと判りませんけど……」

「そう。じゃ次回は、最高記録を目指してみてね」

「はい」

紫の線に絡むように、赤い線が65～85%の間を大きく上下している。これはアス力だ。

「アス力はさすがね。ドイツでの最高値よりずっと高いじゃない。でも、平均値でいくとシンジ君より低いわね……もうちょっと安定させることを心がけてみて」

「……はい」

そして、二人の線より少し低いところ、60%前後のところを、ほとんど起伏のない黄色い線が描かれている。これがレイだ。

「レイは……まあこんなところかしらね。ついこの間まで起動しな

かったことを考えると、この辺で安定してるのはいい兆候だわ」

レイに対する評価を聞いて、アスカが怪訝そうな顔をする。

「何か質問は？」

「はい。ファーストのシンクロ率が妙に低い気がするんですけど。そのままでもいいんですかあ？」

横目でレイを見ながら、白々しく言うアスカ。リツコさんはそれを見て、しょうがないわね、という風な溜め息をつき、言う。

「零号機は扱いが難しいの。それでも、集中力と精神の安定性が抜群のレイだから、何とか起動レベルを保っていられるのよ。今はこのレベルを維持して、少しずつ底上げしてくしかないわ」

「何よそんなの、アタシだって……」

レイを評価する言葉に気がでないアスカは、つい抗議の言葉を口にした。

「アスカには無理ね」

「ちよつとリツコ」

にべもなく叩き落すようなリツコさんの言葉に、アスカの性格を知るミサトさんが窘める。叩き落されたアスカは……物凄い形相で拳を握り締めていた。

「ま、まあ今日はこれくらいにしましょ。上がっていいわよん」

アスカの様子を見て、ミサトさんは慌てて締めた。

更衣室で着替えていると、隣の女子更衣室から「ドガン！」という、ロツカーを殴りつけたような音が聞こえてきた。これは、アスカだよな、たぶん。血気盛んなのはいいが、今からこの調子だと、アニメのように心折れた時の反動が怖い。なんとか、余裕を持たせてあげないと。

俺は……俺には何ができるんだろうか。

## 第十四話 ミッション・インポッシブル 前編

第七の使徒が現れた。

どこからか太平洋を泳いできたそれは、一直線に日本列島、第三新東京市を目指していた。

ネルフは、エヴァによる水際での迎撃・殲滅を決定する。

「沖合いで発見できたのはラッキーでしたね」

エヴァごと地下のリニアトレインに揺られながら、無線でミサトさんと話す。向こうも、指揮車に揺られているのだろう。目的地は同じ、使徒の上陸予想地点だ。

『そうね……今回は街に被害を出さなくて済みそうだわ』

実際、これまでの戦闘で、要塞都市として作られた第三新東京市の迎撃システムも甚大な被害を受けた。復旧も遅れており、今はまだ実戦で使えるレベルではないという。一般の居住区は、有事には地下に引っ込むようになっていたため比較的被害が少ないが、無視できるものでもない。だから今回は、都市に近づけないように戦うことが重要であった。

『上陸直前で一気に叩くわよ。地上に出たらすぐにフォーメーションをとって、目標が現れたらすぐに、初号機・弐号機で交互に波状攻撃。零号機はポジトロンライフルで後方から援護して。わかった？』

『了解』

『オッケー！』

「わかりました」

ミサトさんの指示に、三者三様に答えた。

『せっかくアタシの日本デビュー戦なんだから、アタシ一人にまか

せてくれればいいのに……」

指揮車との通信が切れると、アスカのボヤきが聞こえてきた。

「戦力出し惜しみして万が一があったらコトだしね。安全第一ってことじゃないかな」

俺としては、一人でないといだけでも、ずいぶんと気楽である。

『うつさいわねっ！くれぐれも足ひっぱんじやないわよ、ボケナス！』

「ボケナスって……」

実際、あまり聞かない貶し文句に苦笑しつつ、レイを映すモニタに視線を移した。

「レイ？」

『……なに？』

こちらへ向けられた赤い双眸は、少しだけ強張って見えた。

「緊張してる？」

『いいえ、問題無いわ』

いつもながらそっけない答えだが、やはりどことなく緊張して見える。あるいは興奮しているのか。

「そう？あんまり無茶するなよ」

『私は大丈夫。それよりもシンジ君こそ、無茶はしないで』

「わかってるよ」

なんだか妙な会話になってる気がする……と思ってアスカを見ると、なにやら苦虫を噛みつぶしたような顔になっていた。自重しよう。

記憶によれば、今回の使徒はかなりやつかいであったはず。

コアを二つ持ち、二つに分裂する使徒。脅威の回復能力を持ち、コアをただ破壊してもすぐに復活する。倒す方法はただ一つ、二つのコアを寸分違わず同時に破壊する

という話を、まさか戦闘前に誰かに話すわけにはいかないだろうなあ。本来は誰も知っているはずのない話なのだから。

アニメ版では一度敗北し、N2爆雷によって足止めを行った後、その「倒す方法」を編み出した。

一度撤退するってのは別にいいんだが、足止めの手段は何かならないものか。さすがに半径数キロのクレーターができてしまうような爆弾をばこぼこ使って欲しくない。自然破壊もいいとこだし、人が住んでいないとも限らないのだから。

とはいえ、斬っても撃つても直ぐに回復してしまう相手を、どうやって足止めするか……そういうえば、N2爆雷を食らって、どうして数日間も動けなくなっただろう？

などとつらつらと考えてみるが、いい方法は思いつかない。知っていることが多くても、そこから判ることというのは意外に少ないものだ。

ま、なるようになるか。漫画と同じとも限らないしな。

あつさりと考えることを放棄した。

トンネルを抜けて、リニアトレインが停止した。

眼前に広がる大海原。当然ながらここは海岸である。だが、その光景は海水浴場のような賑々しいものではなく、自然の造形に彩られた静かな美景でもない。この辺はセカンドインパクト前までは結構大きい都市だったらしく、浅瀬のところどころから顔を出すビル

の残骸がなんとも寒々しい。

それでもいずれ、このヒトの痕跡も植物や水棲生物の住処となり、自然の一部となっていくんだろうか。唐突にそんなことを考えてしまふ。

3機のエヴァはトレインから降り、それぞれの得物を持って、海に向かってフォーメーションをとる。

初号機はパレットライフルを持ち、脛には新兵器「PSTンファ―」を固定してある。PSTンファ―は、以前から提案していた格闘戦用武装だ。見た目は少し細身のトンファ―だが、打撃部分から微量の陽電子スプレーを放出できる。これによって接触部分を対消滅・プラズマ化しながら目標を切断するのである。この陽電子スプレーは神経接続でコントロールできるので、普通のトンファ―としても使用できる。

式号機はソニック・グレイブを携えている。プログレッシブ・ナイフと同じ、高熱、高速振動で切断する刃を持つ薙刀である。これもつい先日実戦配備された。戦闘技術が高く敏捷性に優れた式号機とそのパイロットには、この大型の武器は鈍重すぎるように見えるが、アスカの豪快な気質にはぴったりの武器とも思える。

この二機より少し後方に控える零号機は、ポジトロン・ライフルを構えた。スケールサイズでもロケットランチャーほどのサイズがある。ヤシマ作戦で使われるはずだった戦自研の陽電子砲と原理は一緒だが、バッテリーパックで駆動する設計になっており、連射も利く。ATフィールドを破るほどの出力は期待できないが、エヴァの制式武装では最強の飛び道具といっている。

『アタシが先にいくわ。しっかり援護すんのよ』  
アスカからの通信。

「了解」

俺は、使徒上陸予想ポイントへの射線上から、式号機をはずすように距離を取る。

レイは俺と反対方向に動き、しっかりと射線を確保した。  
と、海面に不自然な漣が立った。

『来たわよ！』

ミサトさんの合図と同時に、式号機が走り出す。その向こうに、まるで水牛の角の置物のような使徒のフォルムが、海面から飛び出した。

初号機と零号機で使徒に十字砲火を浴びせる。どちらも空しくA  
Tフィールドに弾かれるが、動きを止めることには成功した。

その一瞬を突くように、式号機はビルの残骸を踏み台にして、跳  
び上がった。

同時に俺も、次の攻撃に備えて走り出す。

『おりゃあっ！』

ズバババババッ！

体長の二倍ほどの高さから振り下ろされたソニック・グレイブの  
刃に、使徒は成す術もなく、きれいに真つ二つに叩き斬られた。  
すごい。

式号機の華麗な動きに、一瞬だけ目を奪われた。速く、無駄がな  
い。機体のスペック差云々ではなく、パイロットがその動きを正確  
にイメージできるか、というところに差があるのだらうと思う。い  
くらエヴァ操縦者としての適性が高くとも、一朝一夕で身につくも  
のではないだろう。彼女がエリート、という話もなんとなく納得で  
きてしまう。

『ナイス、アスカっ！』

ミサトさんの嬉しそうな声。だが、まだ終わっていない。縦に並  
んでいた二つの光球が、斬られる寸前に刃を避けるように左右に動  
いたのが見えたのだ。俺は一度立ち止まり、身構える。

『どう？戦いは常に、無駄なく美しく、よ』

得意気に振り向こうとするアスカ。

「まだだっ！」

俺が叫ぶと同時に、使徒の断片がぴくり、と蠢く。その気配を察  
したのか、アスカも再び使徒に注意を向けた。俺は再び走り出す。

『何よこれっ！』

使徒の断片は、ずりりと脱皮するように変形し、左右それぞれ  
が分断前と同じ姿へと変貌した。二体になった使徒が式号機に飛び  
掛る。反応が遅れる式号機。

間に合うかっ？

「おらあっ！」

走るスピードを殺さず、跳び蹴りを放つ。近い方の一体を海に叩き落した。もう一体の攻撃は止められなかったが、式号機が何とか受け流すことに成功した。

「アスカっ、そっちは頼むぞっ！」

『アンタが指図すんじゃないわよっ！』

アスカの強がりには耳を貸さず、海に落ちた使徒を追いかけつつ、脛のホルダーからトンファーを外し、構える。そんな初号機に逆襲すべく、猛然と海から飛び出す使徒。

凄い迫力だ。

掴み掛かってくる長い腕を左のトンファーで弾き飛ばし、右の方は陽電子の放出を開始した。周囲の空気が反応し、発光する。それをそのままコアにぶつける。

バシユウツ！

派手な音とは裏腹に、ほとんど抵抗を感じることなく、使徒の胸をコアごと薙いだ。一瞬動きの止まる使徒を、すかさず二度、三度と切り刻む。しかし。

『ちよつと、どうなってるのよコレ！？』

すぐに切断面が接合してもとの姿に戻ってしまった。

『キリがないわよ、これじゃっ！』

力はそこそだが動きが遅いし、普通なら楽勝な相手だ。だが、いくら傷つけてもすぐに癒え、しかも疲れ知らずでは、こちらが一方的に疲弊していくばかりである。

『キヤアッ！』

「アスカ！？」

使徒を張り倒した向こうに、転倒した式号機が見えた。そして、少し離れているが、襲い掛からんとする使徒。俺は助けに駆けつけようとしたが、もう一体が行く手を阻む。

クソっ、面倒くさい！

「行かせてくれないなら……」



俺は目の前の使徒の長い腕を切り落とし、右のトンファアを捨てて貫手を放つ。右手がコアに突き刺さったのを確認して、左のトンファアも手放し、そのまま掴んで持ち上げた。

「……オマエが行ってこいっ！」

弐号機に渾身の一撃を放とうと腕を振り上げる使徒に向かって、彼の半身を思いっきり投げつけた。

「ごがしやあつ！」

二体の使徒は、ダンゴ状態になって倒れる。先ほど切り落とした腕は、恐ろしい勢いで主人のもとへ滑っていき、吸収される。直後、腕が瞬時に再生された。ほとんどダメージは見受けられない。だが、どう絡まったのか、二体ともうまく動けないようだ。

転倒していた弐号機はようやく立ち上がると、グレイブを振りかざす。

『弐号機、いったん離れなさい！零号機、援護して！』

ミサトさんの指示が飛ぶ。

『……くっ！』

アス力は憎々しげに呻き声を漏らし、その場から距離を取った。直後に光条が迸る。零号機のポジトロン・ライフルだ。ATフィールドは初号機と弐号機によって中和されている。放たれたビームは障害なく二体の使徒へと突き刺さり、直径五メートルほどの孔を穿った。だが、それも空しく、ずぶずぶと孔の周囲の肉が膨らみ、ゆっくりと孔をふさいだ。

ん？

陽電子ビームによって穿たれた孔の回復が、妙に遅い。さっきはいくら斬つてもすぐに戻ったのに。

『そういうこと……零号機、ガンガン撃つよ！目標に回復する時間を与えないように！初号機と弐号機は、そのままATフィールドの中和を続けて！』

何かに気がついたらしいミサトさんが指示を出した。……そうかなるほど。

間髪入れず、ライフルが幾度も火を噴いた。使徒の身体は回復も間に合わず、次々に穿たれ、削られて、だんだんとその体積を縮めてゆく。

二十発も叩き込んだらどうか。やがて、攻撃が止んだ。

『零号機、ポジترون・ライフル、バッテリー残量ゼロ』

レイが静かに状況を伝えた。もはや原型を留めていない使徒は、びくびくと不気味に蠢いているが、取り立てて大きな動きを見せない。

ポジترون・ライフルの効果が高かったのは、使徒の構成物質を大量に破壊・消滅させることができたからだろう。初号機と弐号機は、使徒の身体を切り落とした。ダメージは大きいように見えるが、実際に「破壊できた」部分はごくわずかだ。あの使徒はどうやら、一度本体から離れた破片でも、その物質組成が無事ならば体組織として再構成できるようだ。

だが、ポジترون・ライフルによって大量に破壊された体組織の再生には、時間がかかるらしい。あるものを再利用すればすぐに回復できるが、ないものを作り出すのは容易ではない。そういうことなのだろう。

『……死んだの？』

アスカの問い。それに答えたのは、ミサトさんだった。

『いいえ、まだ生きてるわ。ただ、しばらくは動けないはずよ。みんな、一度帰還しなさい』

『どうしてよ？今がチャンスじゃないの』

『そのまま攻撃しても状況は同じよ。今、技術部でソイツの弱点を分析しているわ。作戦を立て直すから、いったん戻りなさいって言うてるの』

アス力は悔しそうに歯噛みしたあと、

『……了解』

とだけ呟いた。

リッコさんの話では、使徒が回復して行動を再開するまでに、6日ほどかかる見込みらしい。奇しくも、漫画と同じだけの時間を稼げたわけだ。ただ、漫画では初号機、貳号機共に叩きのめされたために、修理に追われて相手が動き出すまでこちらも動けなかった。対してこちらは、エヴァ3機とも健在で、すぐにも出られる状態にある。これならば、あの使徒の攻略法　二つのコアを同時に破壊する　を編み出し次第、相手が動けないうちに止めを刺すことも可能だろう。

と、ここで俺は気がついた。

ああ、これで「ユニゾン特訓」の必要性がなくなってしまったんだ。

「ユニゾン特訓」とは、第七使徒を殲滅すべく、シンジとアス力を体内時計レベルまで一致させ完璧に同調させるのを目的とした特訓である。その内容は、エヴァの修理が終わるまでの6日間、シンジとアス力が一緒に生活し、二人で踊るダンスをマスターすること。まあ、特訓の有効性はともかくとしても、これがきっかけでシンジとアス力の仲が親密になったのは疑いない。

ここでも、この特訓を利用して、彼女の凝り固まった態度を少しでも解してあげたいと思っていたのだが……うーん。ちょっと迂闊だったかな。

「あれ？レイ」

控え室で物思いに耽っていたのだが、ふと顔を上げると、入り口のところにじつと佇んでいるレイに気がついた。

「どうしたの？そんなところに突っ立って」

「シンジ君、あの人のことを考えていたの？」

「あの人？……ああ、アスカか。……まあ、別にそれだけってわけでもないけどな」

そう言うと、レイはゆつくりと近寄ってきて、俺の隣に座った。

「式号機パイロットは、パイロットに向いていない」

「なんで、そう思うの？」

「冷静な判断ができなず、独断先行する……これでは、シンジ君や私の方も危ないわ」

少し俯いて、レイは言う。相変わらず抑揚のない声だが、こんな話し方をするときはときは大抵怒っているのだ。

「まあ、今回はそうだったけどね……彼女は少し焦ってるだけだよ」

「何に、焦ると言うの？」

「アスカは多分、ずっと一人だったんだ。ドイツでは、たった一人の適格者として持て囃されていたんだろう。もしかしたら、大人達が意図してそういう風に接していたのかもしれない。なのにここに来て、自分の立場を脅かす人間が二人もいるんだから、やっぱり焦るだろ」

「……よく、わからないわ」

人との触れ合いを求めることを覚え、明確な感情を意識し始めたばかりの少女にとって、立場への執着や嫉妬心といったものはピンとこないかもしれない。

「でもさ、レイにも覚えがあるんじゃないかな？……俺が、碇司令の息子が、現れたときに」

そこまで言うと、レイは気まずそうに沈黙した。正直言って、大した確信があったわけでもないが、どうやら図星であったらしい。

「でも……私にとっては、それだけが絆だったから。あの人は私と違って人とよく話すし、たくさんの方の絆を持っているように見える」

「アスカは、それが絆だと思ってないのかもしれない」

レイは少しだけ悲しそうな顔をした。

「それで、どうするの？」

「うーん、どうしようかな。俺としては一緒に戦ってほしいと思うけど、今の気持ちのままエヴァに乗り続けてたら、彼女はどんどん傷ついていく。……機会を見て、いろいろ話してみるさ。それで彼女がどういう選択をするか、それ次第だね」

「……そう」

そこまで話したところで、チルドレンを呼び出す館内放送がかかった。

「……さて、行くか」

俺が促すとレイも無言で立ち上がり、二人、発令所に向かった。

## 第十五話 ミッション・インポッシブル 後編

技術部による使徒の分析結果と、それを元にした作戦案がまとまったらしく、俺たちは発令所に集められた。

第七使徒との第一次会戦から、すでに日付が変わっている。俺は、三時間ほど仮眠をとったので割と元気であつたが、アスカは眠れなかったのか、目の下に隈を作り、どんよりとした雰囲気を漂わせ、持ち前の美貌がなんとも煤けて見える。レイはいつもと変わらない。この辺はさすがと言うべきか。

「あの使徒は二体で一体。お互いを補完しあつてるような関係らしいわ。片方がどんなに傷ついても、もう片方のコアさえ生きていれば復活できる。これを殲滅する方法は、二つのコアに対する同時加重攻撃だけ」

ミサトさんは、やはり徹夜で作戦をまとめていたのだろう、髪はボサボサで少し眠そうであつたが、アスカほどの疲れは感じられない。気力の充実度の差だろうか。

「幸い、使徒は活動不能で、こっちはほとんど無傷。今なら簡単に止めを刺すことができるわ」

予想通りの展開である。だが、問題はここからだった。

「で、止めを刺しに出撃してもらうわけだけど……式号機がフォワードよ。出撃したらすぐに目標に接近して、コアを同時に叩き潰してちょうだい。初号機は式号機の傍についてバックアップ。零号機は、不測の事態に備えて少し後方で待機。わかった？」

そこまで聞いたとき、俯いていたアスカの肩がびくり、と反応した。

「……いわよ」

「え、何？アスカ」

俯いたまま呟くアスカに、ミサトさんが問い直す。

「ふざけんじやないわよっ！」

「ちょ、ちよつとアス力、どうしたのよ」

「何がフワードよっ！？子供のお使いみたいな任務じゃない！テ  
キトーに戦果上げさせて、煽てとこうつてのがミエミエなのよっ！  
！」

突然激昂した部下に、うろたえる作戦部長。

「お使いなんかじゃないわ。私たちの使命は使徒の殲滅なんだから、  
これも立派な任務よ。それに、使徒が動けないってのも計算上の判  
断に過ぎないの。危険で気が抜けないことには変わりないのよ」

噛んで含めるように言い聞かせるミサトさんは、自身何かを抑え  
ているのか、わずかに声を震わせていた。

「……私がやります」

そこに割り込んだのは、レイだった。

「レイ？」

「ちよつとアンタ、何勝手な事言ってるのよっ！？」

思わぬ横やり食ってかかるアス力。

「あなた、やりたくないんでしょう？だから私が……」

「ぐっ、うっさいわねっ！アンタに代わって欲しくなんかないわよ  
っ！」

無視される形になったミサトさんの肩が、ぴくりと震えた。ミサ  
トさんも、大人とはいえあまり穏やかなタイプではない。

「おい、二人とも……」

と止めるのも間に合わず。

「……ええゝいつ！うるさいっ！いい？これは作戦なの。アナタた  
ちの我俣を聞いている場合じゃないのよっ！」

徹夜明けの作戦部長はついにキレた。

『さっきも言ったけど、近づく時は慎重にね』

ミサトさんの指示。

『わかってるわよ』

口調は軽いが、声は低い。未だ憤懣やるかたないといった感じだ。返事とは裏腹に、式号機は無造作に使徒に近づいてゆく。初号機はパレットライフルを抱えて少し後に続く。零号機はポジトロニライフルを構え、後方に佇んでいる。

やがて、式号機は手の届く距離まで近づいた。撤退した時の使徒は、肉が殆ど削げてしまい、コアが殆ど剥き出しの状態だったが、今は周囲に回復中の肉が結構な厚さで張っている。

『フン……』

それを見下ろす式号機。コアの距離と腕の長さを目測し、貫手を放とうと構える。その時。

コアに張りついていた肉が急激に形を変え、ガムかスライムのごとく、式号機の足にずりりと絡みついた。

『きゃあっ！』

足を引っ張られて転ぶ式号機。俺はとっさに、その伸びた肉めがけてパレットライフルを撃ちこんだ。使徒の肉は命中した部分でちぎれ、残った部分は式号機の足首から離れて使徒のコアに吸収される。

そして……見上げると、それまでの動きが嘘のように、みるみる回復してゆく使徒がいた。

事態は、最悪の方向に転がりだしたのだ。

『ちょっとリツコっ！あと5日は動かないんじゃないのっ！？』  
発令所でミサトさんが喚いてるのが聞こえる。

「責任追及は後でやってくださいっ！」

と吐き捨てておいて、俺はトンファアを構えた。

『ミサト！どーすんのよ！？』

立ち上がりながら、アス力が叫ぶ。



『……もう一度、前と同じ方法で足止めして』

二体の使徒は、零号機に狙われているのを見るや否や、互いに距離をとるように動き、一斉に飛びかかってきた。

「つくそっ！」

使徒の攻撃を受け流し、二度、三度と斬りつけるが、相変わらず異様な回復力を見せつける使徒。零号機からの援護射撃は、なかなか飛んでこなかった。

『どうしたの、レイ！』

焦るミサトさん。だが、零号機は撃てない。

『……味方に当たります』

使徒が初号機と式号機を挟みこむようにプレッシャーをかけてくるために、敵味方入り混じっての混戦となっているのだ。この状態で遠距離からの射撃は危険すぎる。

「こいつらも、学習してるって、ことかつ！」

『使徒のクセに、ナマイキなのよっ！』

徐々に防戦一方となる。特に式号機は、プログレッシブ・ナイフ一本で応戦しているのだから大変だ。

『ええいつ！この！この！このーっ！』

式号機は、振り下ろされる使徒の長い腕をかわし、ナイフでコアをメッタ刺しする。しかし、それも徒勞である。俺は俺で、幾度となく使徒を叩き、斬りつけているが、やはり致命傷を与える事はできずにいた。今の俺たちでは、五体満足の使徒を仕留めるのは極めて難しい。かといって、そう易々と逃がしてくれることはなさそうだ。

『シンジ君、アスカ、その使徒は、コアを同時に叩かないと倒せないわ』

ミサトさんからの通信。何も今更、こんな殴り合いの真っ最中に言うことでもないだろうが。

『その話なら聞いたわよっ！』

イラついたように言葉を叩きつけるアスカ。ナイフで相手の攻撃

を裁きながら応対するのだから、それでも誉められるべきだろう。

『だから、初号機と貳号機が動きを同調させて攻撃して！』

『んなこと簡単にできるなら、始めっからやってるわよっ！』

アスカの言葉に、普段の猫かぶりを感じられない。そんな余裕はないのだろう。

『ハア、ハア、ハア』

アスカの荒い息遣いが聞こえてくる。俺もしんどい。なにか、手はないか……

『ハア、ハア……シンジ、アンタ、そっちの使徒の動きを止められる？10秒でいいわ』

10秒？何か考えがあるのか……

「わかった。やってみるよ」

『え……』

俺は余裕もなかったたのでそれ以上言葉を交わさず、使徒の攻撃を裁きながら隙を伺う。使徒は長い両腕を、泣いた子供のようにくるくると振り回してきた。ただその速度は異様に速い。人間の子供サイズと同じくらいの回転数なのだから、その数十倍の回転半径を持つ腕の先端速度と、そこから得られる衝撃はかなりのものだろう。

トンファーで、左右から連続で振り下ろされる腕を弾く、弾く、弾く。

「っだあ、鬱陶しいっ！」

一瞬の隙を突き、トンファーの陽電子を放出させて使徒の左腕を根元からぶった切った。

「もらったっ！」

そのまま懐に潜りこむ。しかし。

「うぐっ！？」

使徒の残った右手で、左のトンファーを叩き落された。

そのまま、初号機の首を掴んで、締める。すぐに復活した左手も添えて初号機を持ち上げた。ネック・ハンギング・ツリーというや

つだ。

首を締められる圧迫感が俺にフィードバックする。なぜか息も詰まった。

「ぐ、ぐ、ぐ……」

朦朧とする俺の視界の隅に、黄色い影がよぎる。刹那、首への圧迫感が弱まった。

「レイっ！」

いつの間にか接近していた零号機が、使徒の左腕をナイフで切りつけたのだ。しかし、すぐに復活する左腕に、逆に零号機が薙ぎ払われる。

『きゃあっ！』

「レイ！？ちくしょうっ！」

俺は、今だ初号機の首を掴んでいた右腕を掴み返し、そのまま使徒の後ろへと回った。

さらに、後ろから使徒の左腕を掴み、羽交い締めにする。

「アスカッ！止めたぞ！」

見ると、式号機も相手を掴み、動きを止めていた。

『合図するまで、止めてなさいよお……』

言い放つと、式号機はなんと……使徒を持ち上げていた。そして

『今よ！離れて！』

言うが早いか、使徒をブン投げた。

俺は慌てて横っ跳びで逃げる。

があああん！

激突する2体の使徒。そのまま折り重なるように倒れる。

そう。アスカは、先の戦いで俺がやったのと同じ事を、やってのけたのだ。

いや、それだけでは終わらなかった。

『おおりゃああああああっ！』

周囲の空気が、ごう、と唸りを上げる程の突進。そして、アスカは一息にナイフを突き出した。

どしゅうつうつっ！

……呆れることに。

式号機は、ナイフとその腕で、手前の使徒のコアを貫通し、後ろのコアまで刃を刺し込ませていた。

そのまま力なく崩れ落ちる使徒。

だが、砕けかけたコアの亀裂から光が一瞬漏れるのを、俺は見逃さなかった。

「自爆するぞっ！フィールド全開っ！」

あたりは白い光に包まれ、ついで煙が視界をふさいだ。

煙が晴れる。後には、直径500メートルほどのクレーターと、三体のエヴァだけが残った。

『……作戦終了よ。お疲れ様』

ミサトさんの安堵したような、それでいてどこか悔しそうな声が、LCLを震わせた。

「ふう、やれやれ。今回は大変だったねー」

シャワーを浴び終わった俺は食堂に行くと、レイとアスカがいた。二人は微妙に離れた席で、黙々と食事を取っていた。俺はその光景に嘆息しつつも、二人の丁度中間あたりの席に腰を下ろす。何か話そうかとも思ったが、取りたてて話す事も思い浮かばず、俺も黙ってうどんを啜り始めた。

少しすると、アスカが話しかけてきた。

「……ねえ、シンジ。どうして、アタシの言うことに何も言わず従ったの？」

「へ？」

俺は質問の意図を測りかねた。

「最後、使徒の動きを止めろ、って言ったときのことよ」

「……あーっと、別に、俺に策があったわけじゃないし……かといつて、アスカの考えをじっくり聞く時間もなかったしな」

「なんで、そんなにすんなりと信用したの？」

「信用、なんて……そんなに仰々しい話でもないんじゃない？それに、俺としてはアスカが俺を信用してくれた方が嬉しいけどな」

「アタシが？」

「違うの？ 俺なら何とかすると思って、指示を出してきたもんだと思っただけだ」

何やら考え込んでしまうアスカ。その様子を見て、俺は苦笑しつつ言った。

「アスカは、人に頼ったり頼られたりってことに慣れてないんだな」とすると、アスカは驚いたような顔を俺に向けた。

「アタシは……アタシは人に頼ったりしない……」

「そういうワケにもいかないだろ。たった三人で、あんな化物と戦わなきゃならないんだからさ」

「でもっ！……」

「アスカ」

俺はアスカの目を見据えた。

「アスカは、独りで戦えるって、本気で思ってる？」

「アタシが、弱いつて言うの？」

「いくらエヴァの操縦技術が高かったって、一人じゃエヴァは動かせないよ。前にも言っただろ？」

「屁理屈よ、そんなの！」

「事実さ。そして、自分が誰に、何に頼ってるか……そいつを意識

してなきゃ、自分が誰かの操り人形になっても、気づけない」

人形、という言葉に、ぴくりと反応するアスカ。アニメでは、アスカの幼少期のトラウマに関わるキーワードだ。

「……アタシが、人形だっていうの？」

「さあな。でも、エヴァのパイロットなんて所詮捨て駒さ。そうでなきゃ、俺たちみたいなガキに人類の存亡を任せるわけがない」

「何言ってるのよ！エヴァのパイロットは、選りすぐられたエリートなのよ！」

「そんな風に思いこまされてるアスカ、命令に従ってエヴァに乗ること以外に価値観を持たなかったレイ、そして、三歳のころから、ここに来るまでひたすら孤独を味わわされた俺……まともじゃないよ、どう考えたって」

沈黙が辺りを支配する。見ると、レイも箸を休めてこちらをみている。少し顔が青い。

しばしあつて、アスカが口を開いた。

「じゃあ、なんでアンタは、そこまで判っててエヴァに乗ってるのよ」

「とりあえず今は、自分の居場所を守るため、だな」

「それも利用されてるかもしれないじゃない」

「そうかもな。というか、十中八九そうだろう。だから、そのデメリットが大きくなったら、逃げるさ」

それを聞き、アスカは半秒ほど呆けたような顔を見ると、はあ、とため息を吐いた。

「……アンタと話していると、なんだか全てがどうでもいいって気になってくるわ」

「そりゃいいことだ。それくらい気を抜いてた方が楽でいいぞ」

「はいはい、わかったわよ」

右手を俺に向かってひらひらと振りながら、アスカは去っていった。

「シンジ君」

替わって話しかけてきたのはレイだ。いつもと同じ表情だが、少しだけ視線が厳しい。

「今の話……」

「ん、ああ。レイはもしかしたら嫌な気分になったかも知れないな。ごめん」

謝罪する俺に、しかしレイはかぶりを振った。

「シンジ君が悪いわけじゃない。あなたの言うとおりだと思う。私も利用されている……でも、その頸木から外れたら、私はきつと、どうしたらいいかわからない」

こころもち、縋るような視線を俺に向けるレイ。

「それは俺に聞くことじゃないだろ、レイ」

「え……」

それが、以前レイに感じた違和感の正体なのだと、俺は突然悟った。俺にくつついて、俺の視点、俺の価値観だけでモノを考えさせていれば、レイにとってはゲンドウが俺に替わるだけだ。

「わからなくても、自分で考えるんだよ。レイにとって何が大切な、自分が何者になりたいのか……司令も、俺も、関係なくね」

レイはしばし考えた後、無言のまま、席を立った。

やれやれ。

あまり説教じみたことは、慣れないので疲れる。とはいえ、本編のシンジとアスカは、お互いに本音を語らなかったからこそ、どんどん拗れていったんだろうし、喋らないよりはいいのかもしれない。

不意に、元の世界の『俺』を思い出す。向こうで、『俺』がこれだけ喋っていれば、どんな風になってたんだろうか。

そんなことを考えながら、俺はうどんをすすった。

うどんは延びきっていて、不味かった。

## 第十六話 リフォーム 前編

中学校からそれほど遠くない、繁華街にあるゲームセンター。俺、トウジ、ケンスケの3人が揃って遊んでいた。学校帰りのため、俺とケンスケは制服、トウジはいつもの黒ジャージだ。

それは、極ごく日常的な風景。だが、ネルフでの訓練が続いた後は、こんな風景でも現実感が酷く希薄なものに感じられる。果たして、これが正常なのか、生死を常に意識しているネルフでの訓練生活の方が正常なのか、時々判らなくなるのだ。

こんな環境で小さい頃から育てば、おかしくもなるよな……俺はそんな事を考え、「こんな環境で育った」二人の少女に思いを馳せる。

「何やシンジ、元気ないのう」

ケンスケがシューティングゲームに興じている傍らで物思いに耽っている、トウジがニヤニヤしながら話し掛けてきた。

「惣流に冷たくされて、落ち込んでるんじゃないか？」

などと、画面に目を向けたままケンスケが茶化すので、俺は大げさに鼻で笑った。

「は、何言ってんだよ。トウジじゃあるまいし」

「そりゃどういう意味じゃ！」

「そのまんまの意味だよ」

怒るトウジに笑う俺。

実際のところ、ケンスケが言うほどアスカに冷たくされてる訳じゃない。ただ、以前のように不自然にベタベタしてくることがなくなっただけだ。そして、俺以外に対する態度にも変化が見られる。

「ワシは、あないな乱暴な女は好かん」

猫かぶりは相変わらずだが、洞木さんやトウジ、ケンスケといったあたりに対しては、だんだんといつもの姿を見せるようになってきた。いつもの、と言っても、ネルフでのような追い詰められた感



じでもない。言ってみれば、どこにでもいるタカビー女、といったところだ。

「よつく言うよ。『オマエ、あの転校生とどないな関係なんや?』とか言つて凄んでたくせにさ」

「やかましいっ! あのとときのワシはどうかしてたんじゃ。あないな性格ブス、もう知らんわ!」

ただ、トウジにだけは普通よりも辛くあたる。それが、今のトウジのアスカ評に繋がっているのだが……理由あつての態度だとは、彼は気づかない。

「うっ」

不意に殺気を感じ、俺は身構えた。

「どあゝれゝがゝ性格ブスですつてえゝ?」

そこには金髪の鬼がいた。

「なっ! そそそそ惣流! ?」

「いゝい度胸してんじやない、このジャージ男お」

「い、いや、今は、その、は、話せばわかるっ!」

「問答無用っ!」

足下には、スタボロのジャージ姿の少年が横たわっている。

俺まで数発被弾してるのはなぜだろう?

「アンタも笑つて聞いてたんだから同罪よ」

「さいですか……」

レイと洞木さんもやってきた。3人で買い物の帰り、俺たちを見かけたのだという。洞木さんは、地に伏すトウジを見つけて目を剥いた。

「ちょ、ちよつとアスカ、何やってるの! ?」

誰がやったか確かめず、いきなりアスカに食つて掛かるあたり、洞木さんも人をよく見てる。

そんな洞木さんを見て、アスカは楽しそうに言った。

「なによヒカリ、そんなにこのバカが心配なら、ついててあげたら

「？」

「え……でも」

「いーのいーの。アタシたちは、シンジと帰るから」  
さらっと無視される俺の意志。

「ホラ、シンジ、ファースト、行くわよ！」

そう言っ、くるりと踵を返した。

うーん、アスカらしいと言っか、なんと言っか。

「え、えと、その……あ、ほら、鈴原、しっかりして」

トウジに肩を貸して立たせる洞木さんを見届け、俺はアスカとレイを追いかけた。

ん？何か忘れてるような……まあいいか。

「まあったく、ヒカリもじれったいのよね」

先頭を歩くアスカは、前を向いたまま、誰にともなくしゃべった。

「せっかく、このアタシがワザワザ嫌な女演じてやってるのにさ」

そう。アスカがトウジに辛くあたっているのは、トウジに想いを寄せる洞木さんのためなのだった。もっとも

「演じてやったって……素を見せただけじゃねーの？」

「何か言っただあ？」

「……いや、別に」

彼女がこうやって、無理せず素の自分を見せるようになったのは、そこに俺がいたからではないだろう。おそらく洞木さんが原因ではないかと思う。

いつもニコニコしながら、裏でみんなを一段見下していたアスカ

だったが、クラス委員という立場からいろいろ世話を焼いてくれる洞木さんには始めから一目置いていた。あの真面目な少女は、考えてみれば不思議なキャラクターである。ペアルックを見ただけで「フケツ」とか言うような、よく言えば純粹、悪く言えば潔癖な少女であるが、一方でやたらと世話焼きだったり、意外なリーダーシップを発揮したりする。

アスカにとつては、こういうある種の母性的な部分に、何か引かかるものがあつたのだろうか。

洞木さんの方は、始めこそトウジのこともあつて、あまり友好的な態度ではなかった（男子のこういう態度については、だいたい女子の方が感づきやすいものらしい）が、ある時期を境に急に親しくなつた。そういえば、アスカがトウジにやたら乱暴に振舞うようになったのも、同じ頃だ。何か女同士で手打ちがあつたのかもしれない。

「ちょっとシンジ、何ニヤニヤしてんのよ」

アスカが訝しげな顔で俺を見ている。

「あ、いや、何でもない」

「気持ち悪いやつねえ」

「……まあ、それは置いといて、トウジももうアスカにどうこうって気持ちはないだろうし、もうちょっと手加減してあげたら？」

「うーん……なんか、アイツの変な日本語で悪口言われると、殴らずにいられない、っていうか……」

「おいおい」

「他傷行為……」

「は？」

ぼそり、とつぶやいたレイに、二人とも振り向く。

「自閉症、精神分裂症などの症状のひとつ……他傷行為を抑えられなくなるのが頻発する……」式号機パイロット、あなた、精神科に行ってみたほうがいいわ」

アスカの形のいい眉が、ひくひくと震える。

「ファースト……アンタ、ケンカ売ってるの？」

「ちょ、ストップストップ！」

慌てて止めに入った。言っていることは酷いが、レイに悪意はない。純粹に心配しているのだ……と、思う。

「相変わらず仲悪いんだな……あ、でも、今日は珍しく一緒に買い物してたんじゃない」

「ヒカリがどうしても言って言うからよっ！」

「はあ……そうスカ」

「ンなことよりっ！」

アスカは、左手を腰に当てて、右手でびしっ、と俺を指差してきた。

「な、何だよ」

「今日もアンタんち行くわよ！」

「またかよ……」

アスカは、ときどき俺の家に遊びにくる。それだけなら別に構わないが、夕飯をたかって、稀に泊まっていくことすらある。いくら中学生とはいえ、男の一人暮らしの部屋にほいほいと泊まるか？な  
どと思うが、理由を聞くと納得してしまうのだ。

「あんなところに寝てたら、体にカビ生えちゃうわよっ！」

アスカは、結局ミサトさんの家に住むことになったのだ。ミサトさんが強引に引き取ったと聞いた。そして、相変わらず散らかし癖は直らないらしい。

「今日もミサトは徹夜らしいしね。あんな部屋に一人でいるなんてゴメンだわ」

「アスカも少しは掃除くらいしてあげればいいのに」

「嫌よ、めんどくさい」

ミサトさんが帰れない日は大抵、アスカは俺や洞木さんの家に泊まりこむ。中学生にしては問題のある行為だと思うが、その理由を誰よりも痛感しているのは、他ならぬ保護者本人なので、何も言わ

れることがないのだった。そもそもネルフの作戦部長に、子供の面倒を見る余裕なんてあるわけがないのだ。

寂しいからって、ペットみたいに人を預かるのはやめてくださいよ。面倒見ることもできないクセに

何度ミサトさんにそう言おうと思ったことが。当事者じゃないから、あんまりキツイことも言えないけど。

ふと、後ろから妙な視線を感じて振り返る。深紅の瞳が、俺とアス力を等分に見つめていた。レイも誘おうかと声をかけようとして、ひとつ妙案を思いついた。

「なあ、アス力、たまには趣向を変えない？」

怪訝そうな表情になって立ち止まるアス力。俺はアス力を見て、次いでレイを見た。

「レイの家、行ってみないか？」

第三新東京市の中心部から少し離れた一角に、「再開発指定地区」と呼ばれるエリアがある。古くは団地の建ち並ぶ住宅地だったらしいが、市中心部の要塞都市機構に組み入れるために「再開発」を始められ、住民は全て立退かされた。だが、本格的に新都市の建築が始まったところで、使徒の襲来によってそれどころではなくなり、放棄された。そんな街に、レイの住まいがある。

古くなったマンションと、建築途中で放棄された建物のなり損ないが建ち並ぶ。さび付いた重機と、遠くに聞こえる工事の音が、うら寂しさをより強く演出している。人の気配はない。

「ファースト、アンタ、寂しいところに住んでるのね」

道を歩きながら、アス力が漏らす。俺も初めて来たが、漫画やアニメである程度知っていたので、さほど驚くことはなかった。そう言えば、漫画のシンジは、もっと早い時期にレイの家に行ってたんだよな。確かそのとき、シンジが勝手にレイの部屋に入って、風呂

から裸で出てきたレイに驚いて、二人して転んで、レイの胸に手をついて……

「ちよっとシンジい、また何かニヤニヤしてるわよ。ホント大丈夫？」

「あ、え……」

「……妄想癖？シンジ君も、精神科へ……」

「れ、レイ、違うよ」

「何でもいいわよ。いつまでもこんなホコリっぽいところに突っ立ってたくないわ。ファースト、さっさと案内しなさいよ」

「……こっちょ」

そう言っつて、さっさと行ってしまう少女二人。俺も慌てて追いかけた。

「何よ、これ……」

絶句するアスカ。無理もない。知っていた俺も、実際に見て言葉を失った。

打ちつぱなしで十分に表面処理されず、ザラついたコンクリート壁。フローリングもカーペットもないコンクリート剥き出しの床には、所々ベトベトしたものがこびりついている。置いてあるものは、簡素なパイプベッドと小さなタンス、2ドアの冷蔵庫。そして、血まみれの包帯が詰め込まれた、ダンボール箱。レイの生活空間にあるものは、それだけだった。

しばし呆然としたアスカは、我に返ると、レイに食ってかかった。「アンタ、何でこんなとこに住めるのよ？」

レイはきょとんとした顔で、答える。

「別に、問題ないわ」

「問題あるわよっ！アンタ寂しくないの？大体誰よ！こんなとこに住まわせたのは！」

「……碇司令」

その名を聞いて、アスカは、はっ、と目を見開いた。次いで、怒りの表情へと変わっていった。レイの両肩を、ぐっと掴む。

「ファースト、アンタ、今すぐここから引っ越すのよ。ミサトに言えば、きつと引き取ってくれるわよ。アタシと住むのが嫌なら、シンジのアパートにも空き部屋あったわよね？とにかく……」

「別に、引っ越す必要はないわ」

「アンタバカア？こんなとこ住んでるから、そんなに無愛想なのよアンタはっ！こんな、こんな寂しいところに住んでちゃだめよ！絶対！」

徐々に語気を荒げるアスカ。様子がおかしい。

「おい、アスカ、どうしたんだよ」

「うっさい！シンジは黙ってて！」

俺を押しのけ、必死の形相で説得するアスカに、しかしレイはかぶりを振った。

「私は、ここにいる」

「何でよっ！？」

「……司令が、選んでくれた場所だから」

「ちよっ……アンタ、ホントにバカね！こんなボロボロの部屋あてがわれて、恩感じてるんじゃないわよっ！」

それを聞いて、レイの目にも怒りがこもる。

「あー、ちよっと待てっの！二人とも」

俺は慌てて、二人の間に入った。そしてレイに話し掛ける。

「レイ、ひとつ聞くけどさ、ここにいたいっていうのは、命令だから？」

その言葉に、レイは少しだけ訝しげな顔をしつつも、

「いいえ。そんな命令は受けてない。引っ越す必要があれば言えと言っていた」

「そんならっ！」

尚も喚こうとするアスカを手で制し、俺は言った。

「んじゃ、ここに残りたい、つてのはレイの意思なんだね？」

「！……そう、そうかもしれない」

俺の言わんとすることに、レイも気づいたようだ。

「だとさ。それならそれでいいんじゃないか？アス力」

「わかんないわよ！」

「いくら寂しくても、レイにとっては大切な場所なんだろう。生活が変わるのもいろいろ面倒だし、引越すなんて無理にさせるんじゃないよ」

「……でも」

「ん？」

レイは立ち上がって、灰色の壁に歩み寄り、手を添える。

「最近、この壁が冷たいって、思うの」

そう言って、本当に冷たいものに触れるような顔をした。

「ホラ見なさい！だから引越しなさいって言ってるのよ！」

「いや……そういうことなら、引越すよりもいい方法があるよ」

「はあ？」

アス力は、もう何がなんだか判らない、といった顔で俺を見る。

「とりあえず、と……」

俺はカバンからノート型端末を取り出し、ウェブブラウザを起動させた。そのウィンドウには、検索サイトの煌びやかなページが踊っている。

「……何をするの？」

「んー？ちよつと待ってな」

画面を覗き込んでくる二人の少女を尻目に、検索ワード欄に文字を入力する。

『第三新東京 工務店 リフォーム』



「へえ」。壁紙っているんな柄があるのねえ」

検索サイトで、近くにある工務店を探し、そこに三人で出向いた。俺は、どうせなら今の部屋に壁紙やカーペットをひいて、きれいな部屋にしよう、と提案したのである。部屋を選ぶより簡単だし、自分好みで自由に決められるのがいい。金にかかるだろうけど、幸い、エヴァパイロットとしての給料のおかげで、結構な貯金もある。ちなみに、アスカは俺の給料の額を聞いて、ミサトさんと副司令に掛け合って強引に同額の給料を認めさせた。レイについては俺がアスカと俺に認めてレイには認めないのか、と、これも強引に副司令にねじ込んだ。ゲンドウがすんなり認めたのが、意外といえば意外だったが……。

「ええ、ええ。このご予算でしたら、かなり上質なものをご用意できますよ。なんでしたら、お客様がデザインされたものを特注で作りますこともできます」

中学生ばかりという客に、店員は始め怪しむような視線を向けてきたが、ネルフのＩＤを見せた途端、VIP待遇に変わった。この街でのネルフの権威は、計り知れないものがある。

「ええつとぉ。あ、これなんか可愛くていいわぁ」

レイそっちのけで、アスカはカタログをとつかえひつかえ物色している。

「あ、こっちもいいわね。ミサトに言って変えさせようかしら」

はしゃぐアスカを尻目に、俺はレイと一緒に壁紙のカタログを眺めている。

「どう、レイ。気に入ったのはあった？」

「これ」

「ん？」

レイが指したのは、ほんのりピンク掛かったクリーム色の、無地の壁紙だった。飾り気のない。でも、この色に囲まれたらきっと暖かな気分で安らげるだろう、そんな色だった。

「お目が高いですねお客様。それは環境ホルモンを出さない特殊な

加工をしておりますて、また汚れにも強く……」

営業の長い宣伝文句に耳も貸さず、レイはその色に見入っている。

「他のも見てみる？」

「うっん、これがいい」

「そう。じゃ、これにします。次はカーペットの方選びたいんですけど」

「あ、はい。畏まりました」

壁紙とカーペットの銘柄を決めた後、工務店の作業員を連れてレイの部屋へ戻った。

作業員は、部屋を見て目を丸くし、次いでレイに同情の視線を向けた。そして、部屋の寸法を一通りの測り終わると、

「工事は明後日になるよ。最高の仕上がりにしてみせるからな、期待してくれよ」

男臭い笑みを見せて、帰っていった。

「今日は、いろいろありがとう……」

三人で簡単な食事をとったあと、俺とアス力は一先ず帰ることにした。

「いいって。それより、工事が終わったらまた来るからさ」

「うん」

「壁紙もいいけどねえ、アンタ少しモノを買いなさいよ。不便じゃなきゃいいってもんじゃないでしょうが」

アス力がごちる。

「……よく、わからない」

「まあまあ。そういうのは本人が必要だと思わなきゃ、邪魔なだけだろ？」

「そうだけど」

「そんじゃ、今度みんなで買い物にでも行こうか」

「なんか奢りなさいよ」

「……なんでそうなるんだよ」

「アンタバカア？女の子誘うんだから当たり前でしょ」

「ああもう、わかったわかった」

話を打ち切り、レイに向き直る。

「ま、そーゆーことだから。また明日」

「それじゃ……」

「……ねえシンジ、アンタさ、司令が嫌いなんじゃなかったの？」

帰り道、アス力はそんなことを言い出した。

「ん、まあ、そうだな。話したっけ？」

「アンタの普段の様子見てれば判るわよ……それじゃどうして、アイツがあそこにいたって言ったとき、何も言わなかったの？」

アス力はあの時、あんなところにレイが押し込められているのは、司令のネグレクトの類かと疑ったようだ。まあ、普通はそう思うだろう。だから、司令に隔意を抱く俺が、あの状況をあっさり認めたことが、アス力には不思議だったらしい。

「うーん……何となくね。レイを急にあの場所から引き離すのは、よくないように思えたんだ」

「なんでよ？」

説明が難しい。なんとなく、で動いちゃったからなあ。

「何ていうかさ、レイって、すぐ過去が希薄な感じがしない？」

「……あんまり漠然とした日本語使われても、わかんないわよ」

「うーん。そうだなあ、端的に言えば、思い出が少ない、ってことかな」

平易な言葉いいなおすと、アス力は少し考え込んで、言った。

「思い出が少ない……判る気がするわ。それじゃアンタ、その少な

い思い出を大切にさせてやろう、みたいな理由だったワケ？」

「んー……まあ、そういうことになるのかなあ」

俺自身よく判っていないので、返事も曖昧になる。

「はあ……アンタねえ」

嘆息しつつ、アスカは俺を睨んだ。

「前々から思ってたけど、人の事を子供扱いすんのやめなさいよね。ム力つくのよ、そういうの」

「えっ、そう、かな」

彼女の言葉に、ドキリとする俺。

「自覚がないのが一番タチ悪いわ」

「……ごめん」

謝った。

「あの天然ボケはともかく、この天才美少女アスカ様に対して、失礼もいいとこだわ」

その言い草に、俺は思わず噴出してしまう。

「な」に笑ってんのよ、反省してないわねっ！」

謝ってはみたものの、やっぱり子供にしか見えないよなあ。

そのままわいわいと騒ぎながら歩いていたが、ふっ、とアスカが神妙な顔をして黙った。

「どうしたの？」

「……ファースト、あの子、あのままなのかしら」

「ずいぶん、レイのこと気に掛けるじゃない？」

「なっ、アタシは、別に……」

慌てて否定しようとするが、それを途中で止めてしまった。

「どうしたの？」

「……あのね、あの子の部屋、……ママの部屋に似てた気がしたのよ」

「ママの部屋？」

それは、もしかして。

だが、アスカは頭を振って、

「……ゴメン、今の、忘れて」  
話を打ち切った。

「あ、ああ……」

しかし、彼女の顔から憂いは消えない。その脳裏に浮かぶものと、レイを重ねて見ているのだろう、というのは想像できた。だから、俺は努めて微笑みながら、言う。

「大丈夫だよ、レイは」

楽観的な俺の言葉を聞き、アスカは不思議そうな顔をした。

「洞木さんや、ケンスケや、トウジや……アスカが、いるから。エヴァより大切なものを、みんなという時間の中で、見つけられる。そんな気がするんだ」

アスカもね。心の中で、付け足す。

「そうかもね……そうだと、いいわね」

それが聞こえたのか聞こえなかったのか、アスカが呟く。

「そんな時間を、アタシたちは、守らなくちゃならないのよね」  
呟きはただ、夜空に吸い込まれていった。

## 第十七話 リフォーム 後編

アス力をミサトさんの部屋まで送った後、俺は一人で自宅に戻った。時計を見ると、もう二十三時を回っていた。ひとつため息をついて、朝淹れたコーヒーの余りをコンロにかける。カップ一杯分とちよつとのコーヒーはすぐに温まり、香りをほのかに放出しはじめた。その香りに刺激され、眠気にボヤけた俺の頭は、ほんの少しだけクリアになる。

今夜はミサトさんは帰らないらしい。そんな日は決まって、アス力は洞木さんの家か俺の部屋に泊まりに来ようとする。俺の意思などお構いなしに、だ。だが、今日は素直に部屋まで送られた。一人で考えたいことがあるから、と言っていた。

誤解して欲しくないが、彼女が俺の部屋に泊まると言っても、やましいことは何一つない。信じてもらえないかも知れない。俺が第三者だったら信じないだろう。が、実際、夕飯を振舞って、少し世間話をして、ゴロゴロしながらTVを見て、アス力がソファで寝入るのを確認すると、毛布をかけてやって、俺は寝室に引っ込んで眠る。それがいつものパターンだった。

それはともかくとして、今日、彼女が素直に自室に戻ったのが少し不思議だった。レイの部屋を見たのが、原因だろうか？

アス力が俺の部屋を訪れる度、それをアス力は、声高に宣言していた。レイの前では特にそうだ。彼女が、俺に対する恋愛感情の類は欠片も抱いているとは思っていない。彼女は未だ加持さんに淡い恋心を抱いているようだし、俺のことは口うるさい生意気な同僚、くらいにしか思っていないはずだ。となれば、ことさら俺の部屋に来たがる理由は、レイへの嫌がらせに他ならないだろう、そう思った。事実、アス力がそう告げると、レイは決まって悲しそうな顔をしていた。

そんな風にレイを嫌うアスカに、何かしらの変化があれば、と淡い期待を抱きつつ、レイの部屋に連れて行ったわけだが、その効果はあったのだろうか？ ファーストチルドレン、ネルフ幹部の覚えめでたい零号機パイロット、命令なら何でも聞く人形女、そういう記号での認識が、少しでも変わってくれば、とも思う。そういう無理解から生じるレッテルはアスカにとっても気分のいいものではないだろう。何しろレッテルを貼るのも彼女自身だ。レイに対する評価と見せかけて、その実は彼女の劣等感の投影に過ぎない。そんなものとは関係ない綾波レイという人物を素直に見られれば、無駄に劣等感を刺激しなくても済むはずだ。

コンロの上のコーヒースーバが、シュワシュワと微かな音を立て始めた。まだ少しぬるいが、俺は火を止め、カップにコーヒを注ぐ。砂糖とミルクを入れようと手を伸ばしたが、なんとなくその手を引っ込めた。

「……俺のやってることも、突き詰めれば同じか」

一人ごちながらコーヒをすする。一日置いたモ力は、酷く酸っぱかった。

翌日の学校。レイはネルフでの実験のため欠席していた。

空席に目を向けつつ、アスカが話し掛けてきた。

「ファースト、今日休みなんだ」

「ん、ああ、聞いてない？今日は……」

欠席に理由をアスカに教えようとすると、彼女はそれを遮った。

「知ってるわよ。実験でしょ。……でもさ、アタシたちは呼ばないで、アイツだけ、ってのはどういふつもりかしら」

その様子を見て、俺は少し可笑しくなった。妬みとか懷疑以外のものが感じられたからだ。

「さあねえ。俺もいちいち上の意向を伺ってる訳じゃないし、基本的には下りてきた命令に従っただけだからなあ」

「何よそれ。くたびれたサラリーマンみたいなこと言って。アンタ心配じゃないの？」

「今までだって何度かあったろ？今更心配したってしょうがないじゃないか」

「……もついいわよ。フン」

それだけ言うと、アスカは席を立った。

レイだけが対象となる実験、となれば、アニメの内容から推測すれば、エヴァのオートパイロットシステムであるダミーシステムの開発か、さもなければゲンドウの計画の根幹に関わるような実験だろう。あるいは、単に身体の「メンテナンス」かもしれないが。正直なところ、どんなことをされているか考えると心が重くなってくる。だからといって、今の俺にはどうすることもできない。拒否するようレイに言ったところで無駄だろう。むしろ危険かもしれない。策を考えるのだけど……思いつかない。少しイラつくのを抑えていた。

さらに翌日。

レイは登校してきたが、午前の授業が終わると、部屋のリフォーム工事の立会いのために早退した。

「アスカ」

「なによ？」

「今日、レイの部屋、見に行くだろ？」

「ん、うん…そうねえ」

歯切れが悪い。いろいろ考えたせいで、顔を合わせづらいのかもしれない。そう訊いても、本人は否定するだろうけど。だから、俺



は別の話をすることにした。

「レイは、さ。アスカのことを羨ましがってるよ」

「いきなり何よ」

「多分アスカだけってわけじゃないんだろうけど。式号機パイロットは、たくさんの絆を持っている。レイはそう言っていたよ」

「絆……？」

アスカの眉が、ひそめられる。

「多分ね、他人に積極的に関われる、関わろうとするアスカが羨ましいんだと思う。レイは……あんな風だから。口下手だし、よく人と話しながら、黙り込むだろう？ あれって困ってるんだよ。何を話せばいいんだろう、ってさ」

「よく見てらっしゃること」

「そんなんじゃない。俺も人付き合いがうまい方じゃないからね……解る気がするんだ」

そう言つと、アスカは大きくため息をついた。

「……はあ……ンで？ シンジ様はアタシにどうしろとおっしゃるの……で？」

「そう尖るなよ。俺はレイとアスカに仲良くして欲しいだけさ。少なくとも、普通に話して欲しい。レイのためだけじゃなくて、アスカのためにも言ってるんだよ」

「なんでアタシのためなのよ」

「エヴァのパイロットなんて特殊な立場にいる人間で、たった二人の女子だろ？ 女子同士でないと相談しづらい悩みとかだつて、あるんじゃないか。それに……」

「それに？」

勢いで話していたが、俺はここにきて躊躇した。これを言つてしまえば、アスカにも危険が及ぶかも知れない……だが、何も知らず壊されるよりはマシではないだろうか？ そう思った。後になって考えたら、酷く欺瞞的な考えではあったが。

「レイは、俺たちの中で間違いなく、一番エヴァを知っている。い

ろいろ情報が得られるんじゃないか？」

アス力は驚いたような顔をして、それから胡散臭そうな顔をした。

「へー……見違えたわね」

工事の済んだレイの部屋は、外の荒涼とした世界から切り離されたように、暖かな雰囲気醸していた。

淡い暖色系の壁紙に、濃いブラウンのフローリング・カーペット。どちらもレイが選んだものだ。カタログで選んでいたときは、この組み合わせはどうか、と思ったのだが、今こうやって実物を見ると、レイのセンスが正しかったと強く感じる。絶妙な色合いだった。

「素敵な色ね、綾波さん……」

「何や、綾波のイメージと違うのう」

「いや、いいよ。綾波のまた違う一面が垣間見える。暖かな色調の中に佇む綾波の、涼しげな蒼髪……絵になるねえ」

つれてきたいいつものメンバーは、それぞれ感動したり驚いたり写真撮ったりしている。

接着剤の微かな匂いが、その部屋の幼さを物語る。それは、こころもち照れたような表情で佇む、レイの心の匂いにも思えた。

「この壁紙、誰が選んだの？」

「私」

洞木さんの問いに、おずおずと答えたのはレイ本人だった。

「綾波さんが？自分で？」

「うん。シンジ君にも手伝ってもらった」

「そう……綾波さんってセンスいいのね」

壁紙の色がよほど気に入ったのか、洞木さんはしきりに感動して部屋を見渡している。

「でもなあ……ちょっと物が少なすぎないか？これまでもここに暮らしてたんだろ？」

ケンスケが、ファインダーから目を外して言う。

「別に、必要ないから」

「……そ、そうか？」

少し鼻白むケンスケと、苦笑する洞木さん、トウジ。

そして、これまで沈黙していたアスカが、口を開いた。

「あんったねえ……どーしてそう無愛想なのよ？」

「アスカ？」

洞木さんが心配そうな顔で、アスカとレイの顔を交互に見る。

「そんなんじゃ、ケンカ売ってるようにも聞こえるわよ」

その辛らつな指摘に、黙り込むレイ。

「お、おい、惣流、言い過ぎちゃうか」

「そうだよ、俺は別に気にしてないよ。慣れてるからさ」

トウジとケンスケが泡を食って止めに入るが、止まりそうにない。

「どう……言えはいいの？」

尋ねるレイに、

「アンタバカア？それぐらい自分で考えなさいよっ！」

答えるアスカ。

「あなたの方が、ケンカを売っているように聞こえるわ」

ツッコむレイ。

「……ぬぁんですってえ〜？」

「アスカっ！？ストップ！」

瞬間沸騰したアスカを、洞木さんは慌てて止める。

「なぜあなたのように乱暴に喋る人が、人と関わりつつづけることができるの？」

「綾波さん！」

火に油を注ぐレイ。洞木さんは泣きつ面に蜂だ。

片や、怒りの形相をその顔に浮かべ、今まさに挑みかからんとするアスカ。片や、無表情の中に鋭い眼光を放ち、静かに立つレイ。

トウジもケンスケも震え上がっている。というか俺もだ。

「……レイ……アンタとは一度、とことん話し合わないといけない

「ようね……」

「そう……わたしも惣流さんには言いたいことがあった……でもここでは駄目」

「そうね。機密だなんだって余計な縛りがない場所の方がいいわ……ヒカリ、離してくれる？」

「えっ、あ……」

未だアスカの腰につかまっていた洞木さんは、慌ててその手を離した。

「ふうっ。……アンタたち、悪いわね。アタシとレイは、これからネルフ本部に行くわ」

「ごめんなさい、みんな。また、来てくれる？」

「お、おう」

カクカクと応答する一同。

そして、二人は出て行こうとする。

「あ、俺も……」

慌てて俺がついていこうとすると、

「アンタは来るんじゃないっ！」

「シンジ君、今日は来ないで」

声をそろえて止められてしまった。

「あ、ああ、そうか？」

戸惑いつつ返すと、二人は再び踵を返した。

「それじゃ」

あとには、呆然と佇む四人が残された。

「えーっと、……なんやったんや、いったい」

「ふ、ふええ、怖かったよう……」

洞木さんは、今更ながら涙目になっている。

「あ、いいんちょ、大丈夫かいな……しかしあの二人、仲悪いにも程があるわ」

「うーん……」

おとといのアレで、少しでも好転することを期待してたんだが……  
……なんとなく悪化したような……

「あー、でも、そうでもないんじゃないか？」

そう言ったのは、ケンスケだった。

「あ？どういってこっちゃ？」

「だってさ、今まではホントに険悪っていうか、お互いけん制して  
るような雰囲気だったじゃないか。今日のはお互い率直っていうか  
……何と言つか、ちょっと違う気がするんだよなあ」

「うーん……」

トウジは考え込む。

「それに……気づいたか？」

「あん？」

「あの二人、名前で呼び合ってたの、俺は初めて見たぜ」

あ……

「そう言えば、綾波さんもアスカも、『ファースト』とか『式号機  
パイロット』とか呼び合ってたもんね」

洞木さんも、得心がいった、という顔をした。

「あん？そうだったかのう」

「……バカ鈴原……」

一人ボケをかますトウジに、一同は頭を抱えた。

次の日。

レイもアスカも普通どおり登校してきたが、二人とも妙にスツキ  
リした表情だった。和解したのか、とも思ったが、相変わらず、二  
人とも積極的に話そうとはしない。何も変わっていないように見え  
た。ただ、お互いを名前で呼んでいるのを除いては。

放課後になると、アスカが話し掛けてきた。

「シンジ、今日、アンタン家行ってもいいでしょ？」

「ん、ああ……別にいいけど」

「そう。っと、そうだ……」

何かを思い出したアスカは、くる、と身体を捻った。その方向には、レイがいた。

「レイ、アンタも行くでしょ？シンジン家」

驚いた。

アスカが、レイを誘ったのである。それも、俺の家へ行くのに。

「え……その」

戸惑うレイに、アスカはさらに身を乗り出す。

「行くでしょ？」

「……うん」

「よろしいつ。そんじゃ、帰るわよ！」

そして、アスカは元氣よく席を立った。呆然と見送る俺。

「シンジ君、行かないの？」

後ろから声を掛けてきたのは、カバンを両手で持ったレイだった。

「……あ、ああ、行くよ、うん」

俺は戸惑いつつ、カバンを抱えて席を立った。

アスカとレイが何やら話すのを後ろから眺めつつ、俺は戸惑いが喜びに変わるのを感じた。ただ一つ、不安を残して。

明日からまた、他の男子から恨みを買っただろうなあ

## 第十八話 種

「おはよーさん」

「うーす」

トウジのいつものようにハイテンションな挨拶に、俺は省エネな挨拶を返す。昨日の実験が遅くまでかかったため、寝不足気味だ。

「なんや、今日は元氣ないのう。また惣流にイビられたんか？」

「人聞きの悪いこと言わないでよ！そいつが辛氣臭いのはいつものことだよ」

教室の反対側の隅から、アスカがでかい声でツツコミを入れてきた。

「げ、地獄耳……」

その方向を見ると、アスカの他にレイ、洞木さん、他に数人の女子が談笑していた。アスカとレイが同じ会話の輪に入っているのも、最近あたりまえの構図になってきた。

アスカとレイのあの一件から二週間が経った。レイの世間知らずで危なっかしいところは、アスカの姉御肌なところに妙にマッチしていたらしく、二人のわだかまりが解けた後は、アスカが洞木さんとともに世話を焼く様子を見せるようになった。レイの、「碇シンジを護衛する」という任務はまだ続いているようで、よく俺にくっついて回っているが、アスカとともに行動することも多い。口数で言えば俺という時よりも随分多くおしゃべりしているようだ。俺としては多少寂しさを感じるが、これがあたりまえの状況なのだろう、とも思う。

「それにしても、惣流も綾波もずいぶんクラスに馴染んできたなあ」

「あ、ケンスケもそう思うか」

後ろからの声に、俺は答えた。

特にアスカだ。レイの「おせっかいなお姉さん役」を演じているうちに、以前のような不自然な振る舞いは影を潜め、徐々に誰にで

も素を見せるようになった。高飛車で、乱暴で、闊達で、明るい。そんなアス力を敬遠する人間もいたが、好ましい変化と受け止めた人間も多かった。良くも悪くも、アスカとレイの漫才のような会話は周囲との壁を無くし、彼女らが「普通の友人」を得るのに大いに役に立った。

そんなことを考えながら彼女たちを眺めている俺がよほどニヤついていたのか、ケンスケが少しかうように聞いてきた。

「随分と嬉しそうだな」

「まあ、そりゃね、知り合いが孤立してカリカリしてるよりは、あややって笑顔を見せてる方がいいだろ」

「ふーん」

答えた俺に、なぜかケンスケはニヤリ笑いを浮かべ、近づいてきて声を潜めた。

「……で、どっちなんだ、シンジ」

「あ？」

言葉の意味がわからず振り返る俺に、さらにケンスケは声を潜め、言った。

「だから、惣流と綾波、どっちが本命なんだって訊いてるんだよ」

「本命ってお前」

すぐにそういうところに話が飛んでしまうことに、俺は苦笑した。

『俺』が中学生のときにも覚えがある。

「けどな、シンジ」

トウジまで参加してきた。

「お前、他のクラスの男子からは二股かけてると思われとる。二人とも人気あるからのう。センス、随分恨み買つとるで」

「そうそう。せめて、どっちかに態度はつきりさせといった方が、むやみに敵を増やすこともなくていいと思うぜ」

「そりゃ、確かに二人と一緒に行動することは多いけどさ、別にどっちかと付き合ってるってわけでもないよ。気がある奴は直接彼女らに告白でもすれいいじゃないか」



二人とも、ラブレターの類は多く受け取っているようだが、直接誘われたり、告白されたりということは、ほとんどないらしい。

「実際にコクって、俺の名前を出されて断られたっていうんならともかく、直接言う勇氣がないからって、俺を恨んでごまかすのは筋違いだろうよ」

そうまくしたてて、無然として見せた。今度はケンスケの方が苦笑した。

「まあ、そうマジになるなよ。あいつらだって本気で惚れてるなんてのは意外と少ないんじゃないかな。アイドルのファンみたいなもので、遠くで囃し立てたり、スキヤンダル相手に嫉妬して見せるのが楽しいのさ」

ケンスケはときどき、妙に達観したような言い方をする。

「そんなもんかねえ。ま、何にしろ、俺にはアスカにもレイにも、恋愛感情の類はないよ。断言していい」

「ふーん、つまんねーの」

「ま、センスは意外と硬派やからのう」

「……お前らも、本人の前で人をダシにするのはやめてくれ」  
ため息を一つついた。

「修学旅行ねえ、日本の学校にも意外とナイスな習慣があるじゃない」

目を輝かせて、今日配られた「修学旅行のしおり」をペラペラと捲りながらシミジミ語るのは、アスカである。

「行き先が沖縄ってのも素敵ねー、懐かしいわ、ああ、早く行きたい」

「へえ、アスカ、沖縄に行った事あるんだ」

そう訊ねると、アスカは嫌そうな顔をして答えた。

「二年くらい前にね。だけど、そのときは訓練訓練で、基地から外

に出してもらえなかったわ。帰りの飛行機であの綺麗な海を見たときの悔しかったことと言ったら……ああ、思い出しただけでも腹が立つっ」

「ハハ、大変だったんだな……」

「でも、今度こそは遊び倒すわよ！そういうえば、スクーバもやるのよね。水着新調しなくちゃ。加持さんを選んでもらおうつと」

そんなアス力を見ながら、俺はまたもアニメのストーリーに思いを馳せる。そして、気の毒に、と同情を深くするのだった。

「ええ〜っ、修学旅行に言っちゃダメ〜っ!？」

ネルフ本部のブリーフィングルーム、テストの終わった俺たちを待っていたのは、ミサトさんからの無情な命令であった。

修学旅行期間の、第三新東京での待機命令。

「しょうがないでしょう？あなたたちが全員出払ってる間に、使徒が現れたらどうするのよ」

「んもうつ、いっつもいっつも待機待機タイキタイキ！たまにはこっちから打って出てみたらどうなのよっ」

「それができたら苦労しないわよ……」

苦笑しながらなだめるミサトさん。

「シンジもっ！アンタからも何か言ってやんなさいよ！」

と、アス力はひとしきり喚くと、俺に振ってきた。まあ、無駄だと思っけどな。

「えーっと、修学旅行の行き先は沖縄ですし、いざとなったら沖縄の国連軍基地から高速機で飛ばしてもらえば、一時間ちよつとで第三まで戻って来れるんじゃないですか？」

「シンジにしてはナイスアイデア！ミサト、それで行きましょう」

冗談で言ってみた案に、アス力が乗ってきた。が、ミサトさんはただ頭を抱え、

「シンジ君まで馬鹿なこと言わないの。国連軍はネルフの小間使いじゃないのよ。悪いけど今回はあきらめてちょうだい」

「……もういいわよ！」

諦めたのか、アス力はどかかとブリーフィングルームから出て行った。

「ありやあ……ずいぶん楽しみにしてからなあ、アス力」

そう言うときミサトさんは罰が悪そうな顔をした。

「あなたたちには、申し訳ないと思ってるのよ」

「謝られてもしようがないですよ。まあ、沖縄で遊んでる間に人類が滅亡しちゃっても困りますしね……レイ？」

妙に重い雰囲気を感じて振り向くと、物凄く悲しそうな顔をしたレイがいた。

「……もう、よろしいですか？一尉」

いつもより抑揚のない声。

「……え、あ、ああ、いいわよ。今日は解散」

うるたえつつミサトさんが解散を宣言すると、レイはとぼとぼと出て行った。後ろから見ていただけでも痛々しい。

「レイも随分と感情表現豊かになったわねえ……」

とは上司の弁である。

「あー、じゃ、俺も上がりますね」

そういつて退出しようとする、ミサトさんに呼び止められた。

「あ、シンジ君、……いつもありがとうね、アス力のこと」

少し寂しげな表情になって、言った。以前より頻度は減ったが、アス力が家に帰らず俺の部屋に泊まることは度々あった。そのことを言ってるのだろう。

「別に礼を言われるようなことはしてませんよ。単に友達とつるんでるだけです。それより、男の一人暮らしの部屋にホイホイと外泊を許すような保護者ってのはどうかと思いますよ」

「その辺は、信じてるわよ」

俺は皮肉のつもりで言ったが、ミサトさんは笑って切り返した。

「信じられてもね……」

「それとも、もしかしてレイだけじゃなくアスカにも手を出す気？」

「どっちにも手なんか出してませんよ」

「あら、そうなの」

ミサトさんは、ニヤニヤと笑みを浮かべてとぼけている。監視や念入りの身体検査をしていて、そんなことがないことは判っているくせに。

「俺に礼を言うくらいなら、ちゃんとアスカの保護者をやってくたさいよ。自分で買って出たんでしょ？」

「んーまあ、ちよつち、忙しくてねー」

アスカが俺に部屋にくるようになって、逆にミサトさんが顔を出すことが少なくなった。アスカを避けているんじゃないかとも思える。

俺はひとつため息をつき、言った。

「まあ、いいですけど。アスカだって中学生の女の子なんですから。いざって時には、ちゃんとケアしてあげてくださいよ」

そう言って、俺は踵を返した。

「……そういうシンジ君は何者なのよ……」

そのかすかな呟きを、俺は聞こえないフリをした。

クラスの連中が修学旅行へと旅立った次の日、浅間山火口の直下に幼生態の使徒が発見され、アニメと同じように、直ちに作戦が組まれた。エヴァでマグマの中に潜つての、使徒捕獲作戦である。

気が付くと、白い天井が見えた。

風邪を引いて熱が出ているときのよう、全身がひどくだるい。

見慣れない場所、静寂、思うように動かない体。なぜか寂しさが湧き上がった。

誰かに会いたい、そう思った瞬間、横から声が聞こえた。

「あ、シンジ、気が付いたの？」

声の方向に首を向けると、アスカとレイがいた。

「……アスカ、ここは、どこ？」

「病院よ。まったく、無茶するんだから」

苦笑しながら言うアスカと、すこし怒ったような顔をしているレイ。

「病院、なんで……」

「何アンタ、寝ぼけてんの？」

言われて、俺は急いで記憶を手繰り寄せる。

マグマに潜行する式号機、捕獲後撤収中の使徒の羽化・活動開始、外装の冷却液を利用した、熱膨張による使徒殲滅、断末魔の足掻きによって切断される式号機の命綱（降下ワイヤ）、沈み行く式号機、そして……

「……ああ、そうか。通常装備で火口に飛び込んだんだっけ、俺」

そのあとのことはよく覚えていないが、全身を包む灼熱と、それに耐えながら無我夢中で式号機を掴もうとした情景は、微かに記憶に残っていた。

「初号機の手には式号機が引つかかったあと、ミサトがすぐにシンクロカットしたからよかったものの、ヘタするとショック死してたわよ、アンタ」

そりやそうか。エヴァの感覚はパイロットへと伝わる。全身を火で焼かれるような負荷が神経にかかっていたのだろう。そうでなくとも、通常装備のエヴァでは外の熱はすぐにプラグ内に伝わる。頭まで熱い風呂に浸かり続けるようなものだ。このたるさは、おそらく熱中症によるものだろう。

もっとスマートな解決方法がないかいろいろ模索したが、使徒が

発見されたあとの状況進行が目まぐるしく、結局俺が干渉する余地がなかった。それならそれで、と、元のシナリオどおりの展開をなぞることにしたのだが、マグマの熱によるフィードバックや熱中症を甘く見ていた。予測しなかったわけではないが、アニメではそういう描写がなかったことが油断につながったのかもしれない。

「…そっか」

「ほら、レイ、アンタも言いたいことあるんでしょ」

少し後ろに立って黙っていたレイを、アス力は引っ張ってベッドの傍に立たせた。

「シンジ君、無茶、しないで」

「ごめん、レイ。また、心配かけちゃったな」

それきり、レイは俯いて黙ってしまった。その沈黙に耐え切れなくなっただのか、アス力が声を上げた。

「ま、アンタはここでもう少し休んでなさい。アタシは民宿にもどって、温泉を満喫してくるわ」

「へいへい、せいぜい楽しんできてくれ。ミサトさんによろしくな」  
手を上げて、アス力は病室から出て行った。後にはレイと俺が残された。

「レイは、温泉に行かないの？」

レイは無言で、椅子に腰掛け、俺の手を握った。

「……どうしたの？」

「苦しいの」

俺の問いに、俯いたまま、ぼつり、と答えた。

その切なげな表情は、何と言うか、ものすごくくるものがあつた。触れると消えてしまいそうな儚さがあつたが、心を揺さぶる確かな存在感があつた。これまでになく、俺はドキドキしていた。

「大丈夫。大丈夫だよ、レイ。俺は大丈夫」

握られているのと反対の手で、俺はレイの頬を軽くなぜた。

「こんな無茶しなくても、普通に楽しく暮らせるようになるために、頑張ろうな」

レイを宥めるために言った言葉に、彼女はしかし、顔をこわばらせた。

彼女の今の境遇に対して、なんと残酷な皮肉を言ってしまったのか。後になってそのことに思い至って、俺は頭を抱えることになる。

## 第十九話 溶融

今日も今日とて、アスカが俺の部屋に来てテレビを眺めていた。

レイのことを慮る様子を見せても、この辺の無遠慮さは変わらない。まあ、たまにはレイも一緒に泊まりに来る事もあるし、以前ほど妬くようなしぐさは見せなくなった。だから、今更そういうことを気にするのもバカらしいと思っているのかも知れない。最近のレイは、いろんな仲間と話をしたり、本やメディアで知識を集めるのが楽しくてしょうがないらしい。今日もしばらくトウジたちと一緒に騒いだあと、読みかけの本があるからと帰ってしまった。

「アスカ、風呂どうするー？」

「んー、このドラマ見終わってから入る」

「あいよ」

使った湯船に蓋をして、パジャマ代わりのスウェットを着てリビングへ出る。アスカはいつものように、ソファの真中に陣取って熱心にテレビを見ている。しまっていたはずのお菓子を勝手につまんでいた。これじゃ、同居してるのと変わらんなあ、と心の中で苦笑する。

こここのところしばらく、平穏とは言わないが順調に日々を過ごしている。

電力系統のダウンによってネルフの機能が完全に沈黙した折に現れた第九使徒に対しては、ゲンドウ指揮のもと、非常用ディーゼルによるエヴァの起動が行われ、使徒が侵入を試ていた射出口の下からのATフィールド中和・射撃により殲滅できた。

衛星軌道上から落下してきた第十使徒は、エヴァ三機がかりで地上で受け止め、コアへの直接攻撃で殲滅した。これもアニメ通りである。どう算出したのか、成功率0.00001%といわれた無謀



な作戦であつたが、俺としても他にやりようが思い浮かばなかった。まあ、恐怖はあつたが、あまり失敗を危惧することはなかった。やることはシンプルだし、アニメとはいえ成功した模様を見ているのだ。人間、成功のイメージを明確に持っている強い。何より、三人がちゃんと連携できれば、大抵の敵には負けないだろう。

第十一使徒はよく判らないうちに殲滅された。俺たちチルドレンは、模擬体を使った連動実験中にいきなりプラグごと射出され、地底湖まで強制緊急脱出と相成った。素っ裸だったので助けを待ち、ようやく発令所まで戻ったときには既に殲滅された後だった。アニメのとおりであれば、マギに寄生した使徒をリッコさん達が対策プログラムを組んで撃退したのだろう。

使徒戦がシナリオどおり進む傍ら、日常生活もそれなりに楽しんでいる。学校では相変わらずバカばかりやっている。そういえば、アスカは俺たちに付き合つて中国武術の道場に通い始めた。もともと空手とマーシャルアーツベースの格闘訓練は受けているらしいが、俺やレイの訓練時の動きを見て興味を持ったらしい。だが、エヴァ武装としてPSTonファアを勧めたら「いらない」と即答された。何かみみっちい感じがするそうだ。あの機能性と渋さが解らないのだろうか。

アスカもレイも、出会った頃に比べれば、表情にだいぶ余裕が出てきたと思う。もちろん、レイにとつての司令、アスカにとつての「エヴァパイロットの称号」が、それぞれ最も価値があるものであるという認識には変わりない。これはもう、洗脳でもない限り急に転換するのは無理だろう。だが、それ以外の価値観を知る事はある。自分が目を向け、手を伸ばせば、手に入るものはたくさんあるんだ。

こうして日々が大過なく過ぎる一方で、情報収集の方は遅々として進まない。人類補完計画、ゲンドウの真意、そして何より『俺』

自身や元の世界との関わりだ。どれも手がかりすら掴めない。ゲンドウは相変わらず話をするのを拒むし、リッコさんにはどこまで踏み込めばいいか判断がつかず、攻めあぐねている。

ただ、感覚的にだが判ってきた事もある。意外だったのは、レイが感情に対して極度に無知・鈍感であるのは、意図的にそうされたわけではなさそうだと、ということだ。レイによれば、ゲンドウは彼なりにレイを育てる努力　本を読み聞かせたり、言葉遣いなどの躾をしたり　をしていたようだし、リッコさんも多少冷たいがその意に従っているようだ。よく考えれば、単にダミープラグの材料やサードインパクトの鍵とすることが目的ならば、学校に通わせる必要すらない。あんな廃墟に一人暮らしさせるでもなく、素直に研究室にでもつないでおけばいいのだ。そうでないところを見ると、普通に子育てを試みたものの、ネルフ本部という外界の情報から隔絶された環境と、普通のコミュニケーションと言うものが極度に苦手な父親の性格が災いしたのではないか。

そう考えれば、ゲンドウが自分の目的に向かって盲目的に突き進んでいるわけでもないのかもしれない。少なくとも、子供の育て方について一貫性を欠く程度には、葛藤があるのだろう。

いずれにせよ、アニメのストーリーによれば、この辺から雰囲気暗転してゆくことになるはずだ。その中で、皆を支えながら、俺自身が自己をしっかり持ちつつけなくてはいけない。仮に大勢を曲げる事ができなくとも、土壇場でサードインパクトに前向きな干渉を与えられる程度である必要があるのだ。そのためには俺とレイ、アスカが連携して戦える状況を崩さないようにしなくてはいけないし、ミサトさんやリッコさん、ゲンドウの振る舞いにも注意しなくては。

「……シンジ！」

突然アスカの大声が聞こえてきて、俺は顔を上げた。

「ん、どうした？」

「どうしたじゃないわよ。何度も呼んでるのに、シカトたあい度胸してるじゃない」

いつのまにか、思考に没頭してしまっていたらしい。

「悪い、ちよつと考え事してた。で、何？」

「もう…アンタもジュース飲む？つて聞いているのよ」

そう言つと、アスカはペットボトルを掲げて俺に見せた。ペットボトルごと持ち出してたのか。

「あー、飲む。つーか、ボトルごと出してたらぬるくなるだろうが」  
「男がいちいち細かい事気にしてんじゃないわよ。そんなに言つならついでに冷蔵庫入れときなさい」

そう言つてペットボトルを差し出してくる。ったく、誰の家だよここは。

愚痴の代わりに一つため息をついてから、ボトルを受け取つてコップに注ぎ、残りを冷蔵庫にしまう。

「そつえばさ、シンジ」

「ん？」

「あさつての相互交換実験つて、何をやるの？」

「ん、何か、現存のエヴァでパイロットを入れ替えてもきちんとしてシンクロするかどうかの実験みたいだよ。パーソナルパターンが近いとかで、取りあえず俺を零号機、レイを初号機に乗せて実験するみたい」

「アタシは？」

「よく判らんけど、アスカは普通のシンクロテストをやるつて聞いているよ」

そう言つと、アスカは少し嫌そうな顔をした。

「何よそれ、アタシだけ仲間外れ？」

「仲間外れつてことはないだろうけど、式号機は特別だつてアスカも言つてたじゃないか。だからじゃない？」

そう言つてはみたものの、おそらく実状は違つたろう。おそらく、

俺が零号機で実験することすらもオマケに過ぎず、レイが初号機にシンクロできるかどうかがメインとなるはずだ。何となれば、これはダミーシステム　レイの素体を利用したエヴァの自動操縦システムオートパイロットの基礎実験となるはずだからだ。

「んー……」

なおも不満そうな声を上げる。アスカにしてみれば、俺とレイが特別扱いで、自分がぞんざいに扱われているように感じているのだろう。

「ま、零号機も初号機も、本来は戦闘用の機体じゃないから、いつでもどちらが戦えなくなるかも知れないってことで優先してるだけだと思うよ。アスカもそのうち初号機か零号機で実験することもあるんじゃない？」

適当な理由をつけてみる。

「んじゃ、アンタかレイが弐号機に乗る事もあるっての？」

「よく知らんけど、そうじゃないかなーと」

「それはそれで複雑な気分ね……」

そう言って、アスカは抱えていたクッションにあごを埋めた。

「でも、アンタ大丈夫なの？」

「何が？」

「何がって、零号機って今まで何度か暴走してるんでしょ？制御が難しいってリツコも言ってたじゃない」

そういえば、アニメじゃ、確か互換実験で零号機が暴走するんだよな。

「んー、まあ大丈夫じゃないか？外部電源外して実験するって言うてたし、暴走しても施設はぶっ壊れるかも知れんけど、俺はエヴァの中にいる限り安全だし」

「人ごとみたいに言うのね……」

「もしかして、心配してくれてる？」

とからかうように言くと、つまらなそうにため息をつく。

「心配すんのはアタシじゃないわよ」

アスカが言わんとすることに、俺もすぐ思い当たる。  
「あー……うん、気をつける」

「シンクロ率、3.8%で固定……起動ボーダーに達しません!」

「マヤ、落ち着いて、もう一度108からやり直しなさい」

うるたえる伊吹さんの後ろで、リッコさんが険しい顔をしている。レイが初号機に乗った状態での起動実験。アニメでは確か成功したはずだ。しかし、蓋をあけてみると意外な結果が待っていた。

「だめです。今度は初号機側から拒絶されました!」

モニタの中で、レイが苦しそうに顔を歪めている。

「リッコさん、レイは大丈夫なんですか?」

俺が口出しするべき状況ではないが、つい口を挟んでしまう。リッコさんは暫し考えたあと、ゲンドウへ目配せした。ゲンドウの表情は遠すぎて伺い知ることができないが、これまた数秒の沈黙のあと、重苦しく宣言した。

「実験を中止しろ」

搭乗用キャットウォークまで走っていくと、ちょうどレイがプラグから出てきた。

「レイ!大丈夫か!?!」

一頻りLCIを吐き出すと、レイはこちらへ振り向き、「大丈夫」とだけ答えた。少し残念そうな表情だったが、思ったより落ち着いているようだ。

「……もつ、初号機は応えてくれない。拒絶されてしまった」  
「そうか……」

寂しげな顔で言うレイ。俺はそれにかける言葉を持たなかった。

この結果は俺にとっても予想外だった。たしかアニメでは、レイと初号機では成功し、シンジと零号機では暴走、という結果に終わったはずだ。レイが初号機にシンクロできなくなったのは、一度ダミープラグを使用した後だったと思う。なぜ、今この状況で……

『サードチルドレンは、速やかに第四ケイジに移動し、零号機搭乗の準備をして下さい。繰り返します……』

館内放送が響き渡った。初号機の失敗で実験中止、ということにはならなかったらしい。俺と零号機のシンクロ実験なんて、何の意味があるって言うんだ……

「シンジ君」

渋々第四ケイジへ向かおうとすると、レイが呼び止めた。

「何？」

「……気をつけて。零号機もシンジ君を拒むと思う。もしそうでなければ、シンジ君の方から拒絶して。でなければ……危険、だから」言葉を選びながら、俺に忠告するレイ。拒絶しなければ危険？

「どういう事？」

だが、レイはそれきり口を噤んでしまった。

「……よく解ないけど、とりあえずシンクロを拒絶すればいいんだね？」

俺の確認にうなずくレイ。俺は、ありがと、と一言礼を言って、零号機の元へと向かった。

これが零号機か……

エントリープラグ内のインテリアにはそれ程大差はない。若干、パネルの材質が異なるくらいだ。オペレーティング・システムも一緒に更新してあるのだろう、操作系にも違いが感じられなかった。『いい？いつもよりゆっくり、落ち着いてシンクロしてね』

伊吹さんからの通信。俺はそれに「はい」とだけ答えると、精神集中のため目を閉じた。

少しして、ＬＣＬに電荷がかかったことを肌で感じる。と同時に、ミルクのような、幼く甘いイメージを想起させる香りが鼻腔をくすぐった。アニメでシンジが「綾波の臭い」と称していたのはこの香りだろうか。なるほど、何となく判らないでもない。

そういえば、零号機の事ってアニメではあんまり語られてなかったなあ。初号機には碇ユイ、弐号機にはアスカの母親の魂なり精神なりが宿っている。ならば、零号機には？アニメのとおりならレイには母親はいない。強いていえば、肉体的には碇ユイ、精神的にはリツコさんが、その母親になるのだろうか……

そんなことを考えていると、神経接続が完了し、シンクロが開始された。

ぞくり

なにかに全身を舐め上げられるような、底知れぬ不快感が突然襲ってきた。

「う……あ？」

『シンジ君？どうしたの？』

声も上げられない。全身の筋肉が萎縮していた。怖い。生命の危機からくる恐怖ではない。目の前に圧倒的な存在感があり、そのあまりの巨大さに、自分が見えなくなる。

『シンジ君！？気をしっかり持って！』

遠くでリツコさんの怒鳴り声が聞こえる。

零号機を拒絶しろ、レイの忠告が頭の隅で思い起こされたが、冗談じゃない。自分に向かって落ちてきた月を、自分の細腕なんかで跳ね返せるもんか！

それはまるで触手のように俺に絡みつき、俺の存在に絡みつき、

自分の中に、自分でないものが入ってくる。自分の中身が、外に漏れ出す。侵される。飲み込まれる。怖い。怖い。怖い怖い怖い怖い怖い

自分を守る全てのものが破壊される感覚の中で、俺から『俺』が剥がれるのが判った。

そのまま意識は闇に沈み……かすかに、レイの泣き声が聞こえた気がした。



## 第二十話 隙間

エヴァンゲリオンは、魂を宿す。これは、アニメでも明らかにされていた設定だ。現に、俺は初号機の中の碇ユイと直接意思疎通した経験があるし、式号機にも、アス力を守護する何者かの意識を感じることができた。

ならば、零号機は？やはり、何者かの魂が宿されているのか。それとも、プロトタイプは例外なのか。

果たして、真実は　この世界での現実とは、どうなのか。その答えは、まさしく今、『俺』の目の前に在る。

それはあまりに巨大で、気を抜くと意識ごと飲み込まれそうなほど、威圧感に満ちていた。他のエヴァの中に在った彼女らと同じものだとはい底思えなかった。神というものが、人の意識では推し量ることすらできない高次のものだとするならば、それは間違いなく神であった。

そんなとんでもない存在であるにも拘らず、それは酷く困惑しているように見える。『俺』と、はがれたもう一つの魂、この世界の『碇シンジ』に交互に意識を向け、沈黙した。

ややあり、それは『俺』へ意思を伝える。

『おまえは何者か』

その問いに答える間もなく、再び、俺の意識が暗転する。

そこは狭苦しいワンルームだった。酷く散らかっていて、かろうじて布団を敷くスペースだけが確保されている。ぽつんと積み上げられているのは、「新世紀エヴァンゲリオン」のコミックス。すでに遠い昔のような気のする、馴染みきった光景。そこは『俺』の住んでいた部屋。しかし、その光景は灰色だった。自分の家なのに、

そこには安らぎという感覚はなく、ただ体を休めるだけの箱だった。いきなりの場面転換。そこは『俺』の職場であった。主のいない席。だが、周囲でそれを気にする者はいない。仕事の穴を埋められる人間はいくらでもいた。

場面転換。行きつけの居酒屋。『俺』はいつも隅で一人で飲んでいた。一言も言葉を発しないまま。今は、『俺』はいない。それでも、和やかな雰囲気は何一つ変わらない。

場面転換。PCのモニタに映るのは、よく入り浸っている掲示板。だが、俺の発言は既に流れ、だれも話題にしない。

かつて恋していた彼女の横には、別の男がいる。彼女は笑っている。

近くの街。

故郷。

そのどこにも、『俺』は存在せず、それでも何も変わらない光景が広がっていた。

そして再び、『俺』の部屋へ場面は戻る。

風もないのに、床に置かれたコミックスのページがひとりでにめくれる。そこに描かれているのは、シンジやレイやアスカが生きるこの世界。いや、微妙に違っている。背景が、人の過去が、人格が、少しずつ食い違っている。そう、この世界は少しずつ都合がいい。誰にとって？シンジ、いや、俺

不意に、映像が途切れた。

目の前の巨大な存在は、困惑を極め、もはや混乱とっていい状況に陥っている。意識の方向があちこちへ飛び、『俺』と『シンジ』はその暴風に煽られ、振り回されていた。あわや吹き飛ばされる、というとき、ぴたり、と暴風が止まる。

『認めない』

そういう巨大な意識が叩きつけられた。『俺』と『シンジ』は一緒に吹き飛ばされ、わけもわからず気を失った。

轟音が鼓膜を揺さぶり、俺は目を覚ました。数瞬考え、零号機に搭乗していることをようやく思い出した。俺を載せた零号機は、しかし俺の意思を無視して勝手に動いている。暴走していた。エントリープラグ内には零号機の視界が映し出されている。その中心にあったのは、ガラスの向こうの小さな人影。

巨大な拳が振り上げられる。それが何を意味しているか、俺はようやく気がつき、狼狽した。

「レイ！逃げろっ！」

だが、レイは一步も動かない。

がしゃあっ！

ケイジとオペレーターを隔てる窓に、盛大なヒビが入る。それでは飽き足らず、二度、三度と拳が叩き込まれた。だが、耐圧ガラスを突き破るまでには至らない。

その内、零号機はメチャメチャな動作を取り始めた。頭を抱え苦しむしぐさを見せたかと思うと、壁に走り寄り頭を打ち付ける。拘束具を掴み、引きちぎる。あたり構わず殴りつける。だが、それも数分ともたず、ゆっくりと動作を止めた。

モニタには、活動限界を示すインジケータが光っていた。

「……それだけ？」

医務室にリツコさんがやって来て、先程の実験中の様子をあれこれと訊いてきた。俺は、シンクロが始まった途端気が遠くなり、次に気がついたときには零号機が壁を殴っていた、とだけ答えた。実際、俺の記憶で確かだと言えるのはそれくらいのものだ。……あの中で見た夢、のようなものまで明かす気には、到底なれなかった。

「何かあるんすか？」

そう、わざと不安げに問い掛けてみると、リツコさんは諦めのため息を一つついた。

「……一応、言っておいたほうがいいかしらね」

少しためらうように、話を切り出す。

「シンジ君、あなた、一度零号機に取り込まれたのよ」

俺の中で言葉の意味を咀嚼するのに、少々時間がかかった。

「取り込まれた、ですか？」

オウム返しに聞き返す。そうしたところでようやく、俺の脳裏にアニメでのエピソード　使徒戦で暴走し、LCLとなって初号機に取り込まれた碇シンジ　が思い浮かんだ。

「そう。あなたは一度エントリープラグの中で分解され、再構成されたの」

「……はあ、そうですか」

何と言つか、返す言葉が見つからない。

「まあ、精密検査の結果も特に異状はないみたいだし、あなたに自

覚症状がなければいいわ」

「ホントですか…というか、そんなこと、なぜ俺に話すんです？」

普通の中学生なら怖がって逃げるぞ。いや、それならいきなり放り込まれて殺し合いやらされてる時点で逃げるか。

「自分の身体に起こったことくらい、知る権利はあるわ。それに、あなたは自分の責任もよく判ってるみたいだしね」

要するに責任を果たしたきや逃げるな、と。

「……まあ、お心遣いには感謝しますよ。正直、一介の中学生に負わせる責任じゃないと思いますけどね」

「それでもあなたは選んだのだから。報酬まで要求してね」

詭弁だ、とは思ったが、まあそんな事突っ込んででも始まらない。「まあ、ちょっと遅くなったけど、今日は帰ってゆっくり休みなさい」

そう言つて、リツコさんは医務室から出て行く。俺は一つだけため息をつくと、帰り支度を始めた。

レイモアスカも、一足先に帰宅したそうだ。俺は監視兼護衛役の保安部の人に、車で自宅まで送ってもらう事にした。

「いつもすみません」

「かまわんよ。どうせ君にはついて歩かにならんのだ」

いつも、つかず離れず影で見守ってくれるチルドレン護衛担当の方々。よほど勤勉で組織への忠誠心の高い人じゃないとできない仕事だと思う。俺には到底真似できない。以前そんなことを言ったら「それでも、君の護衛は随分楽だよ。まあ我々が楽なのはいいんだが、君は中学生にしては出不精がすぎるんじゃないか？子供はもっと外であそぶもんだ」

などと諭されてしまった。『俺』も『シンジ』も昔っから引き籠もり寸前だったからなあ。

程なくして、自宅へ着いた。護衛に軽く礼を言い、部屋に入ると俺は着替えもせずベッドに倒れこんだ。

「疲れた……」

あの出来事は一体なんだったのだろうか。

零号機に取り込まれた。これは判る。『俺』と『シンジ』が一度分離した。これも納得はできる。自分が2つの魂を持っていることは、漠然とだが感じていたから。零号機から出た後も、俺の中には両者の魂を感じ取ることができた。

問題は、零号機がなぜ俺を取り込んだか。そして、何のために『俺』の記憶を読むような真似をしたのか。何故、あれほど取り乱したのか。

そこまで考え、記憶を読み取られる際に見た映像を、俺は思い出した。

この世界でいろいろなことを頑張っているうちに、俺は『俺』の世界のことをすっかり忘れていた。いや、きっと考えないようにしていたのだと思う。

俺は自分の居場所を求め、拘泥する。居場所とは、自分が他者に影響を与え、自分が在ることで周囲に変化をもたらす、その実感に他ならない。だから、この世界に、今の自分の状況に居心地のよさを感じていたのは確かだ。むしろ依存に近い。

逆に言えば、かつての『俺』はそのことに強い飢餓を覚えていたのだ。零号機の中で見せられた映像は、そのことを痛感させてくれた。

そして、一つの疑念をも俺に抱かせる。

「……この世界は、本当に『現実』なのか？」

そもそも、俺がここにいることを『現実である』と考えたのは何故だ？この世界が、夢や妄想の類ではないと、断言するだけの材料は実際にはない。とはいえ、ただの夢にしてはあまりにリアルだし、

時間感覚もしっかりしている。ここに来て、もうじき3ヶ月になる。それだけの時間を過ごした詳細な記憶も、ちゃんとあるのだ。

ただ、この世界が、「新世紀エヴァンゲリオン」というフィクションの世界を基礎としていながら、少しずつ俺に都合がいいというのも確かだ。アスカやレイが和解したことだって、本当はそんなに簡単に済むはずがない。物語では、もっと二人とも頑なで、根の深い悩みを抱えていたような気がする。

だが……しかし……

だめだ。あまりに情報が少なすぎて、いくら考えたって堂々巡りだ。

零号機の中のアレから聞き出すのが手っ取り早いだろうが……多分もう零号機に乗ることはないだろうなあ。結局暴走させちゃったし。そもそもアレは一体何者なんだ？ 初号機や弐号機とはあまりにも異質すぎる。

そういえば、レイは実験前に、零号機を拒絶しろ、と忠告してくれたっけ。レイはあの中にいるものの存在を知っているのだろう。

とすれば、アレは……

「レイに、訊いてみるべきかなあ」

それも少し気が引ける。彼女は自分がヒトと違うものだということを自覚している。学校でヒトとの交流を重ねる中で、自身の境遇に思い至ったとき、彼女はどう感じるのだろうか。

ましてや、それを信賴している男に示唆されるのは……

彼女がどう受け止めるか判らないが、下手をすると傷つけてしまうかもしれない。

「まいったな……」

寝返りを打ち、目を閉じた。瞼の裏に、レイの泣き顔が浮かんだ。それを慌てて打ち払うと、程なく睡魔に引きずり込まれた。

『シンジ君』

翌日、レイから電話があった。

「どうしたの？」

できるだけ何事もないように答えるが、俺もここもち気後れしているのを自覚していた。数秒の沈黙のあと、遠慮がちにレイが尋ねてきた。

『……昨日、零号機に取り込まれたとき、何を見たの？』

来た。

俺は迷ったが、俺が訊きたいことを訊くためにも、正直に話しておくべきだと思った。

「何か、とてつもなく巨大な何かを感じたよ。何者かは判らないけど。そいつは、俺の記憶を覗き見て、酷く混乱していた」

努めて、軽く話す。

『シンジ君の記憶を……？大丈夫なの？』

「ああ、まあ、あんまり気分のいいもんじゃなかったけど」

いい記憶じゃないが、アニメのアスカのように、掘り返されたからと言って全力で拒絶するほどのトラウマを持ってるわけでもない。

『そう』

そう言って、レイはまた黙ってしまふ。俺は、意を決して尋ねてみた。

「レイ、君は、零号機の中のアレが何なのか、知ってるんじゃないのか？」

電話口の向こうでは沈黙が続く。表情が見えないのが、もう一步の踏み込みを躊躇させた。

「……あー、ごめん。変なこと訊いた。知っていても話せないよな。機密事項だろうし。忘れてよ」

『……ごめんなさい』



少しつらそうな声が、胸に痛い。

「いいって。そうだ、これからどっか遊びに行かない？みんな誘ってさ」

『体、大丈夫なの？』

「大丈夫大丈夫。むしろ気が滅入っちゃっていけない。パーっと遊ぶほうがいい休養だよ」

『そう、それじゃ、惣流さんと洞木さんには連絡しておくわ。時間は…15時くらいかしら』

「そうだね、いつもの場所で待ち合わせてことで。トウジとケンスケにも声かけとくよ」

『わかった』

「それじゃ、後でね」

電話を切った後で、ひとつため息をつく。結局訊けなかったなあ、どうしよう。エヴァや人類補完計画のことだけでもスケールが大きすぎるというのに、世界とはなんぞや、などというほとんど哲学みたいなことを考えなければなくなってしまうた。いくら何でも手に余る。

それでもきつと、シナリオは淡々と進んでいくんだろう。そのシナリオの先には、一体何が待ってるというのだろうか。それが絶望的なものだとして、果たして俺はなにができるだろうか？

またもループに陥りかけた思考を振り払い、俺は再び電話をとった。

## 第二十一話 独り相撲

互換実験から一週間後のある夜、帰宅すると、何故か部屋のドアが開いていた。

もう夜も更けている。留守宅は当然真っ暗だが、なんとなく人がいるような気配がする。すわ泥棒か、と思い警戒したが、玄関には見慣れた女物のサンダルがあった。

あいつ、勝手に合鍵作りやがったな。そう思い、電気をつけて部屋に上がる。リビングには、予想通りの人物が、予想と全く違う表情でうずくまっていた。どんよりと曇った、少し涙すらためた目をして、じっと床を見ているアスカに、俺はとてつもない疲労感を感じ、へたり込みそうになった。

今日は、俺にとつても酷くショックなことがあった。混乱もしている。正直、悩める青少年のカウンセリングをしている余裕はない。だが、少女は話しかけられるのを待つように、じっとしている。

「……あー、どうしたんだよ、アスカ。今日は元気ないな」

気は進まないが、話しかけてみた。だが、少女は沈黙を保つ。

「またレイとケンカでもしたのか？」

無言。

「それとも、ミサトさんあたりに何か言われた？」

ミサトさん、というところで、ぴくり、とわずかに反応する。いつもと様子が違うかな？ミサトさんとケンカしたなら、ガサツで軽薄な保護者の悪口を、それこそマシガンのようにまくし立てるのが常だった。こんな風に落ち込むのは何なのか、エヴァ関係か、それとも。

そこまで考えて、今日という日の持つ意味を思い出す。アニメの通りだとすると、これは加持さん絡みか。あまりズバリと挿し込むのは避けて、別方向から話を進めることにする。

「そっぴや、今日はデートだとか言ってたよな、どうだった？」

プライドが高く、大抵の男は適当にあしらいつつ避けるアスカだが、今日の相手は洞木さんの知り合いと言うことで、親友にどうしても、と頼み込まれて断れなかったらしい。もしも、アスカの悩みが俺の予想通りなら、この話題は彼女にとって酷く不愉快なものだろう。まあ、そうは言ってもこれじゃ話が進まん。

「……つまんないから、途中でほつといて帰った」  
小さな声で答える。

「ひつでーの。洞木さんの紹介ならそんなに悪いやつでもなかったんだろ？」

「だから、つまんないのよ。アタシの顔色をやたら気にする割りに、自分のことばかり喋って、アタシの事なんか知ろうともしないんだから。ホント、何しに来てるのやら」

俺はキッチンに立ち、冷蔵庫から麦茶を出す。

「んで？男から逃げてきて、なんで俺んちにいるわけ？」

苦笑はしていたが、疲れも手伝ってか、言葉に少しだけ皮肉が混じる。アスカはまた沈黙した。

「そういえばミサトさんは同期の結婚式って言ってたっけ。今夜は遅くなるのかな？」

ミサトさんの同期ということは、加持さんやリツコさんの同期でもある。三人揃って式に呼ばれていると聞いた。アニメではその後酔っ払ったミサトさんを介抱する加持さん、そして二人のベッドシーンまで描かれていたが。

もしかしたら、アスカは「そうなること」を予測していたのではないだろうか。彼女の、加持さんに対する寄せる信頼を見れば、加持さんがこの心に傷持つ少女をいかに導いてきたかが窺い知れる。しかし、日本に来てからはあまり会えていないようだ。そして、あの判りやすいミサトさんのことだ。自分のところに戻ってきた加持さんを見て、揺れる心を隠せはしないだろう。

そんなことを考えながら麦茶を注いでいたら、危うくグラスから溢れそうになり、少し慌てた。

「ねえ、シンジ」

「ん？」

麦茶をグラスに注ぎ終わったところで呼びかけられ、振り向いて仰天した。いつの間にか気配もなく、息がかかるほど間近にアスカの顔があった。

「キス、しない？」

そうだ、これもまた、「シナリオ通り」だ。俺は自分でも意外なほど冷静だった。というより、急激に冷めてしまった。アスカの両肩を押さえる。少し身を硬くしたアスカを、ゆっくり横へどかし、コップを持ってリビングへ向かった。

「何よ、怖いのか？」

彼女の顔は見えないが、怒っているだろうか、嘲笑っているだろうか。声は低かった。どっかりとソファに腰を下ろし、麦茶で口を潤したあと、ゆっくりと喋った。

「ああ、怖いね」

「何よ、アンタも結局ガキなんじゃない」

言って、アスカは俺の前に回りこんだ。そんなアスカの目を見ずに、答える。

「そうだな。それに、本当の俺は……俺」は、今日のアスカのデイト相手みたいな男だから。加持さんの代わりにはなれないよ」

「……誰が、アンタなんかに加持さんの代わりを求めているのよ」俺はそれには答えず、麦茶を飲み干し、立ち上がった。

「俺あ風呂入って寝るぞ。悪いが疲れてるんだ」

「え、ちよっ」

引きとめようとしたアスカを無視し、俺は風呂へ向かった。

もう、これ以上俺が何を言っても嘘臭くしかない。そう、心の中で言い訳していた。それに、本当に酷く疲れていたのだ。

時間は、今朝に遡る。

けだるい休日の朝。いつもより少し早く目が覚めて、回らない頭を無理やり巡らし、ふと、カレンダーに目が留まった。

俺はそこで、唐突に思い出した。今日の日付、その意味を。

母、碇ユイの命日だった。

食欲が沸かず、朝食を抜いて家を出てきたが、共同墓地に着いた時には、既に日は高くなっていた。少し足が重い。碇ユイを必要以上に嫌悪するのはやめたとはいえ、墓参りまでしたいかと言われると否だ。それでも『シンジ』は、母に会いに来たがっている。

零号機での体験以来、俺は前以上に『シンジ』の感情を意識するようになった。互いの記憶と価値観を共有し、相違が埋まってゆく中で、ほとんど融合してしまうかのような錯覚を抱いていた。しかし、やはり『シンジ』は『俺』とは別の存在としてここにいる。今ここで碇シンジとして活動しているのは『俺』の方だが、いついなくなるとも限らない。そうなったとき、『シンジ』が『俺』に塗りつぶされてしまっただけではないのか。

花を供え、じつと墓標を眺めていると、視界の隅に長身の影が映った。見ずとも誰だかわかる。その影は俺のすぐそばに來ると、一言も発せず墓標に向き、俺の花に寄り添わせるよう、自分が持ってきた花を供えた。

碇ゲンドウ。碇シンジの父親。『俺』がやってきて、ほとんどまともに口を聞いていない。ずっと話したいと思っていた。父を求める『シンジ』も、この世界の真実を知りたい『俺』も。

「なんか、信じられないな。『父さん』が墓参りだなんて」

こんな日くらい、そう呼んでやってもいいだろう。

「ひょっとして、毎年来てるの？」

「ああ」

顔を合わせずに会話する。どうせ面と向かったところで、この男は表情を見せようとはしないだろう。

「母さんって、どんな人だったの？」

無言。

「写真とか、ないの？」

「写真はない」

それが漫画の通りの台詞であることに、思い至った。俺も、ゲンドウも、台詞をなぞるように語る。

「全部、捨てちゃったんだ」

「ああ。この墓もただの飾りだ。死体はない」

少しの沈黙。そして、彼は続ける。

「すべては心の中だ。今はそれでいい……シンジ」

そこで、父はなぜか息子に背を向ける。

「もう、私を見るのはやめろ」

なんだ？何を言っている？

「人はみな、自分ひとりで生き、自分ひとりで成長していくものだ」  
母親の思い出云々まではまだわかる。だが、今の俺は親に依存していたりしない。少なくとも普段は。好き勝手やってる俺に、こんな台詞は不自然じゃないか。

「親を必要とするのは赤ん坊だけだ。そして、お前はもう赤ん坊ではないはずだ」

その不自然さは、何故か妙に滑稽に見える。何かがおかしい。だが、それ以上に笑いがこみ上げてきた。

「自分の足で地に立って歩け。私もそうしてきた」  
「ぶっ」

そこまで来て、とうとう俺は噴出してしまった。そこでようやく、父は息子を見た。訝しげな顔で。

「ククク…な、何言ってるんだよ父さん。今更何言ってるんだよ。あんたは親が必要な赤ん坊を捨てたんだろう。俺はもうあんたなんか見

ちやいない。いや、見てたって親としてなんか見ちやいないよ。まして」

ようやく笑いを噛み殺して、呼吸を整えてから言葉を続ける。

「何が、自分の足で地に立って歩け、だよ。私もそうしてきた?」

「それじゃ、あんたにとって母さんは、碇ユイは何だったって言うんだ」

だめだ。感情がぐちゃぐちゃだ。可笑しさと悔しさと、寂しさと怒りとが絡み合って、抑え切れない。これは誰だ、誰の想いだ。

「俺は知ってるんだ。確かに、この墓の下に碇ユイはいない。碇ユイは、母さんは、エヴァンゲリオンの中にいるんだ。あんたもそれを知ってるはずだ」

制御の効かない言葉だけが溢れる。

「それに……レイは母さんそっくりだろ。さっきはあんなこと言ったけど、俺は母さんの顔もちゃんと思いいせるんだ。彼女を自分の手元に閉じ込めて、一体何をしようとしてるんだ。碇ユイが取り付いた玩具を使って、あんたは一体何をしてるんだよ!」

そこまで言って、俺はゲンドウの顔から再び感情が消えたことに気がついた。低い声で、つぶやくように言う。

「……どこまで知っている」

しまった! つい不用意にベラベラと、余計なことまでしゃべってしまったか!?

うるたえる俺に、ただ鋭い視線を向けるゲンドウ。俺は不測の事態に混乱していた。

「な……何のことだよ」

「ふっ」

だが、ゲンドウはそれに答えず、あろうことか笑い出した。

「慌てることはない。とりあえず、今お前をどうこうしようというわけではない。……お前の正体はわかっているんだ。今、ようやく確信が持てたところだがな」

意地の悪そうな微笑を浮かべながら、ゲンドウは語る。突然の空

気の変化に、俺はなおさら混乱を極めた。

「俺の正体だって？」

「ああ、そうだ。俺はお前のことは知っている。そう、お前は」

それに続いて発せられたのは、間違いなく、『俺』の名であった。



## 第二十二話 感情不信

混乱しきった俺の脳みそでは、まともな問いかけもできないでいた。それを無視し、髭面の男は言葉を続ける。

「二十一歳、職業はプログラマー。地方から東京に出てきて一人暮らし。自称オタクだが、実はそれほどのめり込んでるものがあるわけでもなく、無関心無気力無感動のつまらない人生を送っている。利害の絡まない対人関係が不得手、というより人見知りか。異性関係はさらに苦手で、ハタチ過ぎるも未だどうて」

「ちょ、ちよつと待てっ！」

俺にとって甚だ不名誉なことを口走ろうとするゲンドウを、必死で止める。気持ちの悪いことに、すべて当たっていた。狼狽しきった俺に向けるゲンドウの顔には、嘲るような笑みが浮かんでいる。

「俺が『お前』のことを知っているのが、そんなに不思議か？」

「当たり前だっ！」

と叫んだあと、熱くなった頭で話するのはまずいと思い直し、一呼吸。

「……あんたが仮に、俺と同じく、あの世界からやってきたんだとしても、俺のことをそこまで知ってるのはおかしいだろうが」

自分の異性関係なんか、他人に話す気も機会もなかった。推測はできるかも知れないが、事実として知ってる人間は『俺』の他にいないはずだ。

しかし、ゲンドウの姿をした何者かは、構わず話を続ける。

「お前は勘違いしているようだが、この世界は『新世紀エヴァンゲリオン』の世界のデッド・コピーではあっても、そのものではない。そして、俺もお前も、このまがい物の世界で何かの役割を背負わされ、ここにいる」

そこまで言って、軽くうつむき、左手でサングラスを直すようなしぐさを見せる。

「ある特定の意思、あるいは無意識に基づいて、この世界と人々はただの傀儡、依り代として存在している。俺とお前には、その何者かによって同じ人間の知識が与えられている。それだけのことだ」

その台詞を咀嚼するのに、数秒の時間を要した。

「何者かって、そいつはいつたい」

「知らん」

「俺とあんた以外の人間にも、誰かの知識が与えられてるのか？」

「少なくとも、俺が接した人間はそういうことはなさそうだ。お前もそうだろう」

「なぜ、俺があんたと同じ知識を持っていると判った」

「さあな、何故か知っていた、としか言えん。自分でも信じられなくて、今まで様子見していたくらいだからな」

俺の矢継ぎ早の質問にも、よどみなく答えてきた。まるで俺の考えを読んでいるかのよう……いや、実際読んでいるのだろう。俺の知識を同様にもっているのなら、思考パターンもお見通しということか。

問い詰めるネタが尽きると、あとは沈黙するしかなかった。ゲンドウの側からは何も語りかけてはこない。

ややあつて、不意にゲンドウが背を向けた。遠くからヘリの音が聞こえてくる。

「お前もなんとなく判ってはいたのだろうか？ お前の行動は、『奴』にはできん芸当だ。頑なな綾波レイの心を揺さぶり自分に目を向けさせ、惣流アスカにはエヴァへの執着を薄れさせた。葛城ミサトや赤木リツコにさえ、ある程度の影響を与えることができた。ただ衝突を避け、他人の顔色をうかがいながらヘラヘラと笑っていただけの『奴』にそんなことができたとは思えんし、そもそもしようとすら思わんだろう。自分によって誰かが変わっていくことを何よりも恐れる、『奴』はそういう人間だったはずだ」

その台詞は、事のほか俺に重く突き刺さった。それは間違いなく、『俺』が意識しない……いや、判っていて目をそらしていた『俺』自

身のことだったから。そして、この世界に来て俺がしてきたこと自体を、根底から揺るがすものだったから。

何も言えず固まっている俺を一瞥し、近くに着陸した軍用ヘリへと、ゲンドウは歩いていった。

ヘリが飛び立った後、俺と、長く伸びた影だけが残された。

シャワーを浴びながら、俺はゲンドウの言葉を思い出していた。ゲンドウのこと、この世界のこと。どうしても重く引っかかってしまうのは、やはり『俺』のことだった。俺は本当に『俺』なのだろうか？『碇シンジ』と記憶や価値観を共有しているのだから、別人であることには違いはないだろう。だが、『俺』とも『碇シンジ』とも違う、別の何かが混じっている気がしてならない。ゲンドウの台詞が、その違和感を明確なものにした。

『自分によって誰かが変わっていくことを何よりも恐れる、『奴』はそういう人間だったはずだ』

確かにそうだ。自分が誰かに影響を与えて、その影響によって誰かが傷つく、あるいは自分が傷つく、そういうことに酷く恐れを抱いていた。だから、人間性に深く踏み込むような他人とのコミュニケーションは決して取らないし、取れない。『俺』は確かにそういう人間だった。

零号機の中で見た映像が、脳裏にオーバーラップする。

あの世界の『俺』は、コミュニケーションに対する恐れから、いつしか、どこにいても疎外感を感じるようになっていた。どこにも自分がいない。自分がいても全てが回る。そんな状況がどうしようもなく嫌だった。

こんな人間に、ミサトさんや、リツコさんや、レイやアスカに対して何かを言う資格があるのか？

これまで語ってきたことや行動が、彼女らを不幸にするのではな

いだろうか？

熱いシャワーを浴びているのに、悪寒を感じた。

シャワーから出ると、アスカは不貞腐れてソファで丸くなっていた。冷たくされたことにショックを受けて出て行かれたらどうしようかと思ったが、よかった、と安堵する。

いつものようにタオルケットを用意し、アスカにかけてやろうと近づいた。

「ねえ、シンジ」

不意に声をかけられ、かなり驚いた。

「……なんだ、起きてたのか。どうした？」

「少しでいいから、その、愚痴：聞いてくれない？」

その言葉を聞き、俺はまだ休めないことにため息を一つついたが、少しだけ安心もしていた。素直に愚痴を吐き出す気持ちがあるなら、きっとまだ大丈夫だ。今の俺でも、とりあえず聞き流すくらいはできるだろう。俺は冷蔵庫からビールを二缶とグラスを持ってきた。

「ほれ。こういうときは酔って吐き出しちまったほうがいいだろ」

グラスにビールを缶の半分ほど注いで、アスカに手渡す。

「む……」

起き上がったアスカは、グラスを見て少しだけ躊躇したが、受け取った。これまでも、俺の部屋でちよくちよく飲んだりしていたから、飲酒自体にあまり抵抗はないはずだ。受け取った手で、勢いよく中の液体を口に流し込んだ。

そんな様子を見て俺は苦笑し、隣に座って残ったビールを一口飲んだ。

グラスを開けて顔を真っ赤にしたアスカは、30分ほどマシंगा

ンのように喋りまくった。今日　もはや昨日だが　のデートのしょうもなさが始まり、ミサトさんの生活能力の低さを貶し、加持さんの趣味の悪さを腐したかと思えば、そんな彼が、自分が子供のころから見ていてくれたこと、暴漢から身を挺して守ってくれたこと、ギムナジウムで虐めにあつて潰れそうになっていたときに支えてくれたこと、などを一生懸命に語る。そんなアス力はとても楽しそうで、ああ、これが恋する少女というやつなのだなあ、と妙に感心してしまった。

「他の大人はアタシをエヴァのパイロットとか成績のいい優等生としか見てくれなかったけど、加持先輩だけはアタシ個人をきちんと見てくれてた。そう思ってたのよね」

途端に、アス力の表情が曇る。そこから先は、少しづらそうに、ぼつり、ぼつりと語られた。

デートから逃げ出した後、一度はミサトさんの部屋に帰ったらしい。自室で不貞寝していると、酔いつぶれたミサトさんを抱えて、加持さんが訪れた。

二人で何をしていたのか、と加持さんに問い詰めたが、いつもの飄々とした感じではぐらかされる。それでも食い下がると、苦笑しながら、やっぱりアス力は葛城によく似ているな、と宣ったという。「アタシも結局、昔の彼女と重ねて見られてたのかと思うと……なんかこう、やるせなくて、ね……」

「そっかあ、確かにそりゃ辛いよなあ」

ビールを一口流し込み、答えた。先ほどアス力に注いでやった缶はもう空で、新しく開けた缶も半分ほどになっていた。アス力はそんな俺を怪訝そうに見つめた。

「……それだけ？」

「ん？」

アス力の問いかけの意味が判らず、思わず見返してしまった。

「いや、アンタのことだから、二言三言お説教がくるもんだとばかり」

「俺を何だと思ってるんだよ。説教して欲しくてグチってるわけでもないだろ？」

「そりゃ、まあ、ね……」

苦笑するしかない。

「その手のアドバイスは苦手なんだよ」

精神年齢二十一歳と言っても、恋愛経験はヘタすると中学生以下だ。

「そっぴゃ、アンタのそういう話って聞いたことないわよね。ここに来るまではフツの中学生だったんでしょ？まさか恋の一つもしたことはないってことはないわよね」

『シンジ』の過去で言うなら、ゼロだ。ダメ親どものせいとそれどころじゃなかったというのが実情だろう。『俺』の方は、まあ、皆無じゃないという程度。どう答えようか悩んだが、どっちにしろ話して楽しいことでもなさそうだ。

「残念ながらね。あんまり女子を好きになっただって記憶がない」

「なーんだ、つまらないヤツ」

そう言って、つまらなそうにグラスを仰いだ。アスカのグラスは最初の一杯以外はジューズだ。さすがにもう酔いは醒めつつあるのかもしれない。と、突然ニヤリと笑みを浮かべた。

「レイはどうなのよ。判ってるんでしょ？あの子の気持ち」

「あー……」

こう来ることを予測できなかったのは迂闊だった。

「そういう風に見たことがないと言えば嘘になるけど、本気で自分の彼女にしたいかって言われると、正直よくわからん」

幾分俺も酔っていたのだろう。まじめに答えてしまった。

「まあ、俺は万事こんな調子なんだよ。誰かのことを、あ、いいなと思っても、自分の感情がそこから先に進まないんだ。他人に興味が沸かないつつつか……」

「もしかしてシンジって、ナルシスト？」

若干引き気味に、アスカが問いかけてきた。

「違う違う。むしろ自分なんざ大っ嫌いだ」

「好きも嫌いも、自分に意識が集中してるって意味では一緒じゃない」

ぐ、と俺は言葉に詰まった。

「……大学で心理学でもやってたの？」

「ま、かじったくらいね。ってか、アンタの場合心理学って言う程のもんじゃないわよ」

なんか俺が単純だって言われてるみたいで不愉快だ。まあ、言ってることは間違っていないけど……

「俺のことはどうでもいいんだよ。アス力はどうなんだ？」

「んー、まだちょっと釈然としない部分はあるけど、とりあえず愚痴ったら気分が軽くなったわ。加持さんの台詞も、重く受け止めすぎなのかも知れないしね。まあ、その…ありがと」

照れたように柔らかい笑みを浮かべて言うアスカに、俺は少しドキッとした。

「どういたしまして」

動揺を隠すように、苦笑を浮かべて応える。

「ま、アンタもね、たまにはアタシたちに愚痴ったりしなさいよ。そうでなくても無駄に気苦労多そうなんだから、アンタは」

「無駄につて、ひどいな」

拗ねたように言いつつ、アスカの気遣いが何故か泣けるほど嬉しかった。

不意に、ゲンドウの言葉が脳裏によみがえる。

『この世界と人々はただの傀儡、依り代として存在している』

アスカの言葉も俺の感情も、何者かの統一された意思によるものだということなのだろうか。そのことに思い至り、慄然とした。

「シンジ、ちょっと」

焦ったような声に顔を上げると、アスカの心配そうな瞳が向けら

れていた。

「大丈夫？真つ青な顔してたわよ」

「あ、ああ、ちよつと疲れたかも。もう寝るわ」

「そう？悪いわね、こんな遅くまで付き合せちゃって」  
時計を見ると、もう四時近かった。

「アス力もさつさと寝ろよ。ま、明日も休みだけだな」

「はいはい。じゃ、おやすみ」

アス力は座っていたソファにそのまま横になり、足でタオルケットを引き寄せてもぐりこんだ。

その様子を見届けた俺は、自室へ引つ込み、言いようのない不安を抱えながら、浅い眠りに付いた。



## 第二十三話 暴露と油断

「……どういうことか、説明してもらいましょうか、シンジ君」

目の前には、腕を組んだミサトさんが、眉をひそめて俺をにらんでいる。パイプ椅子と簡素なテーブルがあるだけの、殺風景極まりない部屋。一言で言えば、俺は今、尋問されている。

罪状は命令無視であった。

どうしてこんなことになっているかと言えば、第十二使徒の殲滅作戦における、俺の行動に原因がある。事前に綿密な作戦検討を行ってフォーメーションを決定し、三人に対して十分なブリーフィングを行ったうえで出撃したというのに、使徒 空中百メートルほどに浮いた、白黒縞模様の球状の物体 が射程に入った途端に、俺は作戦を無視して攻撃し、直後、敵に背を向け逃亡したのである。普段チームワークだ何だとアスカやレイへ偉そうに説教している俺が突然そんなことをしたのだ。ミサトさんも肝を潰しただろう。

「あなたがしたことは、決して許されないことよ」

冷徹な声で、演技臭いほど冷徹に、ミサトさんが諭す。

「でも、シンジ君が理由もなくそんなことをするとも思えないわ」  
ましてや、結果が結果である。初号機の攻撃が使徒に着弾した瞬間、使徒の直下を中心に、地面に黒い何かがシミのように広がった。それは急速に面積を広げ、あっという間に直径数百メートルを覆う。そしてそのシミは、地上にあるものを底なし沼のように飲み込んでいった。

俺は、レイとアスカに逃げるよう怒鳴りつつ、手近なビルによじ登って、沈み行く建築物を飛び石のように踏みつけて逃げ切った。  
式号機、零号機も無事だった。

うまくいったというのは、あくまで結果論である。普通に考えれば、俺の行動は意味不明であるばかりか、極めて危険である。砲撃することで自分の位置を知らせ、あまつさえ敵に背後を晒すのだから、後ろから撃たれてもおかしくない。

ただ、俺は知っていたのだ。あの使徒の能力を。アニメと同じという保証などなかったが、それでもあの形状から、アニメと大差なからうという確信があった。実際のところは、確信、などと言えるような立派なものではない。要は、考えるのが面倒臭かっただけだ。最悪後ろから撃たれてもかまわないと、思考のどこかにあったことは否定できない。

「何か言ったらどうなの！シンジ君！」

沈黙に焦れたミサトさんが声を荒げた。俺は妙に凪いだ自らの感情に戸惑いつつ、沈黙を保つ。

「このっ…！」

「落ち着きなさい、葛城三佐」

部屋にリツコさんが入ってきた。数枚の書類をミサトさんに渡す。

「目標の正体が判ったわ」

そう言って、書類を読み上げる。

「使徒の本体は、地面のあの黒いシミよ。直径六百三十メートル、厚さ約三ナノメートル。その極めて薄い空間を内向きのATフィールドで支えているわ。その内部には、ディラックの海と言われる虚数空間を形成している。通常の物理法則が通用しないその空間に落ち込んでしまえば、いかにエヴァと言えど脱出できる可能性はほとんどないわ。危険ないところだったけど、あの行動のおかげで、兵装ビル群の被害だけで目標の正体を暴くことができたわね」

「そんなの結果論だわ！相手の能力が判らない段階で、あの行動は危険すぎる…」

「判っていたんでしょう？シンジ君」

ミサトさんの言葉をさえぎるリツコさんの問いかけに、俺は顔を上げた。

「……何を言っているの？リツコ」

戸惑うミサトさんを見、リツコさんは俺に確信に満ちた目を向ける。彼女は以前から俺に疑念を持っていたが、それが確信となる何かを手に入れたのだろうか。ゲンドウから、何か言われたのかもしれない。

俺は、わざと溜息を一つついた。自分の気分を落ち着かせるために。

「信じてもらえるか判りませんが、全て、お話ししますよ」

「別の世界、ねえ……」

呆れたような口調で、ミサトさんがこぼす。

「フィクションにしても、荒唐無稽に過ぎるわね。C級もいいところだわ」

リツコさんのため息混じりに言った。二人とも冗談だと思っているのか。まあそうだろうなあ。

「信じられないのも無理ないですけどね。でも、嘘だったらもうちょつともっともらしい事を言いますよ」

セカンドインパクトが発生しなかった世界からやってきた人間の意識と碇シンジの意識が交じり合って、今の俺を形作っていること、その世界では、エヴァや使徒の物語がアニメ・漫画になっていること、こちらに来て初号機や零号機の意識に触れたこと、初号機の中の碇ユイから多くの知識を得られたこと　洗いざらい、二人に語った。

言っていて、本当に出来の悪いシナリオだと思う。矛盾に満ち、それでいて御都合主義がちりばめられている。

「で、今回の使徒の正体を知っていたから、あんな行動を取ったと、そういうわけ？」

「そういうわけです」

眉間にしわを寄せ、コメカミを押さえるミサトさん。まさか、こんな与太話で弁解されるとは思ってもみなかったのだろう。対応に苦慮しているように見える。

「あの縞々の球体として突如第三新東京市上空に現れること、エヴァからの最初の攻撃に反応して正体を現すこと、あんな風に全てを影の中に引きずり込むこと　少なくとも、これらは俺の見たアニメと一致しています」

「それなら、倒し方も判るわけよね。まさかあんなものに敗れるようなシナリオではないでしょう？」

少しバカにしたような声色で、リツコさんが尋ねる。だが、俺はそれに沈黙せざるを得ない。

「どうしたの？まさか倒せないとか……」

「いや、倒すには倒したんですけどね」

怪訝そうな顔を並べる二人に、俺は苦笑しつつ語る。

「アニメじゃ、初号機が一度あの影に飲み込まれるんですよ」

「え、それじゃあ」

「で、脱出方法がわからないまま、エントリープラグ内部の生命維持も限界に達して、危うし碇シンジ……ってところで、初号機が暴走。あとは、何がどうなったんだかわかりませんが、上空のあの球体を内部からぶち破って帰還、と」

いよいよ二人の表情がヤバイ。リツコさんは呆れ返っているし、ミサトさんはうつむいて、肩を震わせている。

「……いい加減にしなさいっ！」

あ、キレた。

「そんなワケの判らない話までして、一体何を隠してるの！言いなさいシンジ君！」

俺の胸倉を掴んで揺さぶるミサトさん。

「ちよっ、苦し……」

「だから、落ち着きなさい」

冷静にたしなめるリツコさん。

「シンジ君」

「はい？」

「初号機が影に飲み込まれて、暴走して脱出するまで、私たちがじつと傍観していたわけじゃないのでしょうか？その辺は何か描かれていなかったかしら？」

「はあ、えーっと、そういえば……」

必死でアニメの情景を思い出す。

「別の作戦を立てていましたよ。確か、ありったけのN2爆弾を影の中に投下して、同時に弐号機・零号機が使徒のATフィールドに干渉することで、初号機だけでも弾き出させる……だったかな？」

「ふん、バカねー。そんなことしたら、初号機は無事でもシンジ君は衝撃でぐちゃぐちゃよ。救出作戦になってないじゃない」

鼻で笑うミサトさんに、俺は苦笑して答える。

「だから、救出作戦じゃないんですよ。碇シンジの生命より、初号機の確保を優先する。確か発案はリツコさんでしたよ」

そう言っただけでリツコさんの方を見ると、なにやらあごに手を当てて考え込んでいる。

「まさか、いくらリツコでもそこまで冷血じゃ……どうしたのリツコ」  
「ミサト、これ読んでみて」

呼びかけられたリツコさんは、書類をミサトさんに手渡した。

「何？ ああ、今回の使徒の殲滅作戦案ね。なにになに？国連軍が保有する全ての投下型N2爆弾九百九十二個を目標内部に投下、爆発の瞬間、エヴァ三機を使って使徒のATフィールドに干渉し、虚数空間の自壊を促す……ってこれ、さっきシンジ君が言ったのとまるきり一緒じゃない！」

「この作戦案は、ついさっき私が書き上げたものだし、シンジ君自身は、先の戦闘からこつち、ずっとこの部屋に拘束されていたのだから、知るのとは不可能よね」

「まあ、実際これくらいしか、やりようがないとは思いますがね  
」

俺はへらへらと返す。それとは逆に、ミサトさんが深刻な表情を見せた。

「リツコ、一つ訊いていい？」

「何かしら？」

「……この作戦、使徒の中に何もとらわれていないから発案したのよね。もし、どれかのエヴァが飲み込まれていたら、こんな作戦は……」

「多分、それでもこの作戦を推したでしょうね」

「っ！」

今度はリツコさんの胸倉を掴むミサトさん。

「勘違いしないで、葛城三佐。ネルフとしては、使徒殲滅が最優先。即ち、唯一使徒に対抗しうるエヴァを失うわけにはいかないの。パイロットの代わりは見つかるし、オートパイロットシステムも開発中よ」

「そんなこと、シンジ君の前で言わないで！」

「いいんですよ、ミサトさん」

なだめるように、声をかけた。

「そういうもんだって、判ってますから、俺は。それに、初号機の場合、使徒への対抗手段っていう以上の価値もあるようですね」

そう言って、わざと意味深長な目配せをリツコさんに送ってみる。ミサトさんの頭の中はクエスチョンマークでいっぱいだろう。握力の緩んだミサトさんの手を、リツコさんはゆっくりと外して、こちらへ向き直った。

「で、シンジ君。どうして今、私たちに話す気になったの？言っておくけど、この部屋の会話は全て記録されているわ。あとで司令が閲覧することも可能よ」

「簡単なことですよ。司令は全て知っていました。だから隠す意味もなくなったということです」

「知っていた？」

「ええ。先日、母の命日に墓参りに行ったんですが、その場で正体

を言い当てられましたよ。      どうも、司令にも別世界の人間の意識があるようです」

今度こそ、リツコさんの顔が驚愕に彩られた。

全てを飲み込む影は、徐々にその面積を増している。水際に立っているかと判るが、まるで、何かを探るように、ゆっくりと周囲を侵食している。エヴァを内部に取り込み、一体この使徒は何を望んでいるのだろうか。

夕焼け空には、おびただしい数の爆撃機が飛んでいる。機体にもよるが、一機につき十個ほどのN2爆弾を抱えることができる。聞く。すると、百機近くの大編隊が、第三新東京市上空を埋め尽くすことになる。衝突などしなければ良いが。

『爆弾投下後、爆発のタイミングをカウントダウンで知らせるから、あなたたちはそれに合わせてATフィールドに全力で干渉してちょうだい。影が広がってきたら撤退して。くれぐれも飲み込まれないように気をつけるのよ』

「りようかい」

『シンジ』

ミサトさんからの通信にやる気なさげに答えると、アスカから声がかかった。

『また、さつきみたいな無様なマネしたら、アタシがあんたを影に蹴落とすわよ』

言葉は怖い、表情は…表情も怖い。先の戦闘で、俺が敵に背を向けて逃げたのが相当気に入らないらしい。まあ、これまでは俺も割とイケイケな戦い方してたなあ。幻滅させてしまったかも。

「へいへい。でも、気持ちばっかり前のめりなのもよくないぜ」

俺の軽口に、アスカはどぎつい視線で返事した。こわこわ。

実際、俺はこの時油断していたのだろう。アニメでも実績のない

作戦。だが、他にやりようもないし、たとえ失敗してもいつだって逃げる用意はある。少なくとも危険はなかるうと、タ力をくくっていた。

『それじゃ、行くわよ。作戦開始！』

『N2爆弾投下！』

ミサトさんの号令に次いで、伊吹さんの国連軍への指示が飛んだ。上空から、雨のように光の線が流れる。徐々にドラム缶のようなシルエットが見え、ごうという風切り音とともに、次々に影に吸い込まれていく。

『爆発十秒前！八、七、六』

ほとんど隙間のないほどの落下物の滝。

『各機ATフィールド用意、四、三』

それも徐々に勢いを失う。

『二、一』

最後の一個が、ずるり、と影に飲み込まれた。一瞬の沈黙。

『中和開始！』

全力でATフィールドを展開する、と同時に、もはや音と認識できないほどの轟音が襲ってきた。異なる物理法則が支配する虚数空間ですら、その威力を封じ込めることはできず、漏れ出す衝撃が暴風を生み出す！

その風に耐えながら、使徒に初号機のATフィールドを懸命にぶつけ、虚数の器を揺さぶり続ける。

びしり

「それ」に亀裂が入るのを感じる。それはまさに、堰を穿つ蟻の点穴だった。決壊し流れ出す水は、戦略級大量破壊兵器、約一千発分の衝撃。それが、ATフィールドを中和に回して無防備な巨人を襲ったのだ。



一瞬で、俺の意識は焼き尽くされた。

## 第二十四話 依存からの逃避

暗闇の中。

『俺』の目の前には、女が一人、俺に優しい笑みを向けていた。

歳は『俺』と同じくらい。容姿は十人並み。不細工ではないが、ミサトさんやリツコさんとは比ぶべくもない。それでも『俺』は、その笑顔に惹かれる。渴望にも似ていた。その思いのままに手を伸ばす。

だが、触れる直前、彼女の頬をつたうものに気づき、まるで金縛りにあつたかのようにぴたりと動きを止めた。

泣いている。彼女が。笑いながら。何かを押し隠して。

『俺』は抱きしめもせず、涙を拭くこともせず、彼女が隠す何かを推し量ることすらできずに、ただ呆然と立ち尽くした。

やがて彼女の笑顔が遠ざかる。音も立てず、まるで薄れ行くかのように視界から消えてゆく。

ああ、待ってくれ。だが、呼びかける言葉すら『俺』の口からは出ることがなかった。

それは『俺』の希少な恋の記憶。笑顔に惚れて、一方的に舞い上がり、一方的に冷めた。普通の恋人同士が体験するような幸福は全くなかったし、あげることもできなかった。そんな自分勝手な男に、彼女は最後、泣きながら笑いかけてくれた。その時の彼女の気持ち、は全く理解の外だった。ただ、その涙だけは大層堪えた。そういえば、まともに人を好きになれなくなったのは、あれからだ。

間もなく『彼女』が消え、闇の中に『俺』だけが残された。言葉すら忘れた哀れな男は、孤独に苛まれながら、それでも周囲に手を伸ばすことすらせずに、その場にうずくまった。

その『俺』を、俺は傍らで見下ろす。同じように『俺』を見下ろ

している、もう一つの存在に突然気がついた。『彼女』の姿をしたそれが、使徒であると感じたのは、瞳が血のごとき紅だったからだ。『あんたも、『俺』に興味があるのか？』

零号機に覗かれたとき以来、二度目だ。あの中にいたものと似た、巨大な存在感。これが使徒の存在感ということだろうか。ならば零号機も。

目の前の使徒は、かつて本気で求めたものと似た、けれど確かに違う笑みを浮かべ、うずくまる『俺』の前に降り立ち、手を伸ばす。だが、反応はなかった。

「残念だな、『俺』は無駄に疑り深いんだ。そうでなきゃ、もっと楽に生きてたかもしれないけどな」

やがて、『俺』は立ち上がり、前を見る。俺でも使徒でもなく、何もない闇を見据える。使徒が再び肩に手を伸ばすと、触れる直前にオレンジ色の壁に弾かれた。それはATフィールドだった。『俺』がゆっくりと歩き出す。

「周囲と隔てる壁を強固にして、誰とも深く解りあうことなく、社会を浅くなぞりながら浮き草みたいに生きるわけだ」

零号機も、この使徒も、執拗に『俺』が何者であるか探り、思い出させようとする。それにどんな意味があるというのか。

確かなのは、やはり俺と『俺』は違うということ。それでも、根底で共有しているものは多いということだ。

やがて『俺』も使徒も闇に溶けた。次に現われたのは碇ユイだった。ユイは俺の頬に手を触れようとして、やはりATフィールドに妨げられる。驚いたような顔をして、次に泣きそうな顔をした。

「そう、あなたは独りで生きることを選んだのね。でも、その涙はもう自分で拭くしかないのよ」

言われて、俺の頬に水滴が伝っていることに気がついた。

「わかってますよ。この涙は現実の涙じゃない。俺はもう何年も涙なんか流してないんです。……今更ですよ。さっきの姿だってもう五年も前の話ですよ。『俺』はずっと独りだった。いや、他人の

壁の中に立ち入らないように、他人の壁に寄りかかるようにして生きてきました。孤高でもなく、それでいて他人を理解する努力も放棄する、怠け者の生き方です」

「シンジ、あなたはあの人とは違うのよ」

「シンジは……ここにいますよ」

ユイが俺の横に目をやった。そこには、俺と寸分たがわぬ格好、姿勢を保つ『碇シンジ』がいた。ご丁寧に口の動きまで一致している。

「記憶、経験。後天的に得られる総てを共有したんだ。あなたなら、こうなることは解るでしょう」

まったく同じものになったわけではない。だが、どちらに相違が発生しても、それは瞬時にもう片方へ伝わる。ならば、結局外から見た振る舞いは変わらないのだ。肉体を共有し、感情も価値観も同一の人間を、果たして別人と言えるのか？

「あなたには……シンジには、もう母親の庇護は必要ないത്？」

「それこそ今更ですね。それを放棄したのは……いや、やめましよう。あなたはあなたなりに息子を守る意思があつて、その意思と自分の夢との妥協点が今の状況だつてこと、冷静に考えれば理解はできます。納得はできませんが」

「でも、人工進化による神的合一と不老不死の実現は、今の行き詰った人類に新たな希望を……」

「ユイさん」

なにやら弁解じみた解説を加えようとするユイを、俺は遮った。

「俺は、べつにあなたの夢を妨げる気なんてありませんよ。この戦いが終わったら、不老不死でも神的合一でも勝手にどうぞ。まあ、俺は御免ですけどね」

ユイは顔面蒼白になって下を向く。

突然、スポットライトが消えるように、総てが闇に飲まれた。

目を開けると、もうすっかり馴染みとなった白い天井が見えた。夢見が最悪だったせい、酷く頭が重い。状況を確認しようと身を起こそうとしたが、体に力が入らなかった。そういえば、何か腕や腹の大部分を覆っているような感覚がある。無理やり首を動かして自分の体を眺めると、全身包帯だらけだった。固定されていないところを見ると、骨折ではなく裂傷や火傷の類だろうか。何にせよ、尋常な怪我ではないようだった。

肩から腕、そのまま腹まで視線を落とす途中で、蒼銀の塊が視界に入った。

「あ……懲りねえな、俺も……」

レイが俺の左腕の上に突っ伏して眠っていた。この子はまた、何するでもなく俺に付き添ってくれていたのだろう。泣きそうな顔で夢の中の『彼女』の涙が脳裏をよぎる。

「何で今頃、思い出すかね……それもこんなところで」

右腕を持ち上げる。ほとんど感覚はなかったが、なんとか動いた。幸い、右手の指先までは包帯で覆われてはいない。俺は、その右手を慎重に体の左側にもつてくると、そおと、レイの髪を撫ぜた。この健気な子を心配させないような男になれば、俺もまた誰かを好きになれるのだろうか。そんな埒のないことを考える。

やがて、レイは僅かにむずがった後、ゆっくりと頭を上げる。

「……シンジ君、シンジ君……」

俺の名を呼び、俺の腰に腕を回してしがみついてきた。

「お、おい……」

「心配、した」

鼻を胸にこすり付けて、目も上げずつぶやく。

「そっか。ごめん。ありがとう」

後頭部を撫ぜてあげた。

「また、叩きそうになったけど、怪我が酷いからやめる」  
「そっか」

苦笑。

「使徒はどうなった？」

「爆発であの浮いていた球体ごと四散。もう反応はないわ」

「勝てたか、一応……」

だが、レイは何も言わなかった。その沈黙に不吉なものを感じる。

「レイ？何かあったのか？」

たつぷり数秒、レイは逡巡するように視線を泳がせた後、つぶやいた。

「初号機が、死んだの」

「初号機が……死んだ？」

まったく予想だにしない言葉が返ってきたから、俺は鸚鵡返しすることしかできなかった。

「どういうことだ？」

体を起こし、レイは硬い表情のまま答える。

「もう、初号機は動かない」

「そんな……エヴァなら、N2爆弾の衝撃なんかものもしないんじゃないのか？」

無事とは行かないまでも、それこそパイロットが死んだとしても、修理すればまた動くようになるんじゃないのか。

「体の方は無事。でも、コアが……」

「そこから先は、私が説明するわ」

突然かけられた声に視線を向けると、リツコさんが入ってきた。

「リツコさん、初号機が動かないって、一体」

「……順序立てて説明するわね。作戦中、使徒のATフィールドから漏れ出した爆風がエヴァ初号機を直撃。衝撃自体は大したことなかったけれど、放射熱の方は桁違いだったわ。装甲の80%を融解させるほどに。その熱量によってエントリープラグ内のLCL調整装置に異常が発生して、衝撃とLCLに伝わった熱とであなたは意

識を失った。ここまではいい？」

気を失ったのみならず、全身に火傷を負っているとのことだ。浅間山のマグマに飛び込んだときよりも被害が酷いことになる。いたいどれほどの熱量だったのかと、今さらながらぞつとする。だが、「まさか、その熱でエヴァがいかれたってことではないですよ？」その問いに、リツコさんは首を横に振る。

「使徒が自壊し、衝撃が納まったとき、まだ初号機のコアの反応があった。けど、ケイジに戻して検査したとき、既にエヴァの神経パルスも自我境界線も失われていたわ」

「それは……」

「魂は失せ、ガフの部屋に帰った……あなたなら、これで解るかしら」

「えっ……」

ガフの部屋、総ての靈魂が生まれる源、リリスの胎内。そこに帰ると言うことは、日本風に言えば成仏ということだ。俺のあんな台詞ごときで諦めたというのか。

俺の反応を見て、リツコさんは訝しげに問うた。

「シンジ君、もしかして、またお母さんに会ったの？」

リツコさんには話しておいた方がいいか。俺の責任だし……  
覚悟を決め、俺は気絶している間に見た内容を話した。

「……それは、また……あなたも残酷なことを言ったものね」

俺が話し終わると、リツコさんは首を振って答えた。

「そう、ですかね」

「碇ユイ博士が提唱した第一期E計画、あなたはその内容を聞いたかしら？」

「あ、ええ、大体は」

進化の過程にあるはずなのに行き詰まりつつある人類を、人工的

に進化させ、「神への階段」を一足飛びで上らせる。その手段としてまず、現生人類の母たるリリスをコピーして神の器を作り、人の魂を宿す。これが人と神とが対等となる、いわゆる「神的合一」。その器として開発されたのがエヴァンゲリオン零号機、および初号機だ。

リリスのコピーたるエヴァはまた、新たなるガフの部屋でもある。現生人類は死ねばリリスの胎内へと帰るが、これらを総てエヴァの胎内に取り込み、新たな生命として出産する。こうして生まれた新人類は、S2機関を持つ使徒ほどではないが、現生人類からみればほとんど不老不死に近い生命力を持つことになるらしい。のみならず、ガフの部屋での体験を記憶したまま生まれる人間は、一緒に溶け合ったすべての他者の心を理解している。こうして人類は融和しあい、新たなるステージへ進む……

アニメで、シンジが一度初号機に取り込まれ、サルヴェージに失敗したにも拘らず、プラグではなくコアから排出されたのは、それを暗示していたのだろうか。

「E計画の核となるエヴァはね、独立した神である以上に、母親でなくてはいけないの。何しろ、人類総ての母とならなくてはいけないのだから」

溜息混じりにそういったリツコさんは、俺から目をそらし、窓の外を眺めながら言った。

「まず誰よりも母親でなければいけないのに、実はその資格を自ら放棄していたことを自覚した。自覚させられた、と言ったほうがいいかしら。そんなことになれば、もはやエヴァとしての自我を保つことはできない。執着を失って死ぬか、さもなければ生存本能だけの化け物になるか、どちらかしかないわ」

……今まで自覚なかったのか。

「しかし、そうすると初号機はもう……」

「コアを換装しない限り、動かないわね……まあ、どのみち、その怪我では、しばらく絶対安静よ。あなたの処遇は、そのうち司令た



ちによって決定されると思うわ」

司令はそれどころではないでしょうけど、と、苦笑しながら言った。

「リッコさん……」

「前に、あなたから相談された話、結果的には解決したことになるのかしら。私は何もしていないけれど」

そう言って、寂しげに微笑む。もはや、碇ゲンドウの最愛の妻は本当に死んだ。諦めさせるどころか、諦めざるを得ない状態になってしまったのだ。リッコさんは、彼の心中を哀れんでいるのか、それとも蔑んでいるのか。

だが、実際のところ、ゲンドウはそれほど堪えてないだろうと俺は思う。彼は、本来の『碇ゲンドウ』ではないのだから。

不意に、病室のドアが開いた。姿を見せたのは長身の男。

「レイ、赤木博士、すまんが、席をはずしてくれ」

「碇司令……」

噂をすれば影。驚きの表情で呆然とするリッコさんの視線の先にいたのは、碇ゲンドウその人であった。

## 第二十五話 世界の理

「それで、何の用ですか、司令？」

リツコさんとレイを病室から追い払い、丸いすにとっかかりと腰を下ろしたゲンドウに向かい、用向きを尋ねる。

「何の用ですか、とはご挨拶だな、シンジ。父が息子を見舞うのに利用など要るまい」

「そういうのは、今までまともに父親をやってきた人間の台詞ですよ」

そう言い返すと、苦笑を浮かべる。決して爽やかじゃないが、今までと違う、なんだか妙に疲れたような笑みだった。

「大したことではない。礼を言いにきたのだ」

「礼？」

「そうだ。お前のおかげで、俺の中の『碇ゲンドウ』がようやく黙ってくれたよ」

意味が判らない。俺が余程不思議そうな顔をしていたのだろう。

ゲンドウは俺の顔を見て、少し意外そうな顔をしたあと、苦笑を深めた。

「そうか、お前はうまく折り合いをつけていたんだな。『ゲンドウ』の方が歳を食ってる分、自我が強固だったということか……」

そう言って、彼は自身の中で起こっていたことの説明を始めた。

通常、一人の人間の中では、一つの意識が総ての記憶・経験の槽を司る。ここに溜まった記憶は、意識を形作り、変化をもたらすという相関を持つ。だが、人によってはこの槽の中に壁が形成され、一部の記憶が意識から認知できなくなってしまうことがある。この切り離された記憶は、ある程度の量になると、本来の意識とは別の、新たな意識を形成することになる。解離性同一性障害と呼ばれる精神疾患だ。

俺の場合、突然、二つの意識・記憶が一つの体中存在することに

なった。それでも、幸か不幸かお互いの記憶の槽を受け入れ、共有することができた。ない交ぜになった二人分の記憶や経験は、『俺』と『碇シンジ』両方の意識に影響し、それぞれを非常に近いものに作り変えてしまった。

ゲンドウの場合、お互いどうしても譲れない価値観を抱えていたため、統合に至らず、解離性同一性障害のような症状を患っていたのだという。

「その譲れない価値観ってのが、碇ユイだったってことか？」

「そうだ。『俺』はこの世界に来て、早々に計画の進行を止めようと考えた。だが、どうしても『ゲンドウ』が、碇ユイに再び逢うという妄執がそれを是としなかった。『俺』と『ゲンドウ』の人格は突然交代してしまう。その頻度はあまり多くなかったが……突然ヤケを起こされるのもまずい。だから、あまり目に付かない程度に少しずつシナリオの歯車を狂わせようとしていたのだ」

レイを俺の護衛にあてる、などと言ってレイを俺に近づけたのもその一環だったらしい。

「お前が予想以上に引っ掻き回してくれたおかげで、こちらは楽ができたよ。そして、碇ユイの死によって、『碇ゲンドウ』は総てを諦め、受け入れた」

「そう、か……」

望みが潰えて、外界からの意思と同化してしまう、という話を聞いて、今更だが、この世界の『シンジ』に対して罪悪感が沸いてきた。もともと在った一個の人格を塗りつぶしてしまうという行為は、殺人に等しい。もちろん、理屈で考えれば、『俺』の方だって塗りつぶされ、殺されたという見方もある。だが、どうしてもこの世界の存在に同情的になってしまう。なぜなら『俺』の方が異邦人だからだ。ここどころ、いろんなヤツに『俺』の過去をほじくり返されているから、なおさらそう感じる。

「ん、どうした？」

「いや、何でもない……んで、あんたはそもそも何者なんだ？」

この間の墓地での会話で、今ひとつ理解しきれなかったのが、この男の正体だ。

「言っただろう。俺には『俺』の お前のもとと同じ人間の記憶が与えられた、碇ゲンドウであつたもの。それだけだ」

「うーん」

釈然としないが、そういうものだと思つしかないのだろうか。

「シンジ、お前は、この世界のことをどう考える？」

唐突な問い。だが、俺も同じ問いをしようと思つていた。この世界を異世界と認識する者が、もう一人、目の前にいるのだから。

俺は考える。

「この世界には、俺の周りには、たぶん、俺の望んでいたものが多くある」

この世界に来てからの様々なできごと、様々な出会いが思い浮かぶ。

「俺の価値を認め、過ちを叱ってくれる人がいる」

ミサトさんが脳裏に浮かぶ。

「俺を頼つて、俺を励ましてくれる人がいる」

アスカの勝気な笑顔がよぎる。

「俺のために……泣いてくれる人がいる」

目をつぶると、レイの姿が見えた。

「俺が心のどこかで望んでいたものが、狙つたようにここにはある。だから この世界はリアルたり得ない。一個人に過ぎないはずの俺にとって、都合がよすぎるんだ、この世界は」

被害妄想かもしれない。行き過ぎた劣等感だ、とも思う。だが、その推測は確信に近かつた。

「この世界は、『俺』の妄想か夢か、そんなものが、何らかの原因で具現化したものじゃないか。俺はそう思っている」

何より、異邦人は『俺』しかないのだ。

「……ふ」

黙って聞いていたゲンドウが、かすかに意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「まあ、妥当な推測だろうな。だが、足りない」

その、人を試すような笑みが妙に癪に障った。

「そういうあんたは、どう考えてんだ」

薄いサングラスの向こうから俺の目を見据え、ゲンドウは語りだす。

「この世界の存在は、少なくとも真実だ。だが、世界の中に存在する個々の具象は、未だ現実たり得てはいない」

この男は、別人格と入れ替わっても、こういう持って回った言い回しは変わらないらしい。

「何と言ったかな、そう、ヒルコのようなものだ」

ヒルコ。古事記において、国生みの神であるイザナキノミコト、イザナミノミコトによって最初に生み出された神子だ。八嶋（日本列島）に先駆けて生み出されたにも拘らず、育たないために葦の舟で流されたとされる。

「……つまり、この世界は出来損ないの世界だ、と言いたいのか？」

俺の問いかけに、軽く頷くゲンドウ。

「この世界の歴史は、その大部分が欠落している。日本の成立・発展、神智学の拡大、二度の大戦、経済成長、アダムやリリスの発見、セカンドインパクト、その後の世界的な混乱……今、我々がいる環境を構成するために最小限必要な事象だけが存在しているのだ。それ以外の事象は存在していない。このことは恐らく、純然たるこの世界の人間には、意識することすらできないだろうがな」

現実ならば、過去に存在するどんな些細な事象が抜け落ちただけでも、現在は成り立たないはずである。ノート一冊分の辻褃合わせとイメージによる補完だけでシチュエーションが成り立つのは、フィクションだけだ。

それが何を意味するのか。俺が言葉に詰まると、ゲンドウは続けた。

「俺とて総てを掴んでいるわけではない。老人どもに気づかれない範囲で、この世界の歴史や考古学、国家、宗教に関する資料をありったけかき集めて、マジに詰め込んで解析して得た推論だ」

そう言つて、椅子から立ち上がり、俺を見下ろした。

「まあ、そんなナリでは考えもまとまるまい。ゆっくり休んで、治しながら考えてみるといい」

席を立つ。そこで俺は、大切なことを思い出した。この次の使徒は、確か。

「司令、参号機は……」

だが、ゲンドウは口の端をかすかに吊り上げると、言った。

「判っている。あんな気分の悪いシナリオは俺も避けたい。鈴原トウジのことは任せておけ」

その言葉に、とりあえずは胸をなでおろす。ゲンドウはそんな俺を一瞥し、踵を返した。扉の前で、振り向きもせずと言う。

「俺はこれから、補完計画の停止を目指す。だが、おそらく、この世界が『新世紀エヴァンゲリオン』を基にしている限り、最後は主人公たる碇シンジに委ねられることになるだろう。そのことを覚えておけ」

俺の反応を待たず、ゲンドウは去っていった。

一人になって、白い天井を眺めつつ、考える。

未来のない不完全な世界、主人公たる俺、俺に都合のいい登場人物、『俺』の記憶を持つ碇ゲンドウ……

「この世界が不完全だと言うならば、その後どうなるというんだ？」  
口にして考える。ゲンドウはこの世界をヒルコに例えた。ヒルコとは育ため国、育ため世界。ならば、この世界でいかに努力して悲

劇を回避し、みんなが幸せになるように努めたとしても、いずれ海に流されるがごとく、消滅する運命なのだろうか？それでは一炊の夢と変わらない。

それとも、完全な世界とすることができるのだろうか？そのために何が必要だというのか。

ゲンドウが出て行く間際に吐いた言葉、「最後は主人公たる碇シンジに委ねられることになるだろう」……つまり、あの男は今日話したこと以外にも何かを知っている。奴の言う「最後」に何が起るのか、見当くらいついていなければ、あんな台詞は出ないだろう。

「…だめだ」

考える材料がなさ過ぎる。仮定に仮定を重ねるのは危険だし、かといって土台となる前提条件が少なすぎる。とりあえずはつきりしたのは、誰かの陰謀に引きずられてる状況は全く変わらんということだ。

「主人公はクライマックスになると肝心な秘密を知ることができないってことか。ちく、しょう……」

思考を中断した途端、意識が沈み始めた。朦朧とする脳みそが、そういえば自分が怪我人で、しかもひどく疲れていたことを思い出していた。

## 第二十六話 ルーティン・ワーク

初号機の中の『碇ユイ』と、ゲンドウの中の『碇ゲンドウ』が逝ってしまったあのと、彼は、副司令とリツコさん、ミサトさんを集め、全てを話したらしい。全てというのは、南極で「アダム」が見つかったから、セカンドインパクト、エヴァンゲリオンの開発、使徒との戦いに至るまでの、一連の背景だ。そこにはゲンドウと副司令はもちろん、ミサトさんの父親やリツコさんの母親も深く関わってくる。だから、彼女達の協力を仰ぐ上で、しっかりと話しておくべきだと考えたのだらう。今後の戦いの中で、彼女達を欠くわけにはいかない。

リツコさんには別の場で、本物の『碇ゲンドウ』が死んだことを伝えたのも同じ理由からだ。

結果、リツコさんには敬遠され、激昂したミサトさんに素手で殺されかけたという被害はあったものの、サードインパクトの防止という目的への協力だけは取り付けられたという。顔を酷く腫らしたゲンドウは、俺にそう教えてくれた。

その後、俺とゲンドウの『記憶』を元に、リツコさんやミサトさんと対策を練り、ミサトさんの監督の下、エヴァに乗れなくなった俺がアスカとレイの指揮を執る。そんな体制ができあがった。

俺に指揮を預ける判断をしたのは、ミサトさん自身だった。俺に現場の判断を任せ、自分は大局を見据えた作戦立案と他部署との調整事に専念するのだという。その口ぶりには、「使徒を殲滅する」という行為に対する拘りが薄れているように感じた。

「別に何がどうしたってわけじゃないけど…そう、復讐の対象が変わっただけね」

自嘲気味に、ミサトさんは語ってくれた。使徒なんかよりも、セカンドインパクトすらもその一部に組み込む、狂人たちの計画を今



は潰さなければならぬ。叶うならば、その狂人どもをこの手で撃ち殺してやる。笑いながらそう宣った。

「それにね、人相手となったら、エヴァを使わずとも戦えるようにしておかなくちゃ。これから忙しくなるわあ」

「エヴァを使わず？」

俺が怪訝に思ってたずね返すと、つまらなそうにミサトさんは言っただ。

「アスカ達に人殺しなんてさせられないわよ」

ミサトさんらしい。そう思った。

俺が現場指揮を執ることについて、アスカからは多少不満の声も上がったが、シミュレーションで良好な結果が出たこともあり、概ね受け入れられた。

そんなこんなで、迫りくる使徒を順番に片付けてゆく。

アニメにおいてエヴァ参号機に寄生していた第十三使徒は、参号機が日本に到着した時点ですでに寄生していたと考えられた。このため、パイロットが直接エントリせず、テストプラグ経由で外部からシンクロするという迂遠な方式で起動を試みた。結果、使徒は目覚め、本部への侵攻を開始するが、式号機・零号機は遠慮なく参号機ごと叩き潰すことができた。ちなみに、参号機パイロットとして徴用されたトウジは、結局、一度もエヴァに乗ることなく予備役となった。つまり、機密を口外しないという条件付で無事に元の生活にもどったのである。

第十四使徒、ほとんどの火器をもとめない装甲と強力な光線兵器を持つこの敵との戦いは、壮絶な肉弾戦となった。機動力に勝る式号機を中心に使徒を翻弄するも、強固な外皮の前に攻め手を欠き、時間とともに損耗が増してゆく。辛うじて、式号機が押さえ込み、零号機によるポジトロンのゼロ距離射撃という荒業でなんとか倒すことができた。

衛星軌道上に現れた第十五使徒は、発見されて間もなくにロンギ

又スの槍で貫かれた。ゼーレへの建前として、陽電子砲を積んだ超長距離高射砲台からの攻撃を二、三発試みたが、効果がないと見るや否や槍の使用を即決したのだから身も蓋もない。無論、アニメのような精神攻撃をさせる暇など与えずに済んだ。

いずれの使徒戦も、相応に大変な仕事ではあったが、そこにかつてあった葛藤はなく、発生したイベントに黙々と対処する、まさに「仕事」となっていた。

「エヴァパイロットって、世界を救うエリートなはずでしょう？もう……」

ある夜、例によってグラス半分のビールで酔っ払い、管を巻くアスカと、その横で無表情に話を聞いているレイに、俺は内心困り果てていた。

淡々と進む使徒戦に、アスカもレイも違和感を感じているのだ。

彼女達には本当のことは告げていない。だが、アスカは幼い割に聡明であり、レイは幼いゆえに敏感であった。

「エリートなんつっても所詮、他人が貼り付けたレッテルだろ？あれやこれやと祭り上げられたところで、実際は人類の敵の矢面に立つ一兵卒に過ぎないのさ。そして、やってることはでっかい害獣の駆除だ」

宥めるように諭してみるも収まらない。

「アタシが言いたいのは、何で今頃、そのレッテルが軽くなってるのかってことよ！何よ、ミサトなんて以前は使徒を視線で殺せるくらい睨み付けてたくせに、今じゃルーティンワークこなすみたいに冷めた顔しちゃってさ」

「司令も変わったわ。私や、赤木博士への態度も。何か、司令が目指すものが変わってしまったみたい」

「ネルフの価値観が変わってしまうような、何かが起こったんだわ」

酔った目に鋭い光をたぎらせ、アスカは俺を睨み付ける。俺はその視線に少し怯んだ。

「ねえシンジ、アンタ、何か知ってるんでしょ？」  
その詰問に、

「うーん、まあ、俺も何が起こってるのか知ってるわけじゃないが……」

言葉を濁しつつ、考える。俺はまだ、彼女らに全てを話すべきかどうか迷っていた。今、俺が知るアニメの結末を伝えるには、少々刺激が強すぎるだろう。数秒悩み、少しだけ、情報を晒すことにした。

「……使徒ってやつは、あと二体で打ち止めらしい」

「え……」

よほど予想外だったのか、呆けたような顔をするアスカ。

「で、だ。どうやら使徒以外に戦うべき敵がいるらしい」

「それ、もしかして……人間相手の戦争ってこと？」

肯いてみせる。

「ネルフは軍隊じゃない。汎用決戦兵器なんて物騒なもの持つてはいるが、所詮化け物退治の専門機関だ。それが急に本物の軍隊相手にドンパチとなりや、泡も食うだろうさ」

「でも、エヴァは最強の兵器なんでしょ？防衛戦なら、ケーブルがついてたって関係ないし。それにミサトは元戦自の士官でしょ？それぐらいで慌てる？」

「ミサトさんはミサトさんで色々考えてるのさ。アスカやレイに人殺しをさせたくない、とかね」

そう言うのと、アスカはテーブルにあごを乗せて、憮然とした顔をした。

「なんだか偽善的ー。でも、ミサトラしいっちゃらしいわね」

ここまで黙って聞いていたレイが、口を開いた。

「でも……多分、私たちはそこでも戦わなければいけない」

「そ、そりゃそうよっ！ここまで来て、いくら人間相手でも黙って

みてられるわけないわ!」

アスカがいきり立って見せるが、レイは静かに首を横に振った。

「いいえ、私達の敵は、私達しか相手にできないもの」

「……そりゃもしかして、エヴァ・シリーズのことを言っているのか?」

表情を変えず、蒼髪が少し揺れた。

「どういうことよ。エヴァはネルフのものじゃないの? まさか…

…」

俺は内心で、自分の迂闊さに舌打ちした。ここまで具体的な話をするつもりはなかったんだが。

「……どうも政治的にやばいことになってるらしくてな、ネルフ本部は孤立しかけてるらしい」

三人の間に沈黙が下りる。

「ねえ、シンジ」

「ん?」

「……アンタが前に言ったわよね、みんなといる時間ってやつ。アタシたちが戦って、勝ちさえしていれば……続くのよね」

「……続く、さ」

答えた俺の声は、酷くかすれていた。

その後もしばし雑談していたが、やがて、アスカはソファで寝息を立てはじめる。

「……やれやれ、やっと寝たか」

そう言いながら、タオルケットを出してアスカにかけてやった。俺ももう寝るよ」

レイに声をかける。しかし、彼女は躊躇いがちに口を開いた。

「シンジ君、シンジ君はどこまで知っているの? いつから知っているの?」

「……どうしたの? 藪から棒に」

たずね返すも、レイは黙って俺を見つめる。俺は苦笑を浮かべ、レイの向かいに腰を下ろした。

「大まかなことは、この街に来たときから大体知っていたよ。エヴァの意味、司令の目的、そして……レイのこともね。何故知っていたかは、まあ、そのうち話すよ。この状況じゃ、言っても信じてもらえないだろうし」

「そう……そうなの」

そして、レイは俯いた。

「……私は、私の役目は、来るべき日に全てを融合し、無に返すことだった。そのための核となることだった。それを司令は望んでいた。けれど……」

脈絡なく、レイは自分語りを始めた。隠している意味がないと判断したのだろうか。

「今は、そんなこと望まれちゃいない、か？」

「何故なの？あなたが全てを知っていたことと関係があるの？初号機が死んでしまったことに、関係があるの？私は……」

「レイ」

俯き、とめどなく疑問を吐露し始めたレイを、俺は呼びかける。

「レイは、その言葉のとおりにするのが望みだったのか？今も、そうしたいのか？」

「……わからない。そうするのが当たり前だと思っていたから」

「いつも言ってるだろ？考えるんだ。自分の望みを。本当に司令に従いたいのなら、そうすればいいさ。けど……」

少し躊躇した。それでも、彼女には言わなくてはいけないと思った。

「君の知る『碇ゲンドウ』は死んだ。彼の魂は、碇ユイの魂とともにガフの部屋に還った。今の司令は別人なんだ」

縋るようなレイの瞳は、俺の中の『シンジ』までも揺さぶるようだった。

「失礼します」

俺はリツコさんの研究室を訪ねた。背を向けて何やらタイプしていた部屋の主は、視線だけこちらに向けた。

「珍しいわね。何の用かしら？」

彼女が俺を見る目は、以前とは違っていた。そこには、以前はなかった影がある。見方によつては、『俺』は、彼女が惚れた男を殺した張本人なのだから、無理もない。しかし、俺が視線に怯んだりすれば、きっと彼女はあとで後悔するだろう。だから、俺は努めて飄々と、用件を伝える。

「エヴァのことで、ちよつと相談に乗ってもらえないかな、と」

リツコさんは、軽くため息を吐くと、ようやく身体をこちらに向けた。

「初号機のコア、完全なものにすることはできませんか？」

俺はリツコさんに問いかけた。

「完全なものに、とは、どういうことかしら？」

「S2機関として完成させられないか、ということですよ」

リツコさんは少しだけ驚いたような顔をした。

エヴァ四号機以降は、S2機関搭載型と言われ区別されているが、実は、機構そのものは零号機から搭載されているらしい。

そもそもS2機関とは何なのか。

使徒のエネルギー源と言われる半永久機関。その原理は、南極でのアダム発見から間もなく、ミサトさんの父親の論文で、「スーパーソレノイド理論」として説明されている。俺はその論文を、時間をかけながらもなんとか読み下した。

通常のソレノイドが、コイルに電流を流すことによつて、電磁力から動力を得るのに対し、スーパーソレノイド理論においては、特殊な螺旋構造体の中であるものを循環させることで、虚数空間に満ちるエネルギーを実数空間に汲み上げられる、とする。

あるものとは何か。論文中では、「形而上学で言うところの形相」  
とだけ記述されているが、具体的には、人間の形相、即ち靈魂がそ  
れにあたる。

エヴァのコアは、アダムやリリスのコアを模したものであるが、  
その構造はまさしくS2機関そのものであった。そこに人の靈魂を  
封じ込めて循環させることで無限のエネルギーを発生しうるはずで  
あったが、技術の限界が、封じ込めた靈魂を制御することができな  
かった。このため、エヴァのコアは動力として利用できていない。

それでも、電力供給を失い活動限界に達したはずのエヴァが、暴  
走と言う形で再び動き出すことは、アニメの中でもまああった。

「シンジ君、あなた、その意味を判って言っているの？だれかを生  
贄にしるても言うつもり？」

鋭い視線を向けるリツコさん。

碇ユイの魂を失った初号機のコアを、S2機関として完成させる  
と言うことは、ストレートに取れば、誰かをまたエヴァに溶け込ま  
せろ、ということになるだろう。さすがに俺もそんな恐ろしいこと  
は言えない。

「いえ、マギを、マギの人格移植OSを知るリツコさんなら、S2  
機関に必要な『形相』を人工的に作り出すヒントを持っているんじ  
やないかと思っただんですが……」

「マギを……？」

そう言うのと、リツコさんは煙草を取り出し、火をつける。一口吸  
って、しばし考えるそぶりを見せた。

「マギの人格移植OSは、人間的な直感的判断や発想を実現するた  
め、人間の意思・価値観・記憶を丸ごと移植する。それは言わば靈  
魂のデジタルコピー。その理論を応用すれば、人間の靈魂に近い『  
形相』を得られるのではないか……そう言いたいのかしら？」

「話が早くて助かります。俺もきちんと説明できる自信がなかった  
ので」

そう言うのと、リツコさんは苦笑した。久々に見た、優しげな笑み

だった。

「ふうん、なるほど。確かにその視点は抜けていたわ。私も色々あって疲れていたのかしら」

「え、ということは、もしかして……」

「初号機の再戦力化は当然考えているわよ。それに、あなた達の話では、エヴァ・シリーズと戦う羽目になるかも知れないそうじゃない。アレは完成したS2機関を搭載している上に、高速自己修復すらも可能となるでしょう。言ってみれば複数の使徒を同時に相手するようなもの。動力に限りのあるエヴァでは相手にならない」

そう言いながら、リツコさんはコンソールを操作し、建造中のエヴァ・シリーズ十二体全てが揃い、それら全てを本部側のエヴァ三機で迎え撃った場合のシミュレーションを走らせた。数に勝るエヴァ・シリーズは、ダミープラグによるオートパイロットのためまったく連携が取れず、始めのうちは三機のエヴァに圧倒される。しかし、電源系を破壊されてからは一気に劣勢となる。結局、しとめ損ない復活したエヴァ・シリーズが群がる中、零号機・初号機・式号機は各個撃破されていった。

「けれど、初号機が無限の動力を得られたと仮定した場合は……」

次に起動したシミュレーションでは、初号機の活動限界がない以外、パラメータに変化がないにもかかわらず、先ほどと戦況は大きく違っていた。式号機・零号機のいずれかがケーブルが切断された場合、初号機のフォローに守られながら後退し、スペアのケーブルにつなぎ換えて戦線に復帰する。それを繰り返しながら、三機で丁寧にエヴァ・シリーズのコアを潰し、長期戦にはなったが全滅させることに成功した。

「まあ、実際はあなたたちの腕と戦術にかかっているところもあるし、エヴァ・シリーズの装備も未知数だからあまり当てにはならないけれど。それに……」

「それに？」

意味深な言葉の切りに、俺が焦れて先を促すと、リツコさんは俺



に向き直り、厳しい視線を向けてくる。

それは思いもよらない言葉だった。

「肝心の初号機パイロットが、一番の不確定要素よ」

リッコさんの視線と思惑を、俺は計りかねていた。

## 第二十七話 何もできない

「俺が不確定要素って、どういうことですか」

自分の声が、無意識に低くなった。俺は怒っているのか。いや、これは多分、不安なんだろう。

リッコさんはそんな俺を一瞥し、何も言わず、別のシミュレーションプログラムを走らせた。それは、始めのうちは先ほどと変わらないように見えた。S2機関を得た初号機が縦横無尽に動き回り、他の二機のサポートをしながら着実にエヴァ・シリーズを仕留めてゆく。

「これが一体……」

どうしたって言うんですか。その言葉を吐く前に、シミュレーション映像の傍らに表示されている各機のスレータスの異変に気づいた。

零号機、貳号機の損傷率が、さっきに比べて低い。代わりに、初号機の損傷率が目に見えて高くなっている。奇妙に思い、再びシミュレーション映像に視線を戻した、その直後。

「あっ」

俺は思わず声を漏らした。攻撃を受ける零号機と敵機の間割り込んで応戦した初号機が、その脇から忍び寄った別の敵機によって攻撃を受けたのだ！その一撃は的確に初号機のコアを貫き、行動不能に追いやった。

そこから先は一方的である。エヴァ・シリーズは五機に数を減らしていたが、パイロットの疲労も蓄積した貳号機、零号機は連携がとれず、程なく各個撃破されてしまった。

「さっきのシミュレーションと今回の。違いが判るかしら？」

「よく……わかりません。初号機の動くパターンが何か違う、とか」

俺の曖昧な返事に、リッコさんは向き直って俺の目を見た。

「一言で言えば、初号機の自己防衛を甘くした、というところね」  
「……わざわざこんなシミュレーションを組んだということは、それなりの根拠があるということなんでしょうね」

いくらなんでも、意味もなくこんなことをする時間も陰湿さもないだろう。

「これまでのあなたの行動パターンを見ると、自らの安全より周囲を守ることを優先する傾向があるわ。J Aのときも、浅間山のときも……それでは困るのよ」

どう困るかは、先ほどのシミュレーションが提示してくれたと言っただけだ。

「そう言われても……」

戦いの中咄嗟の判断で、そんなことを気にかけてはいられない。いくら気にしていたところで、アスカやレイに危機が迫っていると見たら動いてしまっただろう。あるいは、その躊躇のせいで判断が遅れ、さらにまずい事態に陥るかもしれない。

沈黙する俺を、リツコさんはしばしじっと見ていたが、やがて、カウンセリングは専門外なんだけど、と小さくため息を吐いた。

「始めは、あなた位の年頃にありがちな若い英雄志向の類かとも思っただけだ……あなた、心のどこかで、自分が死んでも構わないと思っているのではなくて？」

「えーと、そこまで人生諦めてないつもりですが……」

「いえ、単なる自己犠牲とも違うわね、より心理障壁の低い……もう少し考え込んで、すぐに顔を上げて、続けた。」

「たとえば、自分が死んだら、元の世界に戻るんじゃないか、とか」

「まさか」

とんでもない指摘を鼻で笑い飛ばした。帰ることなんて、とっくに諦めてる。

「死んだら帰れるなんて、そんなオカルトな話、想像もしてませんでしたよ。まだ英雄志向だって言われた方が納得がいきます」

「あら、オカルトと言うなら、平行世界の存在自体がオカルトじゃないかしら」

苦笑しながら、リツコさんは突っ込みを入れた。

「シンジ君、あなた以前、自分が存在できる場所を守りたいって言ったわよね。あなたの行動パターンは、それと矛盾しているのよ。目的が自分の存在なら、自分のことをないがしろになんてできないはずよ」

じつと、俺の目を見据えて語るリツコさん。何となく視線を合わせていづらくなり、目をそらす。

「……わかりましたよ。気をつけます。初号機のこと、よろしくお願いしますよ」

踵を返し、そのまま、逃げるように研究室を後にした。

廊下を歩きながら、リツコさんの言葉を反芻してみる。

死んだら帰れるかも、なんて真面目に考えたことなどない。否定する材料もないが、肯定する材料も皆無だろう。試してみるわけにもいかない。結局、アテにはいけない類の推論だ。

しかし、思い返せば、こちらに来て何度も命の危険を感じながら、その恐怖をほとんど後に引きずることがなかった。戦闘時や極限状態での恐怖はあるにせよ、普段の冷静さは、我ながら不思議なほどだ。

俺は意志が弱い。命の危険とはほとんど縁のなかったあの世界においても、俺の精神力は人並み以下だった。クールを装い、適当に力加減をしてうまいこと渡ってはいしたが、実際のところ、緊張や不安を押し殺して表面を繕っていただけだ。まして命のやり取りを実行するとなれば、きっと飯も喉を通らず、使徒ではなくストレスにやられてリタイヤしていたのではないか。

軽く考えればこそ、冷静にもなれる。その軽さが、「死んでも元

の世界に帰るだけ」という、ほとんど実現性のない無意識の期待に根ざしたもののというのなら……

「……うつ」

突然、背筋に言いようもない感覚が襲う。その感覚は胸、肩そして全身に伝わり、震えとして現出した。

「あ、何だ？」

震えが……体の震えが止まらない。歯の根が合わずカチカチと音を立てる。視界に映るものが意味を失い、周囲の状況から隔絶されたような感覚に陥る。

「あら、シンジ君、ちょうどよかつ……ちょっと、どうしたの？」  
聞き覚えのある声を最後に、全ての感覚がブラックアウトした。

『最終安全装置解除、エヴァンゲリオン初号機、リフトオフ！』

エントリープラグの中に響き渡る、ミサトさんの声。

俺はこれから、襲い来る使徒と戦う。

初号機から固定具が外される感覚。よし、いくぞ！

だが、初号機からの応えはなく、手も足もほとんど動かない。

「え、ちょ、何で……うつっ！」

支えを失い、満足に動くことのできない人型決戦兵器は、僅かな脚の動作により、バランスを失い前のめりに倒れた。

『シンジ君、何してるの！』

「いや、ちょっと、なんで動かないんですか、これっ」

立ち上がることもできず、もぞもぞとしか動かない手足を必死で動かし、なんとか仰向けに転がった。その視界には使徒の姿。

「えっ」

黒い手が伸びてきて、視界を埋め尽くす。次いで、頭をつかまれ

持ち上げられる感覚。

頭に途轍もない痛みが襲った。使徒の攻撃が、初号機の頭部を貫いたのだ。

「うわあああああつ！！！」

それが夢であつたのを理解するのに、目に映る白い天井を認識してからたつぷり一分ほどかかった。酷い寝汗が気持ち悪い。寒気すら感じる。

上体を起こし、右腕を毛布の上に出して、ゆっくり、一度、二度と握り、開いた。夢の情景を一瞬思い出し、それが、右手の震えを呼んだ。

自己分析をするまでもなく判った。俺はすっかりビビりきつてしまっているのだ。

結局のところ、リツコさんの推測の通り、俺はどこかで死後のことを軽く考えていたのだろう。それがまったく根拠のない希望であることを認識してしまったがために、薄れていた恐怖が戻ってきてしまったのだ。思わず頭を抱える。

「ったく、今更、こんな」

「シンジ君？気がついたの？」

不意に声を掛けられる。頭を上げると、ちょうどミサトさんが入ってきたところだった。

「びっくりしたわよ。急に倒れるんだもの」

「あ、すみません……なんだろう、疲れてるのかな」

適当なことを言つて誤魔化す。今更、死ぬのが怖くなりました、なんて言えないじゃないか。

「無理しちゃ駄目よー。ここんところ根詰めて何か調べてたみたいだけど」

「あ、やっぱりご存知でしたか」

「そりゃ、ね」

少しの苦笑。俺達を監視しているってことも、今更な話だ。

「で？リツコのところに行つてみたいんだけど、何か掴めたの？」

「あー、……そうっすね」

リツコさんに言われたことが頭をよぎって言いよどむのを見て、ミサトさんは少しすねたような顔をする。

「何よ、私はのけもの？」

「いや、そういうわけじゃないですけど……とりあえず、ミサトさんのお父さんの論文に、初号機復活のヒントがありそうだってことです」

「そう、父さんの論文……」

複雑な表情。それを俺に気取られていることを気がついたのか、取り繕うように笑みを浮かべた。

「それにしても、あれを読むなんてすごいじゃない。元の世界では、そういう研究でもしてたのかしら？」

「まさか。ソフトウェアはちょっとかじってましたけど、生物工学はまったく門外漢でしたし、まして魂とか虚数空間とか、俺の世界では疑似科学やオカルトの類ですよ」

「なあに？父さんの研究がオカルトだってこと？」

「あ、いやそうじゃなくてですね……」

うろたえる俺を見て、ミサトさんはくすくすと笑った。

「つたく、酷いなミサトさん」

「ふふ、ごめんなさい。まあ、今日のところはゆっくり休んでおきなさい。いくら乗るエヴァがないと言っても、あなたの指揮がないと戦力激減なんだから」

「そんなこと言つて、単に自分が指揮を執るのが面倒くさくなっただけじゃないですか？」

「うっさいわね。いいから早く眠りなさい」

すっかり休むのよ、と念を押して、ミサトさんは病室から出て行

った。

ドアが閉まるのを確認し、俺は枕に頭をうずめる。

俺は俺の中の恐怖を自覚してしまった。自分が死ぬことへの恐怖を自覚してしまった。そのこの意味を考える。死を恐怖することは普通だ。恐怖で体がすくみ、思考が止まってしまうのもきつと普通だろう。兵士はそれを訓練で乗り越えるか、麻痺させる。

俺はたまたま無意識でそれを緩和させていた。だが、今は？人並みの死の恐怖を得たことで、俺は一般人、それも平和なあの世界での一般人に成り下がったということなのか。こんな状態では、とてもじゃないが前線には立てない。もしかしたら指揮すらも……

やけに自分の鼓動がうるさい。何か息苦しい。

エヴァで戦えない俺は、ここで一体何ができる？

あの二人の支えになれない俺は、一体何者だと言っただ？

『碇シンジ』の役割を負えない俺は、一体……

「……てっ」

右手に痛みが走る。見ると、拳を握り締めすぎてて、爪が掌を傷つけていた。

「俺は……そうか」

何もできない。

それこそが、間違いなく『俺』だった。

俺が、『俺』に戻ったのだと、悟った。



## 第二十八話 心的外傷

ドカン、と、けたたましい音を立ててドアが開かれた。鍵などか  
けていないのだから、もう少し静かに開けてもらえないだろうか。  
ドアが壊れるじゃないか。

ベッドにもたれて座っている俺を、立ちつくして見下ろす少女が  
逆光気味に見えた。アスカだ。照明もつけず真っ暗だった部屋が、  
急に光を取り入れたため、目が慣れるのに少し時間がかかる。

アスカは俺の顔を見て、僅かに眉をひそめたが、すぐに表情を消  
し、低い声で、吐き捨てるように言った。

「レイが、自爆したわ」

「……なん、だって」

その時、俺はどんな顔をしていただろうか。

ミサトさんの目の前で突然倒れた後、三日ほど入院して体を休め  
ることになったが、退院した俺を待っていたのは絶望だった。なに  
しろ、発令所やケイジに立ち入っただけで吐き気を催し、テストプ  
ラグに近づくと手が震え出すのだ。それにも耐えて乗り込み、LC  
の注入が始まった瞬間　そこで俺の記憶は途絶えている。誰に  
訊いても、このときの様子は教えてもらえなかった。それだけでも、  
どれだけ酷い状況だったかうかがい知れようというものだ。

こんな状態では、出撃はおろか発令所での指揮もままならないだ  
ろう。使徒など目にしたら一体どうなるか。今の俺では、誰の助け  
にもなれない。何とも戦えない。ネルフという組織での最低限の役  
割も果たせない。

それを痛感してしまった俺は、何をする気も失ってしまった。し  
なければならぬことの一つ二つは脳裏に浮かばないではないが、

それに手を付けることも億劫で、俺は誰とも話さず、一人、本部の宿舎の一室を占拠して引きこもった。

いろいろな人が様子を見に来てくれた。ミサトさんは、大人らしく優しく諭しながらも苛立ちを隠しきれず、リツコさんは冷たい表情のまま、それでも自分の言葉がきつかけでおかしくなってしまうたことに責任を感じているようだった。アスカは容赦のない言葉で俺を挑発し、レイは不安げに俺を見て、かける言葉を必死に探していた。

拳句、ミサトさんカリツコさんあたりが差し向けたのだろうか、本部付きのカウンセラーまでがやってきて、俺から病根を引き出そうと話しかけた。

それでも、そのことごとく俺は口をきかなかった。まるで言葉を忘れたかのように、発するべき言葉を思い浮かべることができなかった。人と目を合わせることにすら苦痛だったのだ。

暗い部屋に独り、出される食事だけを体に入れ、それ以外は死んだように黙ってうずくまっていることしかできない。そんな状況が一週間ほど続いただろうか。不意に警報が鳴った。館内放送でサードチルドレンの呼び出しがかかり、携帯電話の着信もあった。しかし、それでも俺は無視した。今の俺に何ができる。発令所で体調を崩して、スタッフに余計な手間をかけさせるだけだ。俺はいない方がいいんだ。俺がいなくとも、きつとうまく回る。そう自分に言い聞かせ、膝を抱えた。

どれほどの時間だったろうか、突然アスカがドアを開けるまで、そのままじっとしていた。

「なん、だって」

それは辛うじて声になった。だが、アスカは答えず、沈黙している。もう一度言われたとしても、理解できたかどうか怪しいところではある。俺は混乱していた。なぜだ、ああ、そういえばアニメでは。しかし、同じ結果にならないように、使徒の能力や顛末なんかは全部伝えていたはずだ。想定外の能力を持っていたのか、それとも、話とは全然違うモノが襲ってきたのか？そういえば、俺はアニメの情報を伝えただけで、作戦立案には参加できていない。まさか、リツコさんやミサトさんがいて無策だったとは思えないが。そうだが、レイと言えば、二人目が三人目に……

ぎり、と音がした。

何の音だろう、と疑問を感じる間もなく、おれは胸倉を掴まれ、釣り上げられた。俺の目に、アスカの激昂した視線が突き刺さる。

「アンタねえっ……どうしたって言うのよ！レイが生死不明なのよ！？アンタ、あの子のことずっと見てたじゃないの！あの子だって、アンタの後ろにひっついて、アンタと話してるの、楽しそうだったのにつ……」

だが、途中で視線は外れた、もう、見ていられないという風に、アスカは目をそらした。突然、脇腹に衝撃が走る。アスカの脛がめりこんでいた。その衝撃で俺は倒れ、ベッドに肩をしたたかに打ち付けた。

「なんでアンタは、こんなになっても、死んだような目してんのよ！」

「アスカ、やめなさい！」

なおも足を上げ、ストンピングの体勢に入ったアスカを、ドアから飛び込んできたミサトさんが羽交い締めにする。間をおかず黒服が入ってきて、何やら喚き続ける少女を連れ出して行った。

残ったのはミサトさん一人。彼女は明かりをつけ、俺を起こしてベッドに座らせた後、自らも椅子に座り込んだ。無表情のまま、じつと俺の目を見据える。

「……さて、シンジ君、いろいろ私に訊きたいことがあるんじゃない

い？」

そうだ、いろいろ訊きたいことがあるはずだ。なのに、一方でそれを止める感情がある。面倒臭い。聞きたくない。俺の感情を揺らさないでくれ。でも、何がどうなっているのか知りたい。レイは、レイはどうなったのか。ああ、でも聞きたくない。なぜだ、俺は、レイのことをあれほど考えていたじゃないか。なんで俺の感情が動かない。自分で自分が信じられない。

そういう訳のわからない思考がぐるぐると頭をかき乱し、俺は言葉を発することができなかった。

しばらく、俺をじつと見ていたミサトさんは、ひとつため息をつくと、語り出した。

「もう昨日になるわね。第十六使徒が襲ってきたわ。あなた達が言っていたとおり、白く光る紐のような形状だった」

ミサトさんの説明は簡潔だった。予備知識通りの姿と融合・浸食能力を持つ使徒相手に、事前に用意した対抗策はすべて徒労に終わった。ポジトロンライフルでは的確にコアを潰すことができず、ソニックグレイブや新開発のデュアルソーのような近接用兵器は、それ自体が浸食され破壊された。ATフィールドが思いの外強力で、N2兵器での熱処理も全く効果がなかった。

それどころか、このN2兵器の使用が裏目に出た。爆発の余波で観測機器の機能が停止している間に、使徒は音もなく移動していたのだ。気がついたときには、爆心から二キロも離れて警戒していた零号機の背後に肉薄していた。そして、逃げる間もなく接触。

「後は、あなた達が語った『シナリオ』通り。マジを持ってしても、融合した使徒を切り離す方法には、辿り着けていなかった。私たちが対策を考えあぐねている間に、あの子は行動してしまったわ。

ATフィールドの反転で使徒を抑え込み、コアのオーバードライ

ブによる自爆を敢行した」

そして、零号機は使徒もろとも、跡形もなく吹き飛んだのだという。

最後まで語り終え、それでも沈黙を続ける俺に対し、ミサトさんは何かを諦めたかのように目を閉じ、立ち上がった。

「こんな状況で言うのも何だけれど、シンジ君もまともな状態ではないのだし、気にしないでおきなさい」

そこで言葉を切り、逡巡する様子を見せた後、俺に背を向けたまま続ける。

「ダミープラントにあるレイの素体のうち一体に、レイと同じ固有波形が現れたそうよ」

それだけ言い捨てて、ミサトさんは出て行った。

レイの素体に固有波形が現れたのなら、それが『三人目』となるのだろう。そうである以上、『二人目』であるあのレイは、死んだ、ということになる。

死。

レイが、死んだ。

その言葉を意識して、俺の体はまた震えだした。

だが、その一方、散り散りに渦巻く思考の片隅で、微かに安堵する自分がいることに気がついた。自分と親しくしていた少女が死んでしまったというのに、である。

「ああ、そうか。そうだったのか」

その意識を直視したとき、俺は自己嫌悪のあまり気が狂いそうになった。

俺は、この世界が、「俺なしではうまく回らない」という事実

安堵していたのだ。

二週間ほど経った。

レイの葬式にも顔を出さなかった俺は、ようやく墓参りをするこ  
とができた。あれ以来、アスカともミサトさんとも会話をしていな  
い。もはや見限られただろうか。そうであってほしいような気もす  
る。

ゲンドウから聞いた話だが、レイの固有波形が発現した素体は、  
『三人目』として目覚める前に、他の素体もろとも突然崩れ落ちた  
のだという。アニメではリツコさんが自らそれを起こしたが、今回  
は誰もその操作をしていない。前触れもなく、物言わぬ彼女らはし  
てC.Lに溶けて消えた。意外なことに、それでもつとも落ち込んだの  
はリツコさんだという。

そんな話も、今の俺にはどうでもよかった。

生前のレイを思えば悲しくもなるが、それ以上に、自分のことで  
手一杯で、ここへもレイの弔いというよりも、現実を直視して、自  
分の今と今後を一人で考えるためという気持ちの方が強かった。

全く、最低だ、俺は。

そついう自己嫌悪が、また俺の思考を鈍らせ、意志を奪う。自分  
が行い得るあらゆる行動に、重い枷がかかっているような感じだ。  
するべきことは判っている。しかし、それを実行する意志が湧いて  
こなかった。そのことがまた、自己嫌悪として重くのしかかる。完  
全な悪循環であった。

結局、墓前にいられたのは僅かな時間だけだった。耐えきれなく  
なったのだ。俺は逃げるように本部へ向かう。その道すがら、今後  
のことを考える。

次が最後の使徒だ。そいつは人間と変わらない容姿で、アニメで

は他人に絶望したシンジに取り入った拳句、シンジの手によって死に、彼の心に深い傷を負わせた。

俺はそいつを、見つけ次第殺そう。いや、さすがに生身では勝てないだろうから、早い内に、そいつが使徒であることを判りやすい形で暴き、エヴァを動かせる状況を作るほうがいいか。あまり関わり合いになつて、情が移る前にやる必要がある。ミサトさんもリツコさんも、事実を知っているのだから、そんなに難しいことではないはずだ。

そして、あとは戦自やゼーレとの戦いの前に行方をくらますのだ。普段のネルフからは逃れられないだろうが、混乱に乗じれば可能かも知れない。俺は死にたくないし、こんな状況でまともに戦いができると思えない。まして、儀式の核にされてしまったらどうなるのか……そういえば、『俺』は劇場版最終話を直接見ていない儀式の中で、シンジの葛藤が描かれたと聞いたが、それがどんな内容かまでは知らない。おそらく、そこで導き出される結果こそが、その後の世界を左右することになるのだろう。こんな風に病んでしまった状態で、重すぎる判断を背負い込むのはまっぴら御免だった。

それは唐突に聞こえてきた。

誰かの鼻歌。ヴェーナーベンの交響曲第九番だ。あまり上手くはない。いや、上手い下手は重要じゃない。そう、これは最後の使徒の登場シーンと同じシチュエーションだ。だが、俺は強い違和感を感じた。なんだ、何かがおかしい。

その違和感の正体には、すぐに気づくことができた。その鼻歌が、女の声だったのだ。最後の使徒、渚カヲルは男性の姿だったはずだ。それに、この声には聞き覚えがある。

本当は、聞き覚えがあるどころの話ではなかったのだが、この時の俺は、それを無意識に否定していたのかも知れない。この異常な

世界においても、あまりにも信じがたいことだったからだ。

ともかく、その声のする方向に歩いていく。もしかすると、と思い、ジャケットに忍ばせていたナイフの位置を確認する。出会い頭で襲いかかってどうこうなる相手とは思えない。だが、万一それで片付くのなら……

果たして、使徒との戦いの余波で瓦礫となった天使像に腰掛けた、奴を見つけた。

「歌はいいわね。歌は、心を潤してくれる」

彼女は、流れるような銀色の長髪を風にたなびかせ、レイと同じ、赤い瞳を俺に向けた。

そう、「それ」は間違いなく女性体だった。そして、その容貌は……決して美女・美少女というわけではない。髪と瞳の色をのぞけば、珍しくもない顔の作りをしている。だというのに、俺は驚きのあまり、その顔から目を離すことができなかった。

「そうは思わない？ 碇シンジ君」

「……どうして」

そう、彼女の顔は、

「それとも、『あちら』の名で呼んだ方がいいかしら？」

邪気なくにつこりと微笑んだ顔は、紛れもなく、俺がかつて恋した人と同じだった。



## 第二十九話 結論

そこにいるのが何者なのか、それを理解することを、俺は一瞬ためらった。ハミングで第九を歌い、主人公の前に登場する、銀髪と赤い瞳を持つモノ。その正体は、最後の使徒であるはずだった。その特徴を、こいつは確かに備えている。だが、決定的に違う。

アニメの使徒は少年の姿をしていたが、目の前のそいつは、女にしかみえなかった。

「わたしの顔、そんなに珍しいかしら？」

珍しくはない。取り立てて美人でも、不細工というわけでもない。平均的な、どこにでもいる顔つき。だが、その顔は『俺』にとって特別な意味を持つ。かつての『俺』の、苦い思い出。不器用なダメ男の、恋愛と呼ぶにはあまりにも情けない記憶。その相手の顔に、そいつはうり二つだったのだ。

「まあ、無理もないかしら」

そいつが右腕を一振りすると、混乱の極地に至る俺の視界が、一気に赤く染まる。見渡す限りの赤い世界に二人きり。あまりに現実離れたその光景を作り出したそれに、俺は一つだけ心当たりがあった。

「渚カヲルの作り出した、電磁波すら遮断する強力なＡＴフィールド……これがそうか」

その光景は、あまりにも非現実的で、俺は、ああ、やっぱりこいつは使徒なのだ、とようやく実感した。不思議なことだが、そう割り切ると落ち着いてしまう。そういえば、使徒が彼女に化けたのは初めてじゃない。あのときはよくわからん精神世界だったが、今回は実体を持って現れた、ただそれだけだ。そう考えると、恐怖よりも怒りがわき上がってきた。

「お前らなあ、一体何が目的なんだ。『俺』の記憶を暴いて揺さぶ

って、何が楽しいんだよ」

しかし、使徒はきょとした表情を浮かべる。

「もしかして、あなた、私がどうしてこの姿で現れたのか判らないの？」

「お前らの考えてることなんか、知るかよ」

「そう。意外と、この世界にもまだ望みがあるのかしらね」

私にはどうでもいいことだけど、とつないで、再び貼り付けたような笑みを浮かべる。

「何の話だ。判るように言えよ」

俺の問いかけには、肩をすくめて応えるだけ。

何でもいい、時間を稼ぐんだ。本部のすぐ近くで、これほど強力なATフィールドを張ったら、すぐに検知されてスクランブルがかかるだろう。なんとか助けが辿り着くまで……

「とりあえず、助けは期待しないことね。惣流・アスカ・ラングレイも、葛城ミサトも、赤木リツコも、今は誰も『存在していない』のだから」

俺の思考を読んだかのように、忠告する使徒。

「……なんだって？」

血の気が引いた。まさかこいつは、既に本部を制圧済みだとも言うのか？しかし、使徒は否定の言葉を吐いた。

「別に、わたしが殺したとかじゃないわよ。殺した犯人がいるとすれば、それは、あなた」

噛んで含めるように語る。意味が解らないぞ、馬鹿にしがたつて。「あなたも気がついていないでしょう？ここは『あなた』の妄想の世界。主人公たるあなたの目に映るモノ、認識できるモノ、そしてあなたが望むモノ、在るのが当然と考えるモノ以外は存在しないわ。はじめからね」

「……ならば、俺が望めば、アスカの駆る式号機が現れて、お前を踏みつぶしてくれるというわけか？いや、それ以前に、俺はお前など望んでないぞ」

彼女の顔をした使徒なんか、思いも付かない悪趣味な冗談だ。

「そうかしら？あなたは望んだでしょう、逃避を」

確かに逃げようとしたが、あれはネルフ関係からの逃避でしかない。俺が生きていくのは、どっちみちこの世界しかないはずだ。

反論しようとして、しかし自らの思考がそれを否定する。人間が、自分の認識する他者との絆を丸ごと否定するのなら、それは世界から逃げることでどう違うというのか？

「この世界に逃げ場なんてないわ。だってあなたを中心とした、そこからの繋がりのみで成り立っている世界だもの。あなたにとって逃げ道になりうるのは、もともと『あなた』が在った世界。今のわたしの姿は、その象徴にすぎないの」

だけど、と言葉を句切り、使徒は腰掛けていた像からふわりと地面に降り立つ。銀色の髪が浮かび、きらきらと赤い光を反射した。

「ただ望んでいるわけではない。あなたには迷いがある。だから、わたしたちはこんな役割を背負わされたのよ」

そう言って、右腕を水平に上げる。

「……シンジ君」

まるで、映画のフィルムが突然切り替わったかのように、死んだはずのレイがそこに現れた。

「……ほんとうに、レイなのか？」

驚きのあまり声がかすれる。生きていたのが嬉しい？いや、この感じは違う。なぜだ？俺の腹からわき上がってくるこの感情は、紛れもなく

恐怖だった。

「あなたにとって、この世界を象徴するのは綾波レイ。そして、あちらの世界を象徴するのがわたし。今ここで、あなたがしなくてはいけないことは、一つだけ。選択よ」

「選択？」

芝居がかった素振り、使徒は語る。

「あなたのポケットのナイフでわたしを殺し、綾波レイを助け出すか。それとも」

手刀をレイの頸動脈に近づけ、言った。

「このまま綾波レイを見殺しにして、元の世界へ帰るか」

千々に乱れる思考を必死でまとめ上げ、思考する。

この世界にいれば、死の恐怖をずっと間近で感じ続けることになる。だから逃げようと思ったのは本当だ。俺が引きこもったせいでは、レイが死んだ。そういう引け目もあった。どっちみち、この世界でも俺は何もできない人間だと思っただら、もうこんな世界にいる理由なんて無かったはずだった。

しかし、あちらの世界の『俺』にだって、何もなかった。他人が根本のところでは恐ろしく、他人と満足に絆を結ぶことができない。そして、あちらでもやはり、『俺』は取るに足らない、いなくてもよい人間だ。そういう虚ろの中に戻れると思うと、怖気が走った。こちらにいれば、少なくとも他人との絆を得ることができた。死線にくぐり抜ける中で、絆を深めることができた。だが、それと引き替えに、自分と、親しい他人の命の危険におびえ続けなければいけない。レイが死んだときの喪失感、それ以上に、その時に自分からわき上がった暗い感情が恐ろしくてたまらない。

ここで死の恐怖を味わうのは嫌だ、さりとて、あちらで生き甲斐の無い生活を送るのも怖い……

……なんだ。俺は、どちらで生きたいかで悩んでいるわけではないんじゃないか。どちらも嫌なのだ。どちらも怖いのだ。

顔を上げ、使徒に呼びかける。

「渚さん、でいいのかな」

「好きに呼びばいいわ。それで、決まった？」

「その前に、一つ教えてくれないか」

「……何かしら？」

「俺が死んだら、『俺』はどうなる？」

「……！」

俺が取り出したナイフの小さい刃を見て、微かに、驚いた表情を見せる使徒。

「あなた、まさか」

「よくよく考えれば、当然のことだ。この世界が『俺』の妄想ならば、俺が『俺』と同じ存在であるはずがない。箱庭の中にある、他よりちよつと思入れの強い人形にすぎないんだ。違うか？」

つまり、俺があちらの世界に帰れるなんて、妄言でしかないってことじゃないか。

言いながら、俺は持っていたナイフを、自分の首筋に当てた。

「まあ、見当違いならそれでもいい。俺はもうどつちも嫌なんだ。

独りぼつちのあの世界も、死の恐怖に耐えながら絆にすぎるこの世界も。……俺を、こんな中途半端な存在として生み出した『俺』に、叶うならば復讐したい」

「血迷わないで！あなたが死ぬ意味なんて何もないわ」

「もともと、この世界も俺も、他人にとっての意味なんて何もない。あんたが言ったとおり、逃げたいだけなのさ。だから、今もこうして逃げるだけだ」

そして、俺はナイフを横に引いた。意外と痛みはない。ただ、やたらと顔を生暖かい液体で吹き上げられる感覚だけを感じた。

死の恐怖でPTSDまで起こしていたのに、自殺するときはずいぶんあっさりしたもんだな。

意識を失うまでの数秒、俺はそんなことを考えていた。

### 第三十話 補完された世界

そこは闇だった。夢や、これまで幾度か見せられた精神世界とは明らかに違っていた。

音も熱も、光も、言葉すらもない。俺がそれまで識っていた感覚のすべてが失われていたのだ。にも拘わらず、俺はそこにある情景を認識することができた。

それはひどくイビツで、これまで物事を認識するのに使ってきた比較と比喻がうまく当てはまらない。だから言語で表すのが極めて難しいのだが、それでも無理に書き下すと、以下のようになる。

俺の足下には、広大な地面があった。地面には纖毛がびっしりと生えていて、一本一本が独特の動きで蠢いているのが判る。俺自身も、そんな頼りない存在のひとつだった。

纖毛の先端は球形に膨らんでいる。その大きさはまちまちで、中には、自身で支えているのが不思議なほど、巨大化したものもあった。

そんな、巨大な球を抱えた纖毛のひとつに、不意に変化が起きる。その纖毛は前触れもなく、ぷつりと根本からちぎれた。糸をぶらさげた球体は、幼子の手を離れた風船のように、ふわふわと浮かび上がっていく。その過程でも、球体は膨張を続けていた。ぶら下がっていた糸は徐々に球体に取り込まれてゆく。

やがて、糸が完全に取り込まれたところには、とてつもなく巨大化し、さつきまでつながれていた地面と同様に、その表面に無数の纖毛が現れた。そうしてそのまま、ゆらゆらと揺れながら飛び去っていった。

翻つてみると、俺が立っている地面も実は球体であり、また別の球体から生まれたものであることが判った。先ほど飛び去った球体も、彼が持つ纖毛の中から、新たな球体が生まれていくのだ。

ミクロにもマクロにも、永遠に続く相似形。それが、俺の今いる

場所であつた。

今ならば、はっきりと理解できる。

あの使徒の問いかけは、限界をきたした世界の最後の賭けだったのだ。

借り物の世界観と、『俺』の乏しい想像力、そして「逃避先を望む心」で成り立っていた、あの脆弱な出来損ないの世界は、逃避のために作り出した場にすら耐えられない、俺の弱い意志によって崩壊の危機を迎え、無数の意志と生命が息づく本物の世界となることを望んだ。いや、望んだのは世界じゃない。世界に意志などない。それすらも、結局は『俺』の意志だったんだ。

それは自問自答。アニメのエヴァンゲリオンで、碇シンジが、内面世界の電車の中で、夕日に照らされながら、知り合いや自分自身に問い詰められるあの場面と同じ。

崩れゆくあの世界を見殺しにするか、執着を蘇らせて持ち直すか。あの赤い空間の中で、二つの選択肢が示されたが、実は明示されないもう一つの選択肢があつた。口にするのも憚られるような、情けない、どうしようもなく弱い自分自身をさらけ出すものだ。

しかし、『俺』はそれをこそ真に望んでいた。

そして俺は選んだ。今ここにある情景を認識できているのはその結果だ。

俺の頭上にも、さきほど飛び去っていったものと同じような、巨大な球体がたゆたっている。熟れきった果実のように、あとは腐って落ちるだけ、という状態だ。

足下の球体、さつき飛んでいつてしまった球体、そして俺の頭上にくくられている球体。それらは、世界そのものだった。

世界には無数の人が在り、人の数だけ膨大な精神構造体があり、それが時々泡沫のようにふくらんで、世界からはじき出される。泡

沫は人の精神をすべて飲み込み、新たな世界として形成される。そこにまたたくさんの人が生まれ、また精神の泡沫を生み出す。

時空から切り離されたこの場で、世界は無限に生まれ続けていた。俺は少しだけ、地面を蹴りつける。すぐに、ぷつり、と地面から切り離された。それは、『俺』という存在が、ふくらみすぎた泡沫とともに世界からはじき出されたことを意味していた。と同時に、その泡沫が新たな世界として存在することを許されたということだ。あの、「エヴァンゲリオン」の世界に似た、しかし少しだけ優しい世界は、こうして存在し続けるのだ。俺は、『俺』はその世界の神となった。

そして、神は世界に実存してはいけない。俺の前にあるこの情景を知っている人間がいないのは、単に説明が遅れているわけではなく、「世界の理を知るものは、世界に存在してはいけない」からだ。だから、俺の精神に干渉して何かを知ってしまった零号機も、使徒たちも、死ぬ他なかった。

これを見た俺の存在も、もはや許されない。だが、俺に与えられるのはただの死ではなかった。

ゲンドウが示唆した、世界に欠けているもの。それを補完するために、『俺』の精神は融かされ、世界に満たされるのだ。それをもつて、世界は一貫した時空を得て、完成する。

世界の原型を作り出し、動かして、仕上げをして最後にいなくなる。それが、『俺』に与えられた役割だった。

考えようによっては単なる生け贄のような話だが、俺の心には恐れも嫌悪もなく、ただ喜びが満ちあふれていた。

だってそうだろう。もう他人を恐れる必要もない。孤独を悲しむこともなく、死に怯えることも、誰かを失うことに怯える必要もないのだ。その上で、俺が好きだった彼女ら彼女らの生きる場として、糧として、俺は役に立つことができるんだ。

どこまでも利己的な、それが本当の『俺』の望みだった。



『俺』が球体に吸収される。もうじき、こうしてくだらないことをグダグダと言語化している俺の思考も途切れるだろう。そのとき、レイやアスカにとつての「本当の日常」が始まる。こんな愉快なことがあるだろうか。もしかしたら、使徒や、他の武装勢力の戦いが待っているかもしれない。それだって、他に目的も未来もない閉塞的な戦いではなく、明日を勝ち取る戦いだ。

まあ、せっかく神様みたいなことをやるんだから、意識を失う前に少しだけ、世界に方向付けをしてやろう。俺の依り代であったシンジと、親しい人間が、多少でも前に進めるように。

これだって単なる自己満足でしかないけど。まあ、いいだろ……

そして、世界は補完された。

シンジは、自分を必死に呼ぶ、聞き慣れた声に引つ張られ、目を覚ました。

「……レイ、レイなのか？」

「シンジ君、気がついたのね。首は？体は大丈夫？」

「生きていてくれたんだ、レイ、よかった、本当によかった……」

「シンジ君？」

会話が噛み合わない。シンジは酷く痛む頭を押さえ、上半身を起こした。そして周囲を見渡して、ようやく状況を思い出した。

「そう言えば、渚カヲルが現れて、そして……」

はっ、と自分で斬りつけた首筋を押さえてみたが、そこには傷一つなかった。

「生きてる……そうだ、渚は？使徒はどうなった？」

状況を掴みきれないシンジがレイに尋ねるも、彼女は首を横に振った。

「わからない。シンジ君が自分の首にナイフを当てた瞬間、急に意識が遠くなって……気がついたら、そこに倒れていたわ」

そう言つて、二メートルほどはなれた地面を指さす。

「もう、あの使徒は見あたらないし、気配も感じない」

「そうか……倒せた訳じゃないと思うんだが」

シンジはそう言つて立ち上がるうとしたが、レイに抱きつかれて止められた。

「レイ、どうしたの？」

「お願い、もう、もう私の前で死のうとしないで。あれを見たとき、どうしようもないほど嫌な感じがした。私のすべてが壊れるような感じがした。だから、お願い」

懇願するように、言葉を紡ぎ続けるレイに、シンジは苦笑した。

「悪かったよ、本当に。……俺も、なんであんな選択をしたのかよくわからないんだ。死ぬのが怖くてパニックを起こしてた俺が、なんで自殺を考えるんだ？もう、あんなことはしないよ。……逃げることは、あるかもしれないけれど」

言いながら、蒼い髪の毛を軽く梳く。それはLCLで痛んで、すこしゴワゴワした、紛れもないレイの髪だった。

「そうだ。……今更だけれど、前の使徒戦のとき、いったい何があったんだ？自爆して、どうやって戻つてこれたの？」

「わからない。私は確かに死んだはず。なのに、気がいたら使徒の横に精神体の状態で居て、使徒がいなくなつたと思つたら肉体まで復活していた」

「そうなんだ。じゃあ、あの……ダミーシステムを使った訳じゃないんだね」

「それはないと思う。死んだらもう二度と復活させないように、赤木博士や司令にお願いしていたし、もうじき素体が崩れ落ちることは、自分でも解つていたから」

自分の復活なき死を覚悟していたという。なぜそんなことを望んだのか、シンジは疑問に思った。それを尋ねると、シンジの目を見据えて、レイは言った。

「……私も、シンジ君たちと同じように、生きてみたいから」

その言葉に込められた意味は、シンジにはよく解らなかったが、それでも、未来を見据える瞳の光を見て、それは好ましいことなのだろうと思えた。翻って、一人ではどうしても前に進めない自分に思わず嘲笑が漏れる。

情けない。あれだけ偉そうにレイにいろいろ言ってたっていうのに、すっかり追い越されてしまっている。エヴァで戦えないから何だというんだ。死が怖いからどうだと言うんだ。そんなものは屁でもない、アスカやレイにそう言ってきたのはシンジ自身だ。自分の土台を、ようやくシンジは再認識できた。

「そっか……そうだね。うん。とりあえず、本部に行こう。使徒が出てあんな分厚いＡＴフィールドを張ってたっていうのに、静かすぎる」

本部は目と鼻の先。ＡＴフィールドなんか張ったら、即座に検知されて警報が鳴っているはずだ。

「そうね。大丈夫？立てる？」

「ああ……大丈夫。俺もいい加減、自分の足で歩かなくちゃな」

「え？」

「ああ、こつちの話。気にしないで」

そして、二人は歩き出した。

### 第三十話 補完された世界（後書き）

残り、エピソード二篇で完結となります。

## エピソード1 続く日常

「……なんだか、あっけないわね」

「そうだなあ」

アスカの絞り出すような呟きに、シンジは呆然と同意の声を漏らす。傍らのレイは黙して語らない。

三人の視線の先では、ネルフ本部施設の解体工事が急ピッチで進められていた。

話は二週間ほど前に遡る。

使徒に遭遇したシンジとレイが、息を切らせて本部にたどり着いたとき、発令所はまさにパニック状態であった。マギが前触れもなく突然システムダウンし、そのまま自閉モードへと勝手に移行してしまったというのである。

このことにより、ネルフの常時・非常時における様々な活動に支障が出ていた。例えば、エヴァのソフトウェアの調整はほぼマギが自律的に行っているし、ハードウェア面の整備とて、マギによる測定と分析結果がなければ覚束ない。それ以外にも、本部周辺の自動防衛システム、セキュリティ、秘匿されているセントラルドグマ内の各種研究、組織戦略分析等々が、ことごとくマギに依存していた。今、ネルフ本部内で生きているのは、旧世代システムでも十分に回っていたOA系、空調やライフラインをはじめとした生命維持系、低レベルの通信系ぐらいのものである。致命的なことに、使徒の出現を検知するための観測系まで機能停止していた。

システムリセットもできず、赤木ナオコが遺した裏コードすら受け付けない。中枢にある生体ニューラルネットワークを直接観測しても、波形はほとんどフラットであった。人間で言えば脳死状態で

ある。

大部分の職員が、通常業務の維持と復旧作業に頭を抱え、奔走していた。そんな状況に二人のチルドレンが戻ってきて、死んだはずのレイをミサトが見つけ泣き崩れてしまい、責任者の指示が止まって混乱に拍車がかかってしまったことなど、全体からすれば小さなことであつた。

そんな混乱の中、使徒との経緯を話すタイミングも得られず、シンジはただオロオロとするばかりであつたが、その状況を大きく動かすものが、前触れもなくメインモニタに大きく映し出される。

この場を収めるべき最高責任者、ネルフ総司令、碇ゲンドウ。めずらしくサングラスを外しており、その暗い瞳がまっすぐこちらを見ていた。

『ネルフ本部の諸君。これまで、この過酷な環境の中、人類の存亡を賭けた任務を、時には非人道的な激務をこなしてきてくれたこと、深く感謝する』

無口、尊大、威圧的と言われたネルフ本部総司令らしくない言葉の後、驚くべき報告がなされた。

『マギの異常にのために諸君は知るよしもなかっただろうが、先ほど、最後の使徒が葬られ、我々の目的の一つを達成した』

どよめきが起こる。最後の使徒が倒されただって？本当なのか？なぜ司令がそれを知っているのか？皆、疑問符を浮かべるばかり。

『私は、ネルフ総司令として、現時点をもってネルフ本部の武装解除を行い、施設を日本国政府へ明け渡すことを宣言する。職員諸君の処遇については追って連絡することになるが、決して今より悪い形にはしないし、断つて去ることもできる。諸君はこのネルフという特殊で重要な機関を支えてきた有能な人材ばかりだ。今後どこでも引く手数多であろうと思うが、諸君らの理想だけは捨てないで欲しいと思う』

突然の組織解散宣言。一同の困惑が最大限に達したところで、モ

ニタが切り替わった。どこかで見た、スーッ姿の初老の男。ああ、そういえば、日本の総理大臣ではないか。

『ネルフの皆さん。ネルフ本部は現時点をもって、呼称を国立特殊生体工学研究所と改め、科学技術庁直轄の研究機関として改組されます。皆さんがこれまで研究され、ノウハウを培ってきた数々の技術を民生転用し、日本、ひいては世界の復興に役立てることを目的とする組織です。碇氏のお話にもありましたが、現職員の皆さんの優れた能力は我々としても欲するところであります。目的は多少変化しますが、これまで同様に皆さんの力を発揮していただきたいと思っています。また、皆さんの技術を多く生かせるよう、査察と調査にご協力をお願いします』

慇懃な言葉ではあるが、表情に尊大な雰囲気を感じさせたスピーチが終わり、モニタが切れた。

ミサトは数秒、啞然とした表情を見せ、すぐに怒り心頭といった顔になり、総司令執務室へ向かった。変わって話しかけてきたのは、先ほどまでマギを見上げて立ち尽くしていたリツコだ。

「シンジ君、司令は最後の使徒が倒されたと言っていたけど……何か知っているの？」

「えーと……俺とレイが使徒に遭遇したのは確かなんですが、倒したかって言われると……」

シンジはもごもごと、状況の説明をした。彼とて何があったか理解しているはずもない。使徒とレイが現れ、少しの問答の後、自分の頸動脈を切って死んだと思ったが、目を覚ましてみると無傷で、使徒は消えていた。言えることはこの程度である。

自殺のくだりで険しい顔を見せたりツコだったが、最後まで話を聞き終わり、吐いたのは諦めの言葉だった。

「ワケがわからないわね」

「まったくです。話している自分でもサッパリなもんで」

しばらくして、ミサトが青い顔をして発令所に戻ってきた。

「あ、ミサトさん……どうしたんですか？」

シンジの問いかけに、ミサトは少し言い淀む素振りを見せた後、言った。

「……司令が、自殺したわ」

「……なんですって？」

リツコが取り落としたボールペンが、床を叩く。シンジには、その音が妙に響いて聞こえた。

碇ゲンドウ、ネルフの解体・移管を宣言した後、拳銃で自らの頭を撃ち抜いて自殺。

即死であった。

その後、シンジの記憶で伝え聞いたような破局が訪れることはなかった。

ネルフ本部を侵攻するはずだった戦略自衛隊は、ゲンドウが日本政府にネルフを明け渡したことにより、逆に本部を守る立場となつたし、天井都市を吹き飛ばすはずだった無数のN2爆弾は、そのほとんどを第十二使徒に食らわせている。

そういう物理的制約以前に、もはやゼーレはネルフやエヴァをどうこうする理由を失っていた。

世界各地で試作研究されているS2機関や、その他スーパーソレノイド理論を応用した装置が、突如としてその動作を止めてしまったのだ。まるで、はじめからそんな動作原理が存在していなかったかのように、それらは無意味な構造物と化した。原因はまったく不明。信じていた原理や研究者生命を賭していた成果が一瞬にして瓦解したことで発狂して自殺に追い込まれた研究者や、中にはスタッフ同士で疑心暗鬼になり、内乱の末自滅した支部もあるという。



これはゼーレと一部のネルフ幹部しか知らないことだが、人類補完計画には、地球規模のアンチATフィールドを発生させるエネルギー源と、儀式を構成するためのフィールド干渉装置が必要だ。それは、S2機関を置いて他にはあり得ない。

さらに、S2機関の無力化は、人類補完計画の前提をことごとく覆す。ゼーレが地球の正当な支配者と見なしていたアダム、その欠片から作られた渚カヲルのクローン体、そして、儀式の贄として建造されていたS2機関搭載型のエヴァ・シリーズ。これらはすべて役に立たぬガラクタとなり果てた。神への階段は失われ、彼らの教義は崩壊したのである。

S2機関を模したコアによって動くエヴァンゲリオン初号機・弐号機もまた、起動できなくなってしまうため、封印処理されることとなった。結局アスカは、母の魂が弐号機に宿っていることを最後まで知ることにはなかったのだった。

本部施設にあるデータや研究資材は、政府によって滞りなく持ち出された。マギに記録されたデータだけではどうしても取り出すことができなかったが、極々一部の重要情報を除いては、ほとんどバックアップストレージより明らかになった。物言わぬ箱と化した巨大コンピュータは、もうじき解体され、次世代の生体コンピュータ開発のための研究材料となるという。

エヴァを失い、マギを失ったネルフは、生体コンピュータやクローニングなどの分野を専門とする先端研究所へと生まれ変わる。対使徒用とはいえ、武装を満載した今のネルフ本部施設は無用なものだったため、本格的に建て替えることとなった。

保安部などの武装部署は、戦略自衛隊へと編入され、そのままジオフロントの守備任務にあたることとなるそうだ。ミサトも、古巣である戦略自衛隊に戻ることもなった。

リツコは、研究所の主任研究員として、所長となった冬月コウゾウとともにジオフロントに残るといふ。

「再来週から壱中も再開らしいよ。洞木さんやトウジたちも近いうちに疎開から戻ってくるだろうね」

「ふーん……ま、アタシには関係ないけど」

シンジは、気のないその台詞に訝しげな顔をした。学校再開の報せは、アスカにとっても喜ばしい話だと思っていたからだ。その雰囲気を見線もくれずに察したアスカは、言葉を続ける。

「アタシは多分、ドイツに送還よ。もうここにいる意味もないから意味もないという割には、未練たっぷりな表情を膝に埋める。寂しく蹲る少女の顔が痛ましくて、シンジは慰めの言葉を探したが、結局見つからない。

その微妙な空気を破ったのは、意外にもレイであった。

「……惣流さんに渡すものがあつた」

唐突にそんなことを言い、ポケットから一枚の封書を取り出した。「何よこれ」

「赤木博士から、惣流さんに渡しておいて欲しいと頼まれた。ドイツからの手紙だそうよ」

「ドイツから？」

そう言つてその場で開ける。便箋の表面を見線でなぞり……徐々に顔が険しくなった。

「んな、何よこれえええええつ！」

「どうした？なんて書いてあつたんだ？」

そう尋ねるシンジに、怒り顔のまま便箋を突きつけるアスカ。

「……ごめん、俺、ドイツ語読めないんだけど」

「……ウチの両親が日本に来るのよっ」

「迎えに来るとか？」

「そっじゃなくてっ！こっちに移住するっつてんのよ！」

わめき散らすアスカ。それをみて、不思議そうに顔を見合わせる

シンジとレイ。

「今更、一緒に暮らそうなんて、ふざけんじやないっての！ドイツにいたときだって、ママが死んでからはたまに電話よこすくらいで、ろくに顔も見せなかったくせにっ！」

「……あー、アスカ」

「何よっ！」

「いろいろ複雑なようだけどさ……とりあえず、アスカは今後も日本にいろってことで、いいのかな？」

「あっ」

シンジの一言で、ようやくそのことに思い至ったアスカは、今度は腕組みをしてなにやら考え始めた。怒っていいのか喜んでいいのか、複雑なところらしい。なんとも微笑ましいなあ、とシンジはその様子を眺めた。

あとで、シンジがリツコから訊いたところによると、アスカの養父母は、それなりに娘に対して愛情を持っているが、彼女の人格形成をコントロールする目的から、わざと疎遠になるよう手を回されていたらしい。エヴァのパイロットという呪縛から解き放たれた彼女に、こんどこそきちんとした親として接したい、と望んだ彼らに対し、「アスカは日本に友達があり、第三新東京市から離れたがらないだろう」と忠告したのは、ドイツ支部とつながりのあったミサトだった。

「まあ、なんだ」

まだ悩むアスカの頭に、シンジは右手を置いた。

「急に家族になるってのも難しいかも知れんけど、まあ、せつかくだし頑張ってみたらどうかな？ いづらけりや、前みたいに俺んちに避難するって手もあるだろうしさ」

「子ども扱いすんなっ……そういえば、あんたたちはどうするのよ？」

頭に載せられた暖かい手を振り払いつつ、アスカは残る二人に尋ねる。

「俺はまあ、引き続き一人暮らしかな。レイは、マンション壊れちゃったから、リツコさんに引き取られるんだよな」

「……赤木博士は忙しいから、私も一人暮らしのような状態だと思う」

淡々と答える二人に、アスカはふーん、と相槌を打つ。

「まあ、そういう意味では前とあんまり変わらないのかしらね」

つまらなそうに空を見上げる少女の言葉を、

「何言ってるんだよ」

少年は強く否定した。怪訝そうな表情をする二人の少女の目を見て、少年は言葉を続ける。

「もう『負けたら死ぬ』っていう戦いから開放されるんだ。これからは、それ以外のいろんなものを考えて生きていかなきゃいけない人間関係、競争、将来自分が何になるかの決断……」

そういうものをいい加減に扱って、一生懸命になることなく生きた男の人生、それは、シンジの中で遠い記憶として残っていた。そして、彼の後悔は、今、人生を「やり直せる」という喜びとなって、少年の心に満ちていた。

「命の危険がない代わりに、たくさんの小さなストレスが俺たちにのしかかってくる。でも、そういうものときっちり戦ってねじ伏せていけないとな」

なにやら恍惚と語りだしたシンジを見て、アスカは小さくため息をついた。

「はあ……まあ、以前の説教好きなシンジに戻ったわけね。よかったんだか悪かったんだか……」

その台詞に、レイも小さく笑った。そして、日の落ちた星空を見上げる。

「自分で、決める。……自分で、歩く」

小さく、つぶやいた。

## エピソード2 遺したもの

二〇〇二年、某県。

小さな農村の隅にある一軒家を、一人の女性が訪れた。

家人であるらしい老婆が、見慣れぬ女性を見つけると、女性は小さく会釈をして、家人に歩み寄った。

「そうですか、あの子と……」

「はい。といつても、一年くらいですけど」

女性は、老婆の息子の元恋人だと名乗った。老婆は警戒もせず、彼女を居間に招き入れる。そこには仏壇があり、まだそれほど古ばけていない、若い男の遺影が置いてあった。

女性はその遺影をしばし見つめた後、線香を上げる。

「あんな子にもお付き合ひしてくれる人がいたんですねえ……いえ、こんなことを言つては失礼ですかね」

力なく笑う老婆に、女性もなんと返したらよいかわからず、愛想笑いを浮かべた。

しばしの沈黙。

「正直言つとですね」

やがて、女性が口を開く。

「彼に振られたとき、私もなんだか、肩の荷が降りたような気がしてしまつたんです。彼は、私がそばにいと、辛そうにしていることがあつたので」

言つてから、彼の母親の前でこんなことをいうのは酷いことではないだろうか、と後悔する。だが、当の母親は表情を変えなかった。「私も、そんな風を感じることはありません。誰に対しても、人と接するのがつらそう。たぶん、あの子にはこの世は合わなかったのではないかと思います。あの子の死に顔は、たった一人で死んでいたのに、安らかに、笑っていましたから」

だから、気にする必要はないんですよ、とつとつと、掠れたような声で話す老婆に、女性はもういたたまれなくなってしまった。

「あ、あの。お線香も上げましたし、私そろそろ失礼いたします」

「そうですか、お構いもできませんで……」

「いえ、その、すみませんでした。突然押しかけてしまつて」

「いいえ、来てくれてよかつた。家を出て行つた以降のあの子の話は、なかなか聞けなかつて」

葬式にも、親戚のほかには勤め先の何人かが参列したくらいであつたし、生前の彼の様子を多く語る人はほとんどいなかったのだという。時々、息子が本当にいたのかどうか疑わしくなる、と老婆は笑つた。

「こつ言つてはなんですが、あの子が生きた跡が、ひとつ見つかつた気がします。本当にありがとうございます」

なぜ、来たのだろう。

帰りのバスの中で、女性は考える。

彼と別れてもう何年になるだろう。もう記憶からも薄れきつたころ、昔のつてから、彼が一年前に死んでいたことを聞かされた。

ワンルームの狭い部屋で、コミックスを枕にしながら、笑みを浮かべて冷たくなつていたのだという。

異常な死に様だとは思つが、同時に、彼ならばあり得るという思いもあつた。いずれにせよ、驚きはしたが、さほど感傷的になるような思い出があるわけでもなく、薄情なようだが、そのまま遠くで故人を偲ぶのみ、のはずであつた。

しかし、その後の休日、ふとした衝動に突き動かされ、昔もらつた彼の実家の住所を探し当て、そこを訪ねたのだつた。彼の母親の、あの様子を見れば、もしかしたら来た甲斐もあつたのかも、と思う。「ひよつとしたら、あの人が行かせたのかしら」

そんなことも思ったが、どうしても彼のイメージにそぐわない。  
「あの人なら、みんな自分のことなんか忘れてくれ、っていうかもね」

彼のことを深く知ることでもできなかったし、本心なんてわからない。  
私にとっては、どちらでもかまわないし

「さよなら、たぶん、もう思い出すこともないわ」  
だから、安らかに。

「あら、これは」

老婆が息子の荷物を整理していたところ、彼が死に際に枕にしていたコミックスの一冊が出てきた。

「全部、一緒に火葬したと思ったけど……」

どうしたものか、としばし考えたが、彼の墓前で焼くことにした。  
「あの子のことだから、あの世でも漫画ばかり読んでるのかね」  
墓の脇の土のところで、藁と一緒に本を燃やす。インクが溶けて小さな青い炎が上がった。

そうして、何分かで本は黒い灰になった。

- 完 -



## エピソード2 遺したもの（後書き）

作者が管理しておりましたサイト「ジンマシン ノベルズ」を、諸事情により九月末にて閉鎖することとなりました。本作は、そのサイトに収録されていた小説のうち、唯一完結していた長編小説です。昔に書いたものですが、思い入れも深く、この場を借りて公開を続けさせて頂こうと思った次第です。

転載するにあたり、特に序盤の方を中心に、判りにくい台詞調の地の文の修正や、言葉尻の訂正、および一部キャラクターの言動を修正しました。特に葛城ミサトなどは、修正前はどうも子供っぽい感じが強かったのが多少緩和されたかと思います。

さて、今後ですが、ネタをいくつか暖めております。プロットが立ち次第、新作としてこちらに投稿させて頂きたいと思います。今後とも、よろしくお願い致します。

2011年10月28日 陣磨 紳

以下は、転載前、初稿の連載終了時に掲載したあとがきです。

プロローグ、および第一話の初稿公開は2001年2月でした。当時、エヴァファンフィクション界隈は最強主人公ものが隆盛でした。いろいろ揶揄されたりもしていましたが、個人的にはわりと楽しんで拝読させていただいておりました。最強の主人公がばっさばっさと困難を切り倒し、異性キャラを次々と落とす。いろいろ考えて読んでいると、こう、頭痛がしてくることもあります。頭を空っぽにして感情移入すれば、意外に楽しいものです。

そう、ポイントは感情移入。別世界の誰かになった気分で活躍するというのは、えもいわれぬ快感をもたらします。自分で書いてしまえば、自身を取り巻く状況も他キャラの感情も自由自在。さらにコストも殆どかからない。これは素晴らしい娯楽だと、他の皆様の作品を読んでいてそう思ったのです。

ただ、こういう娯楽は少し後ろ暗いものがあつて、ノリノリで書いている時に、ふと冷めた目で自分を見つめると、非常にダメージが大きいのではないかなあとも思いました。現実逃避の極地ですからね。

で、そこから発想を膨らまして出てきたのが、まさに「自分自身」がキャラクターに乗り移り、都合のいい世界を作り上げている途中で、いきなり冷水を浴びせられ、結局ユートピアなどどこにもないのだ、と気づく。その挙句、全てから逃避してしまう　ちょうど「依り代」プロローグと第一話、そして第二十九話以降のイメージでした。

この程度のプロットで、久々に小説もどきでも書いてみようかなあ、などと思い立ったのが運のつき。まさかこの結末にたどり着くのに7年も要するとは……

この当時はまだ「キャラクターに現実世界の人間が憑依する」という系統の作品は珍しくて（初ではありませんが）、「設定だけは斬新」などという評価を頂いたこともありました。

あれから7年、二次創作投稿サイトに溢れる憑依系ファンフィクションを見ると、隔世の感があります。

中には、文章力、構成力、オリジナリティともに飛びぬけて素晴らしいものもありますが、やはり、ファンフィクションに重要なのは書き手の熱意だと思います。原作が好きという思い、自分で作ったオリジナル・キャラクターを思う存分活躍させたいという思い、好きなキャラとアレなことをしてみたいという思い。そういう思いの込め具合が、二次創作の面白さに直結するのではないかと、私は

そう考えるのです。

その意味で、この「依り代」は二次創作としては負け組です。こんな淡々として主人公が報われない憑依ものなど、照れの入った芸人みたいなもので、最低の部類です。

そういう作品ですので、完結させること自体に非常に迷いがありました。長期更新停止の言い訳にはなりません、そういう思いがあったのです。しかし、完結させてみて、いくつかねぎらいの言葉を受け、無様に粘って完結させてよかった、と強く感じました。

最後まで読んでくださった皆さん、7年もの間ずっとチェックし続けて下さった皆さん、メールや掲示板、Web拍手で感想を下さった皆さん。ここまで優柔不断な私を完結へ導いてくださったこと、そして、いくばくかの達成感を感じさせていただいたこと、心から感謝いたします。本当にありがとうございます。

2008年11月9日 陣磨 紳

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0729w/>

---

依り代

2011年10月29日00時15分発行